HAKAGI
ハカギ・ロワイアル
ROYALE
3

# HAKAGI ROYALE

ハカギ・ロワイアル

❸

――――――【残り51人】

# 葉鍵ロワイアル参加者名簿

一　　番　相沢　祐一　（あいざわ・ゆういち）
~~二　　番　藍原　瑞穂　（あいはら・みずほ）~~
三　　番　天沢　郁未　（あまさわ・いくみ）
~~四　　番　天沢　未夜子　（あまさわ・みよこ）~~
五　　番　天野　美汐　（あまの・みしお）
~~六　　番　石原　麗子　（いしはら・れいこ）~~
~~七　　番　猪名川　由宇　（いながわ・ゆう）~~
~~八　　番　岩切　花枝　（いわきり・はなえ）~~
九　　番　江藤　結花　（えとう・ゆか）
~~十　　番　太田　香奈子　（おおた・かなこ）~~
十一番　大庭　詠美　（おおば・えいみ）
~~十二番　緒方　英二　（おがた・えいじ）~~
十三番　緒方　理奈　（おがた・りな）
十四番　折原　浩平　（おりはら・こうへい）
~~十五番　杜若　きよみ〈原身〉（かきつばた・きよみ）~~
十六番　杜若　きよみ〈複製身〉（かきつばた・きよみ）
十七番　柏木　梓　（かしわぎ・あずさ）
十八番　柏木　楓　（かしわぎ・かえで）
十九番　柏木　耕一　（かしわぎ・こういち）
二十番　柏木　千鶴　（かしわぎ・ちづる）
二十一番　柏木　初音　（かしわぎ・はつね）
二十二番　鹿沼　葉子　（かぬま・ようこ）
二十三番　神尾　晴子　（かみお・はるこ）
二十四番　神尾　観鈴　（かみお・みすず）
二十五番　神岸　あかり　（かみぎし・あかり）
~~二十六番　河島　はるか　（かわしま・はるか）~~
~~二十七番　川澄　舞　（かわすみ・まい）~~
~~二十八番　川名　みさき　（かわな・みさき）~~
二十九番　北川　潤　（きたがわ・じゅん）
~~三十番　砧　夕霧　（きぬた・ゆうき）~~
三十一番　霧島　佳乃　（きりしま・かの）
~~三十二番　霧島　聖　（きりしま・ひじり）~~
三十三番　国崎　往人　（くにさき・ゆきと）
~~三十四番　九品仏　大志　（くほんぶつ・たいし）~~
~~三十五番　倉田　佐祐理　（くらた・さゆり）~~
三十六番　来栖川　綾香　（くるすがわ・あやか）
三十七番　来栖川　芹香　（くるすがわ・せりか）
~~三十八番　桑嶋　高子　（くわしま・たかこ）~~
~~三十九番　上月　澪　（こうづき・みお）~~
四十番　坂神　蝉丸　（さかがみ・せみまる）
四十一番　桜井　あさひ　（さくらい・あさひ）
~~四十二番　佐藤　雅史　（さとう・まさし）~~
四十三番　里村　茜　（さとむら・あかね）
~~四十四番　澤倉　美咲　（さわくら・みさき）~~
~~四十五番　沢渡　真琴　（さわたり・まこと）~~
四十六番　椎名　繭　（しいな・まゆ）
四十七番　篠塚　弥生　（しのづか・やよい）
四十八番　少年　（しょうねん）
~~四十九番　新城　沙織　（しんじょう・さおり）~~
五十番　スフィー　（すふぃー）
~~五十一番　住井　護　（すみい・まもる）~~
~~五十二番　ＨＭＸ－13型セリオ　（せりお）~~
五十三番　千堂　和樹　（せんどう・かずき）
~~五十四番　高倉　みどり　（たかくら・みどり）~~
~~五十五番　高瀬　瑞希　（たかせ・みずき）~~
~~五十六番　立川　郁美　（たちかわ・いくみ）~~
~~五十七番　橘　敬介　（たちばな・けいすけ）~~
~~五十八番　塚本　千紗　（つかもと・ちさ）~~
~~五十九番　月島　拓也　（つきしま・たくや）~~
~~六十番　月島　瑠璃子　（つきしま・るりこ）~~
六十一番　月宮　あゆ　（つきみや・あゆ）
~~六十二番　遠野　美凪　（とおの・みなぎ）~~
~~六十三番　長岡　志保　（ながおか・しほ）~~
六十四番　長瀬　祐介　（ながせ・ゆうすけ）
~~六十五番　長森　瑞佳　（ながもり・みずか）~~
六十六番　名倉　由依　（なくら・ゆい）
~~六十七番　名倉　友里　（なくら・ゆり）~~
六十八番　七瀬　彰　（ななせ・あきら）
六十九番　七瀬　留美　（ななせ・るみ）
~~七十番　芳賀　玲子　（はが・れいこ）~~
~~七十一番　長谷部　彩　（はせべ・あや）~~
~~七十二番　氷上　シュン　（ひかみ・しゅん）~~
~~七十三番　雛山　理緒　（ひなやま・りお）~~
七十四番　姫川　琴音　（ひめかわ・ことね）
~~七十五番　広瀬　真希　（ひろせ・まき）~~
七十六番　藤井　冬弥　（ふじい・とうや）
七十七番　藤田　浩之　（ふじた・ひろゆき）
七十八番　保科　智子　（ほしな・ともこ）
七十九番　牧部　なつみ　（まきべ・なつみ）
~~八十番　牧村　南　（まきむら・みなみ）~~
~~八十一番　松原　葵　（まつばら・あおい）~~
八十二番　ＨＭＸ－12型マルチ　（まるち）
八十三番　三井寺　月代　（みいでら・つくよ）
~~八十四番　御影　すばる　（みかげ・すばる）~~
~~八十五番　美坂　香里　（みさか・かおり）~~
~~八十六番　美坂　栞　（みさか・しおり）~~
~~八十七番　みちる　（みちる）~~
八十八番　観月　マナ　（みづき・まな）
八十九番　御堂　（みどう）
九十番　水瀬　秋子　（みなせ・あきこ）
九十一番　水瀬　名雪　（みなせ・なゆき）
九十二番　巳間　晴香　（みま・はるか）
~~九十三番　巳間　良祐　（みま・りょうすけ）~~
九十四番　宮内　レミィ　（みやうち・れみぃ）
~~九十五番　宮田　健太郎　（みやた・けんたろう）~~
~~九十六番　深山　雪見　（みやま・ゆきみ）~~
九十七番　森川　由綺　（もりかわ・ゆき）
~~九十八番　柳川　祐也　（やながわ・ゆうや）~~
九十九番　柚木　詩子　（ゆずき・しいこ）
百　　番　リアン　（りあん）

# 葉鍵ロワイアル
# 舞台　地形図

葉鍵ロワイアル

※この物語は巨大掲示板２ちゃんねるの葉鍵（Leaf&Key）
板において創作されたリレー小説です。

※今回の単行本化にあたり、著者自身の手によって本文の
表現やタイトルが改められた個所があります。
※ Web ページの原文を縦書きの単行本として出版するに
あたり、最低限必要な改行等の改変を編集側で行わせて
いただきました。

## 328　ぼくの戦争　――孤独――

　自分がこの殺し合いに巻き込まれたあの瞬間から、四季が巡るくらいの時間が流れたような気がする。そんな訳がないのに、まだ自分は、自分がこの運命に巻き込まれた瞬間まで覚えているというのに。それでも思う、どれだけの時間が経ったのだろう。――自分は今、狂いそうなほど濃密な時間の中に生きているのだと思う。勿論充実などは感じない。喩えるならば、深淵に澱んだ底なし沼に滑り落ちていくような重さだった。

　数日前のことだ。いつものようにのん気にバイトにやってきた自分を、突然叔父は強く抱きしめた。店を閉じるという短い一言と共に、叔父はその太い腕で自分を掴まえると乞うように謝った。訳もわからず戸惑う自分に、叔父は悲しそうな顔を見せるのだ。

　閉店の理由は聞かせてもらえなかった。そこそこ繁盛しているのに、どうして店を閉じるような事態に追い込まれたのだろう。訊きたかった。訊きたかったけれども、自分は結局何も言えなかった。叔父が涙を流すのを見たのは初めてだったからかも知れない。

　――「店を閉じる理由」が、自分を殺し合いに巻き込ませるためだったから、というのは、あまりにも非現実的すぎる。けれど結局はそういうことなのだ。

　何故こんなくだらないゲームに自分たちが巻き込まれたのか。叔父が罪悪の涙を流しながら、それでも自分たちを戦いの渦に放り込んだ訳を知りたい。自分だけは、七瀬彰だけはそれを知らないままに命を終えるわけにはいかない。叔父は自分のために涙を流してくれた。同情と罪悪の涙を。だが、自分に必要なのは哀れみではなく情報と理解だ。

——そんなことを考えながら、考え続けながら、ひとりスタート地点の近くの茂みに姿を隠していた彰は、薄闇と燐光の中で第五回の放送を聞いた。心臓の鼓動を抑えながら聞いたその放送の中には自分の知り合いの名前はなかった。冬弥の名前も由綺の名前もなかった、初音ちゃんも無事だ。彰は小さく息を吐き、背筋を走っていた寒気が引いていく感触を得る。

彰がここ、スタート地点の建物の傍の茂みに辿り着いてから、既に数時間が流れていた。何も行動を起こさず、ただ思索だけを練っている。当然だ、彰の手には武器と呼べるものは一つしかないし、その武器の名前は勇気だ。勿論勇気には、人の意志には、サブマシンガンを装備した見張りの兵士など軽く凌駕するだけの力がある。しかし、真正面から無策で突っ込むことは勇気ではなく無謀で、無謀ではサブマシンガンには勝てない。

暗闇を待たなければならない。臆病と慎重の紙一重を見切って、先の見えない世界を歩くのだ。

——それでも、と彰は思う。

果たして叔父は本当にここにいるのだろうか？確証が全く持てない。勇気が無数の重火器に打ち勝って、この建物の一番奥まで上り詰めたとしても——そこに叔父達がいなければ、勇気は結局何も成し得ない。

考えろ、勇気を力にするためにこのアタマはあるんだ、足りないチエを振り絞って考えろ、命は一つしかないが時間は命の数よりはきっと多くある、急がなければいけないがそれでも自分の命よりは重要じゃない。

（待て、）

彰は小首を傾げながら考える。仮にここが管理施設の中枢だとしよう、そしてこの建物の奥には叔父達がいるのだとしよう。それにしては——黒幕の長瀬一族がいる筈の管理中枢にしては、あまりに守備が貧弱すぎるような気がする。見張りが一人しかい

ないとは、あまりにお粗末ではないか？　そしてその見張りに与えられているのはサブマシンガン一丁。サブマシンガンを打ち破れる程の重火器は確かにそうは無いが、それでも、例えば初音が先に修理していた中華キャノンがある。
　破壊力は相当なものだと初音が言っていた。何てったってSFの世界にしか登場しないようなビーム兵器だ。あの強力なビームを相手にした時、サブマシンガンなど鉄アレイ程度の役目しか果たさない。守衛をケシ屑に出来るばかりか、下手をすれば建物ごと吹き飛ばせるだけの力さえあるかも知れない。
　果たして、こんな危険なところに管理中枢を配置するだろうか？　そもそもどうして「強力すぎる兵器」が自分たちに与えられるのだ。
　彰は考える。
　――そこに侵入者がいるからこそ門番は存在しなければならない。門番は「門」に入ってくる侵入者を撃退するための存在だと定義できる。しかしその門番には侵入者を完全に撃退できるだけの力が無い。それでは門番は何のために置かれる。
　――思いつく。自分たちが反乱を起こすことが出来ない理由は何だ。決まっている、自分の胃の中で音も立てずに眠っている筈の体内爆弾だ。よくよく観察すれば、入り口の戸の上に監視カメラと思われるレンズの反射を確認できる。アレで侵入者を確認し、腹の中の爆弾を爆発させると言うわけか。それならば強力な兵器を与えられる論理もわからなくはない。
　しかし、そこで疑問が浮かぶ。
　何故門番を置くのだろう。監視カメラがあるのならわざわざ門番を置く必要がないではないか。足止めのため？　体内爆弾の爆発による被害がこの施設に影響を及ぼさないように、入り口のところで足止めをする為の捨て駒？　そんな非人道的なことを叔父達がやらせるだろうか（現にやらせてるじゃないか僕たちに）、確かにそうだ、そうだけど違う気が

する、僕たちにやらせてることには叔父達なりの論理があるだろう、しかしこの守衛にはそんな論理はあるのか？（意味を考えていても仕方がないんじゃないのか?）、そうかも知れない、だけど。
次に爆弾についての疑問が浮かぶ。彰だって明瞭に覚えている、先に誰かが体内爆弾によって吹き飛ばされた瞬間のことを。その瞬間自分には全く異常が無かったし、他の人にも異常が無かったようだ。つまり完全に個人を特定して爆発させている訳だ。脱出しようとする人間がいてもすぐに爆発させることが出来る＝島の何処にいても爆弾は個人特定して爆発させることが出来る。その為には何が必要だ？
考えろ。
——必要なのは二つ。目と手だ。
まず「目」——監視が必要だ。あの入り口のように監視カメラが島中に張り巡らされているなんていうことはないと思うから、別の手段で爆弾を特定しているのだと思う。
そして「手」——手段。島の何処にいてもすぐに爆弾を爆発させることが出来るだけの迅速さと正確さを持った、手段が必要だ。そんな手段はどこにある。
ふと彰は空を眺める。曇天で、星も月も何も見えない。分厚い雲の裏に何かが存在するような雰囲気もないし、飛行機が飛ぶ音も聞こえない。
——しかし、空からならば。
空からなら自分たちを監視する事が出来るのではないか。
突拍子もない事を思いついたものだ、と彰は苦笑する。そんなところにいたら、自分はどうしようもないじゃないか。もう少し楽観的に常識的に考えるべきだ、七瀬彰。
彰は縺れていた思考を解きながら、小さく溜息を吐く。叔父達が何処にいるかを考えていたのに、ど

うしてこのような方向に思考が流れているのだろう。この思考は無駄ではないかもしれないが、しかし今すぐ必要であるという訳でもないだろうに。

――この建物内にいないとしたら、叔父達は何処にいるのだろう。もしも島の外ならお手上げだ。だが、島の中にいるならばなんとかなる。なんとか出来る距離にいる。

思いながら、彰は少し頭と身体を休める事に決める。勇気を片手に特攻するのは、もう少し遅くになってからだ。デイパックの中の切り札を抱え、彰は茂みの中で瞼を閉じる。

瞼の裏に澤倉美咲の笑顔が浮かび、鼓膜の奥で美咲の声が蘇る。彰は目を閉じ、耳を閉じ、心まで閉じて涙を堪える。

――門番を置く理由は一つしかない。彰はまだ、そこに思い至っていないけれど。

決まっている。門番は侵入者を撃退するためにいるのだ。

爆弾はすべての参加者に仕掛けられている。一部の例外を除いて。その例外を撃退するために、門番は存在する。けして足止めなどではない、そんな風に貴重な人的資源を使う長瀬一族ではない。

例外の名前はＨＭＸ―12、ＨＭＸ―13というロボットふたり。そして、長瀬一族の末裔たる七瀬彰と長瀬祐介。

彼らがこの殺し合いに於けるイレギュラーだった。

## 329 ――私

――始まりは、安っぽいハノンの響きから。

私の名前は柚木詩子。現在花の女子高生。血液型はＢプラス。個性が光る詩子さん。……何、なんか文句あるの？

得意なことは走ること。必殺技は授業ブッチ。

壁に耳あり障子に目あり、廊下の隅には詩子あり。いつも背中を見ているぞ、あなたの後ろに詩子さん。神出鬼没が代名詞、誰が言ったか雲隠詩子……ってこれ本当に誰が言ったのよ？

好きな食べ物は、甘いもの。中でもザッハトルテは譲れない。でも茜と一緒に食べに行くと、いつのまにか砂糖が当社比三倍とかになっていることがあるから油断は出来ない。甘いものは好きだけど、とてもあの子には敵わない。だから私はウィーン風。生クリームを砂糖代わりに控えめの甘みで楽しむのが通好み。なんちゃって。それでも十分甘いんだけどね。

身長一五二センチメートル。実はちょっぴり気にしてる。だって同い年の女の子で、私より低い子なんていないんだもの。

スリーサイズは上から77、54、82、……って言わせるなーっ！　うわあああん、よくも乙女の秘密をぉおおお！

……なんて、一人芝居してみたり。

別にいいもん、ちょっとくらい胸が小さくったって。それくらいで私の魅力は揺らがないもん……多分。

……気にしてないったら気にしてないの。

お誕生日は五月七日。ゴールデンウィークからちょっとずれちゃった。でもそのおかげで、友達にプレゼントの前借りとかできちゃったりとか。なーんてね。

嫌いなのは鳩。そんな無機質な瞳で私を見ないで。……なんて、トラウマを美しく演出。いいのよ、分かってる。例えフンをかけられたとしても、それもまた人徳だって。え、鳥徳？　どっちでも大差ないわよ。……ごめん、やっぱりかけないで。

彼氏、無し。彼女、無し。親友、有り。

大丈夫、分かってる。大事なものは、何なのか。

好きなのは、賑やかなところ。

嫌いなのは、茜の悲しい顔。

――そんな顔しないで。誰がいなくなっても、私だけは傍にいるから。
好きなのは、晴れの日。
目一杯に日の光を浴びて気持ちぃい。
そんな日はどこかへ出かけよう。
茜を連れて、みんなで遊びに出かけよう。
今日は雨かもしれないけど。
明日の天気はきっと晴れ。
雨上がりの空は澄んでいる。
水たまりに映った空は、きっと高く、そして青ぃ。
だって、私は覚えてる。
雲を貫いて、どこまでも続いていく高み。
空一面に広がった、抜けるような青。
そして……その一番上で、私たちを照らしてくれている、あのお日様のことを。
――私が好きなもの、陽だまり、青空、茜の笑顔。

雲が晴れて光が差す。
その断続が、倒れた少女の頬を濡らす。
閉ざされた瞳に、穏やかな呼吸。
それはさながら森の中の眠り姫。
目覚めの朝はまだ来ない。

――間奏曲は、パッヘルベルのカノン。
永遠に、途切れることなく続く曲――。

## 330　すれ違う想い

「ふう……だんだん冷えてきたなぁ……」
昼間動き回ってたせいだろうか……体温の低下が激しい。
汗を含んだシャツがまだ冷たく感じられていた。
「ほんとは火を灯したいとこだけどな……」
不用意に危険を招くことはできない。
ただでさえここには守ってやらねばならない女の

子が二人いるのだ。
「……そうですね……少し寒いですが、仕方ないです」
久しぶりに和樹の声に反応した少女。
「起きたのか……もういいのか？　なんならもう少し寝てても……」
「いえ……もう落ち着きましたから。すみません、取り乱してしまって……」
「そうか」
「もう、日が暮れますすね」
「ああ」
「暗いうちはあまり行動しないほうが得策だと思います」
「そうかもな……」
ゆっくりと上半身を起こし、和樹へと寄りかかる。
（すっかりなつかれてる気がする……）
和樹は思わず苦笑した。こういう形で頼られるのもまた、悪くない。
「とりあえず……状況をもう一度整理したいと思うんです」
「そうだな、次の行動もまだ決まってないことだし」
まだ眠る詠美の髪を軽く撫でながら、和樹もそれに従う。
「楓ちゃんはどう考えた？」
楓にばかり精神的な負担をかけないよう……と誓った和樹だったが、それとこれとは話が別だ。
楓の頭の回転の速さは帰るための大きな武器なのだから。
「そうですね……まず胃の爆弾はあるということは間違いないと思います。あの女の人にだけ爆弾が仕掛けられていて、偶然爆発させることができた……と考えるほうがあまりにも不自然です……」
「まあ、そうだな」
「あの人……高槻さんは言ってました。『無理に取り出せば爆発する』と。ですが、本当の所は……そ

の……」
「まあ、そうだな（あんな奴にさん付けするな）」
　楓は恥ずかしいので言いきれなかったが、いわゆる排泄行為やちょっとした吐き気で外に出るような代物ではないのだろう。人間の生理的な現象で自爆というのは主催側の本意ではない気がしている。
　無論、和樹の考えのひとつに過ぎなかったが。
　兎にも角も、無事に外の世界に帰れれば爆弾処理はなんとかなるだろう。
「次に脱出経路ですが……おそらく脱出できる場所はないって思ってます。むしろ『脱出できるなら脱出してみろ』と言われてる気がします。なにせ周りに陸地が見えません」
「……」
　それは和樹も疑問に思っていたことだった。
「だけど、主催者もここで骨を埋める気だってんならともかく、生きて帰る気なら絶対その手段があるはずなんだ。船とかがな……」
「はい。だから……」
「切り札は向こうにあり……か。みんなが生きてここを出る為には……」
　主催側との正面対決は避けられないのかもしれない。
「ですが、船は見当たりません」
「船がないとすると……潜水艦か、無線で連絡をとりあって後、ヘリか飛行機がくるってとこか」
「……」
　だが、一番ありそうな飛行機……空を飛ぶ乗り物は人の目に付きやすい。
　すでに五十人近くの人間が死んでいるのだ。
　そんな中でマスコミの目をかいくぐるのは至難の業だろう。
「妥当な線としては潜水艦ですね……そうなれば……」
「やはり地下通路か？　さっきも出たよな、その話」

「……決め付けるのは危険ですけど。……仮に無線で飛行機という形だった時は無線室、あるいは無線機を押さえれば助けが呼べます」
「その時は同時、あるいは先に胃爆弾のコンソール室を押さえなきゃな」
「そうなります」
スタート地点には——といっても和樹が知っているのは焼けた公民館だけだが——すでに黒幕の姿はない。手の届かない……というより手の出せない所に隠れ潜んでいるのかもしれない。
だが主催側の人間（すでに事切れていた）が島にいたことを考えると、そこへつながる道があると考えるのが妥当だろう。
それは恐らく容易には見つけられない場所。
「あとは結界……だったっけ？」
「……その辺はよく分かりません」
「まあな……超常現象って言っていいのか分からないけど、苦手なんだよ」
楓の鬼の力……も、ほとんど発揮できない。鬼の威圧感と、常人よりも若干高い運動能力を出すのが精一杯だ。
「とにかく、それだけの事を成すには……」
「はい。仲間が少なすぎるかもしれません」
「映画だったら一人でもどうにかなりそうなのにな……現実は甘くないわ」
「私の知り合い……姉さん達に会えればきっと力になってくれます」
だが、楓の顔は晴れない。
千鶴の所為を思い出してのことか、姉妹の、そして耕一の無事を祈ってのことか、それは楓にも分からなかった。
「和樹さんも心に留めておいて下さい。今話し合ったことは……」
「ああ、確実性はない推論……だろ？　決めつけて行動するとロクなことにならないな」
「はい、それがいいです。正直分からないことだら

けですから」
確実だと言えることはほとんど無い。主催者側の戦力は不明瞭だし、同じ志をもった仲間ができるかどうかも判らない。胃の中に爆弾がある可能性は高いが、それだって確証がある訳じゃない。
そして、一番危険なことは（放送ですぐ名前が挙げられることからも窺えるが）自分たちの行動が筒抜けである可能性があるということ——そうならば、今の状態ではお手上げだ。
相手に何らかの手段でこちらの手の内を知る方法があったとしたら……（それはレーダーや隠しカメラ、なんでもいい）例えば、胃爆弾を止める手段があったとして、それを素直にさせてくれるとは思えない。
むしろ、相手にとって侵入されて不都合な場所は何かしらの対応処置が取られていることだろう。
こちらには、反抗しうるだけの武器が支給されているのだから、何も無いと考えるほうがおかしい。
それを見極めない限り、反抗しても犬死してしまうだろう。結局、脱出よりも先になすべきことは胃爆弾の爆発を押さえること——
——まったくもって頼りにならない情報量だった。
「……」
「詠美……目が覚めたか？」
「……起きてた」
「そうか……」
いつから起きてたのかは気がつかなかったが、詠美は無表情のまま起きあがり沈みゆく夕日を眺めていた。
「夜の行動は控えたほうがいいと思う。疲れてるならまだ寝てたほうがいいぞ？　さっきのことは……俺も楓ちゃんも気にしてないから」
それは詠美を思いやってかけた言葉。だけど……
「かずき……わたしより……その子のほうがいいの？」
「……詠美？」

楓を睨みつける。
「わたしにはっ……もうかずきしかいないのにっ！
由宇も……南さんもいないのにっ……!!」
「え、詠美さん……」
楓が詠美にゆっくり手を伸ばし——
「さ、さわらないでよぉ!!」
その手は払いのけられる。
「詠美……落ち着け！」
和樹が詠美の両肩をつかみ、揺さぶる。
「わたしじゃダメなの!?　わたしじゃたよりにならない？　答えて！　こたえてよっ!!」
「詠美……」
たしかに楓は可愛い。もう心のどこにも疑念も無いし、絶対に守ってあげたいとも思っている。
だけど、それは恋人の好きの、それとは違う。
だが、楓の目の前でそれを告げるのはためらわれた。
「このどろぼうねこっ、このひとごろしっ……！
わたしのかずきをかえしてっ……!!」
そして——その時最悪のタイミングで五回目の放送が流れた——
『二日目午後六時だ、早速今回も定時放送いくぞー……』
不快な声の中に混じる知り合いの名前……芳賀玲子、牧村南、そして……長谷部彩の名前もあった。
「彩ちゃんまで……」
和樹が悔しさに、己の不甲斐なさに、拳を震わせた。
そして詠美は……
「わたしっ、かずきのことしんじてるっ……だけどっ……だけどっ……」
そして、そのまま広場を飛び出した。
「詠美——っ!!」
「詠美さんっ！」
銃と、まとめてあった鞄を二つ——詠美と和樹の分だ——をひっつかむように手に持つと、その後を

追う。
　本当はそのまま身軽なまま追いかけるべきだったのかもしれない。
　だが、この島で武器を持たないのはあまりに危険……和樹の本能がそう体を反応させた。
　楓もそれに続く。
「待てっ！　詠美!!」
　まさか、ここまで詠美の心は極限状態に追いつめられていたなんて……
(俺は、本当にバカだ――)
　ただ、無我夢中で詠美を追った。
「はあ……はあ……」
　手ぶらな詠美と、重い荷物を持った二人とでは走る速度が違いすぎた。
　楓も常人よりは足が速いとはいえ、詠美のそれには遠く及ばない。
「くそっ！　……くそっ……！」
　手近な木を力任せに殴りつける。
「どうして……ちくしょう、俺はどうして気づかなかったんだ……詠美が、俺を必要としてくれてたのに……絶対に離しちゃいけなかったのに……！」
「和樹さんは悪くない……私が。和樹さんを頼りすぎていたからいけないんです……それに、こんなときでも、千鶴姉さん達の名前がなくて……ホッとした自分がいたんですから……」
「……違う……自分を責めるな……」
　本当は和樹にも分かっていた。誰も悪くないってことを。
　次々と友達が死にゆく中、感情的になってしまった詠美も、その悲しみを押し込めて、冷酷に見えるほど冷静に行動しようとしている楓も、そして、気がついたら他人との触れ合いに恐れを抱くようになっていた和樹も。
「……探しましょう……！　まだ遠くへは行ってないはずです。今の詠美さんを一人にしておくわけには行きません！」

「ああ……詠美、無事でいてくれっ……!!」
気がついたら日は沈み、夜の帳が下りてきていた。

## 331　竜虎

巳間晴香（九十二番）は目の前にあるそれを信じる事は出来なかった。
「嘘でしょ？　兄さん……」
晴香は思わず兄、巳間良祐に覆い被さる。
「嘘でしょ!?　嘘だといってよ！　兄さん！」
必死に体を揺さぶるが、応答なんてある訳がない。
「目を開けてよ……」
晴香は服が血で汚れるのも関わらず、良祐の体を抱きしめた。その身はまだ暖かいのに、もうそれは何も晴香に応えてくれない。
「……あたたかい……？」
そう、その体はまだ冷え切っていない。それはつまり……
「死んで間もない……まだ近くにいるのね？　兄さんを殺したやつが！」
晴香は血走った目であたりを見回した。
「どこにいる、どこにいるの！」
晴香はジョーカーとして高槻の元を離れてから、ずっと迷い続けていた。
智子達を助けたい。そのためならなんでもする。それは偽らざる気持ちだった。
だが、誰を殺せばいい？　誰がもっとも生きる価値がない？
そんな反吐の出るような選択を自分はしなくてはならないのか？
いっそ自分の前に敵が現れてくれたら……そう思ってさまよう晴香の耳に聞こえてきたのが銃声だった。急いでその場にきてみればこのありさまという訳だ。
「感謝するわ……」
晴香は低い声をだしてゆっくりと立ち上がった。

もはや迷う必要はなかった。自分は殺すべき敵を見つけたのだ。
「必ず、見つけ出して、このお礼はさせてもらうから……」
「初音ちゃん。あんたもちょっと休んだ方がいい」
折原浩平の声に柏木初音は笑顔で応えた。
「大丈夫だよ、浩平お兄ちゃん。お兄ちゃんこそ横になった方がいいよ？」
「そういうわけにはいかねぇよ……」
そういう浩平の声は、だがとても力強いといえたものではなかった。傷がまだ痛むのだ。
あの一戦の後、気絶した浩平と七瀬留美をかついでこの湖ぞいのロッジに運んでくれたのは、柏木耕一だった。
だが、その耕一も今は……
「耕一お兄ちゃんも大丈夫なの？　苦しそうだよ。二階で寝た方がいいよ」
初音に対し耕一は黙って首を振った。
しゃがみこんだままの彼の息は荒い。額には脂汗が浮いている。
女装姿のマッチョは息を切らしているってのは傍から見たらかなりヤバイ姿だが、その表情は本当に苦しそうだ。
それは、昨夜力を使いすぎた反動だった。
「へっ、その格好で、息あげてんのは犯罪だぜ。寝てこいよ」
「おおきなお世話だ。怪我人の君こそ寝てなきゃいけないだろう？」
今、寝室のある二階には名倉由依が寝ている。彼女の怪我も命に関わるほどのものではないが、浅いものではなかった。
(まぁ、気持ちは分かるよ、耕一さん)
本来なら、初音の言うとおり、自分達も二階に行って休息を取るべきだった。けど、それは一階に初音と七瀬を残す事になる。

それは、男としてあまりにみっともなかった。
(全く、ぼろぼろだな、俺達)
浩平と由依は肩を負傷、耕一は力の反動でろくに動けない。そして七瀬。
七瀬は特に体の方は問題無かった。
だが、心は……七瀬は今、部屋の片隅でうずくまっていた。膝の中に頭を埋めてその顔は分からない。起きてはいるし、食事もとっていたが、終始何もしゃべらず、目もうつろだった。
(守れなかったのか、俺は。長森だけじゃなくて、七瀬も)
だめだ。くそ、このままじゃくじけてしまう。守るって誓ったのに。いや、まだだ。まだ、七瀬は生きている。生きてるのなら守ってやれる。
「それじゃ、わたし、由依さん見てくるね」
そういって、二階に上がる初音を見届けて、浩平は銃を握る手に力を込めた。
「無理するな、お互い」
そう声をかけてくる耕一に、
「ま、一応男だからな」
と、浩平が応じた時、
バンッ
という音がして扉が突然蹴り開けられた。
驚いて扉の方を振り向く浩平と耕一。その視線の先には。
「見つけたわよ……」
夕日をバックに、日本刀を構えた女がいた。
「誰だよ、あんた!」
浩平はそう声をあげて銃を構える。
「巳間晴香。あんたらに殺された巳間良祐の妹よ!!」
その声と同時に女は飛び掛ってきた。
銃声、怒声、打撲音。
うるさい、もううるさい! 静かにしてよ、お願いだから!
私はずっと、耳をふさいで目を閉じてうずくまっ

ていた。
折原や耕一さんやそれと知らない女のどなる声が聞こえる。
もういや、なんなのこんな現実。
こんなの認められない、こんなのは嘘。
何も見たくない、何も聞きたくない、何も感じたくない。だってこれは嘘の世界、あってはならない世界。
だから、私はすべてを遮断する。
こうしてうずくまっている。
こうしていれば、折原が、耕一さんが守ってくれる。あるべき世界を取り戻してくれる。
だって彼らは救世主だから。
でも、なるべく早くしてほしい。
やっぱ怖いもん。
だめだ。もっと深く、もっと沈んで、もっと何も感じないようにしないと。
でも、そこで会話が、今朝瑞佳と交わした会話が、頭に浮かんできた。
『あいつ遅いわね。何処まで水汲みにいってるのよ』
『でも、浩平立派だよ。昨日ずっと見張りをしてくれたんだもん』
『まぁ……それは感謝してるけど』
『……七瀬さん、起きてたでしょ明け方』
『な、何のこと？』
『いいよ、気を使わなくて。……ごめん七瀬さん。私、七瀬さんが起きてるの気づいてて浩平にあんなこと言ったの。やな女だよ、私』
『……折原も気付いてたの？』
『気付いてないと思う。浩平鈍感だもん』
『そ、そう。ま、どうでもいいけど』
『よくないよ！　だって、守ってほしいのは七瀬さんだっていっしょなのに！』
『な、なにいってるのよ瑞佳、あんな奴に守ってほしいだなんて思わないって』
『七瀬さん……』

『ま、まぁ、でも少しはうらやましいかな、瑞佳のこと。守ってやる、なんていわれるなんて乙女冥利に尽きるじゃない？』
『……私は、七瀬さんのほうがうらやましいよ……』
『は、私？　何で？　今朝の私って相当惨めだと思うけど』
『私、浩平のこと大好きだよ。大好きだから、守ってもらうだけじゃなくて、守ってあげたいと思う。浩平の事、守ってあげたいと思うもん。だから、浩平を守ってあげられる七瀬さんのことがうらやましいよ』
そのときの瑞佳はとても必死で、真剣で、切なくて。ああ、これが乙女なんだな、って私は思って。
——そして瑞佳は、その後浩平を守って死んだのだ。
……なによ、なんなのよ、これは!!
そう、こんな現実は認められない。こんな現実は許せない。
私が、この七瀬留美が、こんなときにじっとうずくまってるなんて……!!
こんな現実を許すわけにはいかない。
なめないでよ、ふざけないでよ、七瀬留美なのよ、私……!!
私は起き上がると、ありったけの力をこめて、吼えた。飛び出した。

浩平達は苦戦していた。
浩平が最初に撃った銃の一撃は晴香に命中しなかった。銃の反動は今の浩平には重く、銃を握る力が緩む。そこに、晴香の日本刀が投げつけられ、銃と刀はあらぬところに飛び去った。
その後は格闘戦になった。
普段の耕一と浩平なら、これほど苦戦はしなかったであろう。
だが、このとき二人の体調は絶不調も極まりりで、

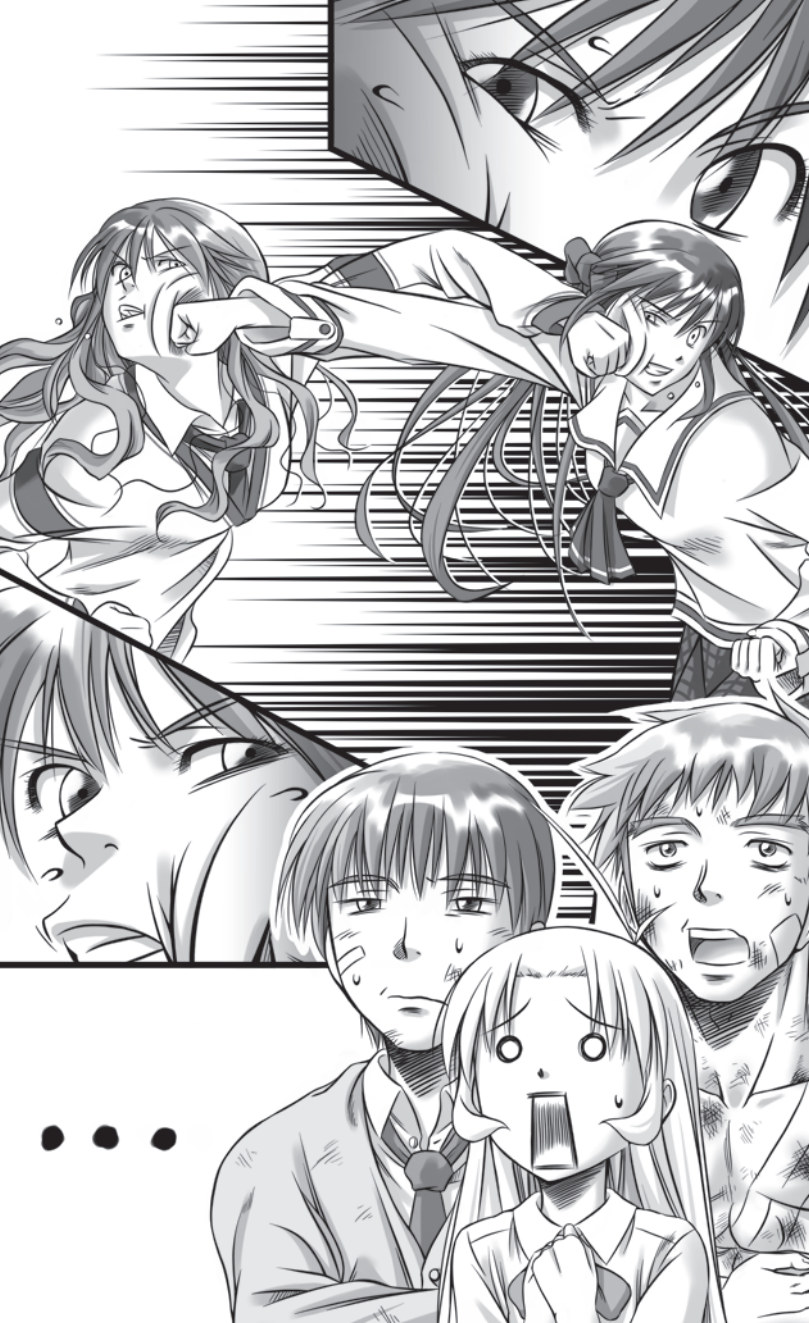
銃声を聞いた初音が加勢にきても、晴香のほうが圧倒的に有利だった。
だが、その場を一つの怒声が切り裂いた。
「おんどりゃぁぁぁぁぁぁぁぁっ!!」
意外な方向からの七瀬の攻撃に晴香は意表を突かれた。
その頬に加速の乗った渾身の拳がめり込む。
「な、なによあんた!!」
体勢を崩す晴香。
そこにタックルをしかける七瀬。
二人はごろごろ転がりながら外に飛び出す。
マウントポジションを取ったのは七瀬の方だった。
七瀬は晴香の襟をつかむと、
ごっ、
その顔に頭突きをかます。その筋の専門用語ではパチキとも言う。
「がぁ……!?」
思わず悲鳴をあげる晴香。かまわずもう一撃と、
七瀬は頭を振り上げる。だが、そこは晴香もさるもの。それよりはやく肘で七瀬のあごを突き上げた。
「ぐあっ!!」
たまらず身を除ける七瀬。その隙をついて晴香は七瀬を蹴り飛ばし間合いを取った。
「いったぁ……よくも乙女の顔を！」
「ど、何処の世界に頭突きかます乙女がいるのよ!!」
「わかってるわよ!!」
晴香に怒鳴り返す七瀬。逆ギレともいう。
「これが乙女らしくないってのはわかってるわよ!!けどね!!」
七瀬は息を吸った。
「危なくなったらピーピー泣いて、助かったらヘラヘラ笑って！　私が憧れる乙女ってのはそんなに底が浅いものじゃない!!」
「な、なんだかよくわかんないけど、上等じゃない……!!」
「手を出さないでよ！　あんた達!!」

『出しません、出せません』
おもわずハモる傍観者三人。
夕日をバックにファイティングポーズをとる二人。
そして、由依は……
「ムニャ、ムニャ……うるさいなぁ……」
まだ、寝ていた。

「へちょい攻撃ね！」
誰かさんの決め台詞をパクリながら、晴香は七瀬の拳をいなす。
「言わせておけば……!!」
連続攻撃を仕掛ける七瀬。そこに、晴香の的確なローキックが炸裂する。
「っぐう……!!」
そこは古傷のある場所だ。七瀬は顔をゆがめる。
「あんた……そこ……？」
少し動きを止める晴香に七瀬の反撃が繰り出される。顔面にクリティカルヒット!!　晴香の顔はもう既にかなり腫れている。
無論それは七瀬も同じ事だ。多分、鏡をみたら死にたくなるだろうな、とかチラッとそんなことが頭を掠めた。
「あんたのパンチ、腰が入ってないのよ!!」
「あんたは目に頼りすぎよ！」
根拠のない罵声をかわしながら二人は殴りつづける。
「もうそろそろとめたほうがいいんじゃないかなぁ。耕一お兄ちゃん、浩平お兄ちゃん」
「……情けない兄達を許してくれ、初音ちゃん」
勝負はここまではまったくの互角。だが、古傷のある七瀬のほうが少しずつおされていた。
そして、ガッ、という音と共に七瀬のひざが落ちた。
「く……この……」
「ふっ……格の、違いが、わかったかしら」
晴香の息も既に荒い。最後の一撃を放とうと拳を

振り上げる。
　だが、そこに、まるで場違いな声が響いた。
「もう……うるさくて、ねむれないですよぉ……」
「あ、由依さん起きたんだ」
「へ？　由依？」
　おもわず振り返る晴香。
　その隙を突いて、七瀬の渾身の力をこめた右ストレートが放たれた。
「……!?　クッ!!」
　それに反応する晴香。結果は。
　七瀬の頬には晴香の拳が。
　晴香の頬には七瀬の拳が。
　そして両者は同時に崩れ落ちた。

## 332 ――罪

　死者の埋葬は骨が折れる。
　実際、爪穴には土が詰まり、袖口や膝は砂で汚れ、そろそろ悲鳴が上がりそうだ。
　……まあ、僕の意思とは裏腹に、ということで。
「ふぅ……」
　額から零れ落ちそうな汗を拭う。少しは労わってやっていいくらいには酷使したと思う。腕も、指も。
　近くの地面には、二つほどの小さな山。
　少しは墓標らしく、飾りを付けてもいいだろう、そう思った。
　脇には拳銃。悩んだが、流石に墓標だからといってこれは無いだろうと思い、置きっ放しにして別なものを探した。巳間が特に銃を好きだったと言う話しは聞かなかったし、まして女の子にこんなものを捧げては末代まで悪い噂が流れかねない。
　気の利いた追葬品は無いものかと辺りを漁ってみても、そうそう都合のいいものは出てこない。
　考えあぐねて、安直なものを見繕ってしまった。
　……それが果たして慰みになってくれるものか、自分独りでは到底答えは出ない。無いよりはマシだ

ろうと想うのは気休めに過ぎないのだろうか。
一方には木の枝、無骨に曲がって味気ない。だが……その分安心できる。
一方には白い花、小さな花びらが頼りない。だが……その分心に留まる。
落日は、音の無い葬送曲のように。
微風は、声の無い賛美歌のように。
僕は享受する。音の無い旋律を。声の無い調和を。誰も知らない終局を。僕しか知らない死に際を。
「………………」
祈りの文句も、枯渇して久しい。
……いや。
どうせ最初からそんなものは要らなかった。
言葉にしなければ伝わらない気持ちがあるように、言葉にした瞬間に嘘になる気持ちがある。
僕はただ祈るだけ。祈りの先に彼らがいることを願いながら。
だから——。

「……忠告しておこう。僕はそうやって隠れて僕のことを尾行していて、声も上げられずに死んでいった人間を知っている」
僕を背後から望む木陰、そこにいる。
祈りの姿勢で絡めたままの指を解くことも無く、まして振り向くことも無く、僕は彼の人物の現れい出るのを待つ。
——摩擦音。
風を切る、音が裂く。
衝いて出る、槍。
白い影、まるで僕と相対するような白い風。
それが、向かってきた。
それは一瞬。
葉が布に擦れた音が、まだ届かないほどの一瞬。
僕が彼女を見た。
彼女が僕を見た。
——旋風。
槍は、僕に届かない。

……否。
僕は、ほんの半角、それだけ体をずらしただけ。
凶風は吹き荒んでいった。
一瞬後の沈黙。
唯それだけの静寂。
そこで彼女はやっと僕と向き合った。
色の見えない表情、その裏に隠れた焦り。
……見える、手に取るように。だが。
紫のケープに白の法衣を纏い、金色の髪に白のカチューシャを宿す。宛ら神官のような佇まいの彼女。トパーズの瞳に滾る意志の光は、頑として揺らごうとしない。
……それは、殺人に道を失った者の目でも、狂気に追い詰められた者の目でも、盲目の傀儡の目でも無い。
そんなことは……この瞬間に……分かっていたはずなのに……。
彼女は、再び槍を中段に構えると、僕を見据えて突進してくる。
鋭い、呼気。
僕は彼女を見据えたまま、そっと偽典の頁を一枚外した。
走り寄る白、槍の先端がぶれる。
……持ち替えた？
その意味を考えるよりも早く、視界が紫の一色に染まる。
——目くらまし。
全速力で僕の横を通り過ぎる彼女。それが、本命。
背後の樹木に足を蹴り当てて慣性を殺し、彼女は一挙に反転し、僕の背後を狙う。
その勢いに恐れは無く、その勢いに迷いは無い。
全力で槍を振るう。
突きではない。斜め袈裟懸けに、僕の肩口を突き破るように。
どしゃっ！
体勢を崩して、地面に無残に崩れ落ちた。

土煙が上がる。浮き上がったケープが、地面へと落ちる。
……その瞬間、心がほんの少し絶望した。なんでこうなることを考えなかったんだろうって、思慮の足りない自分を罵倒した。
崩れ落ちた姿勢のままで見上げる。僕は彼女の視線を真っ直ぐに受け止めた。
……否。
それは受け止めたのではない。むしろ逆。射殺せるものなら、僕は視線で彼女を突き殺したかった。
我ながらなんと冷たい視線なのだろう。
高い空の上から見上げるもう一人の自分が苦笑する。
いつのころからそんな偽善を言うようになったのか。
いつのころから本当の自分を偽るようになったのか。
分かっているはずの本質に、拒絶反応を催すもう一人の自分。
……関係ない。今抱いているこの気持ち、それがそのまま僕と言う証だ。
「……久しぶりだね、とか、元気かい、とか、そんなことを言うつもりは無いよ」
その瞳の冷たさが、そのまま宿ったかのごとくに冷え切った言の葉。
「……加えるなら、君がクラスAであるとか、同郷である存在だとか、そんなことにもう興味は無い」
言葉の冷たさに及びつかない瞳の温度。……ねえ、教えてくれないかA—9、その表情は僕を憎んでいるのか。それとも、僕が怖いのか。
地面に膝をついたまま、二対の感情を整理できないまま、白い法衣についた土埃を拭う余裕も無く、唯ひたすら僕に視線を突きつける……彼女。
——見下ろす側は、僕。
槍を杖に、彼女は立ち上がり再び僕に突撃しよう

と構える。
だが。
「⁉」
みしっ、といやな音を立てて、地面に衝いていた刃先から柄がずれ落ちていく感触を彼女は味わったことだろう。
……交錯した一瞬に、僕がその槍先を切りつけたことなど、彼女が気づくべくも無い。
支えを失い、不意の出来事に彼女はよろめいた。
僕は寸前の瞬間に空間を一足飛びにして彼女に近づくと――
「がふっ⁉」
――その左手で、彼女の胸元を殴った。
衝撃によろめいて、地面を滑るA―9。
僕はその有様を見送ると、そっと残骸を拾う。
彼女がさっきまで佇んでいた場所には。
「ぐ……げほっげほっ！」
一時的な呼吸困難に喘ぐ彼女。
彼女がさっきまで倒れこんでいた小山には。
――飽き捨てられた子供の玩具のように、折れて砕けた墓標の枝が。
――土足で踏みにじられたかのごとく、千切れて汚れた墓標の花が。
「――いってくれないか？　生憎、今、僕は頗る機嫌が悪い」
……僕は憎む。この静穏が破られたことを。

## 333――夢

――滑らかに指が動くようになるまで、一体どれくらいの練習をしてきたのか。
小さい頃からやってきたピアノだから、私にはそんなに苦労した意識は無い。
くるくると鍵盤の上で踊る指先が、いつしかカノンを奏で出す。

私の意識は、その穏やかなまどろみの中に沈んでいった。

それは、よく晴れた日の公園。
戦利品は山葉堂の特製ワッフル。
目を輝かせる茜に、げんなりとする折原君。
そんな二人を見ながら、私は手元のたい焼きに頭から齧り付く。
——それは、私が見た夢。

……ありゃ？　ここどこだろ。
いつのまにこんなとこに迷い込んだのかな。
なんだか体が軽ーい。
気持ちいい……。
……ていうか地面無いよ、ここ。
何で私沈んでないの？
えっと……たしか森の入り口で待ってて、それで
いつまでも来なくて、変な女の人に襲われて……。

……ってそうだよ！
私襲われたんじゃない！
思わず首に手を当ててみる。
……ありゃ、痛くない。
すごく苦しかったはずなのに。
……しかもよくよく考えたら私、
全力で逃げてたはずだし……。
ポンっ。
そっか。
これ夢だよきっと夢～。
な～んか妙にふわふわしてると思ったのよね……。
……でもいつの間に眠ったの、私。
確か走っていたはずなのに。

ドクン。

喉が、疼く。
私——死んだの？

「そんなことはないです」
え⁉
……誰⁉
「あなたはちゃんと生きていますよ、詩子」
茜⁉
「ハイ」
良かった……。茜、無事だったんだ。
「ハイ」
相沢君に、会ったんだよね？
「ハイ」
うん……、でもとにかく元気でよかった。
「詩子」
茜が私の手を取る。
「こんなところで倒れていてはダメです」
え……。何……？
「まだすることがあるはずです」
そう……なの？
「頑張って、生きてください」

……うん。
「では起きて下さい。そろそろ起きないと遅刻です」
「…………む」
むくり、と起き上がる。
いつのまに倒れていたんだろう。
「私……、気を失っていた？」
首をしめられた時に喉を痛めたんだ……。
それなのに全力で走ったりしたから……。
呼吸困難で失神……、かっこ悪い。
思わず、首に手を当てたまま呆ける。
すると気づくことがある。
それは右の手のひらのほのかな温かみ。
そういえば、誰か懐かしい人と会った気が……。
——まさか。
キョロキョロとあたりを見回す。
だが周りには誰もいない。

誰かがいた様子も無い。
「………」
ふっと、私は小さく笑った。
パン！　パン！
両頬を手のひらで叩く。
鮮烈な痛みが走る。
でも、なんだかすっきりした。
眠気覚まし代わりだ。
さあ、いこう。まだ、立ち止まっていられない。
「……よし」
そして私は走り出す。本当に、私にとって大切なものを守るために。

それは、よく晴れた日の公園。
戦利品は山葉堂の特製ワッフル。
目を輝かせる茜に、げんなりとする相沢君。
代わりの生贄が出来たとばかり、折原君は得意顔。
だけど、茜が取り出したワッフルはなぜか三つ。
絶望の表情で助けを求められても、生憎私にはどうしようもない。
そんな三人を見ながら、私は手元の袋からたい焼きを一つ取り出す。
真ん中で千切って二つに割ると、私はそれを横にいた少年に押し付ける。
あんこは苦手なんだよ、そんな顔をしているが気にしない。
意を決して、男の子たちが三者三様、それぞれ未知の甘みに口をつける。
そんな彼らの様子を見て、私と茜は思わず笑う。

——それが、私の夢。

**334　夜の森往く抵抗者**

ブツッ。
放送が途切れる。

もう何度足を踏み入れたかわからない森の中で、茜は五回目の放送を聞いていた。
残りは五十一人という言葉が心に残る。
英二の死を看取りその妹に狙われてから、茜はこれまで、これといった行動を起こしていなかった。
と言うより、誰とも出会うことがなかっただけなのだが。
自分の知らない所で、気付けば多くの人間が死んでいた。
(……さっきの放送、長森さんの名前がありました)
同じクラスの少女、誰にも優しく、おだやかで。
そんな彼女も、死んだ。
むしろ、あのような性格だからこそ、こんな状況で生きていけるわけなかったのだと思う。
さほど親しくなかったクラスメートに、短い黙祷を捧げる。
その途中だった。
「里村茜だな」
自分に、声がかけられたのは。
「……誰？」
親しくもない人間に呼び掛けられたら、とりあえずそう返すことにしている。
だが、この顔には一応見覚えがあった。
たしか、ゲームの管理者、高槻と言ったか。
「おいおい忘れちまったのか？　ゲームの管理者、高槻だ」
どこかの誰かと同じことを言う。
ひょっとしたらこの男も、根はなかなか面白い奴なのかもしれない。歪んではいるが、一体何がこの男に影響を与えたのだろうか。
茜はふと、そんなことを思った。
「……私に、何か用ですか？」
怯えもせずに、言う。
自分でも驚きだった。
なにしろこの男は、こんな恐ろしいゲームの管理人なのだ。

「あぁ、用があるのさ」
高槻は口のはしをにやりと歪め、言った。
「お前は今のところ、このゲームの殺人ランキングで二位になっている。一位は藤田と言う男なのだが、こいつが随分と丸くなっちまってな。殺人者として見込みがなくなっちまった。そこで、だ、お前には『ジョーカー』をやってもらいたい」
「……『ジョーカー』ですか？」
「あぁ、そうだ。まだ生き残りが半分もいる。どいつもこいつも、仲間意識が強くて、殺しなんぞやりそうにない。だからお前には、そういった連中を排除してもらう」
茜にとって、それはよくわからない提案だった。
「……よくわかりません。……言われなくても、私を殺そうとする人がいれば、私は殺します」
「違うんだよ」
高槻は茜の言葉を否定した。
「お前には『手駒』になってもらうのさ。俺達がバックにつく。定期的にこちらから場所を連絡して、その場にいる人間を一人殺せばいい」
「……私にメリットは？」
その茜の言葉に、高槻は笑みを深めた。
「八人殺してもらえればいい、そうしたらお前はゲームから開放してやる。武器も良いのを渡してやるし、食料も与える、安全な寝床も用意するぞ？　この島で、俺達に把握できていないことなんかないからなぁ」
「……そうですね。あなた達がこの島を造ったのですから」
茜の言葉に、高槻の笑みが凍り付く。
「何故知っている、貴様」
「……簡単なことです。私は百貨店に入りました」
「だから、何故それでわかったんだ」
「……人の生活の気配がありません。この小さな島に百貨店があるのもおかしいです。……それは住宅街も同じ。この森にしたって、動物が少なすぎやし

ませんか？　……家の中には包丁や食料があり、工事現場にも武器になりそうなものがあります。……全部含めて、このゲームの為に用意されたものなのでしょう？」
　何事もなかったように言い放つ。
　茜の言葉に高槻は言葉をなくし、そして笑い出した。
「ハァーッハッハ。気にいった、気にいったぞお前。俺達の力は強大だ、もし受けてくれるなら、今後お前の人生全て保障してやってもいい。どうだ、やってくれるな？」
　提案は、茜にとって魅力的なものだ。
　所々で補給したとはいえ、食料や水も尽きかけている。夜になったら、また寝床も探さなければいけない。
　何より、自分は帰りたい。
　だが、何よりも決定的なこと。
（……私は、現実的なだけです）
　高槻が銃身も持ち、グリップを茜に向けた。
「さぁ、銃を取れ」
　茜は右手を動かし——
「……嫌です」
　隠し持っていた銃を発砲した。
　高槻の両腕を貫く弾丸。彼は持っていた銃を取り落とした。茜は素早くその銃を蹴り飛ばし奪う。
「き……貴様ぁぁぁぁっ！　何故だっ！　何故乗らないぃっ!!」
　高槻が叫ぶ。その声は怒りで満ちていた。
「……私は現実的なだけです。……利用するだけしておいて、裏切るつもりだったのでしょう？」
　冷たく言い放ち、歩き出す。
「貴様、俺を殺さないのか？　管理室についたら、絶対にぶっ殺してやる！」
　その脅しにも、茜は立ち止まらず言った。
「……あなたには無理です」

「あの女……殺してやる、ぶち殺してやる……」
森の中を、血だらけになりながら歩く。
許されることではなかった。自分があんな小娘に遅れをとるなど。
あってはならないことだった。
だから——
ダンッ、ダンッ！
高槻は、撃たれた。
森の中から、人影が近付いてくる。
その人影は高槻の傍らで立ち止まり、死体となったそれを蹴り飛ばした。
人影は、死体と全く変わらぬ姿形。
高槻だった。
「05の馬鹿が。先走りすぎなんだよ。上——主催と観客の連中は、あくまで仲良しごっこを楽しんでる連中が、最後には醜いさま曝け出して殺しあうのが見たいんだよ。『ジョーカー』なんぞ用意して、楽しみを潰しやがって。今頃他の『高槻』には厳重注意がいってるよ。だがお前はこれでいい。小娘ごときにやられる貴様なぞ、いらん」
自分と同じ姿をした高槻を蹴りながら、高槻は言った。
「何故お前のナンバーが『05』なのか教えてやろうか？　お前は五番……五体の中で一番出来が悪かったんだよ。さて……こちら04。05は排除——」
そこまでだった。
「……な？」
自分に何が起こったのかわからなかった。
そのまま口と額から血を流し、05の死体の上に重なるように倒れる。
全く同じ姿をした二つの死体。
04を狙撃したのは——立ち去ったはずの茜だった。
「……いろいろわかりました、ありがとうございます。……でも、死ぬ前に悪事を喋るのは、三流のやることです」
04の死体から銃を奪う。

05から奪った銃はサイレンサー付きだった。
そのせいで、04には銃声が聴こえなかったのだ。
「……だから言ったでしょ」
05を見下ろし、呟く。
「……見てますか？　……私は簡単には死にません。……ゲームのルールに従い、生き残ります」
この様子をどこからか監視している存在に、誓う。
風の吹く夜の森を、茜は歩き出した。

## 335　逢魔ヶ時

暮れなずむ夕日を浴びながら、弥生は痛む右目をつぶったまま武器を作っていた。
ストッキングを脱ぎ、つま先の方を結び、そしてその中に石や財布から出した硬貨をつめていく。何度か振ってみてちょうど良い重さに調整する。
横から力をこめて振ると遠心力を利用できる。側頭部にあたれば敵は一発で昏倒するに違いない。そう弥生は思った。
その時風の流れが変わった。そしてその風に乗って人の声が聞こえてきた。
「暗いうちはあまり……いほうが……います」
「そ……な…」
声がしたところに弥生は接近する。しかしまっすぐ急ぐ事はしない。さきほど音を立てたばかりに一人殺し損ね、あまつさえ右目を痛めたのだから。
太陽を背にして弥生は物音をたてないように移動する。一歩進むごとに足元に小枝等の音がするものがないかチェックする。
その間にもさまざま興味深い話が聞こえてくる。
胃の中の爆弾、潜水艦、地下通路、無線機、ヘリ、あるいは無線機を押さえれば――
会話の内容を全て把握することは難しかったが、断片的な単語から脱出に関して話し合っているのだと弥生は推測した。
ほんの一瞬、彼らの話に乗るという選択肢を考慮

する。弥生とてむやみに殺したいわけではない。殺さずに済むならその方がいい。
しかし、彼らの言葉に力はない。全て確証の無いあやふやな憶測を話しあっているだけだった。
弥生が縋っている十人殺せば最愛の二人を助けるというのも同じくらいあやふやな物ではあったが、それでも、主催者の言葉である。一参加者のなんの根拠もない言葉よりはましだろう、弥生はそう判断し、彼らを殺す事を決意した。
再び慎重に接近を開始する。物音をたてないことを最優先したため接近に時間がかかり、目的地に到着する前に放送がかかった。
『二日目午後六時だ、早速今回も定時放送いくぞー……』
人の死を放送するこれも、今の弥生にとってはどうでも良いことである。あの二人の名前が呼ばれない限り。
むしろ、今ならば声の主達も放送に気をとられるだろう。それに全島に響いている放送は、弥生が接近する物音を隠してくれる。
チャンスであった。
弥生は急いで接近しようとした。
が、その前に深呼吸を一回して頭を冷やそうと努力する。
人間は生きるか死ぬかの非常時において大事なことをぽっかり忘れる生き物であり、冷静沈着なようでいても、実は普段の三分の一も冷静ではないのだと弥生に右目に走る痛みが教える。
だから自分のとるべき行動を何度も何度も繰り返しイメージしチェックする。
もう、先ほどのように44マグナムがあることを失念して、殺し損ねることなどあってはならないからだ。
チェックが終わると弥生は急いで接近する。
放送が終わりかけていることもあるが、それにも増して弥生にとってもうすぐ絶対有利の瞬間が来る

からであった。
　しかしその時間は短い。その時間が終わる前にけりをつける必要があった。
「詠美――っ!!」
「詠美さんっ！」
　その声と同時に誰かが走り出してゆくのが見える。弥生は発見される危険と逃がしてしまう危険を天秤にかけ、発見される危険をおかしてでも森の中から出て追跡することを決断した。
　太陽は自分の背後にあり逆光である事、さらに、焦っている様子から、背後には注意をはらうことは無いであろうと判断したためである。
　弥生が二人に追いつくと二人の背後にある木の陰に隠れ、そこから二人を観察する。
　どうやら、男は守るべき人を喪失したようだったた――今走り出していった人物がその相手なのだろう。彼らは、その誰か――詠美という名前のようだ――を、追うことに決めたらしい。

　その場面に弥生の心はなに一つ動かなかった。弥生が理解したことは男が和樹という名前であることや、彼が機関銃を持っているといった、彼女に必要な散文的な事柄だけであった。
　そして殺す順番を考える。
　どう考えても大の男であり、機関銃を持った和樹から殺すべきだった。
　そして夜の帳が下りる。
　その瞬間、闇が訪れる。どこに行っても人工の光で照らされる現代社会では絶えて久しい真の闇が。
　この瞬間こそ弥生が待ち望んでいた瞬間だった。
　痛みをこらえて今までずっとつぶっていた右目を開ける。光が失われてから闇に眼が慣れるまでのわずかな間、人は何も見えない。弥生のように初めから闇に眼をならしでもしないかぎり。
　弥生の左目には闇しか映らなかったが、右目は二人の姿をはっきりととらえていた。隠れていた木から飛び出て二人に突進する。左手の44マグナムは使う

気は無い。
散弾銃と比して命中率、威力、射程の全てにおいて劣る拳銃。弾丸の浪費を覚悟して何度か試射してみた結果二メートル先の的ですら外したこともあるくらいだ、それに今は片目しか見えていない。この状況で命中を期待する事は奇跡を期待する事と変わらなかった。
千堂と楓は何者かが走ってくる物音に気がつき、背後を振り向く。
しかし、まだ何も見えず棒立ちのままであった。普段ならふたりとも違う行動をとったであろう。しかし、一時的に視界を喪失した状況で予期せぬ出来事に見舞われた彼らは、思考停止した状態で弥生の襲撃に反応できないでいた。
弥生は和樹に駆け寄ると右手のストッキングで出来た鈍器を力一杯頭に叩きつける。予想以上に伸びたストッキングで狙いが逸れて、和樹の後頭部に当たった。
だが、手応えは十分。吹っ飛ばされた和樹は、そのまま地面に顔面から倒れ込んだ。
続く動作で弥生は地面に倒れた和樹の喉を力一杯かかとで踏みつける。足下に伝わる、生々しい、物が潰れる感触。
弥生は手首を返し、左脇に構えていたストッキングを今度は内から外に向けて振るう。次の目標である少女——楓はそれを上体を逸らしてかわした。
素早く楓は切り返し、右手につけた鉄の爪で弥生に反撃する。肘を狙ってきた凶器を、弥生は腕を縮めてとっさにかわした。
誤算であった。
襲われた人間が、こんなに早く体勢を立て直し、闇に順応するとは思わなかったし、それにこの少女の動きの速さは大の男と変わらないほど俊敏だ。
一つ間違えたら死ぬ、と弥生は恐怖心を抱いた。
だが退くわけにはいかなかった。あの二人がいつまで無事か解らない、もうこれ以上殺すチャンスを

逃すわけにはいかないのだった。
　距離が詰まったとき、二度ほど攻勢をかけてみた。だが見事にかわされる。逆に防戦に追われ立場がひっくり返った。
　突きかけられた。懐を深く構えてどうにかかわす。一転して体のバランスをとっていた手を狙われる。両手を後方へ。とたんに左足が残り、そこを斬りつけられた。すり足を使って後退する。先に倒した和樹の体に足が触れた。全身がぐらつく。
　防御ががら空きになった。それを狙っていたかのように全体重をかけた突きが来る。
　楓が一気に弥生に接近する。
　弥生は倒れながら右手のストッキングを楓に投げつける。鈍い音がして動きが止まる。
　上半身をひねりつつ、足を力一杯横へ払う。強い衝撃が伝わってきた。足首あたりを刈られ、楓はたまらず転倒する。
　弥生は相手の体がどこにあるか見当をつけると躍りかかる。ほとんど正確に捕捉した。
　左手の44マグナムを楓に押しつけ引き金を引き絞る。
　そこを中心に楓の服がみるみるうちに夜目にも黒く染まってゆく。
　致命傷であった。

「耕一さん、どうしてわたしたちはめぐりあったとたん別れるんですか？　何度同じことを繰り返せばいい――」

　楓の言葉がそこでぷつりととぎれた。
　口を半開きにしたまま動かなくなった。眼が大きく見開かれているがもう何も見ていない。
　弥生は右手で死体となった楓の眼を閉じてやった。ただの感傷だとはわかっていたがやらずにはいられなかったのである。
　そのまま少しの間弥生は動かなかった。まるで二

STREET MEMORY

人の冥福を祈るかのように。
しばらくの後、弥生は立ち上がり二人の装備を回収して再び動き始めた。
冬弥と由綺を救うために。
後七人殺すために。

**十八番　柏木楓　死亡**
**五十三番　千堂和樹　死亡**
**【残り49人】**

## 336　余裕と苛立ち

里村茜（四十三番）が去って暫くして、高槻04、05の死体が爆音と共に、跡形も無く消去された。
潜水艦ＥＬＰＯＤの発令所。爆破スイッチを押した高槻は、自らと同じ姿をしたクローン体を処分したことを意に介する事もなくメイドロボに当たり散らしていた。

二十四時間後に修理の目処がついたが、修理完了までに誰かがここを嗅ぎつけるのではないかという苛立ちが彼を不機嫌にさせていた。
「04と05の奴、先走りおって……だが、四十三番が単独行動だったのは不幸中の幸いだった。集団行動している連中だったら、致命傷になりかねなかった。ルールに従い、残るか……その方がこっちには都合がいいので大歓迎だ。ただ、俺に害が及ぶ場合は容赦無くやらせてもらうがな」

## 337　――疑念

その衝撃はひどく重たくて、私はしばらくの間満足に呼吸をすることが出来なかった。
少年は笑っている。
怒りに拳を震わせながら、視線に冷気を帯びながら。
その有様に戦慄して、私は再び息を飲む。
……だが、やらなくてはならない。

いずれ来る結界の限界を前に、今を置いて、この初期段階を置いて彼を殺す機会などありえない。
殴られた拍子に噛んでしまった唇から血が滲む。
鉄色の味が、妙に鮮やかに舌に広がる。
……生きている、そう血が叫んでいる。
私は、刃先を失って柄だけになってしまった槍を拾い上げる。
それはもはや槍とはいえない。ただの棒だ。
だけど、それを構えて再び立ち上がる。
少年は眼前にいる、その間合い数メートルといったところ。
……退くわけには行かない。
私は、私の好きな人たちを守るために。
「——全ての不可視が閉ざされたこの〝形而下〟。
……此処において、あなたを討つ」
闘う理由は、いつだってシンプル。
心の弱さを補えるだけの、それだけの意味さえあれば。

始まりから不審だった。
何故、あの少年がここにいるのか。
名前を持たず、通り名ですらない、唯その容姿どおりの呼称に過ぎない少年という呼び方。
開示された名簿。鬼、強化兵、機械、魔法使い。
……数多の異能者に迷彩された少年の二文字。
誰も気づかなかったのか。
戦場に紛れ込んだこの名無しの悪魔のことを。
ジョーカーは初めから彼ひとりが用意されていたのではないのか。
……その疑念は、私が偽のジョーカーを演じているがゆえに、より強まった。
——第一回放送。
ジョーカーという立場で在りながら名前を読み上げられた私。
ＦＡＲＧＯの出身でありながら名前を読み上げられなかった少年。
それはどういう意味なのか。

高槻の一存であのような放送に名を連ねた私。
同じ不可視の繋がりであるのに名前の無い彼。
まさか読み忘れたとでも言うのか。
……そんなことはありえない。
ならば、どういうことか。
……高槻には、呼ぶことが出来なかったのではないのか？
高槻の一存という理由が通用しない何かが、彼の参加に隠されているのではないか。
そしてその理由は。
……それは、彼がゲームの主催者側に与しているからと考えるのが、一番納得がいく説明だった。
その脅威は。
「ああああああっ！」
棒を振りかざし、全速で少年に接近する。いつものごとく、彼は微動だにしない。
ブンっ！
風を切る轟音。
ワンパターンな斜め袈裟懸けの打ち下ろし。だが今回は前回とは違う。
すっ、と手応えの無くなる感覚。
ここだ。
彼はいつも最小限の動きで、私の攻撃をかわしてきた。
先の交錯の瞬間、彼は僅かに一八〇度、軸足を基点に回転しただけで私をいなした。
ケープで目くらましをした筈なのに、まるで彼は見えてるかのごとくに、さらにすれ違いざまに私の武器までも破壊している。
……ケープの目くらましは、そのまま私の心の目くらましになってしまっていたのか。
四十五度の振り下ろし。
もちろんこれは既にかわされている。しかし、
ぐぁん！
もう一度風を切る音。
叫び声に気合を乗せ、渾身の一振りを、棒が地面

に接する前の、引き上げの一振りを彼に打つ！
――似非燕返し。
だが、それも。
「…………」
少年は無言で私を見つめている。
左手には分厚い本……これは……まさか教典か。
そして反対の右手では。
「……お粗末」
人差し指と中指に本のページを挟み込みながら、手のひらで棒を完全に受け止めていた。
その手のひらが、きゅっと棒を握る。
「くっ！」
私はその瞬間に彼に蹴りを放った。
しかし、少年はその蹴りに動じることも無く、むしろその反動で私は反動で背後へ飛ばされ、棒も手放してしまった。
……ここまでは、計算どおり。
一瞬。ただ一瞬のこと。
再び土煙が上がり、私は必要以上に地滑りする。
一度目は小山に倒れた。あれがもう少し固いものであったら、私は強かに腰を打ちつけていたことだろう。
いや、そもそもその小山はなんでそこにあるのか。
生憎、今の私にはそれを考えるゆとりは無かった。
一瞬。転がる一瞬に、私は切り取られた槍の先端を掴む！
ブン、と三回目の風切音が上がる。
けして得意とはいえない投擲……だが、この距離なら当てる自信はある。
狙いは……首筋。
だが。
ザン、と棒が地面に落ちる音。
キン、と槍先が弾き飛ばされる音。
二種類の音が、同時に鳴った。
「あ…………ああ」
思わず…戦慄に喉が渇いた。

開放した右手、挟み込んだ一枚の紙を、彼は飛来する槍先へと振るった。
その手首の速度は、もしかしたら槍の速度よりも速かったのかもしれない。
槍先は、無残に地面に落ちた。
「――こんな攻撃じゃ、僕を殺せない」

## 338 King of Kings

「かず……き……？」
詠美はその場に座り込む。
期待していたのだ。
和樹はきっと楓より自分が大事。
それを証明するために追ってきてくれる。
それは日常においては可愛い行為だったかもしれない。
相手の愛を確かめ、自分がより相手を愛するための通過点になったかもしれない。
和樹も可愛いいたずらと笑ってくれたかもしれない。

頭の中で描いていたのは追ってくる和樹。
頭の中で描いていたのは和樹の愛の囁き。
もう二度と手に入らないものたち。

目の前で繰り広げられたのは。
現実感のない悪夢。
全てが見終わったのにまだ覚めぬ悪夢。

和樹の手を握る。

――ぎゅっ……――

温かい。まだ生きているかのようだ。

――ぎゅっ……――

（え……？）
握り返された。
「和樹⁉」
しかし、骸が動くことなどないのだ。
それは詠美による妄想。

「和樹……。好き……」
頭は首に支えられていない。
支えているのは詠美の両手。

「和樹……。愛してるよ……」
唇を重ねる。
血の味がした。
抱きしめる。
抱きしめる……。
「愛してる……。和樹……」
もう一度言う。

俺も愛してるぜ。

詠美の耳だけに聞こえた返事。
涙が止まらない。
その声が聞こえてまた涙が出た。
和樹の死を実感してしまった。
雫が頬を伝う。

だが、勇気が出た。
和樹の声が勇気をくれた。
「和樹のしたかったこと。楓ちゃんのしたかったこと。私が受け継ぐよ」
立ちあがる。
「私は同人界のKing of Kings! 詠美ちゃん様なのよ！」
自分を奮い立たせる。
「このつまんないゲームのストーリーは！」
瞳に光が戻る。

「この詠美ちゃん様が描き直してやるんだから!!」
(もう大丈夫。だから……。心配しないで見ててね。和樹……)
詠美の心に決意が宿った。

## 339　接触

「もう……限界ね……」
それがそこでの最後の言葉。軽く、かすかに響いた声。目の前の少女――リアン(百番)の体はもう限界に近づいていた。
もう、これ以上仲間を待っているわけにもいかなかった。
舞の、佐祐理の死を告げた放送。
そしてそのやり場の無い怒り、憎しみをぶつけるべき相手、南ももういない。
このまますべて忘れてしまえば……狂ってしまえればどんなに楽だっただろう。だが、目の前の苦しんでいる少女が、それを許してはくれなかった。
(この子も……戦ってるんだ……私が逃げるわけにいかないじゃない!)
自分だけここでこの少女の死を黙って見守っているわけにはいかない。
(ごめんね、姉さん、スフィー、私は……独自の判断で行動するわ)
この島は割となんでも揃っていた。
住宅街や店もあった。
(きっと……この子の症状を抑える薬とか……あるかもしれないし……)
医学の知識は無い。下手をすれば少女の死を早めてしまう結果だってありうる。
だが、何もしないで隠れていることよりずっとマシだと思えた。たとえ、その先に最悪の事態が待ち受けていようとも。
洞穴を飛び出す。

待ち合わせの小屋にスフィーや芹香の姿がないかと淡い希望を抱くもそれは果たされなかった。
（本当にごめん……）
リアンを抱え、凄惨な戦いが行われている世界へと飛び出す。
結界のこと、脱出のこと、本当の敵のこと……
それよりも、失われようとしている少女の命――
リアンを助けるために動くのは今しかないのだから。来栖川綾香（三十六番）の行動原理は実にシンプルだった。
（毒……蛇に噛まれたときの消毒剤……なんかじゃダメよね……さて、どうすべきかしら？）
考えながら綾香は急ぐ。もちろんリアンの状態、周りの状況に気を配りながら。
気がつくと、どこからか小川のせせらぎ。その音にまぎれ、騒がしい声が聞こえてきた。綾香は出来る限り気配を殺しながらその声の主を伺う。
十五メートル近い崖の下、緩やかな流れの川のほとりにその男はいた。
エクストリームの試合でも滅多にお目にかかれないほどの凄み。
（なんて威圧感……！）
綾香の額から汗が流れ、落ちる。
あの男はやばい――綾香の直感がそう危険信号を発していた。
（ここから離れなきゃ――）
だが、綾香の体はその威圧感で金縛りにあったかのように動いてはくれなかった。
「なんて激流だ……これに巻き込まれたらいかな俺様でも生きて帰れねぇぜ……」
「ぴっこり」
「だが……サバイバルに難関は付きものだ。今晩のメシは魚にするぜぇ……なあ相棒」
「にゃう♪」
その男、低くドスの聞いた声は綾香の体を否が応

にも震え上がらせる。
「……分かってんだろ？　俺が水が苦手だってこと。だからよ……」
「ぴっこり」
「おめぇ……捕まえてこいや」
「ぴっ、ぴこっ⁉」
その男はなにか喋る毛玉を引っつかむと、上流へと放り投げる。
「ぴ、ぴこぴこっ⁉　ぴこ〜〜〜〜〜〜〜……」
遥か上流へ消えて行く毛玉を見て騒ぐ猫。
「にゃう♪　にゃう♪」
「なに踊ってんだ……おめぇ猫だろ？　おめぇもだ……よ‼」
「にゃにゃっ⁉　にゃ〜〜〜〜う〜〜〜〜……」
（なんて非道な奴……！）
綾香はその男に激しく嫌悪感を覚えた。
「ったくよ……使えねぇ奴等だぜ……これならまだうぐぅうぐぅ言ってたガキの方が……」
そこで男の声が止む。
「今……俺はなんて言った……？　あのガキのほうがいいだと⁉」
男はその場で崩れ落ちるかのように——
「この残酷無比な俺が……まさか……そんなことあっていいはずがねぇ……‼」
（あの男もまた……この島の被害者なのかもしれないわね……）
凄みをもつ目の前の男も、この異常な島に精神を侵された哀れな犠牲者なのかもしれない。
綾香の気が少しだけ緩んだ……その瞬間だった。
「誰だ⁉」
男の声。
（しまった！　まさか感づかれるなんてっ⁉）
綾香の表情に怯えの色が走る——！
「そこで盗み聞きしてる奴ぁ！」
同時に綾香に対し銃口が向けられる。
（銃——⁉）

戦慄が走り抜ける。
だが、綾香の格闘の経験が無意識の内に体を動かす――！
手近にあったもの……リアンの体に触れたとき同時にたぐりよせた飛び道具になりえるもの――
「でやぁっ！」
それはリアンの持っていたバインダーだった。
「……！」
同時にリアンを抱え、脱兎のごとくその場から離れる綾香。
「ちいっ！」
男が一瞬ひるんだ際に――まさしく刹那の出来事だった。
「あの女……素人じゃねぇな。……気配の殺し方といい……やるじゃねぇか……」
男はその落ちてきたバインダーを拾う。
「なんだ？　このカードの女は。……まあいい、盾ぐらいにはなるかもしれねぇ、もらっておくか」

「はぁはぁ……あんな男がいるなんて。やはりこの島は危険すぎるわ……早くリアンを助けないと大変なことに――！」
あの男の目は、何人も殺してきた――そんな目をした男だった。

「ようやく戻ってきたか……こら、水をかけるんじゃねぇ！　死んだらどうするんだ!?」
「ぴこっ!!（怒）」
「な～う～（怒）」
「分かった分かった……おめぇらにも魚やるから水はやめれ……」
「ぴこっ♪」
「にゃうにゃう♪」
「があぁ、落ち着いて食え！　じゃれてんじゃねぇ、おろすぞ!!」

## 340　ここから始める物語

また此処へやってきていた。玲子が逝ったこの『北の広場』へ。彼女がどんなに後悔しても、もう戻らないあの頃に戻るかのように。
「かずき……わたし、またここからはじめるよ」
つまらない嫉妬から楓を罵倒した場所。
身勝手な行動で和樹を困らせた場所。
「わたし……まけないから」
和樹が、楓が遺した脱出への道──。
「ここから、はじめるんだ……」
生きて帰る……それは和樹達の心からの願いだった。
一度は壊れて──そして和樹が彼女の心を癒してくれた。彼女が取り返しのつかないことをしようとしたとき楓は、彼女を許してくれた。
だから──
「もういちど、ここから──」

## 341　詠美ちゃん様の推理

周りに誰もいないことを確認すると、詠美はそこに座り込む。
ちょうど、和樹が座っていた場所に。
「……えっと、たしかかずきは……」
詠美は和樹達の言葉を一生懸命に頭に思い描いた。
こう見えても詠美は短期間の記憶力には自信があった。その記憶力で何度テストを乗り切ったか分からないほど。
「そう！　せんすいかん！　せんすいかんといえば……およぐ！　……そんでもって……もぐる？」
だが、応用力はなかった。
「ふみゅ～ん……」
途方に暮れかけたが……
「まだよ……いちおう会話のないようーは全部暗記し

てるんだからっ……たぶん、えっと……たぶん、忘れない」
詠美は必死に頭を働かせ、脳裏に言葉を焼き付ける。
本当は詠美にも分かっていた——心優しい楓と、和樹の、二人の言葉。
絶対に忘れたくなかった。忘れることは、今の詠美を否定することだから。
「なかま……そう、なかまをさがす……そしていっしょに考えてもらえばっ」
しかし、詠美が昼間会ったカップルのようにいきなり襲ってくる者もいるかもしれない。
「どうすれば……」
こんなに頭を使ったのは初めてだったかもしれない。
「そうだ……楓ちゃんに……」
——私の知り合い……姉さん達に会えればきっと力になってくれます——
「えっと……柏木って女の人をさがせば……なんとかなるかな？」
詠美がやっと出した答えはこれだった。
「……そうよ。わたしは同人界の女王なんだから‼」
自分を勇気付けるように、詠美が勢いよく立ち上がる——と同時に何かがポケットから転がり落ちた。
「え……何？　……ＣＤ？」
それは、もしもの為に楓が詠美の服に忍ばせていたＣＤ。
——楓が、どうしても南には渡せなかったＣＤ。
楓は無意識のうちに悟っていたのかもしれない。このＣＤに何か手がかりが隠されていたこと、そして、おそらく自分はその謎の解明を果たすことなく散ることまで——
楓がどう思っていたか……もう詠美には、そして誰にも分からないことだった。
「……何……これ……4/4？　……ふみゅ？」
そんないきさつなどまったく知らない詠美がそれ

を拾い上げまじまじと見つめる。
「なんかの……音楽ＣＤ？　……まあ、いいか」
詠美はそれをもう一度大事に服にしまう。
それは何気ない仕草は偶然だったのかもしれない。
だが、そのＣＤが後でどれだけの役割を果たすかを、詠美は知らない。

## 342　ここから伝える物語

「じゃ、かずき……楓ちゃん、いってくるね」
名残惜しむように、寂しげなその言葉は夜の森へと消える。
「すべてがおわったら……また……ね」
その時は泣こう。涙尽き果てるまで。
まだ消えぬ涙の痕を乱暴に手で拭う。
「かずき達の想い……絶対に伝えるからっ!!」
そして、詠美は歩き出す。
大いなる悲しみを心の扉に仕舞って。
かけがえの無い友達。
そして、短い間だったが確かなぬくもりを確かめあった、あの人の遺志を継いで——。

## 343　狩のはじまり

「ずいぶんとぼろぼろになったな、あんた達」
国崎往人（三十三番）の問いかけに、
「ええ、まったくですね」
と、水瀬秋子（九十番）は答えた。
実際、往人の前に現れた水瀬秋子と水瀬名雪（九十一番）の姿は痛々しいものだった。
二人とも服は汚れ、秋子の頬にはバンドエイドが、そして何より名雪の頭には包帯が巻いてある。
だが、二人ともその顔にはいつもの朗らかな笑顔が浮かんでいた。
（たいしたもんだな）
それを見て往人はそう思った。

前回の生き残りでそれなりに修羅場を潜り抜けている秋子はともかく、名雪のほうまで笑顔で、
「わ、なに国崎さん、そのカラス。お友達？」
とか往人にしゃべりかける。
「んなわけあるか。非常食だ」
「わ、ひどいよ国崎さん」
「こんな奴、それで十分だ。おいこら、つつくな」
「国崎さん、ひどいよー、鬼畜だよー」
往人は「うるせぇよ」などと返しながらも、久方ぶりに交わす（と言っても、一日もたってないな）明るい会話に少し心が和んでいた。
少し表情を緩めて秋子の方を見る。
「てっきり、喫茶店にずっといると思ってたが」
「そうしたかったのですが……あの後襲撃を受けてしまいまして」
「襲撃？」
往人の目が鋭くなる。
「誰にだ？」
「名前のほうはわかりません。ですが姿のほうは見ました」
秋子は真顔になって答えた。
「長い黒髪で割と長身。そして、切れ長で多少たれ気味の目をしたきれいな女性です」
秋子はそのほかに武装、服装等の細かい特徴を、往人に告げた。
「この出場者の中にはジョーカー、主催者側に雇われた殺し屋が幾人か紛れ込んでいるようです。往人さんも気をつけてください」
「ジョーカー、だと」
往人は低く呟いた。
最後に彼が殺した女を思い出す。真剣な、どうしようもなく必死な、そんな思いを抱え、それでも人を殺すことしか方法がわからなかった、あの少女のことを。
「……許せんな」
「そうですね……」

ため息と共に秋子も同意する。
「そのジョーカーに襲撃を受け、琴音さんの行方もわかりません」
「そうか……大変だったな」
往人は名雪にも何か言葉をかけようとして彼女のほうを向いた。
そこで、往人はかすかな違和感を感じる。名雪はこの会話中もずっと笑顔のままだった。
確かに、いつも笑顔の少女というイメージはあった。
が、こんな張り付いたような笑顔をするような娘だったたか？
「ところで、往人さん。探し人は見つかりましたか？」
「あ、ああ……」
だが、秋子の問に、そんな違和感は頭の中に定着する前に消えていってしまう。
「まだだ。このレーダーでは番号しか表示してくれないんでな」
先ほども、017の表示が出たので、本人に気が付かれないようにして確認してみたが、それは長身でやや筋肉質のショートカットの女。彼が探す神尾観鈴には似ても似つかなかった。
もっともこのレーダーのおかげで、慌てて逃げた先、水瀬親子の存在をキャッチできてこうして合流することができたのだが。
「もう少し経てば放送が始まるから、番号も絞れるかもな」
多少の罪悪感を無視して往人はそう吐き出すようにいった。
「……その番号なんですが……あなたの探し人は神尾、でしたよね」
秋子は頬に手を当て首をかしげる。
「それならば、おそらく番号は二十三、二十四、二十五番のどれかじゃないかしら」
「……なんでそう言いきれる？」

「昨日の高槻の放送です。高槻がこの五人を殺せ、といったとき、その中に鹿沼葉子さんという方がいました。その人の番号が確か、二十二だったはずです。そしてすでに河島はるかさんという、二十六番の方が放送で呼ばれましたから……」
「そうか！」
往人は慌ててレーダーを覗き込んだ。神尾は晴子と観鈴がいるから、二十四は必ずどちらかの神尾であるはず。
「いた、おそらくこれだ」
023と024がいっしょの場所にいた。他にもう一人そばにいる。025のほうは海岸のほうにいた。
「多分、023と024のほうが正解だろうな……助かったぜ秋子さん」
「よかったわ。ここから近いの？」
「ああ、今きた道を戻ったところだ」
それは、先ほど十七番を見つけた少し先にいったところだった。

「これだったら、すぐ見つけられるな。あんたらはどうする、ついてくるか？」
「いえ……」
秋子は首を振った。
「私たちは元から知り合いの信頼できる人と合流したいと思います。そこでなんですが……」
秋子は一度言葉を切る。
「あつかましいお願いですが、そのレーダーをお返し頂けないでしょうか？」
「レーダーを？」
「はい、喫茶店にいるうちは必要もないものだったのですが、こうなってしまった以上、早く頼れる人と合流したいのです。名雪の怪我のこともありますし」
「そうか……」
往人はしばし逡巡した。だが、
（この距離なら、レーダーがなくてもすぐ観鈴達とも合流できるだろ）

もちろんこちら移動している間に、彼女達も移動するかもしれない。だが、探せないということはないだろう。もうすぐ日が暮れるというのは不安要素だったが、あるいは夜のうちは向こうも動かないかもしれないし。

「そうだな……もともとあんたらのもんだしな。いいぜ、もってけよ」

「いいんですか？」

「ま、今の礼もあるしな。それじゃ、俺はそろそろ行くぜ。急ぐことになったからな」

「うん、それじゃあね、国崎さん」

名雪が笑顔で往人に別れの言葉を告げる。

「あばよ」

そういって立ち去ろうとした往人の背中に秋子の声が投げかけられた。

「……待ってください」

「？　何だ？」

「……いえ、その」

言いよどむ秋子。その姿に往人は多少の驚きを感じる。そんなことをするような人には見えなかったので。

「……あなたは……私たちと別れた後、敵に会いましたか？」

「ああ」

「殺し、たのですね？」

「ああ」

「そうですか……後悔はしませんでしたか？」

「ああ」

往人は秋子の彼女らしくない質問に三度同じ答えを返す。

「その人たちには、その人たちなりの事情があったかもしれないのに？」

「そして、俺には俺の事情がある。俺は、俺の大切なものを守りたいと思う。そのためには、後悔なんて、しない」

「……そうですか……それならばもう……」

秋子の声が徐々に小声になっていく。
「なんだって？」
その声を聞き取れなかった往人が聞く。
「いえ、何でもありません。お気をつけて往人さん」
「……あんたらもな」
往人は聞き逃していた。
秋子が——それならばもうあなたは、私達の敵ですね——と言ったのを。
「何で、あんな嘘ついたの？　お母さん」
「ジョーカーのこと？　あら、あれはまったくの嘘じゃないわよ」
秋子はカラスを肩に乗せて去っていく往人を見つめながら、名雪に答えた。
「……そうね、ちょっとした宝くじかしら」
別にあの嘘に大きな意味はない。話の流れで、「敵」というものを往人に説明しなくてはならなかった。
そこで浮かんできたのが、あの人、柏木千鶴だっただけだ。
そう、彼女——柏木千鶴も、もはや秋子の敵だった。彼女が妹達や従兄弟を守るために殺人を辞さないというのならば、彼女もまた往人と同じように敵なのだ。
そして、その敵同士がつぶれあってくれれば……。
(本当に宝くじみたいな話ね)
秋子は首を振った。
「さ、あゆちゃんと祐一さん、探さなきゃね」
「うん！　まずあゆちゃんね。えーっと、あゆちゃんの番号はね……」
名雪は終始笑顔だった。

## 344　**小さな手掛かり**

もうすぐ夜の帳が降りる。
時が経つにつれ蝉丸には馴染みのある香りが島を

覆っていく。
――死臭。
それは、吐き気を催すような死の香りだった。
最初はその香りに耐え難い嫌悪を示していた月代だったが、今では別のものを嫌悪している。この悪臭に嫌でも慣れかけている、自分自身を。

　先刻の放送によれば、あれからさらに死者は増え――既に凡そ五十人程の骸がこの島に転がっているらしい。中には、野ざらしのままになっている者も多いだろう。――おそらくは、高子や夕霧達も。
　見つけてやれれば、埋葬くらいはしてやれるかもしれないが……。

　この日中、蝉丸と月代は島の海岸沿いを探し歩いていた。発端となったのは月代の提案だ。
「(･∀･)探す……といっても、あの高槻って人……どこにいるんだろう？」
「分からん。もしかしたら、既にこの島には居ないのかもしれん」
「(･∀･)でも、最初はいたよね？　船とかは無い、って言ってたけど、この島から出るための別の手段があるんじゃないかな？」
「そうかもしれん」
「(･∀･)やっぱり、ヘリコプターとかかなぁ」
「ヘリコプター……？」
「(･∀･)知らない？　こう、プロペラが上についてて、それがぐるぐる回って飛ぶの」
「……ああ、回転翼機のことか」
　蝉丸自身は見たことはないが、独逸や亜米利加がそのような兵器を開発していたと聞いた覚えがある。今となっては相当に進歩しているのだろう。滑走路を要しないならばこの島の何処かにあっても気付き難い。
　だが、飛行機の類はいざとなれば簡単に飛行不能にできる。地上にあるとは考えがたい。それに、そ

んなものが飛んだのならば、いくら感覚が衰えているとはいえ蝉丸が気付かないはずがない。何らかの異能などで隠されているなら別だが……その場合はどうしようもないので、考えるだけ時間の無駄だ。
「(・∀・)だったら、飛行船で空からみてるとか……」
「そのようなものも、昨日から見ていない。あるとすれば相当の高空だろうが……少なくとも近くに降りてきたことはないな。だが……」
……何か、感じる。それは非常に些細な感触だが、あの雲の向こうから、何者かが見ているような気がする。
「(・∀・)それじゃ地下道が海の下に通ってるとか……」
「海の底に道を造るのは非常に手間がかかるはずだ。ここは、他の陸地とは少なくとも数里は離れている。あの仙命樹の洞窟でもそこまで長くはなかった」
「(・∀・)そっか。じゃあ後は、潜水艦……とか」
「潜水艦……」
「(・∀・)そうそう。どっかの崖下の海中とかにでっかい秘密基地があってそういうところに隠してあるんじゃないかな……って」
「秘密基地、か」
かつて特殊部隊の一員として大陸で戦った日々が脳裏によぎる。蝉丸達強化兵に与えられた使命の多くは、表沙汰には出来ない性質のものだった。
それこそ、まるで少年向けの冒険小説の産物かと思うような「秘密基地」に潜入・破壊せよ、との命を受けたこともある。中には自分達と同じように強化された常人ならぬ相手もいた。確かさいぼーぐとかいった……そう、あれは確か……黒幽霊団と……。
過去の回想に浸りかけた蝉丸に、すねたような月代の言葉があびせられた。
「(・∀・)……だから、海沿いに歩いて調べてみようっ、て。……蝉丸、聞いてる？　ねぇっ！」
「……ああ。分かった」
もし、高槻某がこの島にまだ居るとすれば何らかの脱出手段を有していると考えた方が自然である。

様々な非常事態も考えられるこの状況で、「仲間に連絡すれば迎えがやってくる」などというような悠長な状態で構えているとは思い難い。即座に逃げ出せるようにしているはずだ。
ならば、長期間の滞在が可能であり、かつ脱出手段がすぐ側にある何処かに隠れているのだろう。潜水艦ならばそれらの条件を充分に満たしている。
特に手がかりがあるわけではない。ならば、この方法も悪くはあるまい。
こうして、何回かの休息をはさみながら二人は島の周囲を探り歩いた。
途中で黒焦げになった死体や、怪しい機械の残骸を見つけたりしたが、脱出の手がかりになりそうなものは見つからなかった。
なお。先刻、自動車らしきものの音がしたため向かった先で、固く抱き合う一組の男女を見かけはしたのだが、それに月代が気付く前に進路を変更し、敢えて無視した。……先ほどからやけに自分にくっついてくる月代を見ていると、なぜか非常に厄介なことになりそうな気がしたので。それに――きよみの事もある。今はそんな気分になれなかった。
そして海沿いの、ある尾根上にたどりついた時。
月代が、竹槍を握りしめて小声で囁いた。
「(･∀･)蝉丸。なんか音が……しない？」
「む？」
月代も微量とはいえ仙命樹を持っている身だ。常人よりその感覚は鋭い。
蝉丸は耳を澄ます。
小さな音が聴こえた。少し向こうからの波音に紛れがちになるが、その音は足下の地面――そのさらに下から聞こえた。
……カン。カン。カンッ……。
……ピーッ、ピーッ、ピーッ！
金属を叩くような、小さな澄んだ音。
そして、何らかの機械が出すような無機的な音。

(これは……)
そしてさらに気付く。周囲の土が、木々が——新しいものであることに。
岩にも苔がついていない。寺社にある枯山水の置物でもここまで綺麗ではあるまい。そして木も、樹齢の割には海風による影響が殆ど見られない。
これらは、置き替えられたものだ。
この下に「何か」が造られた後に。
それは、おそらく——。
蝉丸は月代の耳元に口をよせ、小声で囁いた。
(……月代)
((・∀・)なに、せみまる)
(おそらく、この下に何かがある。だが二人では心許ない。ここはいったん退き、他の者を探す)
腹中の爆薬のことも気になる。二人だけで突入したところで、きよみのように爆発させられてはたまらない。せめて、この事を他の誰かに伝え、策を練る必要がある。
余りここに長居して、こちらの居場所が分かっているらしい高槻某に疑念を与えるわけにもいかない。こちらが気付いた事に気付かれ、逃げられても困る。
相手には今の会話までは聞き取れまい、と蝉丸は考えていた。荷物や服についても調べたが特に妙なものは見つからなかった。腹中に仕込んだ爆弾に、仮に音を聞き取る機能があったとしても、大したものではないはずだ。
こちらの行動は、おそらく——この島に来て何度か感じた、視線の持ち主達によって向こうに伝えられているのだろう。殺意のない、だが冷ややかな同種の視線。雲の彼方から感じる「それ」を、今の蝉丸は「監視者」のものではないかと考えている。
もっとも、蝉丸は今の時代の技術には疎い。もしかしたら間違っているのかもしれなかったが、そこまで考慮する余裕はさすがになかった。
(——もしかしたら、この「ぱそこん」が何かの役に立つのかもしれんが、俺には分からん。誰か、こ

れを扱える者に出会うことができれば……）

## 345　ふたりだけのせかい　～sacred days～

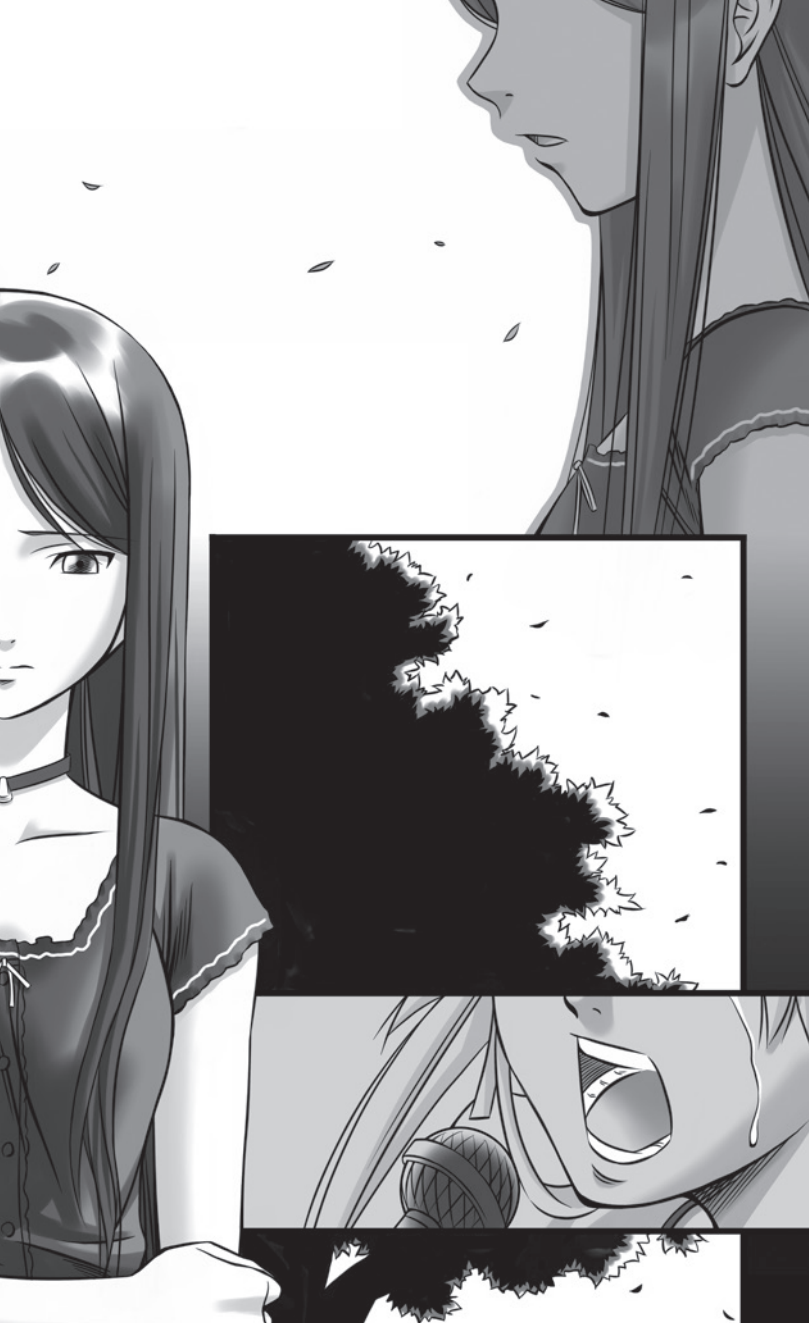
そこは二人だけの世界。
全ての介入が無意味となる世界。
度々聞こえる銃声も、定時放送も、彼等にとっては意味をなさない。
彼等が出会い、その世界が生まれた。
星空の祝福する下、彼等はいた。
「ねぇ、浩之ちゃん」
「どうした？　あかり」
「ちょっと、話し疲れちゃったね？」
「あぁ、そうだな」
「でも、まだまだ話し足りないよね？」
「そうだな。俺達の過ごしてきた時間だからな。いくら時間があっても、足りないぜ」
「ふふ、そうだね」
「あぁ。だから、もっと話そうぜ？」
「うん……ねぇ、浩之ちゃん？　こうして星空を見上げてると、私達、世界に残された最後の二人みたいだね」
「ずいぶんとおかしなことを言うんだな」
「酷いよ浩之ちゃん……」
「はは。あかりらしくて、いーんじゃねぇか？」
「今日で世界が終わっても、私は幸せだよ。浩之ちゃんといるんだから」
「あかり？」
「世界に残された最後の二人って言ったよね。だから、浩之ちゃんがいなかったら生きていけないんだ」
「……俺もだぜ」
「浩之ちゃん、守ってくれるって言ったよね。もしも、どっちか先に死んじゃたら……」
「……わかった。約束する。だけど、生きて帰るぞ？　どっちかが死んだりしたら、それは世界の終

わりだな」
「そうだね……。聖なる瞬間っていうのかな。好きな人と迎える、世界の最後の瞬間っていうのは」
二人、口づけを。
この世界がいつまでも続くようにと――

**346　夜が来る。**

「と、いうわけで紆余曲折を経て、私達は今も一緒に行動しているーー」
「誰に説明してるのよ……しかもはしょりすぎ！」
杜若きよみ〈複製身〉、観月マナ、霧島佳乃……三人は、何故かあのままなし崩し的に一緒に行動することになっていた。
「いわゆる三人寄らば、かしましい……という奴ね」
「あなた……キャラクター変わってない？」
きよみは、先程からとんちんかんな台詞を吐いてはマナを困らせていた。
「あはは、そんな二人には漫才師一号さん、二号さんに任命するよぉ～」
佳乃は佳乃でこの状況を楽しんでいるかのように振舞うものだから……
「……もう、いいわ……勝手に言ってて……」
マナはただ頭を抱えるばかりだった。
先の放送――きよみの名前が入っていた……ここにいるきよみではない。
まったく同姓同名の、別のきよみ――。
それを聞かれたくない所為からなのかもしれない。だから、事の真偽を聞くのはマナにははばかられた。
「そういえばきよみさん。さっき放送で呼び出しがあったよぉ～」
否、だけになった。
「ん……そうね……私には関係ないのよ」
さらりと言ってのけるきよみ。
その瞳の奥に、寂しげな瞳があることをマナは見

逃さなかった。
（とても……そうには見えないわよ！）
まるで目標を見失ってしまったかのような空虚な瞳……。マナはそれ以上その話題を続けることはできなかった。
「で……お姉ちゃんのところ……行くの？」
佳乃が、めずらしく真面目に二人にそう振る。
「そう……ね」
マナにも答えられない。本当に今この時にそこへと行くべきなのだろうか……。
「まあ、なるようになるわよ……たとえどんな宿命が待っていても、結果は自分で動いて出すものよ。その先に待っているのが不幸だけでもね。私はもう、現世にいること自体不幸だから……怖くないけどね」
「そんなことっ……」
言うものじゃない!!　と、マナは続けるつもりだったが、結局何も言うことはできなかった。

きよみの、その表情に何も言わせないだけの迫力を感じたから。
「まあ、そう決め付けたものでもないんだけどね。好きにしたら？　私は暇だし、一人でいるよりは安全ね、行くなら付き合うわよ？」
（……さっきまで私に殺すだの殺されるだの言ってたくせに……なんて勝手な女！）
「何か言った？　おチビちゃん」
「……（怒）」
マナの伝家の宝刀……スネ蹴りと、きよみの悪口と共に繰り出される平手打ちは小一時間にも及んだ……無論、佳乃が止めに入ってようやく収拾がついたことは言うまでもない。
「決めたよ……マナちゃん、お姉ちゃんのところに……私行く」
もちろん精神的にではなく、肉体的に……という意味だ。
決意の瞳。もう涙は溢れていなかった。

「分かったわ……行こう」
マナもまた、強くあるために……そう判断を下した。
（センセイに……笑われたくないもん）
「こっちよ……」
マナが先頭に立って、あたりに気を配りながら歩き出す。
「それと……」
何度もくじけそうになって、それでもマナがマナでいられるのは……聖だけのおかげじゃない。
「ありがとね……」
ボソリと呟く言葉。かすかな、恥じらいで消えてしまいそうな声。
「ふう、これだからおチビは……」
「……（怒）」
その相手は、知って知らずかただ軽く悪態をつく。
今度は揉めなかった、お互いに。
ふと佳乃は思う。涌き出た疑問、知らない夜の記憶——。
（あれぇ……何か忘れてる……そうだ、お手伝いさん一号さん……どこに行っちゃったんだろう……昨日の夜、記憶がなくなったあたりからなんかおかしいなぁ。なんも覚えてないや。……ま、いいか）
思考の混乱の最中、梓はボディーガードメイド一号から格下げされていた……。
日は沈み、また夜が来る。
参加者達の心を震えあがらせる真の闇夜が——。

## 347 残照

沈みかけた太陽が最後の光を投げかける一室で、二つの別れがあった。
「ホントに行っちゃうの？」
心配そうに初音が声をかける。落ち着いたとはいえ、由依の怪我は深く、未だに血が滲んだままだ。
「うん。ありがとうね。また、会おうね」

由依は涙をにじませて初音の両手を取る。
物騒だけど、と言いながら初音と二人で服からほどいたダイナマイトを半分渡す。
「きっと、絶対、会おうね！」
二人は笑顔でお別れした。
互いにダイナマイトを持った手を、大きく振ってお別れした。

「さっさと、行きなさいよ」
憮然とした表情で七瀬が声をかける。目覚めたとはいえ、二人の目は充血していて、頬は盛大に腫れたままだ。
「ふん。——言われないでも、出て行くわよ」
晴香は目を怒らせて七瀬を睨む。喧嘩売ってんの!?　と言いながら「しっしっ」とする七瀬の手をはたく。
「次はきっと、絶対、勝つわよ！」
二人は火花を散らして別れた。

互いの鉄パイプと刀を、ぎらりと夕日に輝かせて。

——情況を整理しよう。
まず晴香と七瀬が壮絶なダブルＫＯを演じた後、二人が目を覚ます前に浩平が高熱を出した。
体調不良のところに大暴れしたためか、純粋に怪我のためなのかは不明である。次に耕一だが、これまた鬼の力の発動による反動で元気がない。
その後目覚めた二人を加え、由依と初音を司会に（あまり適任ではなかったが）情報交換することになった。
良祐と、瑞佳の死も語られた。
「良祐のこと、私……全然判らなかったな……」
黒いコートの男。巳間良祐は遠い昔に晴香と別れ、多くの人に悲しみを振り撒いて、そのまま逝ってしまった。
もはや、記憶はあまりに遠かった。自然と涙が流れたが、それほど長い間ではなかった——と思う。

七瀬だけはその涙を不満そうに見ていたが、それでも何も言わなかった。
すん、と晴香が鼻を鳴らし、夕日を背に部屋の隅まで影を流し立ち上がる。
「ごめん」
それは話を中断させたことに対してなのか、それとも七瀬や、ここに居ない浩平、もしくは瑞佳に対してなのか。
「もう、泣かないから」
ひょっとしたら、良祐に対してなのか。それは誰にも判らなかったが、そう一言呟いて自らの情況を話しはじめる。
過去。出会い。放送。そこで耕一が意見を挟んだ。
「君らは、あの高槻から特に恨みを買ってるのか？それとも奴を怯えさせる何かがあるのか？」
少し考えて、晴香は答える。
「良祐や、由依は……巻き添えなんだと思うけど。他のみんなは、たぶん両方ね」
不可視の力、高槻との因縁、それらの概略を説明する。続けて管理者達を襲撃した事を、仲間が捕えられた事を——殺しの契約についても——話した。
「なんだか、まるで信用ならないじゃない」
高槻の性格を知り、七瀬は呆れたように言う。
「そうだ、それなら葉子さんとやらを追った郁未ちゃんと合流して、反抗したほうがマシなんじゃないのか？　もし二人が合流していれば、既に攻め込んでいる可能性すら出てくるとは思わないか？」
ベッドで転がりながら、耕一が後を引き継ぐ。かなりだるいのだろう、動きが緩慢である。
「それに人質作戦を取るなら、最初からそうすればよかったんだ。ゲームが開始されてから、参加者を捕らえなおして人質にする必要があるか？　例えば初音ちゃんを人質にして開始すれば、柏木家のみんなは今ごろ必死に戦っていると思う。——何か、変だと思うな」
沈んだ表情で思考をめぐらせている晴香に、由依

が訴えかける。
「郁未さんを、探そう?」
これで決まった。晴香は由依と共に郁未を追う事に決めたのである。

### 348　闇色の再会

夜がくる。闇が、落ちる。
口元を笑みのカタチに歪め、冷笑じみた表情が篠塚弥生の顔に貼り付いていた。
あと、七人。
それで、あの二人が生き残れるなら……。
森を徘徊しながら、弥生は利き手に掴んだ機関銃のグリップの感触を確かめる。
血にまみれ、震える手で。
人を殺すことは最も恐るべき禁忌だ。
それは、法律で決まっているからだけではない。
それを、弥生の腕の震えが教えていた。
もう、三人も殺してしまった……。
そう……この、手で。
散弾銃で殺し、鈍器で殺し、拳銃で殺した。
気が付けば、震えは全身に及んでいた。
血が、あんなにも赤黒く、そして生臭いものとは知らなかった。
青年の頭を捉えた、あの瞬間の腕にくる重力。
靴の踵で致命傷を与えた、あの、感触。
銃器を撃つ反動。そして、胸元に広がる、血。
いくら冷静なキルマシーンを装っても、所詮は人の子……。
じりじりと、恐怖が弥生の腕に、胸に、そしてその脳に伝わる。
これが、禁忌を犯した者の、心理。
誰に責められるでもないというのに、酷い罪悪感が脳漿に居座っている。
こんなことでは……いけない。
いくら理性的に、物を理解しようとしても、頭の

中には、自分が殺した少女の、あの最期の顔がちらつく。
あんなにも悲しげな表情は知らない。見たことがなかった。
名も知らぬ少女の死に際の一言も、胸に刺さったままだ。
あの二人を守るため。
そんなのは言い訳でしかなかった。
理由ではない。人を殺してしまった今、それは意味を成さない。どんな理由を付けても、それが切実で在れば在るほど、それは言い訳にしかならないのだ。
違う可能性を模索しても意味がないことはわかっていた。わかっていたが、考えずにはいられなかった。
もし、この奸計に自分が気付いていれば。
もし、一番に二人を見つけられれば。
……今に、もしも、なんて言葉に意味がないことは、弥生自身が一番、理解していた。
もし、私が、人を殺さずにいられたなら。
もし、最初から人を殺すことなく、二人を守ることができたなら。
がさり、と物音がした。
はっと息を呑んで、弥生はとめどない思考を振り払う。
音の距離は、それほど近くも遠くもない。
すっかり帳の降りた闇に、目を凝らす。
右目が、ズキリ、とそれを非難するように痛んだ。
――また、殺すのか。
そう、問いただすかのように。
人影の数は二つ。
闇に慣れたとは言え、距離がありすぎる。相手の顔は判別がつかない。
片目に傷を負っていなければ、或いは見えたかもしれない。舌打ちを堪え、弥生はその二つの影を見極めんと、距離を感づかれない様に縮める。

「……っ！」
弥生が見た、二つの影は、彼女が必死で守り抜こうと、そう決めた二人――由綺と冬弥のものだった。
「由綺さん！」
堪らず、声をかけた。森の静寂が、一瞬ビリ、と震え、そして前以上の静寂が三人を包む。
「弥生さん……！」
少しばかりの沈黙のあと、由綺が笑った。泣きそうな、顔で。弥生は、手にしていた武器を全てその場に放り、由綺を抱きしめた。
「く、くるしいよ……弥生さん……」
苦笑いを浮かべても尚、嬉しそうに声を上げる。
喜ばしき再会。
ここが、死を与える島でなければ、そうだったのかもしれない。
「お二人とも、よく……無事で」
頬が熱い、そう感じたときに、ようやっと自分が泣いているのだと、弥生は気が付いた。
「弥生さんも……よかった。ね？　冬弥くん？」
「ああ……」
冬弥だけがその場にそぐわない、招かれざる客のようにただ、萎縮していた。

## 349　宵闇病

「……何のためにこのゲームを企画したかって？」
長瀬源一郎がそう訊ねると、長瀬源之助は苦笑して、
「儂に意図はないよ」
遥かな高みの雲の上で、二人はそんな風に語っている。
七瀬彰が推測したことの半分は正しかった。
このゲームの表の企画者たる長瀬一族のうち、長瀬源之助、長瀬源一郎、長瀬源四郎、そして、フランク長瀬。四人が上空で観察していた。源五郎と源

三郎の二人が何処にいるかは知れぬ。
レーダーに映らない不思議な構造の飛行船の中、上空数千メートルの高さから、高性能なカメラを使用して彼らは観察している。
彼らが監視しているのは、しかし——長瀬祐介と七瀬彰のふたりだけである。腹の中に爆弾が埋め込まれていない、長瀬一族の末裔たるふたりを。

何故このゲームが企画されたかは、長瀬一族の誰も実は知らぬ。そこに働く空気のような意図を汲み取れぬまま、流されるままに長瀬一族は殺人教唆を行う事になる。彼らに罪悪感が生まれたのかは判らぬ。彼らはまともな人間であるのだからきっと罪悪感は強く働いているのだろうが、否定できない強制力がそれ以上に大きかった。
心根はどうであれ、彼らはこの殺人企画を遂行しないわけにはゆかなかった。彼らは真っ当な人間である筈なのに、こうした罪悪を犯さなければならないという運命の因に巻き込まれた。だから、本来ならば彼らに罪はない。しかし、ことが終われば、当然のことだが、彼らは法に裁かれなければならない。彼らは不運である。

ここで、一族全員が必ずしも意図をまるごと飲み込んだわけではないことを記しておこう。この飛行船自体がその証拠である。長瀬一族の若者たるふたりを監視するためのこの飛行船が、強制力に反する証拠なのだ。

セバスチャンこと長瀬源四郎に、長瀬源一郎とフランク長瀬の二人が談判に来た。願いは一つ。
自分たちの甥をこの馬鹿げた戦に放り込まないでくれ。
懇願は却下された。長瀬祐介も七瀬彰もこの戦いの部分となる事を確と定められたもの。却下した長瀬源之助とてふたりが可愛くないわけがないのだ。

可愛い孫なのだ。それでも強制力はそれを許さなかった。
だが、そう言ってすごすごと引き下がるわけにはいかぬ。可愛い甥をみすみす死地に送るような事など出来ぬのだ。強制力に逆らおうとする意思が、長瀬一族の中に生まれる。なんとかしてふたりを死地から遠ざけたい。強制力に肉親の情が逆らう。
逆らった結果、妥協案が出された。
そのふたりをこの企画から除外するわけにはいかないが、せめてもの救済策として、参加者全員に埋め込まれる筈の体内爆弾を例外的に外そう。
彼らの死ぬ確率が少しでも下がった訳ではない。最高でもどちらかひとりしか生き残れないし、恐らくふたりともが死ぬ確率が一番高いであろう。だが、妥協が心に生まれた瞬間、諦めが生まれた瞬間、強制力は彼らの心に、可愛い甥を殺す事を認めさせてしまった。

観察者としての仕事を彼らは未だ一度たりとも果たしていない。祐介も彰もまだ、何かをしでかそうとはしていない。
――しかし。
例えばふたりが何かを――自分たちへの反逆をしようとしたとき、自分たちは何をするのだろうか。
強制力は告げる。その時は彼らを殺せ。

高槻の定期報告を、通信機越しに聞く。ゲームは滞りなく進んでいるようだった。愚かで卑屈な男であるが、悪知恵が働く男だ、と苦笑せざるを得ない。自分たち長瀬一族に頭が上がらぬようではあるが、何を考えているかも知れない。
――長瀬一族は、高槻の所属する集団「FARGO」の上位団体であった。だから高槻は彼らに頭が上がらぬ。だが、長瀬一族とて「意図」に反する事は出来ぬのだから、支配されているという点に於いて、彼らは同じだった。結局長瀬一族に出来ること

もまた、人が死んでいくのを見ながら、
――甥達が死なぬ事を祈りながら、
――観察を続ける事だけなのだから。

彼らに意図を課したのは誰か？
問うまでもない、
――余だ。

## 350　熊狩りビト

「……さて、これからどうするよ？」
相沢祐一（一番）と椎名繭（四十六番）の二人が去り、がらん、とした居間にどっしりと腰を下ろして、北川潤（二十九番）はパートナー、宮内レミィ（九十四番）に語りかける。
当面の目的なら、無いことも無い。目の前に鎮座おわしているこのＣＤだ。
天から降って来たこのノートパソコンと、そのドライブに挿入されていたＣＤ―ＲＯＭ。
実際問題、この他にもＣＤが存在するとして（それはほぼ確定事項ではあるのだが）、誰が持っているのか、あと何枚存在しているのか、どうやって探せばいいか、といった肝心な事に関しては皆目検討がつかない。
「まさか、こればっかりは道すがらあった人に片っ端から聞いてみる、というわけにもいかんしなあ」
そう北川は呟くと、天を仰ぎ考える。レミィも口を挟まない。
時計の秒針の音と、どこか遠くで虫の鳴く声だけが、薄暗い居間に静かに響く。
そうして、暫しの沈黙の後、
「……よし！」
と、北川はその膝をぽん、と叩き、レミィの方を見た。
「何か思いツイタの？」
期待感溢れるレミィのその声に、北川はそれに負

けないくらいの清々しい笑顔で、
「何も思いつかん！」
と、これまた爽やかに言い切った。

……そして、再び沈黙。
眠気と格闘しつつも、北川の頭脳はフル回転する。
朝になったら動く。これは決定事項。男が一度決めたことを曲げるのはいかん、と北川は考える。
第一ここに留まって知り得る情報は死人の名前くらいのもの。そりゃあ、こうやって隠れていれば多少は延命効果もあるだろうが、それだって限界はある。
自分たちは、動かなければならない。
問題は、何処に動くか。
当てもなく飛び出すのは、言うまでも無く危険。
こっちには武器がない。いざとなったらこのパソコンでもぶん投げてやろうか、とも思ったが、そもそもＣＤを探しているという目的がある以上、そんなことをしたら本末転倒だ。
……やはり、知り合いづてに情報を仕入れるしかないか。
この状況下ではそれすらも危険かもしれないが、まあ、全くの初対面の相手に聞いて回るよりかは、遥かに安全だろう。
少なくとも、無言でいきなり銃を向けられてズドン、という事は、無い筈だ……多分。
自分の知り合いで今現在生き残っているのは、誰で何人居るかをリストアップする。
まず思い浮かぶのはつい先ほどまでここに居た相沢祐一（と、椎名繭）。だが、二人は情報を持っていなかった。除外。
美坂は……死んだ。妹も、一緒に……だろうか？
……兎も角二人とも、もうこの世にはいない。
住井もだ。あいつの敵もとってやりたいな、と思った。
（……おっと）

考えが脇に逸れた。悪い癖だ。とりあえずは、目の前の問題を解決しなくてはいけないのに。

先ほどの放送までで名前を呼ばれなかった知り合い。まず水瀬さん。それと……確かそのママさんも生き残っていたはず。

(あとは……)

あとは、居ない。これだけ。

参加者がまだおよそ半分残っている状態で、これだけ。なかなかに絶望的な数字である。思わず頭を抱えたくなる。

(あ)

そういえば、レミィの方は、何人知り合いが生き残っているのだろうか?

少なくとも、自分より少ないということはないのではないだろうか?

聞いてみようか。

窓の外に視線を巡らすレミィに、声をかける。

「レミィ」

「ン?」

レミィが自分に向けられた声に、敏感に反応し、振り向く。

「あのさ」

そこまで口をついて出て、あっ、と慌てて北川はその後の言葉を飲み込む。

「あー、いや、なんでもない」

「ソウナノ?」

レミィはあまり気にした素振りもみせず、また窓の外に視線を向ける。

危なかった。

俺はなんてデリカシーのない男だろうか、そう北川は思った。そして自分を恥じた。

いくらなんでも、面と向かって『君の知り合い、あと何人生き残ってる?』なんて言う奴があるか、この馬鹿。

(まあ、きっと、何とかなるさ……)

これまでも何とかなった。だからこの後も何とか

なる。ならなきゃ……困る。
　北川は必死で、自分にそう言い聞かせた。
（……でもなあ）
　やはり残り人数に対して、知り合いが二人（十二人）というのは、いささか不安である。
（せめて、あと一人居ればなあ……あ？）
　その時、北川は頭の片隅に何か引っかかる物を感じた。
　だが、それが何なのかまでは思い至らない。
（何だよ、ちくしょう）
　思い出せそうで思い出せない感覚に、何故かやたらと焦ってしまい、北川は落ち着きなく部屋を見回す。
　そして、本当に偶然だが、思い出すに至るきっかけを持った物が、この部屋の中にはあった。
「あ」
　熊の剥製が部屋の壁から頭だけ、にゅっと伸びていたのである。
　その熊の姿に、ある一人の女性……いや、漢の姿が重なる。
「ああーーーーッ！」
　突然大声を張り上げた北川にぎょっとして、レミィが恐る恐る、といった感じで訪ねる。
「ど……どしたノ、ジュン？」
「あ、いや」
　慌てて取り繕い、北川はそれでもこみ上げる笑いを抑えきれない。
　そうだ……そうだそうだ、彼女がいたじゃないか！
　熊をも素手で張り倒せそうな力強さを持った、あの……！

　……ほぼ同時刻。
「べぇっくしょい！　……風邪かしら？」
　鼻をすすりながら、七瀬留美（六十九番）が呟く。
「お、なんだなんだ七瀬、漢らしいクシャミだな」

一瞬遅れて飛んでくるのは、折原浩平（十四番）のいつもの軽口。
「うるさいわボケェ！」
そして、いつもの鉄拳と、いつもの絶叫が、夜空に響き渡った。

## 351　御堂もビビる！　詠美ちゃん様は強いんだぞ！

男は森を徘徊していた。
彼――（八十九番）御堂はこれ以上他の参加者との接触は避けたかった。坂神蝉丸の他にも注意すべき敵がいることを知ったためでもある。
あの川で見かけた女……。
岩切、安宅を葬った奴……。
もう一つ、足手まといを作りたくないという理由もあった。
『あのガキ……あゆとか言っていたな……まだ死んでねぇよな』
しかし、最大の理由はあの放送……坂神の連れの少女の演説であった。
御堂はいかなることがあろうとも他の参加者の命は奪わない――敵はあくまでも主催者。
しばらく進むと、何者かの気配がした。
『……近いな、この気配……女か？』
御堂はすぐさま身を翻し、木の幹の影に隠れた。
間もなく、その場に現れたのは大庭詠美（十一番）であった。
彼女は御堂に気付く気配は無く、本来なら彼女はこのまま通り過ぎる……はずだった。
『ちっ、面倒な事になりやがった、何事もなくこのままやり過ごせれば――』
と突然、彼の頭上の獣達が暴れ出した。
「ぴこっ！　ぴこぴこ！」
「にゃにゃ！　な～う～」
『こっ、こらぁ！　暴れるな！　痛てっ！』

「誰かいるの⁉」
慌てて二匹を取り押さえるが、時既に遅し。詠美に勘付かれてしまった。
「ねぇ？　誰かいるの？」
「……」
御堂はこのまま逃げることを考えた。相手に敵意が無ければ、追撃は免れる……そう考えたからである。
「いるんだったら、武器を捨てておとなしくトーコーしなさい！　そうすれば命だけは助けてあげるわ！」
『投降……捕虜になれということか……しかし、奴の自信、相当なものだな……一体武器は――』
「早く出てこないとこの『ムーンライトマジカルステージストライクレーザービームライフル』が、あんたを木ごとふっとばすわよっ！」
『な、何ィ⁉』
御堂は驚愕した。それほどまでに強力（そう）な兵器が支給されていたとは……。
そして己のクジ運の無さを右腕の中の猫を見ながら絶望した。
『木を盾にしたとしても、俺の銃では分が悪すぎる……ちくしょう、こんな時にっ！』
御堂はあっさりと詠美のハッタリを信じ込み、戦意を喪失した。
彼は、腰に差してあったデザートイーグルを女の足元に放り投げ、投降した。

## 352　月明かりの下、赤い女神

（問題はあの男よね……まだいるのかしら……）
マナは歩きながらあの聖と対峙した男のことを思う。
藤田浩之（七十七番）。
マナはその名前は知らないが、顔は覚えていた。
聖に近づけば近づくほど、あの男の狂気の表情を思い浮かべ、萎縮する。

「おチビちゃん、夜が怖いの？」
「違うわよっ！」
時折、聖の事を思い出しているのか、言葉を発さなくなった佳乃を見やる。
先程渡した聖の形見――まだ開けられたことのないバッグを胸に抱いて、無表情で歩く。
「佳乃ちゃん……大丈夫？」
「……えっ？　も、もちろんだよぉ～」
ふと我に返り、いつもどおりの人懐っこい笑顔。
先刻からこれの繰り返し。
(強がってるけど……まいってるのかな……無理ないよね……)
「ガキのくせにお姉さんぶるのは似合わないわよ」
「な、なんですってっ……！」
だが、この夜の雰囲気に、小競り合いをしようという気にはどうしてもならなかった。
「……で……だ………だよ？」
佳乃の声が響く。
「ねぇ、あの娘、なんか変じゃない？」
マナの耳元できよみの声。
「……」
佳乃は、恍惚とした表情であらぬ方向を向いては独り言を喋るようになっていた。
何を言っているのか分からない。
先程の佳乃とはうってかわって、あきらかに様子がおかしい。
「佳乃さん、どうかしたの？」
「……えっ、な、なにが？」
瞬間、佳乃の瞳に光が宿る。
「疲れてるの？」
「ぜ、全然大丈夫だよ！」
「そう……ならいいけど……」
きよみは訝しむが、本人の言うことを信じることにして、先を急ぐ。
(だ、大丈夫かな……)
マナもまた、不安に思っていた。

「たと……だ……よ……から」
だんだんとその間隔が短くなっていく――
きよみとマナは、背筋が凍るような悪寒を感じていた。
それは得体のしれない恐怖――。
「佳乃ちゃん！」
マナが耐え切れずに声を張り上げたとき……
ゴッ……！
何か、鈍器で柔らかいものを叩いた音が響いた。
「えっ……？」
目の前で何が行われているのか分からない……。
ゆっくりと崩れ落ちるきよみさん……闇夜に飛び散る何かの液体。
……そして、無表情にこっちを凝視する佳乃ちゃん。
「な……に……？」
土の付着した石からなんか……水がしたたってるよ……どうしてそんなものもってるの？　かのちゃん……
ゆっくりとこっちへ近づいてくる……。
どうしたの？　きよみさんは？　なんで倒れてるの？　もしかして敵の襲撃？　霧島センセイを倒したあの男でもいたの？
ゆっくりと佳乃ちゃんが私の目の前で両腕を振り上げて……
「なにしてんのよっ！」
え？
体が宙に浮かぶ感覚――

きよみ……さん？
佳乃ちゃんの姿が遠ざかる……
ゆっくりと……こっちを見てる
きよみさん、
佳乃ちゃん置いて行っちゃダメだよ……
あっ……良かった、
追っかけて来てくれてる……
でも石を持って走ったら危ないよ……

「はあ、はあ……一体なんなのっ！」
「きよみ……さん？」
何故かきよみさんに抱えられて。
「なにか……出てるよ？」
きよみさんの頭から黒い水が出てる……。
「しっかりしなさいよ！　このチビ！」
え？　私？
「はあ……はあ……火事場の馬鹿力もここまでかしら？」

開けた場所、森を抜けた場所……。
森を抜けて月明かりにきよみさんが照らし出されて……憎らしいけど、ちょっと綺麗だなって、思った。女神様みたい。
だけど、その女神様は、月明かりで初めてはっきり見えたその女性は——
赤かった。
「きよ……みさん？　きよみさん！」
「騒ぐなチビ！　……それよりこの状況、絶体絶命よ……」
後ろは崖。ほぼ直角で、とてもじゃないが降りられたものではない。落ちても死なないかもしれないが、無事ではすまない。
「……佳乃……ちゃん？」
「……ふふ……」
虚ろな目をした佳乃が、ゆっくりと追い詰めてくる。
「……武器貸しなさい……チビちゃん」

「えっ？　……ダメだよ！」
だが、静止の声も振りきってきよみが武器を奪い取る。
奪い取った獲物はオートボウガン。聖を殺害した浩之の武器だ。
「来たら……撃ち殺す……この距離ではずさないわよ……」
ゆっくりと狙いを定める。目標は佳乃の体の中心より少し左上――心臓。
手が震える。狙いが正確に定まらない。
頭から流れる血が、命のやり取りをする恐怖がきよみの体をそう反応させる。
どくどくと、脈打つように流れでる血の感覚だけが妙にリアルに感じられた。
「……わた、しが……やるの……」
黄色いバンダナの巻かれた手に、血の付着した石。
「そんな……どうして……」
きよみの横で、佳乃の姿を呆然と見つめる。

「……し……んで……」
そして佳乃は躊躇無く歩み寄り……
「こ、こないでっ！」
きよみがマナを体で弾き飛ばし……引き金をひいた！
ばしゅっ！
鮮血が舞う……佳乃の左腕に、突き刺さるボウガンの矢。
マナを弾き飛ばした際に、狙いがそれた……その結果だった。
佳乃はそれをものともせずにきよみへと石を打ちつけた。
「あう……」
ゴッ……！
再度、鈍い音がする……
きよみさんが、スローモーションのように……崖下へ吸い込まれて行く……。

「き……きよみさんっ!!」
ただ、無我夢中だった。
崖を見ていた佳乃ちゃんを弾き飛ばす。
佳乃ちゃんはそのまま木に打ちつけられて倒れる。
センセイの妹、今は構っていられない。
手荷物をもって崖下への道を探す。
センセイの応急処置セットが入ってるから……。
すぐに手当てすれば助かる！
下り坂を見つけてはその方向へ走る。
「きよみさん……きよみさん！」
崖下で、きよみさんがこっちを見ていた……。
「……お……ちびちゃん……」
「きよみさん！」
駆け寄る。
傷がひどい……両足が折れて骨が見えてる……。
頭からの出血もひどい……
「いまっ、助けるから！」
助かるから！　すぐに……だって私霧島センセイの弟子なんだから!!
「もう……いいから……」
「聞こえない！　はやく手当てしなきゃっ!!」
ザッ……ザッ……！
「誰？　……マナちゃん？」
その時女の人の声。
いつもなら大好きで……すぐにでも駆けよって甘えたいお姉さん。
その横に随分と傷ついた長髪の女の人と、そこから後ろ、少し離れた場所に、藤井さんがいた……。

弥生さんは、もう、由綺から離れないだろう……。
だから、俺は由綺から離れる。
俺に、誰も近づかないように、もう、誰も大事な人を傷つけないように。
だけど、俺達はまた出会ってしまった。
非日常の中の一ページで。

「……マナちゃん……よかった、無事だったの？」
「お……姉ちゃん……」
由綺が駆け寄ろうとした時、弥生さんが由綺を止める。
「お知り合い……ですか？」
「うん、あの子はマナちゃん、私の従姉妹なの」
「そうですか……もう一人の方は？」
「知らない」
「そうですか」
あくまで機械的に、事務的にそれだけを済ませる。
本当にこの人には人間の血が流れているのだろうか……？
出会った頃ならそう思っていたんだろう。
でも、本当は誰よりも心に熱い想いを秘めていて……。
微かな心の揺らぎが、俺には伝わった。一度だけ、弥生さんの足が震える。

「お姉ちゃん……」
呆然と、マナちゃん。
駆け寄ってあげたい……だけど、俺は弱くて……。
「もう一人の方……とどめさしたほうがいいよね？」
「……由綺さんがそう……おっしゃるのならば……」
「お姉ちゃん……!?」
弥生さんが思案に暮れて、やっと出した答え。
その言葉に怯えるマナちゃん。
由綺だけがいつも通りで、それを見ているだけの俺が、どうしようもなく滑稽で……。
「こ、こないで……」
その女の人を抱きしめるようにマナちゃん。
その倒れている女の人はもう助からないのだろう。
この島であれだけの傷を負ってしまえば……。
それでもマナちゃんはその人を守るようにして、由綺を、弥生さんを見る。

「どいて……いただけませんか？」
諭すように弥生さん。
「マナちゃん、少しだけどいていて？　その後一緒にいきましょ？」
囁きかけるように由綺。
そして、それを見ているだけの俺。
「……」
ただ、呆然とそれを見ているだけの、俺とマナちゃん。
可愛い教え子、今の彼女の心を考えただけで、胸が張り裂ける……。
（由綺……あの頃に戻りたいよ……）
「俺が……やるよ」
意を決して警棒を握り締める。
「冬弥君⁉」
「……いえ、私がやります。私がやらなければならないんです」
弥生さんのその静止の言葉も意味も聞かず、俺は二人に歩み寄った。
「ふじ、い……さん……」
絶望の瞳を俺に向ける。胸が痛む——。
ゆっくりと女の人の頭上に移動する。
ちょうど、由綺達から背中を向ける位置に。
「……最低ね」
朱に染まった女が、紡ぎ出した言葉。
「ああ、だから俺は、こんな方法しか取れないんだ……」
身をかがめる。なるべく不自然でないようにして。
（マナちゃん……逃げろ……その娘も俺も由綺も置いて…早く……）
「ふじい……さん？」
かすれそうな声。また胸が切なく締まる。
横の女も一度面食らったような顔をしたが、不敵な笑顔で……。
（それがいいわ、ベストの選択ね……）
死の淵で苦しんでいる女性でさえ……。

俺は、自分の弱さを呪った。
「できない……できないよっ!!」
マナちゃんの、絶叫、心の叫び。
「マナちゃん……マナちゃんまで冬弥君をたぶらかすの……？　冬弥君……どいて……そこをどいて」
由綺の声が遠くで響く。
だけど、足音がゆっくりと近づいてきて……。
「……由綺……」
「ね？」
横の弥生さんは沈痛な面持ちでそれを見ていた。
ああ、弥生さんも気づいたろうな……由綺の、今の心に。
「さあ、どいて」
チャキッ！
ニードルガンの音。すぐ後ろで聞こえた。
由綺はまた、俺のせいで手を汚すのか──。
「なんて……情けないチビなの……あなたもあなたよ……」
血と、絶叫が飛び散る。
「早く連れてって！　このノロマッ!!」
瀕死だったはずの女性が、手で体を押し上げるように動いて由綺に飛びつく。
「あっ!!」
二人、地面に体を打ちつけて転がる。血が、飛び散る。
「……!!」
その声に背中を強く押されて、気がついたらマナちゃんを抱えて走り出していた。
「き、きよみさ〜ん!!」
腕の中で叫ぶマナちゃんの声より、女──きよみの体に針の刺さる音が生々しく、大きく聞こえた。
その音も少しずつ遠くなって……
そして、マグナムの銃声。
その音の余韻が消える頃には、三人の姿は見えなくなっていた。

「どうして……どうして……弥生さん、どうして冬弥君……」
由綺のすすり泣く声を聞きながら、押し当てたマグナムを女から放す。
「由綺さん、藤井さんを探しましょう……話は……それからです」
「うん。だけど……マナちゃんは許せない……許せないよ……」
「……そう、ですか……」
弥生はかすかに涌き出た迷いをかき消し、由綺の頭を撫でる。
今の弥生にとって冬弥と由綺はすべてなのだ。
たとえ、それが間違った行動であったとしても。
奪った命はもう戻らない。
死んだ者達の為にも、弥生達は生きて帰らねばならない。
（それこそ詭弁ね……）
そう自嘲し、倒れている女の体を綺麗に横たえてやる。
もう、後戻りはできないのだから……
そして、朱に染まっていた由綺を優しく抱きしめてやった。

十六番　杜若きよみ〈複製身〉死亡
【残り48人】

## 353　そうだ学校へ行こう！

ごとん。
箪笥を寝室の扉に押し付けて、カモフラージュする。
「ちゃんと寝てんのよー。喧嘩しちゃ駄目よ！」
「行ってくるねー」
晴香、由依と別れてまもなく耕一、浩平の症状は更に悪化した。
男二人は反対したが、寝ていて治るようなもので

もないと考えた七瀬と初音は、薬品調達に出かけることを押し切ったのである。
消毒薬、包帯は発見できたのだが内服薬が……必要なのは解熱剤、可能なら抗生剤も欲しいのだが……発見できなかった。
屋内で発見した、詳細な地図を見ながら病院、診療所を探すが、見当たらない。なんて不便な島なんだろうと思いつつ、仕方なく遠くを探そうとしたとき。
近場に……学校を発見した。そうだ保健室がある。先行者の武器を残し、初音は浩平の銃、七瀬は鉄パイプと散弾銃を持つ。
もはや太陽は、ほとんど沈もうとしていた。
それが、最後に見る太陽になるかもしれないけれど。
それでも、構わない。
そうだ学校へ行こう！

真っ赤な空に、奇妙なシルエットが三つ。
二人のウェイトレスさんと、チビッコが一人。
助さん角さん宜しく、ウェイトレスを両脇に従えたチビッコ……あゆが叫ぶ。
「はやくはやくっ！」
一人だけ小走りなのだが、ウェイトレスたちは早歩きだ。例によって家屋に侵入し、今度は晩御飯を頂戴すべく、内部を漁る怪しい三人組。
「たい焼きだよっ！」
転がり込むように二人の間に、いや事実転がりながら鉄板を手にしたあゆが雪崩れこむ。手にはたい焼き用鉄板。何故こんなものが？
携帯にも便利な上に、朝ぐらいまでは保つだろうと考え、リクエストに応えて餡子を練るべく、鼻歌交じりに火を起こす梓だったが、ふと表情を曇らせる。
火が、つかない。
妙なことに周辺の家屋は全て、ガスが供給されていなかったのだ。改めて確認すると、電気すら通っ

ていない。
「これって、どーいうことかな？　この家、変じゃない？」
残念そうに卵をお手玉しながら、梓が疑問を口にする。
「生活臭、しないものね……」
この島の建物は、おそらくゲームのために設置されたもので、全ての家屋がまともに機能しているわけではないのだろう、と相変わらずお手伝いすら拒否されて、すっかり小さくなっていた千鶴が答えた。
うまい具合に食材はある、しかしガスが無ければ熱量が足りない。たい焼きなんて、絶対無理。
「うぐぅ」
あゆがうなだれる。
憐れに思った梓がふと目をやると、電気の付いた教室が視界に入った。
「……教室？」
「あら本当。電気通ってるのね」
「家庭科室か理科室があれば……」
そうだ学校へ行こう！

## 354　たい焼きだよっ！

広い調理実習室の片隅で。
「ぱりっとして、ふわっとして、あんこがしっぽまでだよっ！」
梓の周りを、興奮したあゆが転がりまわる。はいはい、と千鶴があゆをあやす。
思った以上の設備が整っていたので、たい焼き用の食材のみを持ってきたことを、少し後悔した梓だったが、いまさら戻るつもりもない。今あるものを、最高に仕上げようと心に決め、たい焼きを焼き始める。
しゅうーーー。
焼き音と共にたい焼きの皮の、甘く香ばしいにお

いが広がっていく。暴れまわっていたあゆが、ようやく動きを止める。
「しっぽまでだよっ！」
結局、言う事は変わらなかった。

校庭にぽつんと立つ、一人の少女。
なめらかな亜麻色の髪をした、長い長い三つ編みを赤く染めて、迷いと決意を共に立つ少女。
かるくそよぐ風が、甘い香りを運んでくる。しっぽまでだよ、と叫ぶ声が聞こえる。たい焼きだろうか？
「……こんなときまで」
私も、馬鹿ですね、と苦笑して――久しぶりに笑った――校舎を見上げる。
それも、いいかもしれません、と心の中で呟いて。
背負った業と浴びた血潮に似合わぬ、爽やかな微笑みを浮かべながら、茜は歩き始めた。

裏門手前に、二人の少女の影。
動物の尾のような、長いツインテールを垂らした少女と、双葉のように、ぴんと立ったクセ毛が印象的な少女。
「意外と近かったわね」
連続して襲撃を受けたために、少なからず過敏になっていた七瀬が安堵して、初音に話しかける。
「……」
しかし、初音は答えない。なにかを嗅ぎ取るように、鼻をひくつかせているようだ。
「初音ちゃん？　どうしたのよ？」
そう言って初音の顔を覗き込み、同じように鼻をひくつかせる。いい、匂いがする。
たい焼きの美徳をひたすら羅列する、異様に興奮した甲高い雑音の中に、懐かしい声が混じっていた。
「梓……お姉ちゃん？」
日々の食事どきはもちろん、料理を習うたびに感嘆し尊敬していた、あの姉の声。絶賛すると、必ず

照れくさそうに鼻の頭を掻いて、視線を落とす、あの姉の声に間違いない。
「この声、梓お姉ちゃんだよ！」
二人は目を丸くして、希望の光を浴びせた運命に感謝した。
少なくとも、この時点では。

夜闇よりも暗い、教室の中で。
一人の少女が、かたかたと震えていた。
一体何が、できると言うの？
たった一人で、店長さんの仇なんて。
こんな小さな刃物ひとつで、どうしろというの？
物音一つで弾けてしまいそうな、高密度の緊張の中。
なつみは一人、かたかたと震えていた。
不安定な殺意と、圧倒的な恐怖を抱えて。
かたかたと、かたかたと、震えていた。

## 355　そして一つの決断

冬弥はマナを抱えて走った。ゲームが始まってから冬弥は自覚していなかったが、精神の均衡が崩れてきていた。それでもまだ残っていた理性が、マナを殺させるわけにはいかないと告げていた。
死から遠ざかるためだけに、一心不乱に走る。マナを抱えての無茶な逃走であったが、暫くすると由綺と弥生の姿は見えなくなっていた。それでもまだ何かに追われるように走りつづけ、体力が限界に達するころになって漸くマナをおろし、冬弥自身もマナの隣に腰を下ろした。
「良かった、無事だったんだね、マナちゃん」
「うん。さっきは助けてくれてありがとう」
マナは助けてくれたことに関しては素直にお礼を言った。だが、その後冬弥が何かいろいろと話をしているのを聞くだけで、一向に口を開かなかった。

「どこか怪我をしたの」
普段元気なはずのマナが言葉を発しないという事に気がついた冬弥は、今度はマナの体の心配を始めた。それでもマナの口が開かれる事はなかった。
二人の間に流れる沈黙を拒むかのように普段以上に言葉を発する冬弥であったが、次第に言葉が途切れがちになる。沈黙に絶え切れず何度となく言葉を口にしようとするものの、そのたびに拒否される言葉を恐れ言葉を発する事の出来ない冬弥。そして長い沈黙の時が訪れる。
「どうしてなの」
長い長い沈黙が破られ、それまで冬弥の言葉に全く反応せずあらぬ方を見ていたマナがぽつりと一言漏らす。
「え……」
言葉の意図もわからずただ呆然とする。立ち尽くし、間が抜けた返事をする冬弥。
「どうして、藤井さんは、由綺お姉ちゃんを助けてくれなかったの」
冬弥の顔を正面から見据えるマナの口調は決して強いものではなかったが、それでもマナのその言葉が、自分を責めたてるように心の片隅に突き刺さり、思わずマナから顔を背ける。
一方のマナは、冬弥に対して怒っているというわけではなかった。ただ、前に一度由綺に襲われたにもかかわらず、それでも心の奥底で冬弥が由綺のことを助けてくれるのではないかと言う淡い期待を抱いていた。それは期待というよりも願望に近いものであった。
そんなマナの想いは、由綺の現状と冬弥の取った行動によって最悪の形で裏切られた。そしてマナの中で何かが音をたてて崩れていった。その中で出たのが先程の言葉であった。
「仕方なかったんだ。俺が由綺に逢ったときにはもうあんなになっちゃってて……俺にはどうしようもなかったから。せめて由綺にこれ以上人を傷つけさ

せないようにする事しか出来なかったんだよ」
言い訳を聞きたい訳ではなかったマナは、尚も言い訳を続けようとする冬弥を制して再び口を開く。
「だから、だから代わりに藤井さんが、由綺お姉ちゃんの変わりに人を傷つけるというの」
「ああ、俺にはそれしか方法が思いつかなかった。もうこれ以上由綺の手が汚れてゆくのを見ていたくはなかったんだ。由綺には綺麗なままでいて欲しかったんだ。そのためになら俺は汚れる事も厭わなかった」
その言葉を聞いて、マナは冬弥の由綺に対する愛情、そして優しさに触れる事が出来たような気がした。そしてそれと同時に——ここに来る以前のマナならば多分わからなかったであろう——冬弥の心の弱さというものを感じ取ってしまっていた。
「そう。それが藤井さんの優しさなんだね。今更だけど私にも分かったような気がするよ……でも、それだったら、どうしてその現状を受け入れてしまったの。なんでその優しさを、由綺お姉ちゃんの壊れた心を治す方向に使ってあげられなかったの」
マナの視界がぼやける。
「殺し合いを命じられて、絶望しか感じられないこんな場所でも、自分を見失わない人はいた。他人を殺めることなく、傷ついた人を手当し続けた人。自分の命を賭けてみんなで協力して脱出しようと訴えた人だっていたのに」
マナの頭の中に、あの衝撃的な放送とその後の爆破音、そして微かに笑いを含んだ聖の顔が浮かぶ。
「なんで、なんで藤井さんは諦めてしまったの」
最後の方は涙声になりながらも、マナは必死になって言葉を紡ぎ出した。
「……」
冬弥は黙ったままであった。いや、何も言えないでいた。
「藤井さんの心も、もう壊れてしまっていたんだね」

「……」
「あたし、こんな気持ちじゃ藤井さんとは一緒にいられないよ。それにあたしまだやることが残っているから、もう行くね」
「マナちゃ……」
「それと、さっきは助けてくれてありがとう」
尊敬した人の死。優しかった従姉妹の豹変。こんな島の中で憎まれ口を叩き合いながらもほんの少しだけ心を通わせた仲間の死。さまざまな挫折を経験し、生きる気力さえ失いかけてはいたが、それでもマナは医者の助手としての使命を思い出し、冬弥の元を去り、聖の遺志を継いでこの島で傷ついた人を助け続けることを、再び心から誓い、幸せだった、そしてもう戻れない過去を振り切った。

冬弥はほんの少し前までかつての教え子が立っていた場所――今は誰も存在しない空間――を見つめ、ただ何かを考えていただけであった。

## 356　インサニティ

パン、と乾いた音が月明かりの下で響いた。
「うん。やっぱりそうだよね。そうだよ」
「……何がですか？」
拍手を打つように両の掌を合わせた由綺が、少し血に染まった衣服を気にする様子も無く、「やっぱり殺しちゃったほうがいいよね」と嬉しそうに微笑んだ。
先程まで泣きじゃくっていた様子は、微塵も感じさせない。
「冬弥くん、わたしがいないと寂しがってないかなあ。きっと寂しがってるよね。マナちゃんってひどいよね。わたしから冬弥くん奪うんだもの。殺すくらいじゃ許せないよそうだ捕まえたらね冬弥くんの目の前で撃っちゃうよわたしそのくらいじゃ駄目かなぁ――」

弥生は整った顔をほんの少しだけ歪め、う、と顔を左手で覆う。右手に構えたオートボウガンが、かたかたと震える。

こんな筈じゃなかった。

私は、由綺さんをスターダムにのしあげるため、叶わなかった自分の夢を、人生を、希望を、その全てを彼女に捧げ——ようとしていた。

そうでなければ、私の人生は無意味になってしまうから。彼、藤井冬弥を由綺さんと添い遂げさせようとしたのも、全て打算だ。由綺さんの気持ちがどうとか、藤井さんの気持ちがどうであるとか、私の知ったことではなかった。

ただ彼が、由綺さんにとって不可欠な存在であると知ればこそ、二人の仲を取り持とうとしただけだ。

しかし——

「——どこにいったのかなぁ冬弥くんとマナちゃんお姫様だっこされるなんてうらやましいなぁやっぱりわたしあのときコンサートに行かないで冬弥くんといっしょにいるほうがよかったんじゃないかなぁ」

弥生が見つめる由綺の視線が、宙を漂う。それはまるで——

「——ひょっとしたらあのときにでもマナちゃんと会ってたのかなぁそうだとしても仕方ないよねわたし仕事選んだんだもの冬弥くん優しいからそれに甘えちゃって甘えたかったんだもん!」

——狂人のそれだ。

「由綺……さん!」

「え、弥生さん? どうしたの、怒っちゃいやだよ」

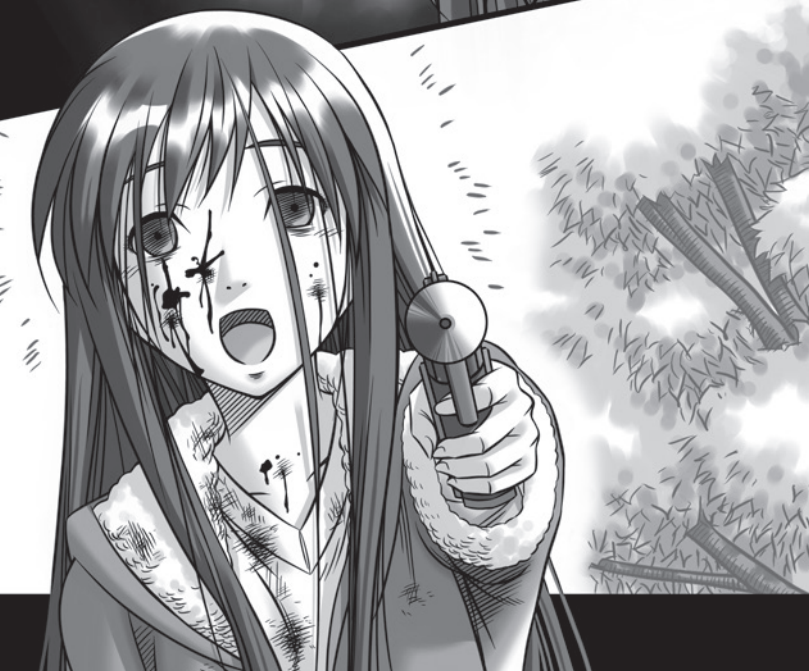
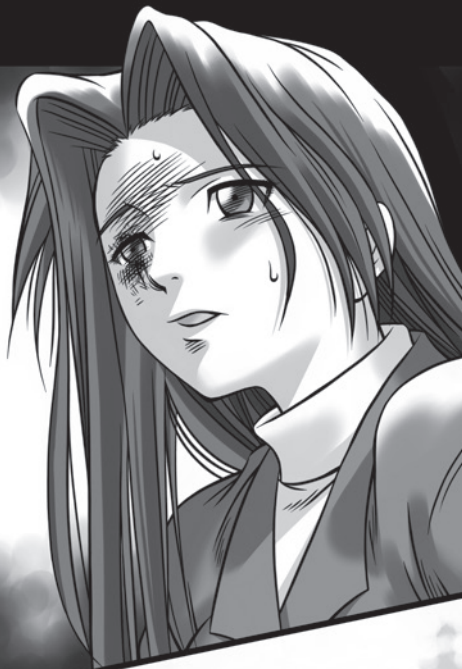
そこにある由綺の顔は、いつもの表情だった。青い月明かりに照らされて、血に塗れるアイドル。右手に構えたニードルガンの銃口は、こうしている間にでも弥生に向けられている。

狙っているわけではないのだろうけど、前後の判断がついていないのは明白だった。

にこりと微笑む口元、愛らしいアーモンドの瞳。

化粧を施すこともなく、整ったベビーフェイスは、まるで母をみつめる子供のように純粋無垢な表情を弥生に向けていた。
「そう思わない？」
「ええ、思います」
由綺に、何も聞かれた覚えはなかった。でも、由綺の考えはわかっていたから、弥生はただ頷いた。
壊れてしまったというのなら、私もそうなのかも知れない。
また一人で呟き出した由綺から視線を逸らすことなく、弥生は言った。
「観月マナを殺しましょう」
「そうだよ。それがいいよね」
由綺はまた、柏手を打つように、パン、と掌を打ちあわせ、嬉々とした表情で笑う。
弥生の中にある由綺の姿は、何も変わっていない。何も。
そう。マナを殺し、冬弥と由綺と共にこの狂った島から出て、私たちは——私たち？　——私は——私は？　——私——
青い月明かりだけが、何者をも拒まぬかのように、ただ静かに闇を照らし出していた。

## 357 （無題）

「……たい焼き、美味しそうです」
くぅぅと、お腹の音が鳴る。日常を思い出させる甘い匂い。だが、今の茜には遠い匂いだった。今の彼女から漂ってくるのは血の臭い。
もし、彼女がそれを手に入ようとすれば、トラブルは避けられないだろう。
「……やっぱり、諦めましょう」
そう思って踵を返そうとしたとき、茜は不意にこちらをじっと見ている人影に気付いた。
『匂いに釣られて警戒を怠るとか……最悪です』
「里村、さん？」

「……七瀬さん」
相手は茜の知己であった。と言っても知り合いの知り合いなので、親しい訳ではない。現に彼女は鉄パイプと銃を持って茜を警戒している。
「あ、あのっ！」
茜がどうするべきか思案していると、七瀬の影から顔を出した小さな少女が声を掛けてきた。
「……？」
「たい焼き、食べたいんですか！」
その少女から発せられたのは予想外の問いかけ。
「中に居るの多分私のお姉ちゃんなんです。よかったら、貰えないか聞いてきましょうか？」
「いえ、私は……」
あまりにも無警戒な少女に困惑する茜。返り血で汚れた彼女の姿を見て警戒しないのは異常だろう。よほどのお人好しなのだろうか？　七瀬も困惑しているようだ。茜が判断に迷っていると、
「初音!?　よかった、無事だったんだ！」
建物の中から、ボーイッシュな少女が鉄格子の嵌まった窓にくっつけるようにして顔を出していた。
「梓お姉ちゃん！」
初音と呼ばれた少女が喜びの声を上げる。感動の再会といったところなのだろう。
「千鶴姉もいるよ！」
「ほんと!?　私は耕一お兄ちゃんと一緒だったんだよ！」
再会を喜び合う二人。その間も七瀬は茜をずっと警戒していた。少しして、初音は茜の方をちらりと見てから梓に尋ねる。
「梓お姉ちゃん。たい焼きって余りないかな？　たい焼きを食べたいって人が居るんだけど……」
「大丈夫！　たっぷりあるから腹一杯食べれるよ！」
こうして茜は、なし崩し的に校舎の中へ招かれることになったのである。

……足音がする。

なつみが潜む教室に近づいてくる気配が三人分。
なにやら嬉しそうな話し声もしている。それは、彼女にはもう出せない声色で。それが悔しくて、なつみはドアの影で強くナイフを握りしめた。

## 358　命、散って

……全く、なにやってんのかしらね、私は。
それにしても、この頃の娘(こ)ったら生意気なばかりで、大事なところでしっかり動けないんだから。
おチビちゃん、ちゃんと逃げられたのかしら？
逃げたわよね？
でないと私が虚しすぎる。
しっかり生き延びなさいよ……。
それから、まだ生きているはずの私たちの妹――たしか、月代とかいう名前だったはずだ。
あの娘は、無事生き延びられるだろうか。
仙命樹の影響が少ないから、身体的な優位も少ないけれど、その分、私のように思い悩む必要もない。
常軌を逸した回復力と不老性。仙命樹が与える肉体的な利点は、『自分が他人(ひと)と異質な存在である』という、嫌な悩みも一緒に連れて来る。
けれども、仙命樹の影響が少なければ。そんな悩みに囚われることなく生きていける……。
そのせいか、まっすぐに育っていたあの娘。
……ちょっと生意気だったけど。
彼女には幸せになって欲しい。
蝉丸さん、任せたわよ？
……そして最期に、俊伐さん。
本当は現世で愛されたかったけれど……。
私、あなたが愛したきよみさんのような、みんなに誇れるようなことは何もできなかったけれど。
でも、今そこで失われるかもしれなかった命を長らえさせることだけはできたと思う。

上出来ではなかったけれど、自慢しても良いわよね？

それぐらいのことは、私だってやったんだって。

……それにしても、いざ死ぬとなったらあっさりとしたものね。

杜若きよみの代替として生を受け、見たことも会ったこともないその影を追わなければならなかった、その境遇を呪った。

仙命樹のせいで自由に死ぬこともできないことを悩んだ。

私と同じ役割をになっているくせに、何の悩みもなさそうに暮らしていたあの娘（こ）に苛立った。

いくら注いでも報われることのない愛に苦しんだ……。

自分の存在意義に悩みながら日々を過ごす内に、もう五十年。

私は充分に長く生きた。

最後に人助けができて良かった。それで充分。

そういうことにして、先にあの世で待ってるわ、俊伐さん。

こっちに俊伐さんが来るのを、ゆっくりと待つことにするわ……。

……或いは。

或いは、俊伐さんは複製身の私と同じところには来られないかもしれない。

そもそもが、同じ人という生き物ではないんですもの。

そんな身分であなたを愛そうということ自体が間違いだったのかも。

……嫌な考え。

けれど、もしそうならば、私と同じところに来られるのは……。

嗚呼、光が……。

広がって……いく……。

## 359　たい焼きは復讐の薫り

「兄さんの敵を討つために、やっと手に入れた力。銃火器の前ではちょっと不安だけれど、いざとなればスイッチで刃をとばすこともできる……」

理奈の右手で光っているのはスペツナズナイフだった。

(刃を飛ばすときには絶対に外すことが許されない。できればもう一つ。何かもう一つ、保険の為の武器を手に入れたい――)

そんな風に思っていた理奈。

しかし、武器がそこらに落ちているなどという幸運はなかなかあることではなかった。

「待っててね、兄さん。この武器一つでだって、あいつをもう一度見つけて、そして兄さんの仇を討つから……」

新しい武器を見つけることができなくても、理奈の決意は鈍らなかった。

黙々と標的を求めて歩き続ける理奈。

しかし……。

更に彷徨うこと数時間。

(最後に食べ物を口にしたのはいつ頃だったたっけ？)

いつしか理奈はひどい空腹に襲われはじめていた。しかし、ずっと都会で暮らしてきた理奈に、野山の物を取って食べる勇気はなかった。腹をこわして、逆に体調を崩しかねない。どこからか、食品を手に入れなくてはならなかった。

「腹が減ってはなんとやら、って。昔の人も言ってたけど……」

そうして歩き回って理奈は、ついに住宅街のはずれにたどり着いたのだった。

「ここになら、何か食べ物があるかもしれない……」

食べ物を求め、住宅街に踏み入ろうとしていた理

奈のもとへ微かに漂ってくる何かの薫り。
「これは……あんこの匂い？」
たい焼きの臭いは校舎から漏れ出て、住宅街にまで届いていた。
たい焼きは、あまり強い臭いを発しない食べ物ではあったが、空腹の人間は食べ物の臭いに敏感になるものだ。
街の中を歩き出してまもなく、緒方理奈は『それ』を嗅ぎとった。
（今川焼きでも焼いてるのかしら……こんな殺伐とした島で、なんて日常的でのどかな匂いなんだろう……）
自分の置かれた状態がもっとマシなものであったなら、理奈の頬はゆるんでいたことだろう。
この臭いが本物ならばそこに食料がある。それを作り出している人間も。
他の人間との接触は避けたいところだったが、もしかしたらその人物が、兄の仇であるかもしれない。
そうでなくても、警戒は充分にしなくてはならないが……。
「もう、どれだけの人が正気なのか分からないんだからね……」
右手のスペツナズナイフを後ろ手に握り直し、正面から見られてもすぐにはその所在が分からないようにして、理奈は慎重に歩き出した。
その、たい焼きの臭いに向かって。
「でも、こんな状況でたい焼きを作るような人とならば争いにはならないと、そう思いたい……」
臭いの発生源付近には、彼女が兄の敵だと信じている里村茜、その人がいる。
そのことを無論、理奈は知らない。

## 360　別れの引き金

右手には小銃を持って、左手にはナイフを持って。

琴音はただ、走った。目的は一つ、浩之に会うために。あかりに会うために。
信じられる人だから。
だから、二人の姿を見つけた瞬間。
「藤田さん！　あかりさん！」
喜びの声を上げて、走り寄った。
「琴音ちゃん！　無事だったか！」
突然の声に戸惑いつつもそれが琴音だとわかり、浩之の顔から笑みがこぼれた。あかりも、その横で驚きながらも手を振っていた。
琴音は二人の前で立ち止まり、一息つく。
「会えてよかったです。怖かった、です……」
そう言い、泣き出した。
「よしよし。よく頑張ったな」
浩之はそっと琴音を抱き寄せた。
あかりも優しく見守っている。
そのまま時間がすぎ、やがて琴音が口を開く。
「何人にも、裏切られました……私、また人間不信になっちゃいました……でも、私わかったんです」
——死ンジャエバ誰モ裏切ラナイッテ
——ミンナ友達デイラレルッテ
——私強クナレタンデスヨ
——ヒロユキサンアカリサン褒メテクレマスヨネ？
声は、どこか遠い、遠い世界から聞こえた気がした。
それはある意味、間違いではなかった。
凍り付いた表情のまま、浩之は悟った。
この子は、今、別の世界にいるのだと。
何も見えない、何も聴こえない。
そんな間違った世界に。
「琴音ちゃん……何を、言ってるの？」

信じられないものを見たような、そんなぎこちない笑みを浮かべ、あかりは訊いた。
おそらくあかりも理解しているのだろう。
だが、理性がそれを認めないだけなのだ。
この少女は、壊れている。
「何を言ってるんですか？　私、間違ったこと言ってませんよね？」
琴音は不思議そうな表情であかりを見た。
その視線は、自らの言葉に含まれた『意味』がどういうものなのか、まるでわかっていないようだった。極限の混乱状態の中で、自分の間違った思考が全ての中心だった。
「……琴音ちゃん、それは……違うよ」
ようやく、浩之が声を絞り出す。
「死んだら裏切らないんじゃない……裏切れないんだ……それは強さじゃない、弱さだよ。こんな状況じゃあ……みんな狂ってしまうけど、それでも信じることが強さなんだ」
そんな強さの先に何があるのかは知らないけど、と、心の中で言う。
綺麗事を言っているのはわかっていたが、自分のしてしまった罪と償いを考え、そして、たとえ先に何があろうと、綺麗に人間らしく生きたいと。
それが浩之の出した答えだった。
もっとも、それより優先されることとして、愛する人を守ることがあったが。
「え……何を言ってるんですか？　浩之さんまで、何を言ってるんですか!?」
浩之の言葉は琴音に届かなかった。当然だ、考えに考えて出した琴音の結論を、真っ向から否定する言葉だったからだ。
自分の否定――それは『裏切り』だった。少なくとも、今の琴音にとっては。
浩之は、裏切ったのだ――
左手のナイフで浩之の腹を刺し、そのまま間をとる。

浩之の体が崩れ落ちた。
「浩之ちゃん！」
あかりが叫び、浩之にかけよった。
「信じていたのに……藤田さんまで裏切るんです
ね？」
そんな二人に、琴音は銃を向けた。
「もういいです、死んで下さい。死んだら、裏切り
ませんよね？　ずっとずっと、友達でいてくれます
よね」
琴音の指が引き金にかかり、
「だめだっ……」
浩之が小さく、それでもしっかりした声で言った。
腹にナイフが刺さったまま、傷口から血を流しなが
ら、それでも、はっきりと。
「……引き金を引いちゃだめだ……嫌な、予感がす
る……」
「浩之ちゃぁん、喋っちゃダメだよ！」
「琴音ちゃん……引き金を引いちゃ、ダメだ……」

あかりの制止も聞かずに、琴音に言う。
琴音の指は引き金にかかったまま、止まっていた。
「琴音ちゃん、もう一度……言う。琴音ちゃんは間
違ってる……だけど、俺達は裏切らない。引き金を
引いちゃだめだ……絶対に、よくないことが起きる
……」
「ひろゆきちゃぁん……」
浩之の声から力が失われていく。
「琴音ちゃん、銃を捨ててよ！　浩之ちゃんを安心
させてあげてよ！　浩之ちゃんを信じてよ！　ひろ
ゆきちゃんが……しんじゃうよぉぉ……」
あかりの悲痛な泣き声が、琴音の心に刺さる。そ
れと共に、今までのことが、琴音の中に浮かんだ。
この二人に、どれだけ勇気づけられ、どれだけ励
まされたことだろうか。

どうすればいいの？
浩之さんは、私を裏切って……私を信じて。

……でも、死んじゃえば、ずっと友達で。
だけど、撃ったらよくないことが起こるって……
浩之さんは私を裏切ったけど、
だけど、私を今まで支えてくれて……
ウラギッテ、シンジテ……
ドウスレバ、イイノ……？
ヒロユキサン……ドウスレバ

限界だった。
ほんの僅かのきっかけで、琴音の心は崩壊するところだった。
次の言葉を浩之が言おうとして。
「何をしてるんだ⁉」
そして、きっかけは、全く違うところから訪れた。
「――――っ⁉」
琴音は即座に声のした方向に向き直り。
引き金を引いた。
引いてしまった。

爆音が夜空に響く。
爆発した銃は、琴音の右腕を奪い去り。
それは、極限状態だった琴音の心に、ショック死をもたらすには充分だった。
最後に、琴音は思ったのかもしれない。
自分は、道具にまで裏切られるのかと。
それは誰にもわからなかった。
琴音が倒れる。
浩之も、あかりも、声の方にいる二つの人影も。
ただ呆然と、それを見ているしかなかった。

## 361　夕餉

江藤結花・来栖川芹香・スフィーの一行は、いまだ森の中を歩いていた。まだリアン達とは出会えないままだ。
　手持ちの武器が増えた分、見えない敵への不安は薄らいだ三人だが、今度は空腹が彼女たちを蝕んで

いた。なにせ、配給されたパンしか食べていなかったのだから。
　そんな時、
「……」
「え？　何か言った？」
「……」
「家って……、あ、ほんとだ」
　さっきまで木と茂みしか見えなかった道の先に、家の屋根らしきものが見えていた。そしてもう少し前に進むと、それは数を増し、どこにでもあるような街並みになっていた。
「この島って森と川だけじゃなかったんだ」
「街まであるとはねぇ……」
　口々に驚きを表しながら、街に向かって坂道を降りていく。
　街の中に入った三人は、真っ先に目に付いた家に近寄った。

ピンポーン
「ごめんくださーい」
　結花が声をかけたが、何の返事もない。
「入ってみようよ」
　スフィーがドアノブをひねると、鍵もかかっていなかったらしくすんなりとドアが開いた。そのまま家の中に上がりこみ、リビングとおぼしき部屋の明かりをつける。
「……」
「え？　あ、そういえば……」
　当たり前のように建っているこの家だけど、そもそも森と川しかないような島の中にどうしてこのような街があるのだろう？　あまりの自然さのせいで気付かなかった疑問が、芹香の指摘で浮かんでくる。
「確かに不思議だよね。森があったり街があったり。何なんだろう、この島って」
　とはいえ、考えてみた所でその意図はすぐわかるものでもない。

「考えるだけでも疲れるから止めましょ。休憩所とでも思えばいいじゃない」
半ば投げやりにも取れる結花の一言で、スフィーも考えるのをあきらめた。
家の中は、家具や調度品などが置いてある、ごく普通の室内だった。ただどの部屋も妙に整然として、いわゆる「生活臭」がないのが気になった。
「わ、冷蔵庫の中身まで入ってる」
結花の声に、他の二人も台所に集まった。
中身といっても、ミネラルウォーターや缶詰といった保存が利く物ばかりで、生ものは入っていない。
「う〜ん、これくらいあればちょっとしたものが出来るかな？」
「本当？」
空腹で滅入っていたスフィーの顔に笑みが戻る。
「もちろん。伊達にＨＯＮＥＹ　ＢＥＥで腕を振ってる訳じゃないんだから」

それから三十分後、台所のテーブルには黙々と缶詰の中身を食べている三人の姿があった。
「結花のうそつき」
拗ねるスフィーを横目に、結花がツナ缶を食べながら、
「そんな事言われても……。火が使えないんじゃ、お手上げよ」
そう、台所にあったガステーブルが使えなかったのだ。結局、冷蔵庫の缶詰を開けて食べるだけになってしまった。
「でも、食べ物にありつけただけでも良しとしなきゃ」
「むぅ〜」
「……」
食事の後、スフィーと結花は二階に上がり、ベランダから外を眺めていた。
「……結構いっぱい建物があるんだね」
闇夜の街には街灯の明かりだけでなく、いくつか

の建物にも明かりが点っている。
「この街って、人が住んでるのかな？」
「どうなんだろう？　ここに来るまで誰にも遇わなかったし」
「って事は……誰がいるの？」
「他の参加者がいることは間違いないわね」
「この街にリアンたちもいるかなぁ？」
「いるといいね」
その頃、一階のリビングでは芹香がソファーに横になっていた。
「……」
何か不穏な空気を感じながら。
数時間後、芹香がその不穏な空気の正体を知る事になるとは、まだ誰も知らない。

## 362　ふたりだけのせかい　～world end～

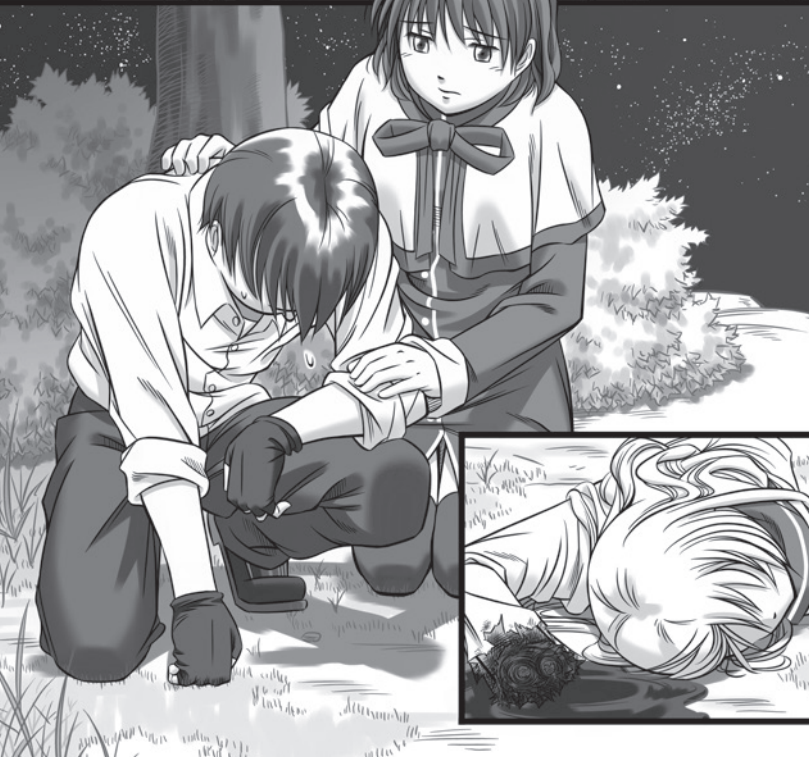
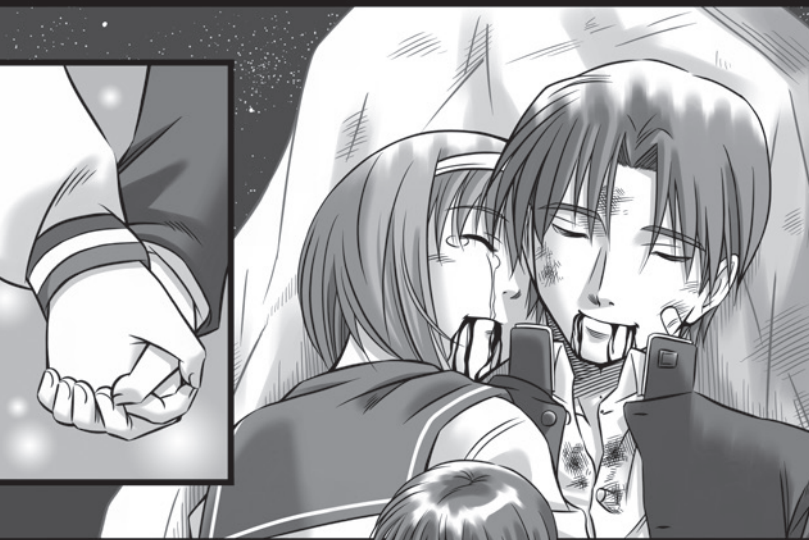
「畜生……」
浩之が呟いた。
「あかり……約束、守れなくて……わりぃ……」
浩之があかりに笑いかける。
その笑みに何がこめられているのか、あかりにはわかったかもしれない。
「そんなことないよぉ……ひろゆきちゃんといられて、幸せだったよぉ」
浩之を抱き締める。
涙が、あかりの頬から、浩之の頬へと伝わった。
誰かの声が聞こえる……ような気がした。
だけど、関係ない。
ここはふたりだけのせかいだから。
「……さっきは、あんなこと言ったけど……あかり、お前、は……生きて……」
「ダメだよぉ、ひろゆきちゃんがいないと、ダメなんだよぉ！」
叫ぶ。
あかりは浩之の腹に刺さっていたナイフを抜き、

自分へと突き刺した。あかりの口から吐かれた血が、浩之の顔にかかる。
「……これで、ひろゆきちゃんと……一緒だよぉ」
　満面の笑み。これ以上ない、幸せな。
「馬鹿……でも、もう……一緒だな……」
　驚きその光景を見つめていたが、浩之は最後にはそう言った。
「……うん、そうだね。ひろゆき、ちゃん？」
　これからも、よろしくね？
　最期のキスを。
　二人笑顔で、手を繋いだまま。
　星空の祝福を全身に受けて。
　ふたりの世界は、閉じられた。

「祐介さん。私達のしたことって……何なんでしょう……」
「わからないよ……わからないよ、畜生……」
　止めようとしただけだった。
　人が死ぬのを見るなんて、御免だった。
　だが結果的に、三人の命が失われた。
「……ちくしょう……」
　力なく、拳を地面に叩き付ける。
　夜の闇が、残された者を、祐介と美汐を、包み込んだ。
　残酷に。
　限り無く、残酷に。

**二十五番　神岸あかり　死亡**
**七十四番　姫川琴音　死亡**
**七十七番　藤田浩之　死亡**
**【残り45人】**

## 363　学校の静寂

「ねえ、お母さん」
　無邪気に甘える幼子のような声。それは母である

秋子にとって、絶対の命令として脳に響く。
「そうね、きっと……ここにいるわね」
「うん、しかもたい焼きの香りがするよ」
手元のレーダーを見ながら、秋子は頷く。
013、017、020、021、043、061、069、079……。少し離れて090、091……その二つの番号は間違い無く秋子達のもの。
民家から手に入れたナタを振り、前方を見据える。どこにでもあるような何の変哲も無い四階建ての学校——。
「名雪は、ここで待っててね、私が……あゆちゃん連れてくるから」
「うん♪　まだ殺しちゃ嫌だよお母さん」
「はいはい……何があっても……絶対出ないようにね」
番号、若いところで連番にも近い数字。多分、柏木千鶴も、そしてその姉妹もここにいるのだろう。
何の根拠もない憶測だったが、秋子にはそう感じられた。
もし違っていたら……その方がありがたい。
間違いなくあの女と戦う時は命をかけねばならないのだから。
(入り口は……ここだけね)
名雪が隠れている校舎の隅の体育倉庫を一瞥してから、校舎全体、そして出入り口を探す。
「用意周到なこと……」
高槻の差し金だろうか、一、二階の窓にはすべて鉄格子が取り付けられていた。
「この昇降口を除けば……中にいる人は誰も出ることは出来ないわね」
しかし、よくもまあこの狭い空間にこれだけの人間が集まったものだ。
秋子は苦笑し、中に入る。
レーダーにはまだ近くに反応は無い。
ガラガラガラ……。
ゆっくり、音を立てないように昇降口の扉を閉め

る。
「…………」
カチッ……。
そして内側の鍵を閉めて、ナタを大きく振りかぶり……その鍵穴の部分へと振り下ろす――！
ガシャァ――――ッ!!
恐らくは学校中に響き渡ったろう。
真の恐怖、殺戮ゲーム、その始まりの合図だ。
その音が鳴り止まぬうちに、秋子は既に三階へと移動していた。
(これで誰も……逃げることはできない……)
三階以上の高さから飛び降りて逃げようとする者もいるかもしれない。それはそれでいい。秋子はその背中を狩ればいいだけだ。
レーダーの番号を見ながら、秋子は薄く笑う。
(待っててね、名雪、もうすぐあゆちゃんを連れて帰るからね――)
静寂とたい焼きの匂いだけが学校内を支配していた。その中で秋子は、いずれ混じるであろう濃厚な血の匂いの予兆を全身で感じていた。

## 364　夜のはじまり

ああもう、どこから「突然」って言えばいいのかしら？
あいつらがブッ倒れたとこから？
ううん、晴香のアホが因縁つけてきたところからかな？
元はと言えば、あのオバサンが瑞佳にケリかましたとこからなんだろうけど。
まあ、ここではたい焼きの香りを察知したところからはじめるべきかもしれないわね。
……違う？
じゃあ、あのイジケ女が飛び出したところからはじめようかしら。
……それでいい？

あんまウダウダ言ってると怒るわよ？
いいわね？　いいって言いなさい？
……よし。
……こんにちは。
あ、もうこんばんわなのね。
ご機嫌いかが？　乙女の七瀬よ。男の七瀬じゃないから注意してね。間違えたら殺すわよ。最近、余裕無いんだから。
突然。そう、突然私たちを襲ったイジケ女がいたの。短刀で初音ちゃんの双葉のくせっ毛を一葉にしちゃうトコだったんだけど、うまくかわして私がその腕を難なくキャッチ。
あのオバサンと比べれば、チョロイもん。せいぜい晴香のアホに、毛が生えたくらいかしらね？
イジケ女が喚くのを抑えて、初音ちゃんは身の上話を始めたわ。まあ、あのまま腕をへし折っちゃうとかいうワケにもいかないし、説得するのが妥当とは思ったんで任せてたんだけど……。
……やっぱり一筋縄では、いかなかったのよ。

まくしたてる初音の言葉に、なつみは反応しなかった。精神的に衰弱し、常に無かった孤独感に身を浸した今の彼女に、初音の言葉は届かなかったのだ。
全てが届かなかったのならば、事件は起こらなかっただろう。不幸なことに最後のひとことだけが、突き刺さる棘のようになつみの心を抉ったのである。
『あなたにも一緒に居て幸せになれる人、いるかな？』
誰が仕組んだわけでもない、偶然の皮肉であった。
その台詞を受けたなつみは眉間にしわを寄せ、怒ったような、泣く直前のような、異なる感情の重なった複雑な表情で、七瀬を一瞥することもなく、その手を振り払おうとした。
七瀬はなつみの豹変ぶりに驚きつつも、抗議の声を発しようとする。

「ちょ――」
なつみが叫ぶ。
「うるさいわね!!」
他を圧倒する憤りを撒き散らして、なつみが絶叫する。
「私には、もういない！　そんな人、いないの！　殺されたのよ!!　だから、だから、だから私は――」
そして、その台詞を合図として、いくつもの事象が錯綜したのである。
強く振り払う、なつみの腕。
「ちょ、ちょっと、落ち着きなさ――」
慌てる七瀬の声。

ズドン！

突然の、銃声。
「あんた!?」
「お姉ちゃん!?」
七瀬が、初音が叫ぶ。撃ったのは茜である。普段と変わらぬ、知性をたたえた静かな瞳のまま、茜は銃を構えていた。
なつみが短刀を拾おうとでもしたのだろうか。そうは見えなかった。しかし判らないままでも、七瀬たちは反射的に身をすくめ、そして弾けるように跳び退った。
初音も、なつみも、そして七瀬すら至らぬ、修羅の境地に到達していた茜は、なつみの言葉を最後まで聞くことなく、全てを予感していた。
(だから私は――、の続きは……決まっています)

ひとたび襲いかかってきた相手が、再び感情を――おそらくはきっと、殺意を――沸騰させた。当然のように、やがて向けられるであろう殺意に応じて、撃った。ただそれだけの事だった。
茜は目的を達成するために、心と鋼の刃を振るい、

幾つもの命を奪って歩んできた。
　罪は罪として認識している。しかしその罪ゆえに、目的を達成する意思は強くなり続け、とどまることを知らない、はずだった。
　それなのに、命中しなかった。心の奥底にある、葛藤のせいなのか。何かが間違っていたのか。
（……我ながら、甘すぎです。どうかしていますたい焼きのせいでしょうか）
　理由はどうあれ、命中しなかった事は、確実に裏目に出た。七瀬や初音にとっては、誰を狙っての弾丸か判断できない。それほどまで透明に、自動的な意識で、茜は引き金を引いていたのである。
　茜は自らにかけられた声に、明らかな恐怖が混じっているのを感じて後悔したが、もはや手遅れだった。誤解されても文句は言えまい。
（……命中したところで、結果は同じだったかもしれませんが）
　要するに、もはや誰かと行動をともにすることなどできはしないのだ。そう改めて思い知ったことだけが、得るものであり失ったものでもあった。

　誰もが混乱し、誰もが微動だにせぬ空白の瞬間が、そこにあった。もしかしたら数分だったかもしれないし、もしかしたら数秒だったかもしれない。とにかく、その停止状態が続いたあと。
　ふと、石化の魔法を解呪されたかのように、全員がわずかに身じろぎしたのである。
　その、刹那。場の混乱に拍車をかけるように、すう、と廊下が闇に包まれた。
「⁉」
　七瀬はかすかな記憶を頼りに、手近にあった廊下のスイッチを押す。しかし照明はつかない。
　彼女の知る由も無いのだが、一階に関しては元々配電設備が死んでいたのである。そのため、夕日の最後の余光も既に届かぬ一階の廊下は、突如として真っ暗になった。

そこに居た、ほぼ全員が。恐怖に背中を押されて駆け出していた。

ズドン！

銃声。それは初音と再会できるという安堵を、あっさりと吹き消すように校舎に響き渡る、死神の叫びであった。たい焼きを咥えつつも怯えるあゆを、実習台の下に隠して、二人のメイドは頷きあう。

千鶴はお馴染みの鉄爪、梓は掃除用具ロッカーから取り出したモップを手に、教室を飛び出した。ほんの数瞬前まで期待に鳴り響いていたそれを掻き消すように、不安の鼓動が大きくなる。

眉をひそめて耳を澄まし、千鶴は呟いた。

「下の階ね……どっち、かしら？」

梓はほんの少し考え、初音の台詞を思い出す。

「千鶴姉、保健室だ！　保健室、行ってみよう！」

階段脇の各階案内図を見て位置を確認するや、二人は頷きあい走り始める。一段降りるごとに光を失う階段は、地獄への道程のように不吉に口をあけていたが、どちらも怯むことなく飛ぶように駆け下りていったのである。

彼女らと入れ替わるように、茜は二階に上がってきていた。階段脇には美術室。反対側の階段脇に、明かりのついた大型教室が見える。

（……失敗、しました）

かるく溜息をついて、廊下を歩き始める。弾丸を外したことはもちろんだが、結果として敵を増やしただけというのが、何より痛い。

狂人が、突如として無差別攻撃をはじめたように思われただろうか。

他人の殺意に敏感になりすぎた自分が、まだ狂人でなければの話だが。

私はどこで、日常の輪の中から抜け出してしまったのだろうか？

はあ、はあ、と息も切れ切れになつみは玄関まで移動していた。
(撃たれた！　やっぱり本当にみんな、殺し合いをしている！)
震える手を抑え、拾いなおした短刀を抱き、下駄箱にもたれかかる。屋上や保健室の死体を思い出して、ぞくりと身震いする。
恐怖を断ち切ろうと、大きく深呼吸して思考する。去っていったココロに届け、と願いながら。
(ねえココロ？　聞いているかしら？　ひとつだけ。ひとつだけ、教えて欲しいの。あの中に、店長さんの仇は居たの？　私は、この短刀を振るっていいの？)
……もちろん、答えは無かった。
俯いて、苦笑い。
(私には、もういない。さっき自分で、そう言ったじゃない)
そうだ。私は今や、ひとりぼっちなんだ。
思い知らされた孤独。その闇のなかで寂蓼感に苛まれるなつみの耳に、微かな一言が囁かれた。
『……いるよ。だから、頑張って。悔いの無いように……頑張って』
それきり声は聞こえなかったが、存在を感じていた。
(そっか。ココロ、居てくれたんだね。私、頑張るよ。だから、応援してね？)
気持ちを取り直して短刀に意識を集中する。
息を整えて。下駄箱に身を隠し。短刀を構え。
そして、店長さんの仇をとる……そう、殺し合いに、参加する。
私たちは、殺し合いを、する。
私たちは、殺し合いを、する。
私たちは、殺し合いを、する。

## 365 Unexpected

　母親と別れてわずか数分で名雪は退屈し始めていた。
「うーっ、つまんないよぉ」
「何があっても出るなっていっても、つまんないんだよぉ。お母さん早くあゆちゃん連れてこないかな、早くあのときの雪ウサギみたいに、ぐちゃぐちゃにしてやりたいな。簡単に殺したりなんかしないんだ、生きたまままたっぷりと泣かせてやるんだ。そして、とどめは祐一の目の前で刺してやるんだ、そしたら、きっと……」
　名雪の妄想は加速して行く。
「名雪、いままでごめん、俺は悪い夢を見ていたんだ」
「やっとわかってくれたんだね祐一、でももう遅いよ」
「そんな……俺、名雪の言う事なら何でも聞くから、だから見捨てないでくれよ……」
「うーん、じゃあこれから一ヶ月間、毎日イチゴサンデーおごってくれたら許してあげるよ」
「おごるおごる、これから一生でもイチゴサンデー食べさせてやるよ」
　そして妄想はクライマックスを迎えつつあった。
「もうあんな悪い子にだまされちゃダメだよ、私がそばについててあげるから」
「名雪、今のって……もしかしてプロポーズかい？」
「もう〜女の子にそんなこと聞くなんて、祐一ってホント、デリカシーないね」
「ごめん……でも、俺の気持ちも同じだから……ずっと俺のそばにいてくれ、名雪！」
「うん……祐一もきっとそう言うって思ってたよ……ねぇキスして」
　そして祐一は私に熱いキスをしてくれて、そんでもって結婚式は白い教会でスイートホームは暖炉の

ある大きなお家なんだよ、子供は三人くらいほしいなあ。
えへへへへ……。
妄想も一段落すると、また退屈の虫が騒ぎ出す。
「ちょっとくらいなら……いいよね」
体育倉庫から顔をちょっとだけ覗かせる……とそこには、
「あっ、ねこさんだ。ねこーねこー」
偶然にも一匹の野良猫が夜の散歩中であった、これを見逃す水瀬名雪ではない。
名雪の異常な雰囲気におびえてか、野良猫は校舎に向かってまっしぐらに逃げて行く。
「ねこーねこー、待ってよぉ」
もはや母親の言いつけも忘れ、一心不乱に猫を追い掛け回す名雪。
しかし、もうすでに日は落ちている。
「あれ……ねこさんいなくなっちゃったんだよ、どこいったのかなぁ？」

「もしかして中かな……？」
名雪は一階部分の窓の鉄格子を力いっぱい動かしてみる、が外れない
「うーっ、どこか入れる場所はないかなぁ……」
手当たり次第窓の鉄格子を引っ張るがまるで外れない。
この頃、校舎内では凄まじいバトルが繰り広げられているが、名雪の耳には入らない。
最後の一箇所、一階男子トイレの窓の鉄格子を引っ張ると、工事がそこだけ手抜きだったか簡単に外れた。
と、同時に猫の鳴き声。他にもっと騒がしい音がしているだろうに……しかし、名雪にはさっぱり聞こえない。
人間、見たいもの聞きたいものを優先するものである、まして名雪はすでに精神の均衡を欠いている。
「やっぱり中だったんだね、もう逃がさないんだよ」
こうして水瀬名雪は不幸にも激闘の渦中へと自ら

踏み込んで行くのであった。

## 366　冷たいギフトとモノノケサミット

――目がクリクリして、肌がスベスベな近所の子供たちを十人ばかりかっさらってね。北海道に連れて行ってライ麦畑に放して裸で追いかけまわそうって計画を立ててるんだよ。なかなか素敵だろ？　こう見えても俺は子供が大好きなのさ！

（『にこにこぷん』第二十五回　じゃじゃまるのセリフより抜粋）

「ねぇ、ジュン」

夜半、毛布にくるまってうつらうつらしていたところを、宮内レミィ（九十四番）に声をかけられて、北川潤（二十九番）は頭をあげた。

「ん……なんです？　レミィ・クリストファー・ヘレン・ミヤウチ」

まっ暗闇の中、北川と同じように毛布に身体を包んでいるレミィが、彼の抱えているノートパソコンをのぞき込んで尋ねた。

「その中のCDって何が入ってるの？」

そのまま北川にのし掛かるようにして、ノートをまじまじと見つめるレミィ。豊かで艶のあるプラチナブロンドの髪が北川の首筋をなでる。それが彼にはくすぐったくてしょうがない。少し身体をよじると、北川は適当に答える事にした。

「『にこにこぷん』が入ってる」

「なんデスカそれ？」

好奇心をくすぐられたレミィが目を輝かせて再度尋ねる。

「あらま。おまえさん『にこにこぷん』を知らないのか。あの大スペクタル長編連ドラを知らんのか」

「うん、だって仕方ないヨ……アタシ、Dadのお仕事あったし……」

しゅん、としょげかえるレミィ。いささか後ろめ

たさを感じながらも、北川の目元がだらしなく緩んだ。興が乗った北川としてはこの千載一遇のチャンスを逃すわけにはいかない。
「そいつはいかんな。この歳で、じゃじゃまる・ぴっころ・ぽろりの八十年代御三家キャラを知らんようでは、二十一世紀の世知辛い世の中、とてもじゃないが渡っていけない」
「そんな……アタシまだ死にたくない」
「いーやおそらく死ぬ。何となく死ぬ。人知れず死ぬ」
「シヌ……」
「死ぬのです。レミィはにこぷんを知らないという一事だけで死ぬるのです。やれやれ、無知は罪だね悲しいね」
「ソンナ……」
レミイは子どもがやるようにいやいや、と頭を振っておびえるような仕草をする。北川にはそれがいちいち面白くてしょうがない。
「レミィ」
北川は急に真摯な表情を作ると彼女の方に向き直った。
「ハイ……」
「知りたいか」
「ウン、知りたい」
「本当に知りたいか」
「ホントに知りたい」
「その知りたい気持ちを州にたとえると？」
「ユタ」
きっぱりとレミィは言った。
「ちょっと弱い」
「インジアナ」
少し考えこむような素振りを見せると、あらためてレミィは言い直した。
「いまいち」
「サスカチュワン」
かなり困った顔になった。

「さて、寝るか」
「ミシシッピ」
レミィの目の端に光るものが浮かび上がった。
「それくそゲー」
「ネ……ネブラスカ」
涙で顔をぐしゃぐしゃにして、かすれ声でレミィは言った。やりすぎたか、と内心狼狽した北川であるが、レミィの素直すぎる反応を見るにつけ、えも言えぬ気分になるのもまた確かであった。
「よろしい。不肖この北川潤が、迷える子羊へレン宮内の蒙を啓いてさしあげよう」
こほん、とわざとらしく咳払いをすると、北川はおもむろに語り始めた。

「……簡単に言うと、両親に捨てられたという境遇を同じくする三人の孤児が、義兄弟の契りを結んで、共同生活を送っていくって内容のドラマだ」
「ミナシゴがギキョーダイに？　大変だけどおもしろそーだネ」
意外な舞台設定にレミィはきょとんとした表情になる。
「ただ、どいつもこいつも一癖も二癖もあってなぁ。長男のじゃじゃまるは、身長一四〇センチ以下の可愛い女の子を見かけると、脊髄反射で背後に忍び寄りエッサホイサと担ぎ上げてそのまま愛車のトランクへ放りなげるわ、家の金を持ち出して外国先物取引に手を出すわのトラブルメーカーだが、まぁいいヤツだ」
「ぜんぜんよくないと思うけど、イーヒトなのネ」
「長女のぴっころも、気に入らないことがあると、アリの巣に爆竹を仕掛けてストレスを解消するし、スーパーでメイプルシロップ万引きして日がな一日舐めているから十八歳にして総入れ歯だし、それでいて自分を国家元首であると信じて疑わないという事実が、戦後教育が掲げる『伸ばすべき個性』の意義を根本的に問いかけて愉快でたまらないが、いい

ヤツだ」
「あまりオチカヅキになりたくないけど……それでもイーヒトなのネ」
腕を組んで、自分を納得させるかのようにうんうんと何度も頭を振るレミィ。
「末弟のぽろりに至っては、基本的に行動が全て放送コードに引っかかるし、指が五本あるくせに三以上の数をかぞえられないが……」
「イーヒトなんでしょ？」
「その通り。致命的にいいヤツだ」
北川は、大仰に手を胸の前に当ててレミィの聡明さを讃えた。
「とまぁ三者三様、人間として大胆な欠陥があるが、町内に駆けめぐった『隔離してほしい珍獣達』のレッテルに苦悩しながら、奈良盆地の彼方に幸せを探しに行くっていう話だ。泣けるぞぉ」
「すごい……アタシ今すぐにでもにこにこぷん見たくなってきたヨ！」
「同感だ。でもそれにはまずノートを何とかしなけりゃな。今日から忙しくなるぞレミィ」
「うんっ、一緒にガンバローネ！　ジュン！」
弾けるような笑顔でレミィが応えた。
「疾走する現実逃避。加速する転落人生。駆け抜ける妄想ハイウェイ。それがにこにこぷんなんだ。転がり続ける石と痴人にコケは生えねぇ！　って事でそろそろ寝るとしようか。おやすみレミィ、せめて夢の中では安息と幸福を」
当初の目的を頭の中からすっかり放擲した北川だが、最後にそう締めくくるとベッドの上に横になって本格的な眠りについたのであった。

## 367　臨戦態勢

「な……に……？　今の……」
入り口の方から、何かを壊したような音……
そして、遅れて銃声——

香ばしいあんこの匂いに誘われて、校舎の中へと立ち入っていた里奈は、そこで現実に返る。
「……!!」
殺人ゲーム、その言葉が再度脳裏に浮かんだ。
上等なブーツを脱ぎ捨て――もう見る影もなかったが――靴下だけの身軽な格好になると、長い直線を一気に駆け、手近な教室へとすべり込む。
もちろん、廊下を走る音を消す為の行為だ。
（敵が……いる……）
それが複数なのかどうかは分からない……分からないが……。
廊下の様子を再度慎重に覗き込む。
誰もいない……静寂――
（もう……終わったのかしら？）
そう思いながらも、理奈は廊下に備え付けられていた消火器を手に取り、安全ピンを抜く。
（いざとなれば、目くらまし、殴打武器にもなるだろう）

今度はゆっくりと落ち着いて教室内を見回した。
（窓に……鉄格子!?）
入ってきた時は気づかなかったが、とても人間が出入りできるような窓ではなかった。十センチ間隔で固い鉄棒が備えられている。
グイッ……グイッ……
ためしにそれを揺らしてみるが、びくともしない。
（もし、まだ終わっていないなら……袋のねずみってわけね……）
恐怖心をかき消すようにゆっくりと深呼吸する。
（ゲームに乗った……乗ってしまった奴が……まだこの中にいる！）
それはただの思いこみではあった。
だが、その可能性を信じない愚か者が真っ先に命を落とす――。
そう結論付けた理奈は、手持ちの武器を確かめて、ゆっくりと戦闘態勢に入った。
教室の前後の入り口の状態、そして鍵の有無を確

認する。
鍵をかける——それは愚かな行為だ。
追い詰められたとき、逃げ場がない。
殺してくれと言っているようなものだ。
あいにく、復讐を誓った理奈に自殺願望はない。
次に、床に耳を押し付ける。階下から、かすかな足音——それが事実なのか錯覚なのか理奈には判断できない。
これだけの静寂の中、極限状態の理奈があるはずのない音を聞いてしまう可能性。ないと言いきれるだろうか。
理奈はその行為をあきらめると、次は窓の外を、眼下に広がる世界を覗き込む。もちろん、外からは見つかりにくいように慎重に。
校庭に一人の少女の姿が見えた。暗がりの中、かろうじて長い髪の女性だろうと判別する。
校舎の周りを、入り口を探すように調べている。
(まさか……入り口がふさがれているの?)
——何故入ろうとしているかは謎だったが
鉄格子で窓がすべてふさがれているとすれば……入るのは昇降口しかない。
だが、その少女(だと理奈は判断した)はそこから入ろうとしていない。
(だめね……早急すぎるわ、結果を出すには)
一通り状況確認すると、理奈は扉の外を慎重に窺い、そして……何かのきっかけがくるのを待った。
それは銃声か、足音か、誰かとの遭遇か、理奈にもまだ分からなかった。

## 368　保健室の衝撃

こんばんわ七瀬です。
……って、なんだあんたなの。さっきも挨拶したわよね?
とりあえず、あたし達がガッコに閉じ込められて

苦労する前の話を続けるわよ。
　最近すっかり脇役になっちゃって寂しい限りだけど、やっぱり一筋縄では行かなくって苦労したんだから、心して聞くのよ。

　あたしは暗い階段を転がるようにして、保健室まで駆け下りた。心の中で、定まらぬ思考が疾走する。初音はどうなっただろう？　なんで電気つかないの？　イジケ女ウザいわね！
　――そして里村茜。彼女は何を考えて、発砲したのだろう？
「……あーいう頭の良さそうな娘の考える事は、よく解らないわ。ここのところ折原みたいなバカとしか話してないからかしら？」
　我ながらバカが伝染ったみたいで情けなくなってくる。感染力は強そうだ。
「おっと」
　一階の端のほう、階段脇に保健室はあった。

　知性の退化という、学生にとって実に深刻な事態を自ら予想したため、悲嘆に暮れて目的地を見逃しそうになっていた。
「な、な、なな七瀬お姉ちゃん！」
「うっわ！」
　初音ちゃんが飛び出してきた。
　危うく反射的にハタきそうになるが、鉄パイプでハタくのは洒落にならないので、散弾銃で……じゃなくって！　素早く抱きとめる。
「なに？　なにが――」
　――あったの？　と尋ねようとする七瀬を抑えて、初音は保険室内を指し示す。
「あ、ああ、あれ！」
　そこには、布団を被った血塗れの死体がいらっしゃった。

　ギャ――――――――――!!

悲鳴が木霊する。
あまり、というか全然、乙女っぽくはなかった。
踊り場で、二人のウェイトレスが立ち止まる。初音の声が聞こえたような気がしたのだが、妙な悲鳴で掻き消されてしまっていた。
「？」「？」
互いに首を傾げ、そして考えたところで無意味なことを同時に悟り、頷き合うや再び階段を駆け下りる。さすがに息の合った、無駄のない動きであった。
一階に降り立ち、曲がってすぐ、保健室の扉を開けて踏み込む。
「せいッ！」
「なんの！」
鋭い気合いと共に振り下ろされる鉄パイプを、梓がモップの柄で受け止め、そのまま流れるように回転する。左側の柄で鉄パイプを流し抑えて、なかば背面越しに右側の柄を腹部へ突き込んだ。同時に千鶴が内側にステップを踏んで、七瀬の気管を真一文字に切り裂――
「お姉ちゃん！」
――制止したのは、初音の声だからだったろう。
二つの旋風が、ぴたりと収まった。
完全に鉄パイプを振り下ろさせられた状態で、頸動脈から一センチのところに鉄の爪。左脇腹十センチのところにモップの柄。
ここまでくると、悲鳴すら出ない。
七瀬は非常に不本意かつ衝撃的な形で、恐怖の防弾戦闘ウェイトレスさん二体、もとい初音の姉さん二名に遭遇したのである。

## 369　あゆ攻防戦

とりあえず、私は移動していた。無論、慎重に。

初音と七瀬さんの二人と合流後、直ぐにあゆの元へ走った。当然、あゆの保護の為。
今ごろ千鶴姉達は保健室のすぐ隣（たしか会議室のような机ひとつないホール）に移動しているはずだ。死体のある部屋に留まるのは気分のいいもんじゃない。
本当は千鶴姉も一緒に、と言いたいとこだけど、今の状況で多人数で移動するのは得策じゃない。それに……入り口付近で変な音も聞こえた。何かが壊れるような音。
ゾッとする。
ここ、たしか昇降口以外の場所は封鎖されている……いや、されていた。
確かめたわけじゃないけど……千鶴姉ももしかしたら同じことを考えてたかもしれない。千鶴姉の表情は、いつになく緊張していたから。
今思えばここに立ち入ったのは軽はずみだったかもな……。

でも、今はそんなこと考えてる場合じゃない。
私は、二階へと――調理室へと向かう階段を目指した。

「あそこを曲がれば階段……」
物音を立てないよう、慎重に。
このまま、無事に目的地に辿りつければいい。
梓もまた鬼の力を有してはいたが、今は普通の人間と大差ない。銃火器を持った人間相手に正面から戦えるとは思えない。
何故か？　それは武器がないからだ。
保健室の掃除用具入れから先のないモップ（木の棒ともいう）を獲物にしてはいるが、ないよりましか、程度のものだ。
――里村茜。
梓は、七瀬から聞いたその名を思い浮かべ、ぞっとする。
至近距離から躊躇なく発砲した少女。その弾が外

れたのは、あるいは躊躇したからなのかもしれないが、実際見たわけじゃない梓には分からない。
なんにせよ、正面からぶつかり合うのは避けたかった。
だが、あゆを見殺しにするわけにもいかない。
梓が一人あゆを保護に向かう理由——それは、割と単純だ。
千鶴は、初音達を護る。
梓は、あゆを保護し守る。
どちらのリスクが大きいかはこの際どうでもいい。
とりあえず、この防弾服のおかげで致命傷になる確率は多少は低いのだから、千鶴が助けに行くのを除けば、梓が一人で行動するのが最も理に適っている。
「二階……!!」
階段を駆け上がり、慎重に前を向く。
「誰にも遭遇しませんように……」
だが……その願いは果たされなかった。
階段の踊り場から残りの段を一気に駆け上がり、二階へと身を踊り出す……それがそもそもの間違いだった。
廊下の向こう側に一人の女の影。
——里村茜——
梓がそれを肉眼で確認したとき……
暗がりの中でガバメントが火を吹いた——!
パンパンパン!!
どこか情けない音と共に、梓の体が不自然に歪む——正確に胸に三発。
「かはっ……」
口元から血が滴る。
防弾服を着ていなかったらそれで終わっていただろう。
仰向けに転がって床をすべる——
体勢を立て直そうと転がる矢先に、再び銃声。
先程まで倒れていた場所に弾丸が命中する。そしていくつかの何かがぶつかり合う音（それは、跳弾の音であった）。

（防弾服……ですか……!?）
　背後に人の気配がないことを確認してから、茜は、近くの備え付けられていた消火器を力任せに前方に蹴りつける。それは普段の茜からは想像もつかない野蛮な行動だった。
　そして、一発、二発!!
　ドッ……!!
　中に圧縮されていたものが破裂し、あたりに撒き散らされる。白い煙の中、壁にぶつかる消火器の残骸の音が幾度か響いた。
　間髪入れずに、後方の階段（梓が使用したのとはまた別の物）へと後ずさりしながら白い煙の向こうにいるであろう人物に三発ぶち込む。
「うっ！」
　短い呻きが微かだが轟音の中聞こえた気がした。
　茜は、そのまま身を翻すと階段から上の階へと姿を消した。
「くうっ……」
　白い煙の向こうから飛んできた銃弾の内一発が梓の左肩を貫通していた。ちょうど防弾服に覆われていないところだ。
（あゆっ……!!）
　白い煙の向こうから、また銃弾が飛んできそうな気がして……恐怖に顔をひきつらせながら梓は、一度退避するため、彼女が昇ってきた階段へ床を這った。
　その刹那——
　近くの扉から何かの影が飛び出した。
　何かを振り上げている。
　梓にとって幸運だったのは——
　鬼の力がなくても常人よりは強い力を持っていたことでも、それに対して無意識に腕が（傷ついた肩も含めて）動いたことでもない。
　恐怖と緊張の中、硬直した手が持っていた獲物を離していなかったことだった。
　ガチッ！

その降ってきた何かの刃の部分でなく、その柄の部分をモップで防ぐ。
梓の力を持ってしても、押さえるのがやっと……という速度で振り下ろされた刃、それは、水瀬秋子のナタであった。
梓の眼前までせまったそれは、わずかに枠の額を傷つけ、そこで止まった。その受け止めた衝撃に、肩の傷が痛み、梓の顔が苦痛に歪む。
「くっ……!!」
絶対的なピンチに恐怖を通り越した絶望を感じる梓。だが、圧倒的優位に立っているはずの秋子は、一瞬梓以外の空間に注意を向けたかと思うと、梓が昇ってきた階段にむけて飛び移り、そのまま上の階へと逃走した。
(すまん、あゆっ……必ず……迎えにいくからっ!!)
梓は痛む肩を押さえながら、秋子が消えた階段を転がり落ちるように階下へと向かった。その拍子に、幾本かの切られた前髪が、血と共に宙へと舞って落ちた。
「いい判断です……」
一度は離脱した茜であったが、階下の戦闘の音を聞きつけ再び白い煙の立ちこめる二階へと戻ってきた。
——上手くいけば不意をついて漁夫の利を狙えるかもしれない。
だが、すでに秋子は上階に逃走しており、梓も階下に逃れていた。
相手の手の内が知れないというのは大きな不安材料である。仕留め損なったメイド服の少女が、そして、新しい敵が持っている武器が分からない以上、深追いは禁物と判断した。
そして状況を分析する。
「……どうやら、閉じ込められてしまったようですね」
入り口は何者かによって内側から封鎖されていた。

おそらくここにいる者の中に、殺し合いを望む者がいるのだろう。
「それならば、ここにいる人全員を倒して出ることとします」
茜の腹は決まっていた。
殺人者を判断する手段はない。
それならば――全員倒せばいい。
そしてゆっくり脱出の方法を探せばいい。
「生きてあの空き地へと帰るんです……」
再び茜は階段から三階、そして四階へと姿を消した。

秋子は動揺していた。
名雪が、この校舎に入ってきてしまったのだ。
当初の計画では、単独行動している者から順番に仕留めていくつもりだった。それから、ゆっくりとあゆを捕獲――レーダーに表示されるあゆの番号は、死者の番号と照らし合わせて、すでに割り出している。
もちろん、あゆに危害を加える気はなかった。
それをするのは名雪なのだから。
……だが、その名雪の身に危険がせまっている。
（本当は一人ずつ消すつもりだったのですけれど……はやく終わらせないと……）
名雪と、あゆ、そして他の参加者の位置を確認しながら三階の教室へと入った。そこは、多分音楽室であった。その証拠に教室の前方にグランドピアノが鎮座している。
名雪が建物に入ってきたことによって秋子は、あゆを捕まえ、名雪と合流し、そして、名雪の入ってきた場所から抜け出す計画へと変更した。
だが、あゆがいると思われるであろう教室に、二人の人影が接近していた。あゆを捕獲しようとすれば、戦闘を避けるのは難しい状況にある。名雪の状態を考えるとこの時間のロスは惜しい。
（どうするべきなの？　先に名雪と合流するか、あ

ゆちゃんはこの際あきらめるか、それとも、当初の予定通り全員消すか……）

レーダーで名雪の、そして他の者の位置を確認しながら秋子は大きく息を吐いた。

秋子はこの島に来て、初めて――取り乱していた。

## 370 残された人達

私達は唐突に合流した。

もちろんいきなり殺されかけた七瀬さんの怒りを抑えるのは大変だったけど……兎にも角も、私達姉妹は合流できた。

あとは……耕一さんと楓だけ。

話によれば初音は耕一さんの消息を知っているらしい。すぐにでも聞きたいところだったけど、今は事態が切迫している。

もしかしたら、閉じ込められてしまったのかもしれないのだから。

梓が、今あゆちゃんを迎えに行っている。

本当はついていきたかったけど、そうもいかない。

ここには七瀬さん、そして初音がいる。

二人を残していくのは危険過ぎる、かといって四人で行動するぐらいなら梓か、私一人であゆちゃんを迎えに行ったほうがまだマシだ。

だから私が行こうとしたんだけど……

『千鶴姉はここで待ってて、あゆを連れてくるから！』

そう言って、私の言葉も聞かないうちに飛び出してしまった。

今、私達は保健室の隣、会議室（……だと思う）にいる。死体のある場所に三人でいるのは気が重すぎたから。

一部屋離れたこの場所でも、放置された死体からは嫌な臭いが漂ってきていて、初音達の嗅覚を苦しめている。……私は、こういうことに慣れているからまだ平気だけど。

梓達が戻ってきたら初音の持つダイナマイトで入り口を爆破して脱出しようと思う。
火はないが、初音の持つ銃で遠距離から誘爆させればなんとかなるはず。それでもダメなら、調理室から火種を持ってこなくてはならないだろうけど……。
さすがに、ダイナマイトで昇降口を爆破したところで鉄筋の校舎が崩れ落ちる心配は無い……と思う。
不安なのはその行程であの発砲した人や、初音を襲った人に再度襲われやしないか……。
「梓……」
ややあって銃声……そして爆発音。
私の目の前が、一気に暗くなった――

## 371　縁

銃声。叫び。爆発音。
今度は二階で戦いが始まっていた。
「千鶴お姉ちゃん……！」
天井を透視しようとしているかのように、険しい表情で空を睨むようにして、歯を食いしばる千鶴の手を、初音が軽く握る。
「初音……」
躊躇い。守るものの選択。どちらも捨てられないのならば。どうすれば、良いというのか？
私はどうして、いつもこんな選択を強いられるのだろうか？
自然と、握った手に力が入る。
苦しみに耐えるかのように。
ぐっ、と。
初音が握り返す。はっとする。
……この子は、こんなに力強かっただろうか？
「梓お姉ちゃんを、助けに行ってよ」
「私たちなら、だいじょうぶ」
七瀬と初音が、笑顔で言った。
「あなた達……」

素敵な、笑顔だった。
千鶴は初音たちと、いくつかの事柄について打ち合わせた。そしてダイナマイトを一本だけ、貰い受ける。
「私、梓とあゆちゃんのところに行ってくるわ」
改めて声にする。
決意が目に光を与え、身体に力が漲る。
「だから、二人もがんばってね」
暗い教室に似合わぬ明るい笑顔をうかべ、初音を軽く抱擁し、七瀬の髪をすいてやりながら千鶴ははっきりと口にする。
「それじゃ、七時に」
それは打ち合わせた、脱出の時間。幸い学校だけに、時計だけはどこにでもある。離れていても同時行動は可能なのだ。
生きてさえ、いれば。

からりと乾いた音をわずかに立てて、千鶴は暗い廊下に出る。階段を上がろうとしたとき、視界の隅に人影がひっかかった。
（……初音を襲ったという、女の子かしら？）
目を細めて闇に目を凝らす。トイレのほうだ。その人影には特に身を隠そうとか、そういう配慮が全くない。もしも里村さんという娘なら、もう少し警戒しているだろう。
気配を殺し、様子をみる。
「お母さんどこかな？」
人影は、少女は、何度もそう繰り返していた。どこかがおかしい。そして、何かが気になる。
「あゆちゃんどこかな？」
繰り返される、調子外れの明るい声。あれは里村茜ではない。髪色は亜麻色ではなく、青だ。
おかしいのは、そして気になるのは……千鶴は記憶を掘り返す。そうすることが、極めて重要だと思った。

（……お母さん!?）
母子。そしてあの髪。あれが水瀬名雪、なのだろうか？
（縁が、あれば）
秋子と交わした言葉。思えば、あの出会いなくして今の自分はない。
方向を見失っていた自分の意志が、今の健全な状態にあるのは、秋子のおかげでもあるのだ。
ならば、放ってはおけない。この小さな闘技場に、あの娘が一人で居ることは、あまりに危険すぎるから。

「水瀬、名雪ちゃん？」
「うん……おねえさん、だあれ？」
「あなたのお母さんの……お友達、よ。お母さんを、探してるんでしょう？　私も妹を探しているの。一緒に、探しましょう？」
にっこり笑って手を差し出す。年下の女の子と仲良くなるのは、得意なほうだ。
「うんっ！」
名雪は元気に、この建物の中では異様なほどに明るく答え、手を握った。
千鶴は名雪の手を引いて、階段を上る。
名雪の手は、冷たかった。初音の手の暖かさが、消えてしまうような気がした。
（初音……）
不安が走る。だが後戻りはできない。
（無事で居てね、初音）
こうして千鶴は、名雪を保護した。
秋子が――名雪の母が、梓を襲撃していたことも知らずに。
（何だってこんな、とんでもないのが二人もいるんだ！）

銃撃と斬撃をどうにかやりすごした梓は、引き換えにあちこちをぶつけて階段を転がり落ちていた。
だいたい二人して、あんな澄ました顔してよくもまあ、えげつないと言うかなんと言うか。
千鶴姉並みだよ、と声にだして言ったとき。
当人と、目が合った。
「呼んだかしら、梓？」
「うわ、ち……千鶴姉……っ！」
張り付いた笑みと、引きつった笑みが交差した。
梓にとって先の立ち回りと同じような、短いけど長い長い緊張の瞬間が続いたが。
その娘、隠し子？　と名雪を指差すに至って容赦なくハタかれた。

「ふーん、お母さんかあ」
踊り場で、三人身を寄せ情況を交換し合う。
名雪はその間、二人の制服のフリフリを嬉しそうにいじってみたり、イチゴサンデーお願いします、とか言ってみたりしていたのだが——
「とりあえず、あゆの所にいかないと」
——その一言に、反応した。先ほどの異様さを、再び発揮して。
「あゆちゃん!?　あゆちゃんいるの!?」
叫ぶ名雪。
「知り合いなの!?」
梓が驚く。
千鶴は既に知っていた事だが、それでも反応の異様さに驚いた。
「お母さんがね、あゆちゃん連れてきてくれるの、それでね、わたしね……」
その後の台詞を心に留めておくのは、あまりに辛かった。
そして、理解した。
……名雪が、正気を失っている事を。

（これも、縁だというのかしら？）
千鶴は誰にともなく、問いかける。
答えなど期待してはいなかった。
ただ運命が、無機質に横たわっているだけだった。

## 372 ――――螺旋

少年は、葉子の行動の意味を知らなかった。
葉子は、少年の怒りの意味を知らなかった。
二つのすれ違いが、思いの螺旋が、静かに、森の中で波及する――。

――いつから、こんな風になってしまったんだろう。

――どうして、こんなに怒りに囚われているんだろう。

――この島に来るまで、全然こんなことはなかったのに。

少年は、棒を拾い上げると、そのまま彼女に放り投げた。

――生きる理由が、欲しかった。
――闘う理由が、欲しかった。
――殺す理由が、欲しかった。
――どれもこれも、何か違う。
――人間のように、振る舞ってみたかった？
――そうかもしれない。
――最初から、人間じゃなかったわけだし。

「不可視の力……それは確かに君たちにとっては他者に対するアドバンテージだ。しかし……御明察の通り、僕を相手にする場合だけは状況が異なる。不可視の源流を相手に、不可視の力では戦えない」

葉子は、槍を投擲したままの体勢で座り込んでいる。
コロコロ……、と棒が転がってくる。

そして、葉子の膝までたどり着くと、ぶつかって止まった。
だが、葉子にはそれを拾い上げる余裕が無かった。目だ。
ずっと、少年の目を見続けていた。
ずっと、少年の目に縛られていた。
そこにある深い悲しみを前に、心が停止していた。
闘わなくてはいけないのに。
殺さなきゃいけないのに。
自分の心の中の何かが、いつしかそう動くことを拒絶し始めていた。
分からない。何が、そんなに悲しいのか――。
「間違ってはいない。確かに、今後不可視の力が復帰する可能性があるとするならば、そうなる前に、一秒でも速く僕を殺すべきだ。それが、生き残る唯一の術かもしれない」

……震えていることに、気づかない。
……歯をくいしばっていることに、気づかない。
……涙が込み上げていることに、気づかない。
「……さあ、足掻いて、もがいて、僕を殺してみせてくれ。そうしなければ、僕が君を殺す。それが君の望んでいることなんだろう？」
言葉の苛烈さが、視線の悲しさに二律背反。
どうして……私は、彼を殺そうなんて思ったんだろう。
こんなに……、こんなに可哀想な笑顔を見る事になるなんて。
葉子は揺らぐ、心の深層で初めて揺らぐ。
死への恐怖と、殺人への恐怖。
そのとき。

――かちゃり。

投げ出した右手が、何かに触れた。
これは、何？

――それは銃。
――鈍色に黒を照り返す。
――少年が置き捨てた。
――人を殺せる武器。

少年は目をしばたいた。
それは銃を失念していたことの悔念か。
それとも彼女がそれに気づいたことの満足か。
恐る恐る、葉子は拳銃を拾い上げ、トリガーに指を通す。
重い……だが片手で持てないほどでもない。
それなのに、実態以上の何かの重みに圧されて、葉子はそれを両手で支えなくてはならなかった。
銃口の先には少年。
少年は、動かない。

ただ、彼女のぎこちないその一挙手一投足を、まるで見守るかのように、ただじっと、そのままで。
葉子は震えていた。
……なんて、引き金が遠い。
それを見た少年が一言、言った。
「――どうだい、人を殺せる力を持った感想は？」。

## 373 ――背反

――何を言う名を持たぬものよ。
　これが
　そちの欲しがっていたものであろう？

うん、確かにそうだ。この色鮮やかさ。
形だけだった笑顔に、本質をくれた。

――なればこそ、その感情に身をやつし
　人を滅ぼすもまた自然なりや？

最初の少女。それで回路が狂った。
これだけ死を拒んでいるのに、
これだけ殺意に魅惑されている。

――その醜さも合わせて人間。
　それでもなお、人に惹かれるか？

変わらない。人間の汚いところなんて、
君なんかよりずっと見てきている。
だから……そればかりじゃないって、
希望も知っている。

――人ならざる異形ゆえ。

同じ想いを、共感していた。

――徹頭徹尾の人でなし、その分際が今更。

そんな僕にも、できることがあった。
　背中で激しい痛みに喘ぐ郁美。
　手を繋いで楽しげに歩く詩子。
　知らぬ間に変わり果てた巳間。
　胸を赤く血に染めて眠る少女。

爪弾け
爪弾いてしまえ！
　　　　　　　　　　違う
　　　　　　　　　　そんなことは
　　　　　　　　　　　しない
撃たせてしまえ。
撃たせてしまえ。
撃たせてしまえ撃たせてしまえ撃たせてしまえ
　　　　　　　　　　違う。
　　　　　　　　　　違う違う違う。
心無きものよ、その虚の顎を以って
心弱きものを喰らい潰してしまえ。

——どうしてだろう。
怒りで、人を殺したくなるなんて。
「引けばいい、その引き金を。不可視だろうが可視だろうが、そんなことは関係ない。君の殺意が確かなものなら、それは確実に僕へ届くだろう」
目に見えないプレッシャーが蔓延する。
拳銃を構えたまま、まるで迷子の子供のように、葉子は怯えている。
そんな自分を……懸命に偽りながら。
「——人を殺すとは、そういうことだ」
少年は、動かない。

**374 ————贖罪**

殺人のイメージ。
私の中の殺人のイメージ。
それは透き通った風や水を穿つように。
それは真っ白な綿飴を握りつぶすように。
それは暗闇の中を手探りで進むように。
それは下ろしたての寝巻きを着るように。
それは見えない壁に亀裂を探すように。
それは一本しか咲いてない花を摘むように。

死のイメージ。
私の中の死のイメージ。
それは赤土の溶けた泥水。
それは固く閉ざされた鉄牢。
それは感触を残さない撃鉄。
それは永遠にたどり着けないゴール。
それはこびり付いて拭えない血液。
それは私ノオ母サン。
ソレハ眼前ノ少年。

不可視のイメージ。
それは甘美な波動の軌跡。

拳銃のイメージ。
それは耐え難い痛みの表象。

凍てつく波動が、私を貫く。
その先に、よぎる、紅。
空っぽの心が、指先に力を込める。
撃つの？　……私。
銃口。その先に目標。その向こう側に笑顔。
誰の？
少年？
……お母さん？

そして、次の瞬間、トリガーを、引いた。

——どうして、こんなことになってしまったんだろう。
あやふやな戦意に心を軋ませたまま、どうして私はここに立っているんだろう。
私はぐるりと周りを見渡す。
音の無い世界。
時の止まった世界。
するとそこに私は奇妙なものを見つける。
あれ……これは、私？
目尻に涙を溜めて、両手で拳銃を支え、そして今、正にそれを放とうしている。
あれ……違う。もう……銃弾が放たれている。
あれ、でも止まってて……分からない。何これ。
その銃弾が向かう先は……人だ。
あれ、この人は懐かしい人だ。
前に会ったことがある。
でも何でこの人がここに？
穏やかな笑顔……あれ、でも私の見たことのあるそれと少し違う。昔より色鮮やかで……その後ろに別な思いを隠し持っている笑顔。
なんだろう、これ。

怒ってるの？
何で？
分からない。
でも、笑ってるけど凄く怒ってる。
だから、それを見た私は、訳が分からなくなって、
怖くて、悲しくて、それで発砲した。
銃弾が届いたら、あの人が傷つく。
ううん、死んでしまうかもしれない。
何でそんなことしたの？
……頭、痛い。考えたくない。
私はそこから目を背ける。
すると今度目に入ったのは……小山。
何これ、変なの。
こんな森の中で、しかも二つも盛り上がってるなんて不自然。
——よぎる。
彼が拾い集めていた枝の欠片。
彼が拾い集めていた花びらの欠片。

……何、そんなところに枝とか、花なんか飾って。
何の意味があるの？
あれ、でも私さっきそこに思い切り飛び込んで、それで……。
ぱっ、と彼の方を向く。
もちろん変わらず笑顔のまま。
迫り来る銃弾を見つめているのかそうでないのか。
彼が小脇に抱えているもの、それを見る。
それは本だ……私にとっては馴染み深い、教典。
あれ……装飾が違う、なんだろう。読んだことの無い古い版のものなのだろうか。
黒塗りの表紙と、分厚い冊子。
刻印は見えない。でも……まさか……これは。
……偽典。それは旧教から死に纏わる記述を収集したといわれる異色の外典。
力を求めることにだけ専心したＦＡＲＧＯで、もはやそんなものを手に取る者などいないというのに。

——それで、ようやく気づいた。

止まっていた歯車が、ようやく回り始めた。
ここまで追い詰められなければ……気づくことの出来なかった怒りの理由。
あ……あああ……。
戻る。本当の私へと、復帰する。
視界が一致する。銃口を通し、少年を見据える私へと。
放たれた銃弾が動き出す。
飛ぶ。彼へ向かって、真っ直ぐに。
私は、彼に言った。
目尻に溜まっていたものが、頬を伝って、落ちた。
「————さい」
その瞬間、彼がクスッと笑ったような気がした。

## 375 ——希望

『——いずれ、ロスト体であろうとそれが不可視の力を持ったもの以外と相対した際には制御体と全く遜色の無い力を発揮する。その力の顕現は指向性を持ち、そこらの銃火器に類似点も多いが、その破壊力はそれを超えるところにあるのは周知の事実である。ロスト体排除の鉄則は先手必勝にあるが、それは裏を返せば我々に不可視の力を防御しきれないことを示す。我々はその状況を打破すべく究極の防御機構を構築したが、その軽量性と反射性の維持は最終的に我々の力だけでは成されず、結局不可視の力によってコーティングすることによって維持されることとなった。不可視に相対し得るものは不可視のみと言う原則に、我々はまたも直面することになった。しかし結果としてこの機構は一般的な銃火器のそれを完全に打ち返す実際兵器としての付加価値も

付いた。この利点は一般兵においても擬似的に不可視の力の恩恵にあずかることの出来るということだが、その生成は今のところ彼を介してのみでしか成功を見ず、またそのコストの問題から見てもまだ兵装は遠いと見られる――』

「第X次定期報告抜粋」

まあ……、そもそも銃を向けられているのは僕なわけで。

それなのに、どうして僕がその銃を向けている当人を威圧している構図なのか。

もっとも、それを異常に思わなかったような心境だったからこそ危険ではあった。

囁きに膨張した悪意が溢れ、彼女を本当に殺しかねなかった。

僕の中の悪意、僕の外からの悪意、知っていた様な気もするし。知らなかったような気もするし、見て見ぬ振りをしていた気もする。

あれが、本当の僕だとでもいうのだろうか。

……分からない。今は、まだ。

眼前には鉛の玉、高速で接近して、僕を穿とうとする。

これが……彼女の殺意の結晶なのか。そう考えることは単に僕のいじけで、意味の無いことだった。

何故なら、それより先に届いたものがあるから。

「――――ごめんなさい」

その一言で

――気持ちが、解けた。

フッと、頬が緩んだ。

銃弾が接近する。

僕はおもむろに抱えていた本を真ん中くらいから広げる。

銃弾が接近する。

僕は広げた本をそれに向けて掲げる。

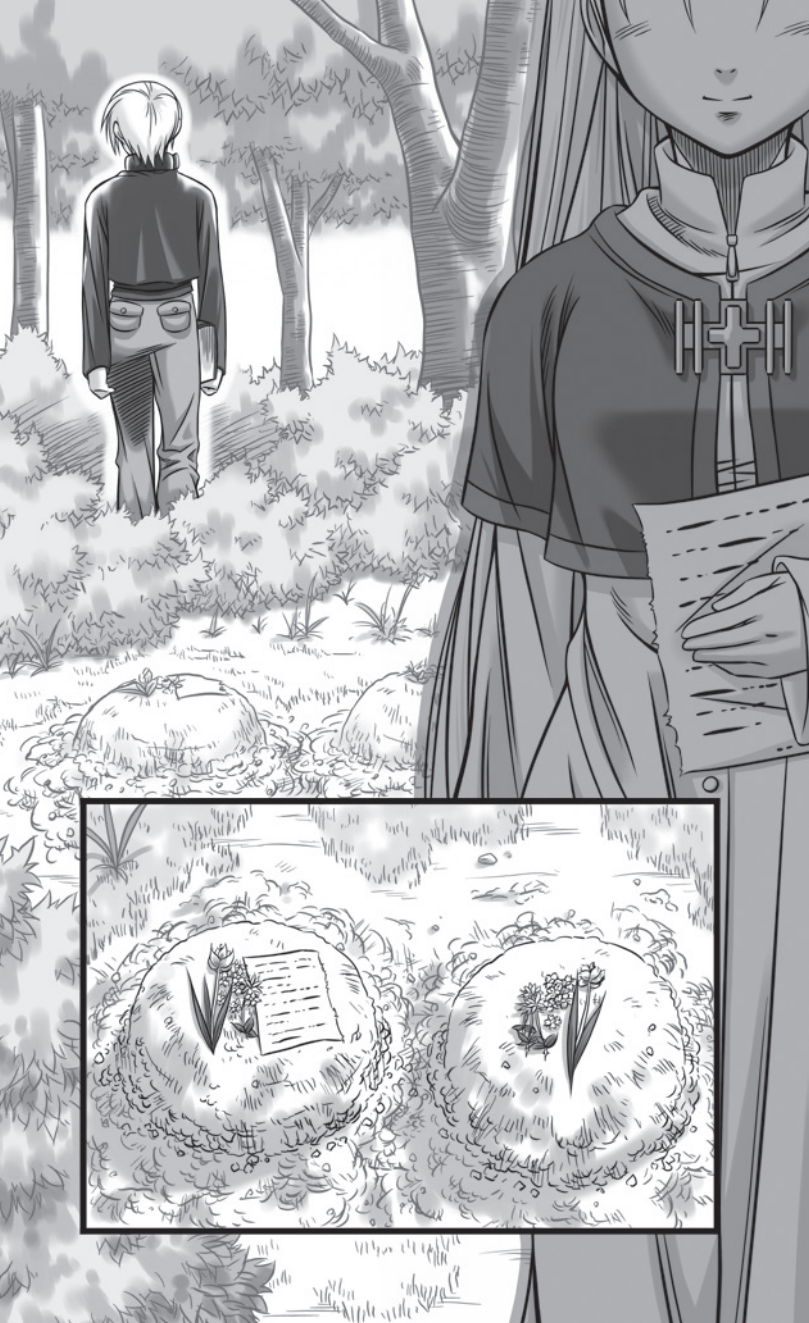
そして、激突。
——銃弾は、その軌道を達成することなく、あさってての方向へ飛んでいった。
葉子を臨む。
彼女は悲哀と悔恨と……それに困惑を混ぜ合わせた表情でなお……呆然としていた。
気の毒といえば、そうかもしれない。
だがそれも致し方ない。
何せ、僕を怒らせるなんていう珍しいことをしでかしたのだから。
ただし。
「……その言葉が、聞きたかった」
——成果としては、悪くない。

——偽典。それは死を収集し刻印した書物。
それは全篇を通じて死に敬服する立場をとっている。それが故に、そこに収められた葬送句も少なくない——

「……と、こんなところかな。やっぱり僕なんかはダメだな。君のような女性に助力を講じてみるとよく分かる。少なくともこれのほうが〝らしい〟じゃないか」
「そうでしょうか……特に最初のものと変わらないような気が致しますが……」
「いやいや、多分こっちのほうが彼女たちも喜ぶよ」
談笑が聞こえる。一時の戦慄が、まるで最初からなかったものであるかのように。
小山の片方にはまたしても枝が。しかし今度は最初のような無骨に節ばったものではない。
それは若木の枝だ。みずみずしい緑の葉をつけ、そこには確かな未来への希望が見える。
小山の片方にはまたしても花が。しかし今度は一輪が捧げられているのではない。
それは雑草にまぎれて生える小さな花たちの束だ。そこには今を生きる生命の息吹が漲っている。
葉子はしゃがみこんだまま、両手を組んで祈りを

捧げている。
その一方で、少年は土で汚れた両手をパンパンッと拭っている。
「『祈りは、誰が為に――』」
少年が、ぼそっと呟いた。
すると、葉子がそれに呼応するように言った。
「『――彼の地にある、貴女の為に』」
それを聞いた少年は目を丸くした。
「驚いた、教典の文句をちゃんと覚えていたか」
「これでも、真面目な信者のつもりですので」
つん、とおすましをしたかのように葉子は答えた。
「――死を汚すことは許されない」
心に刻むように、葉子は一人呟いた。
――先ほどの一戦から程なくして、葉子は自らのことを少年に伝えた。
自分が高槻に従っている振りをしていること。
現在の命令は巳間晴香の連れの抹殺であること。
晴香は高槻の策略に陥れられたということ。
自分が少年のことを背信者だと思っていたこと。
「おいおい、それはひどいな」
最後の内容にだけは、流石の少年も苦笑した。
「……で、僕のことはもう殺さなくていいのかい？もしかしたら寝首をかくかもしれないよ」
「あなたが最初からその気でしたら、私はもうとっくにやられています。それに……」
葉子はそっぽを向いた。
「もう気が失せました」
「あはは、それは恐縮」
と、そこで少年は二つのものに気づく。
一つは、銃弾を弾く時に落とした偽典の頁一枚。
もう一つは葉子が目くらましに使ったケープ。
少年はその二つを拾い上げると、そっと葉子に差し出した。
「……ま、こっちの一枚は餞別。効果の程はさっきご覧の通り。お守り代わりにでもしてくれ」
葉子は黙って頷くとそれを受け取った。

ケープを肩にかけなおした葉子に向かって、少年はぼそっと言った。
「巳間の妹のことだけど」
ぴたっ、と葉子の動きが止まる。
「もし……出来ることなら救ってあげて欲しい。そうでないと、あいつが浮かばれない」
言って……墓標の片方に目をやる。
「……それは、私もお願いしようと思っていたことですよ」
ケープを結ぶ手を止めて。葉子は優雅に微笑した。
「さて、じゃあもう行くかな」
少年はパンパンと膝の辺りの埃を払った。
「あ、そうだ。郁未とは会ったかい？」
「いいえ」
葉子は首を横に振った。
「どこかで会ったら、あなたのことをお伝えしておきましょうか？」
すると今度は少年が首を振った。
「いいよ。――一月に満たない同棲だったけど、結構彼女のことは分かってるつもりさ。こんな状況なら彼女はどうするか――」
「……毒を喰らわば皿まで、ですか」
「その表現は……、いやまあそんなところだ。高槻はさぞ猛毒だろうよ」
少年はそう言いながら苦笑した。
「じゃ、そういうことで僕も毒蛇退治に行ってくるよ。生き残っていたらまた会おう」
そういうと、少年は駆け足で茂みに突入した。
その唐突さに目を丸くした葉子は一瞬呆ける。
しかしすぐ気を持ち直して叫んだ。
「――高槻の、クローンに、気をつけてぇぇっっ！」
その言葉に、走り出した少年は急停止を余儀なくされた。
キュッ、と音がするかのように方向転換すると、感情が見えない表情でつかつかと戻ってくる。

思わずその様態にぎょっとして葉子が固まっていると……。
「……クローンって、何？」
……それから、少年にそのことを説明するのに葉子は少しの時間を費やした。
「なんだか……めんどうなことになったな」
ポリポリと頭を掻きながら、少年はそう呟いた。
「あの顔が複数並ぶのは気持ち悪いから？」
「本物がどれだか区別しにくいからねぇ」
同時に、互いの言葉が出た。
「……………………」
思わず、沈黙。
「……成る程、それが君の本音か」
「わ、私はあなたの気持ちを代弁して――」
葉子は思わず顔を赤くしてそう言った。
「ふぅん………」
少年は葉子のことをじっと見つめる。
葉子はその視線から恥ずかしそうに目線を外しつつ、なんとか耐え忍んでいる。
「……ま、いいけどさ」
少年は肩をすくめて笑った。
そして、つかつかと今度は葉子の脇を通り過ぎていった。
「じゃ、今度こそ」
そう言って、少年は森の中へ去っていく。
さっきの教訓か、今度は走っていない。
彼の背中を見送りながら――ふと、その視線を下げる。
そこには、先ほど整えなおした二山の墓標がある。
――そのとき、埋葬という言葉が、なぜだか今の葉子には、とても暖かく感じられていた。

詩子へ。
――一応、まだ殺害者数カウントはゼロだよ。
かしこ。

## 376　脱出のために

四階には、まだ戦渦は広がっていないようだった。
階下のあちこちから争う音が聴こえる。
この学校内に何人いるのかはわからないが、最終目標は生きて帰ること。
その為に、茜は自分を狙う者を容赦するつもりはなかった。
だが――
(……軽率すぎました)
思い返す。
最初に襲われた時、あの少女は自分を狙っているわけではなかったのだろう。
しかし、予感があった。
あそこで殺しておかないと、後で確実に狙われる、と。
だから、発砲した。
銃弾が当たらなかったのは何故だろうか。
予感で人を殺すことを、やはり無意識のうちにためらったのだろうか。
澪を殺した時からの自分では、そんなことはしなかっただろう。
祐一と出会ってからだ。中途半端になってしまったのは。
(……私が死んだら、責任、とって下さいね?)
自分の持ち物を確かめる。
ナイフ、ガバメントと予備弾丸、高槻から奪ったベレッタと予備マガジン、サイレンサー付き銃、メリケンサックに……。
(……忘れてました)
手榴弾が四つ、転がり出てきた。
早めに気付いていれば、これを使って壁でも破り、

脱出できていたのに。
（……迂闊すぎです。やっぱり、こういうことは向いてませんね）
既に四人の参加者と二人の高槻を殺しておいて、何を思っているんだろう。
茜は自分の思考のおかしさに、くすりと笑った。
クラスの男子生徒が見たら、半数は一目惚れ間違いなしの笑顔だった。
やることは決まった。
一階の壁を手榴弾で爆破し、脱出する。
この混戦状況を乗り切る自信はなかった。
（……手強そうな人が何人かいるみたいです。……それに、また後先考えない行動を取るかもしれません）
慎重に気配を探り、三階へ。
そもそも一番のミスは、二階に突如躍り出た人影にうろたえ発砲したことだった。
相手の出方を窺ってからでも、あの距離では充分間に合ったはずなのだ。
人影の動きが妙に「慣れ」ていたのと、茜自身この状況に混乱していたこともあり、発砲してしまった。
あの人影に味方がいたなら、茜はそれまで敵に回したことになる。
信頼できる人間は、ここにはもういなかった。
全てが、敵とみて間違いなかった。
（……早く、脱出しましょう）
足音を殺し、二階へ。
（……この銃）
階段を降りる途中、ガバメントを見て気付いた。
（……弾切れです）
気付いてよかった。
もしも知らずに戦闘に巻き込まれていたら、ここぞという時に大きなミスをするところだった。
弾を交換しようとし、ふと思いとどまる。
ある一計が、茜の中に浮かび上がった。

いささか、ギャンブルではあるが、試してみる価値はあった。
相手が乗ってくるかにかかってはいるが。
ガバメントの弾倉はそのままにし、サイレンサー銃に持ち替えた。
一階へ。
踊り場で。
その少女と出会った。
「兄さんの仇……見つけた」

**377　鬼と羅刹**

点灯する数字。
それは位置座標が同じ——つまり重なっている事を示す。017、020、043、061、091。なんと六つの数字が重なっていた。
少しだけずれた所に021、069。中央少し校庭寄り(昇降口か?)に079。
反対側の階段に移動する013。いや、043も反対側へ向かっている。
もちろん、この部屋には私……090しかいないはずだ。
それは残る五人、いや四人が上下の部屋に居るという事だ。
名雪……091が、誰かと一緒に居るかもしれない、という事だ。

そこでふと、往人と交わした会話を思い出す。
『それならば、おそらく番号は二十三、二十四、二十五のどれかじゃないかしら』
神尾がその辺りならば。冷や汗が背を伝う。
(柏木が……二十番前後のどれかである可能性は高い。とても高い)
校舎に突入する頃から、漠然と抱いていた予感は現実味を増していた。あの黒髪の鬼と、再びまみえるのだろうか。

017や020、021が姉妹ならば。私は幾人の鬼を、打倒しなければならないのだろうか。それでも私は、行かねばならない。
　名雪の、ために。

「うぐぅー、狭かったよぅ、怖かったよぅー！」
　両手にたい焼きを抱えたあゆちゃんが、ズリズリと引き出される。
「悪い悪い、今度は一緒に行くから、許してな」
　引き摺ることに苦労はしたが、あゆちゃんは無事だった。
　しきりと梓にうぐうぐ文句を言うが、たい焼き効果は覿面だったのだろう、それほど怒ってはいない。しっかりと梓に抱きつきながら話しかけている。
　そんなあゆちゃんの背中を、名雪ちゃんがポンポンと叩いた。
「ね、ね、ね、あゆ、あゆ、あゆちゃん！」
「あゆあゆじゃな……名雪さん⁉」
　きゃー、わーい、と両手放しで喜ぶ二人だが。あゆの知らぬ危険が、名雪にはある。
　わたしは梓と共に、緊張した面持ちで二人を見つめて――いや、名雪ちゃんを「監視」していた。

　ふと梓の視線が、僅かに揺らいだ。そして驚きと、理解の光が浮かんだ。
　楽しげに話すあゆちゃんを、ぐっと抱きしめて名雪ちゃんから引き離す。その意を汲んで、私は名雪ちゃんの手を引く。冷たい手を、ぐっと引く。
　そして私は、振り向いた。そこに立っているであろう彼女を、迎えるために。
「……こんばんわ、秋子さん」
「こんばんわ……千鶴さん」
　秋子さんが答える。彼女の強さに陰りは感じなかったが、今は酷くやつれて見えた。
　きっとあの時の、わたしもそうだったのだと思う。

（千鶴姉、このひと……）
梓が囁く。解っている。梓を殴り合いで圧倒できる人間など、そうそういない。
「秋子さん。名雪さんを……お返しします」
とても儚い、小さな冷たい手を放して、名雪ちゃんを送り出した。
「ありがとう。感謝するわ」
秋子さんは慈しむように名雪ちゃんに手を回して、柔らかな笑みを浮かべる。素敵な、本当に素敵な笑顔だった。
だけど。なぜ、この母子はこうなってしまったのだろう。
「でも、この娘は――」
わたしは梓と共にあゆちゃんの前に移動し肩を並べる。
「――渡せません」
梓が構える。
わたしと秋子さんは、そのまま。
戦いは。
いや、殺し合いは――もはや避けられないのだろうか？

## 378　ぼくの戦争　――希望の弓――

闇がすべてを支配する時が訪れる。微かな光と蠢く心臓の音が静寂に融けようとする時間が、草むらの中で仮眠をとっていた七瀬彰にも平等に訪れる。
少しだけ身体に寒気を覚えて、ゆっくりと七瀬彰は目を覚ました。既に日は完全に落ち、辺りは闇に包まれている。無謀を勇気にし、勇気を力にするには十分な闇だった。
目をこすり闇に目を慣らす。手元の水をごくごくと飲み干す。次第に闇に慣れていく目、少しずつ戻ってくる指先の感覚、きしむ骨、歪む筋肉、心臓の音がゆっくり高まる、そして心の中に不安が募る。
初音は、冬弥は、由綺は無事だろうか？　願わく

ば、自分が行動を終える前までに、誰も死なないでいてほしい。すべてをぶち壊しに出来る確率などゼロに等しいし、自分のちっぽけな勇気が野蛮な暴力の前に屈服させられる瞬間も、まるで映画のように明瞭に脳裏に浮かぶ。

それでも――自分が死ぬまでは殺し合いをするな。

願いながら彰は門番を眺める。サブマシンガンを小脇に欠伸をしている様子が見えた。建物の明かりに影となって映る守衛の姿が、彰の目にはやたら大きく見える。落ち着け。ゆっくり休んだ自分と違い、彼らは休む事が出来ない。隙をつけばサブマシンガンの一つや二つ克服できる。大きく見えるのは自分の心に不安があるからだ。

彰は草むらの中で一つ息を吸い、もう少し考えようと思う。臆病ではない、これは慎重なのだ。言い聞かせろ。自分はこの建物に、たった一発しか弾丸の無い命の拳銃の、その貴重な照準を定めて構わないのか。叔父や高槻がここにいるという確率は低いだろう、こんな危険な場所にいる可能性なんてミジンコよりも小さいのだ。

だがそれならば彼らは何処にいるというのだろう。歩き回って探したが、他にめぼしい建物などなかった。昔は学校だったと思われる古い建物はあったが、そこに兵士のような存在はまったく見受けられなかった。少なくともあの狡猾な高槻が、そんな危険な場所に身を置くわけがない。奴は必ず多数の護衛を携えている筈だ。

考えろ。少なくとも高槻は、奴は確かにこの島の中にいる筈だ。この島の中にいる筈なのだ。

爆弾を爆発させる仕事は、恐らく高槻の仕事なのだから。

長瀬一族はこの殺し合いの主宰である。爆弾の管理などという、言い方が悪いが瑣末な仕事を、長瀬一族自身がするわけもない筈だ。一方、自分たちに殺し合いをさせるのが目的である以上、爆弾をむや

みに使う事は許されない。だから言うまでもなく、高槻以外の、高槻以下の人間が爆弾を扱って良いはずがない。反乱・即・爆発の状況から考えるに、責任者は間違いなく高槻だ。
爆弾を操作するのは高槻の仕事だ。彰はそう結論付ける。慎重に考えろ。ここまでに間違いは無い筈だ。順番を踏んでしっかりと考えるのだ。小さく深呼吸。爪を噛みながら彰は指の震えを落ち着ける。唇まで震えていて上手く爪さえ噛めないことがもどかしい。
爆弾の操作は何処でも出来るわけではない。
口の中で言葉にして反芻する。
彰は昔バトルロワイアルという小説を読んだことがあるが、あのとき参加者を縛っていた爆弾は、『禁止エリア』に侵入することによって爆破するものだった。しかし自分たちが今行っている殺し合いゲームにはそういう縛りは無い。爆弾は飽くまで、反逆者を抑え付けるためだけに使われている。だから、爆弾一つ一つが、違う。
完全に個人特定の上で爆発をさせている、ということから、爆弾にはひとつひとつ識別コードがあることは間違いないと思う。その為には装置が必要だ。爆発させる爆弾のコードを特定し、遠隔操作で爆発させるための装置が、だ。遠隔操作ということは、電波か何かで操作しているのだ。ここまでは想像に難くない。
彰は空を見上げる。見上げ、自分の目の前に屹立する建物が、恐らくこの島に存在する建築物の中で、一番高いものであることを確信する。
爆弾を制御し、好きなときに爆発させるためには妨害されない位置からの電波の射出が必要なのだ。だから高槻はここにいなければならない。
彰は確信とともにもう一度空を見上げる。目が闇に慣れる。建物の屋上に、通信用のものとは別の——大きなパラボラアンテナのようなものを見つけ

て、彰は確信を自信に変えた。
あれは間違いなく、爆弾の制御装置だ。それならば、少なくとも高槻はここにいる筈だ。自分の推論が的を外していて、高槻がこの建物の中におらずとも——少なくとも、高槻や長瀬一族と交信をするための通信機はある。

彰はごくりと唾を飲む。指先の震えが惨めなほど彰の勇気を削っていく。死ぬかもしれない、という事態がようやく彰の胸の中に染み込んで行く。白かった勇気が不安という鮮血によって赤く染められていく。唇を噛む。不安が魂に震えを呼び起こす。
「——こんなところで、今更臆病風かよ」
わざと乱暴な口調で、彰は自嘲する。握り締めた拳が痛いほどだ。彰は自分の根性の無さに呆れてくる。先ほどまでの勇気が紛い物のように思えてくる。
「生きて帰れるかは判らない。たぶん死ぬだろうさ」
彰は口の中で、自分にしか聞こえないような大きさの言葉を呟く。目を閉じ、美咲さんの死を聞いた瞬間の憤りを思い出す。すると馬鹿げたことに悲しくて涙が出そうになる。泣いてどうするんだ違うだろう。美咲さんの死を聞いた瞬間の怒りを思い出せ。
——黒い憎悪を勇気に換えろ。
「これ以上、死なせない」
呟く。
——決意の言葉は不思議なものだと彰は思う。ただ呟くだけで、勇気という名の矢を与えてくれる。
これ以上、大切な人が死んでいくのは嫌なんだろう？　その為に、自分が行かなければならないんだ。美咲さんが死んだのは半ば自分のせいだ。自分がもう少し賢くて強かったら美咲さんを死なせずにすんだのかもしれない。歯を食いしばれ。指の震えを抑えろ。落ち着け。勇気を出せ。頭を使え。走れ。自分は絶対に無駄には死なないのだと言い聞かせろ。

自分の命を、高槻と叔父達を殺す弾丸に換えろ。その為に僕には勇気の矢が与えられたのだ。
——この手に、希望という名の弓を握り締めて。
突入を前に、彰は最後の深呼吸をする。生きて帰れないかもしれないから、これが最期の深呼吸になるのかも、と思うと背筋に寒気が走ったその時、一つのことに思い至る。
爆弾が電波によって操作されているのならば。
そして、爆弾というものの特質を考えるならば。
上手くいくかもしれない、と彰は思った。

**379　僕の罪**

ヒトの心は弱くて脆い。
ヒトの心は儚く切ない。
ヒトの心は、容易く壊れる——

天野美汐（五番）は、前を行く長瀬祐介（六十四番）の背中を見ながら、ぼんやりと考えた。
何故、この人は、こんなに平然としていられるのだろう。
人が何人も死んでいるのに。
見知らぬ人に限った話ではない。彼も、私も、見知った人……大切な人を、失っているのに。それに……
つい先程の出来事を思い出す。
目の前で、銃を暴発させて果てた、女の子。
そして、後を追うように息を引き取った、ふたりの男女。
私たちが声をかけなければ、また、違った結果になっていたのだろうか？
……分からない。もう答えは出てしまったから。
やり直すことは、出来ない。
結果として、私たちが、声をかけ、三人は、死ん

だ。
なのに、何故、この人は、こんなに平然としていられるのだろう。
この人は、これまでも自分の身を省みず、私を助けてくれた。
そんな人を疑うなんて、自分はどうかしているに違いない。
美汐は必死で自分にそう言い聞かせる。彼こそが平常で、私こそが異常なのだ。
しかし、美汐の目には、彼の整然とした態度はひどく不自然に映る。
先程は、あんなにも悔恨の念を浮かべていたのに。もしかしたら、すでに、この人も――
美汐の中で、何かが、音を立てて壊れた。
先を行っていた祐介は、暫しの後に、足を止め立ちすくむ美汐に気付き、ゆっくりと駆け寄った。
「どうしたの？」
美汐は思う。どうしたの？　どうしたの、って。どうかしているのは、私じゃなく……
「……祐介、さん」
ゆっくりと、美汐は、デリンジャーに手を伸ばす。
「うん？」
まさか美汐がそういった行動に出るとは思わない祐介は、不思議そうな顔で美汐を見つめるだけ。
だから、美汐も、思いのほか落ち着いて――
祐介に、その銃口を向けることが出来た。
少々特殊な能力が備わっているものの、長瀬祐介の精神面は紛れもなく一般人のそれである。
だから、先ほどの惨劇を目の当たりにして、ショックを受けていない筈はなかった。
だが、それでも祐介は、何でもなかったかのよう

に振舞った。
　死んだ人間はもう還って来ない。それは嫌というほど知っていた。
　後悔するなら、このゲームが終わってから、思う存分すればいい。
　それまでは、今こうして僕の後ろを歩く彼女を守ろうと、そう決心していたからだ。
　だから、彼女が不安にならないよう、後悔と、感情の渦を心の奥に押し込め、平然と、『いつも通りの自分』を演じてみせていた。
　だけど今彼女は、僕に、銃を向けている。
　それは彼女が、僕に信頼を寄せてくれない、何よりの証。

　祐介は気づかない。
　その演技こそが、美汐の信頼を、そして精神を奪う結果になったのだと。
　美汐は、一緒に悲しんでくれる、同じ位置にいる人を求めていたのだと。

　銃を構えたままの美汐。
　その銃口を見つめる祐介。
　時間だけが、過ぎていく。
　やがて美汐が、ゆっくりとその口を開く。
「死んで、ください」
と。

　その台詞を聞き、やっと祐介も思い至る。
　彼女はやっぱり、普通の人なんだ。
　だから、人が死んでも、平然と振舞ってみせる僕が、まるでおかしな人に見えるんだ。
（それも当然……か）
　僕がここで彼女に殺されれば、僕は瑠璃子さんの所に行くことが出来る。
　それは、ほんの少しだけ、魅力的な選択のように思えた。

少なくとも、今の僕は……天野さんを救えない。
これは、その罪に対する罰なのかもしれないと、そう感じた。
(——だけど)
彼女の手は、汚させたくなかった。
せめて、僕に対してだけは。
(——何を考えてるんだか)
自嘲気味の笑いが漏れ、それに美汐が反応する。
「何が可笑しいんですか!」
(何がって……自分かな)
美汐に背を向けて、歩き出す。
「何を——!」
聞こえない振りをして、祐介は歩を進める。
一メートル、二メートル。ゆっくりと、二人の距離は離れる。美汐の指は、未だトリガーにかかったまま。その銃口は、未だ祐介を向いたまま。
二十メートルほど離れ、祐介は美汐のほうに向き直る。
そしてその懐から、鈍い光を放つワイヤーを取り出し、言った。
「君が手を汚す必要なんて無い。僕が……自分で死ねば、それで解決する」

我ながらおかしな話だ、と祐介は思った。
解決する? 何が解決するというのだろうか。
僕は死に、僕の死を間近で見た彼女は、より深く心に傷を負う。
解決どころか、泥沼必至じゃあないか。
こんなのは間違っている。間違っていると分かっているのに、手は止まらない。
ゆっくりと、ワイヤーが、首に巻きつく。いや、自分で、間違いなく自分の意思で、巻きつけている。
(……参ったなあ。僕も無理に振舞ったツケが、ここに来て出たみたいだ)
やっぱり、僕も、どうにかなっているんだ。と、祐介は思った。だから、この手を止めたい、と思う

と同時に、早く楽になりたい、なんて、そんな事も考えてしまう。
(本当、どうかしてるんだ。僕も、彼女も、みんな——)

## 380　朝が来る

(私にはもう何もない、ってわけね)
静かな夜の公園を散歩するかのように、マナは暗い森の中をゆっくりと歩いていた。
(藤井さんにはもう逢えない。お姉ちゃんは私を……殺そうとした)
聖も、そしてついさっき、きよみまでもがマナを庇って、逝った。
マナは疲れていた。生きるとか死ぬとかそういう問題ではなく、ただ疲れていた。今はもう何も考えたくなかった。
何もかも忘れて眠ってしまいたかった。眠って、目が覚めたらすべて夢でした。……それを期待するのは間違っていることなのだろうか。
それでも、マナの足は惰性で前へ、前へと運ばれていた。既に、意志も目的も失われてしまった。
聖の妹、霧島佳乃。今となってはもう、崖の上で対峙した時の瞳のイメージしか残っていなかった。
(からっぽ……)
光のない、意志の力の感じられない瞳。空虚な瞳。あの時持っていた石をマナの頭に叩きつけるのに、何の躊躇もしないだろう——そう思わせる目だった。
(でも)
——今の私、きっとあの子と同じ目をしてる。
私も、もう何も考えていない。ただ、全部を投げ出して眠りたい。
(鏡、持ってなくてよかった)
やっぱり、こんな時でも自分のひどい顔は見たくないから。
この場でそんな発想が出てくるのが少し不思議で、

マナは無理にでも笑ってみようとしたが、上手くいかなかった。
その時、何かに足を引っかけ、危うく転びそうなところを慌てて踏みとどまる。
(なによ、もう……)
何気なく足元に目を落としたマナは、見た。
木々の隙間から差し込む月明かりに、その顔の部分だけが青白く浮き上がっていた。
「澤倉……先、輩」
転がっていた死体は、憧れていた先輩その人だった。
死体を座るように木にもたれかけ、服についた土埃を落とす。肌に飛び散った血を丁寧に拭い取ると、瞳を閉じ、両の手を胸の前で組ませた。穴を掘る道具はなかったが、これがマナにできる精一杯の弔いだった。
実際のところ、そこにあった死体が美咲のものだったから、というわけではない。他の誰の死体であっても同じことをしただろう。
それが、今ここに生きているマナ自身にとっての義務だと思ったから。
と、そこで、マナはハッと胸を突かれたように感じた。
(義務――生きている私の、義務)
マナの双肩には、二人の命が背負われている。
死んだ人間には決して背負うことのできないものをマナは背負っている。
自暴自棄になることは許されない。誰でもない、マナ自身がそれを許すことができないのだ。
(ホントどうかしてる……こんなんじゃ笑っちゃいますよね、澤倉先輩)
マナは近くの木を思い切り蹴りつけた。硬い音がして、葉が何枚か落ちてくる。
(いつつつつ……目ェ覚ましなさいよ、観月マナ)
足に伝わる痛みがマナの思考をクリアな状態に引き戻す。

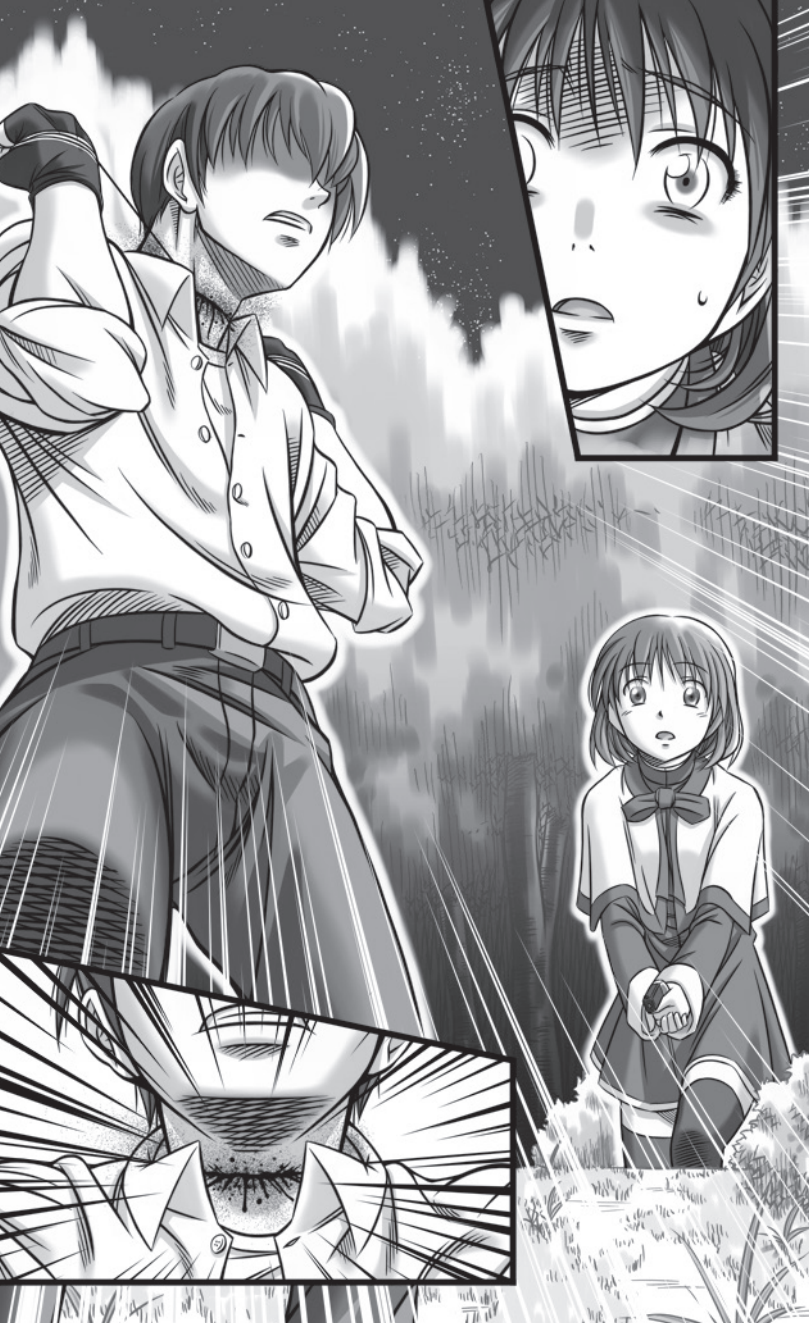
今やらなければならないこと。それはこの状況を脱却する方法を考えることだった。
（このゲームを終わらせるには、自分以外の全員を殺せばいい。……そんなのできるわけないし、させてもいけない。ならあの高槻とかいう男を叩く？
無理ね。警護の人間もたくさんいるだろうし、それに）
——私に人は殺せないから。
そして、マナにはどうしても引っかかることがあった。
（この馬鹿げたゲームをあの男は『金持ちの道楽』とか言ってたわね。ということは、よ）
その金持ちたちがこの島にいるとは考えにくい。危険だからだ。恐らくは島の外の別の場所に集まっているのではないだろうか。
となると、この島からそこまでに何らかの、この島の状況を伝える連絡手段があるはずだ。
（このゲームの存在意義はそこにあるのね。なら……目を奪う？）
その連絡手段を断ち切れば、その金持ちたちの目的は果たされなくなる。
当然高槻のところには何らかの連絡が行くだろう。それを聞いて、高槻が果たしてどうするか。自棄を起こして、全員の爆弾を爆発させるだろうか。多分、それはない。金持ちの道楽、と言ってもただ殺し合いを見ているだけではあるまい。参加者はギャンブルの対象にされていると見て間違いない。
この島に参加者を集めるのにも相当の金がかかっているだろう。ならば、高槻が一瞬で全員の命を奪うとは考えにくい。
それに、島の状況が向こうにわからない状態では、どれだけの人が死のうと何の意味もない。
なら、どうするか。それはわからないが、焦って何らかのアクションを起こすことはほぼ確実だろう。
（その時ね。……勝負が決まるのは）
この島の、自分以外の人間が全てゲームに乗って

いるとは思えない。絶対にこのゲームを終わらせようとしている人間が、いる。
——それなら、私はその人たちを助けられればいい。
管理者側の目を奪うこと。そのためにできることを考える。
（この島の状況を外に伝えるとして、あちこちに管理者側の人間を忍ばせておくか……カメラを設置するか）
だが、前者はちょっと考えにくい。武器を持った人間が大勢いる場所に、そのためだけにそんなリスクの大きいことはしないだろう。
すると要所要所に配置されたカメラの映像を何らかの方法でそこに送っていると考えるのが妥当だろう。
有線のはずはない。自分たちを観察しているカメラから伸びるコードを参加者が見て、切らないわけがないからだ。
（無線……多分海は越えられないわ。この島のどこかに、きっと中継用のアンテナがある）
そのアンテナを見つけないことにはどうしようもない。しかし、どこにあるのかは想像がついた。
（この島の全域をカバーするために、カメラは相当数必要なはず……それだけの映像を管理するには相応の機材がいるわ。となると、どこかに本部として使われてる場所がある。アンテナも高槻も……そこね）
恐らく、警備も厳重を極めるのだろう。しかし、ここでむざむざ殺されるのを待っているわけにもいかなかった。
——このゲームを、終わらせる。
強い意志が、マナの瞳に宿る。これ以上悲劇が繰り返されるのはもうたくさんだった。
（澤倉先輩、ありがとうございました。やっぱり私……先輩みたいになりたいです）
月光に照らし出されて、美咲の顔はひどく穏やか

なものに見えた。
眠っているかのように見える美咲の死体に深々と一礼すると、マナはまた深夜の森の中を歩き出した。
その足取りに、もう迷いはない。
そして——また、朝が来る。

## 381　彼の傷、彼女の傷。

自分はどうかしている。
彼女もどうかしている。
みんな、どうかしている。
だったら、もう、こんなところからは、早く消えてなくなりたいと思わないかい？
呆然とした天野美汐（五番）の表情。それを見て長瀬祐介（六十四番）は思う。
僕がこんな死に方を選んだことによって、彼女はどう変わってゆくだろうか。
少なくとも、いい方向には変わらないだろう。
それなのに、僕の手は、これ以上ないくらいしっかりとワイヤーを握り締めている。
彼女を救いたいと思う僕がいて。
だけど、もう楽になりたいとも思う僕もいて。
今強いのは、後者。
——それに、こういう、悲劇の主人公的な役割も、一生に一回くらいは、いいかな。
そんな事も、ほんの少しだけ、思う。
美汐には、その行動が理解できない。
何故なら、長瀬祐介は、すでに正常ではない筈だから。
何故なら、長瀬祐介は、私も殺そうとしている筈だから。
だから、美汐には、祐介のその行動が理解できな

い。
　分かるのは、祐介は自分を殺そうとする意思がないのではないか？　という疑念が自分の中に生まれたことのみ。
　だからといって、自分はどうすればいい？
　もしかしたら、これさえも演技かもしれない、だけど――
　その答えが出る前に、
　祐介は、その手に力を込めた。
　鮮血が迸り、ワイヤーが祐介の首にぎりぎりと食い込む。
　答えは出ない。出なかったが、本能的に、美汐は駆けた。
「長瀬さん！」
　その声に、祐介はワイヤーを握る手を緩め、顔を上げると、美汐の方を見、微かに笑い、
　そのまま、うつ伏せに倒れた。
「長瀬さん！　長瀬さん！」
　抱き起こし、身体を揺さぶる。
　見たところ、死に至るような深い傷ではない。だが、痕は残るかもしれない。
　その傷をつけたのは、直接では無いにせよ、紛れもなく、自分。
　祐介がうっ、小さく声を上げる。
「長瀬さん！」
「ごめんね……天野さん」
　と、呻く様に呟いた。声を出すのも苦痛なのだろう、顔が歪む。
「なんで……なんで長瀬さんが謝るんですか……」
「なんでって、そりゃあ……」
　僕が悪いから、と言おうとして、祐介はごほごほと咳き込む。吐き出された真っ赤な血が、美汐の制服に吸い込まれる。

（……手当てを……手当てをしなくちゃ……）
　自分の、そして少し悪いな、と思いつつも祐介のカバンの中を探る。何か応急処置出来るような物はないか、必死で探す。
　勿論、ただ単に支給品が入れられていただけのバッグに、そんな物が入っている筈も無く。
（どうしよう……）
　美汐は途方に暮れた。自分は、こうなってしまった原因だけ作って、後は何も出来ない。
　ただ、自責の念にかられ、涙を流すことしか、出来ない。

　ぱきり。

　音。
　反射的に、デリンジャーをその方向に向ける。
　その銃口の先には、呆然と立ち尽くす一人の少女――観月マナ（八十八番）が居た。

## 382　刃

「……あなたですか」
　踊り場から声をかける茜。
　一階には、前に会った少女。
　名前を、茜は知らなかった。
「死んで貰うわ。あの時、私を殺さなかったことを後悔するのね」
「……だから、勘違いです」
「黙りなさい。言い訳なんて見苦しいわよ」
　理奈は相当疲れてはいたものの、瞳だけは獲物を前にした獣のようにギラついていた。

　茜は内心溜息をついた。
（……今日は、私、甘すぎるみたいです）
「行くわよ」
　言うなり、理奈は消火器のホースを茜に向け、発

射した。
たちまち周囲は粉末で埋め尽くされ、視界は真っ白になった。
このまま出鱈目に銃を撃つべきか。
それとも、一旦下がるか。
茜はどちらも選ばなかった。
消火器から発射されるや否や階段を数段降り、手すりを飛び越え一階に着地した。
こちらの視界が封じられるということは、相手からも見えないはず。
そう判断し、一気に裏に回りこもうとしたのだ。
着地の衝撃で足が痛むが、大したことはない。
階段の方を見ると……そこに理奈はいなかった。

消火器を発射するやすぐに、理奈は右手にナイフを持ち、左脇に消火器を抱えた状態で階段を駆け上がった。
銃で撃たれる危険性は考えなかった。
もとより分の悪い勝負だ、このくらいのギャンブルは仕方がなかった。
死んだら死んだで、運がなかったのだ。
だが、そこに茜はいなかった。
「!?」
それを確認した瞬間、反射的に消火器を後ろに放り投げた。
すぐさま振り向き、階下を見る。
ガァァン!!
不意をつかれた茜が、消火器を避けていた。
「なんで当たらないのよっ！」
悪態をつきながら、ナイフを構え、階段を駆け降りた。

銃を構えた途端、上から消火器が飛んできた。
「……っ！」
すんでのところで、飛び退き、かわす。
理奈は既に、ナイフを持って階段を駆け降りてき

ている。
　理奈に向かい銃を構え、何度も発砲する。
　そのどれもが当たらなかった。
　考えてみれば、まともに向かってくる人間に向けて銃を撃ったことはあまりない。昨日初めて銃を持った人間が、動き、自分を狙う標的を簡単にしとめられるわけはなかった。
　それでも、近くに来ればそれだけ当たり易くもなる。何度目かの発砲で、ついに、理奈の左肩をとらえた。

　痛みが走る。そんなものが何だ。
　兄さんの味わった苦しみに比べたら――
　撃たれてもなお理奈は走り、間合いに入った途端にナイフを振るった。
　ギリギリ、かわされる。
　相手も流石に馬鹿ではない、壁側に避けてくれればよかったが、廊下側に移動されてしまった。が、懐に入り連続でナイフを振るえば、自分の有利には変わりない。
　反撃の隙を与えず、ただひたすら、ナイフを振り続ける。
　刃を撃つチャンスは一度。
　もし外せば、
(終わりね……)

(……何か狙っているんですか？)
　右へ左へ、反射だけでナイフを辛うじて避けている。こんな状態では、銃で狙えやしない。
　一度無理に撃とうとしたが、その瞬間に右腕を狙われていた。
　腕にわずかに切り傷ができている。
(……毒でも塗ってるわけじゃないようです。……もしそうだったら、この傷だけで致命傷ですから、退いているはずです)
　思考だけは、相変わらず冷静だった。

（……相手の狙いをかわせば、おそらく私の勝ちです。……かわせなければ、負けです）
必死にかわしながら、相手を観察する。
汗が浮かぶ、疲れも出てきた。
それでも冷静に相手を見る。
武器はナイフ一本、左手は動作に流されている。
だからといって、ナイフで隙を作るようには思えない。
左手で何かを狙っているような攻撃もしていない。
（……流れに任せて、チャンスを待っている？……隙ができるのを？　違う、もっと別の何か）
相手の武器はナイフだけ……ナイフ？
そういえば、何かで見たことがあった。
ナイフの中にも、確か――
次の瞬間、茜がわずかに、ほんの少し大きく後ろに下がった。
理奈の目が光った気がした。

ナイフを振り始めて数十秒。
その瞬間が始めてやってきた。
相手に悟られてはならなかった。
だから理奈はあえて自分から狙おうとせず、ただ偶然を待った。
流れに乗ったナイフが、茜の胸の正面を通り過ぎる瞬間を。
訪れるチャンスを見逃すはずはなかった。
（当たって‼）
ナイフのスイッチを、理奈は押した。
ダンッ！
茜が大きく後ろにのけぞって――
そのまま体勢を立て直した。
少し遅れて、刃が床を転がる音。寸前で、銃のグリップで飛んできた刃を弾いたのだ。
狙っても簡単にできることではない。
最後は結局、偶然だ。

運命の神様は自分に微笑んでくれた。
ダンッ。
発砲。
今度こそ、理奈をとらえた。
腹を押さえて、理奈はゆっくりと、その場に崩れた。

## 383　一つの別れと次の挑戦

ゆっくりと、理奈に歩み寄る。
茜の服の袖はボロボロで、汗も酷くかいていた。
有り体に言うなら、疲れていた。
「……死ぬかと思いました」
理奈を見下ろして、言った。
「あっそ、私、には……そうは見えなかったけど。
余裕の、表情……だった、じゃないの……」
「……気のせいです」
「そう……」
理奈はふぅと、大きな溜息を一つついた。
「悔しい、なぁ……兄さんの仇、とれなかった……。
このままほっといて、いい……わよ。兄さんも、楽、には……死ねてないんでしょう？」
「……はい。多分」
その言葉に、理奈は再び茜を睨み付けた。
「やっぱり、あなたが殺したんじゃない」
「……違います。……あなたのお兄さんは、私が見つけた時は既に死にかけてました。大切な人を守れなかったそうです。……あの人は私に『楽にしてくれ』って言いましたが、私は断りました。……大切な人を、約束を守り切れなかった罰です。……結局、見殺しにした形になってしまいましたけど」
今でも思い出せる。
あの男の人の表情を。
悔いを残して逝ったのだろう。
「本当？」
「……嘘はつきません」

「……何よ。私、バカみたいじゃない……」
気付けば、理奈の瞳から涙がこぼれ落ちていた。
一度流れてしまえば、止まらない。
「勝手に誤解して、罪のないあなたを殺そうとして。逆に返り打ちに遭って……馬鹿じゃない……」
後から後から、雫がこぼれ落ちる。
暗い廊下を、濡らしていた。
「本当はわかってたのよ、きっと。だけど、仕方ないじゃないの……。誰かを恨みでもしないと、こんな中で、生きていけないわよ。怖かったの。本当の事を知ったら、今の自分を支えてるものがなくなりそうで。怖かったのよぉ……」
理奈の言葉が、妙に引っ掛かる。
何故だろう。今何か、自分にとって大事なことを言われた気がする。
「でももう、関係ないわね。死ぬんだから。誤解であなたを襲って、悪かったわよ……」
理奈が話し掛けてきた。

だから茜は、ひとまず考えることを止めた。
「……苦しいなら、楽にすることもできます」
銃を構える。
「……ほおっといてって言ったでしょう。兄さんも、楽には死ねてないんだから……」
「……そうですか」
あくまで冷たく言って、銃を下ろした。
暫く無言が続く。
それを撃ち破ったのは、第三者の声。
「あなたが、店長さんを殺したの？」
廊下の奥を見る。
暗がりでよく見えないが、校舎に入って最初に、自分達を襲った少女。
牧部なつみだった。
「……そんなこと言われても」
店長さんとは誰のことか、わかるわけがない。
茜は困った声を上げげた。
「そこのあなた？　この女、血も涙もない、凶悪殺

人鬼よ？　ひょっとしたら……この女が犯人かも」
　理奈が呟く。
「……なんてこと言うんですか？」
　非難の眼差しを送る。
　理奈は笑って答えた。
「悔しいじゃないの。やっぱり、あなた嫌いよ。私からの、最後の……攻撃……」
　そのまま、目を閉じる。
　もう何も、喋らなかった。
「そう。じゃあ、殺しちゃっていいよね？　ココロ」
　予感は当たっていた。
　やはり、あそこで殺しておくべきだった。
（……今日は、やっぱり、甘すぎです）

**十三番　緒方理奈　死亡**
**【残り44人】**

## 384　The decided future

「散々やな……」
　痛む腕を押さえて、智子はそう呟いた。
「そうですねぇ……」
　同じように、疲れた調子でマルチも同意の念を示した。
「まさかガス欠するとは思ってへんかったからなあ……」
　海岸線を離れて、一時間もしたあたりのことだっただろうか……。
　プスン、プスン。
「な、なんやこのジープ。突然変な音出し始めたで？」
「ホ、ホントですね」
　いきなりの車の変調に、二人とも驚きを隠せない。

「な、なんなんやろ……。ジープって変なところ走ってもええように丈夫に出来てるんや無かったの」
特に軍事関係や自動車に興味があったわけではないが、それでも一般常識としてそれくらいのことは智子も知っていた。
「は、はわわわわわわわわわ〜〜。ど、どうしましょう〜〜!?」
マルチは慌ててばかりでぜんぜん頼りにならない。
——分かりきっていたことではあったが。
「だぁあもうっ、うろたえんなや〜〜！」
つっても、私も免許持っとらんけどな……。
誰にも聞こえないように、智子は心の中で呟いた。
「ああ、智子さん前〜！」
「へ、……のわっ!?」
目の前に森林が、そして大きな木が迫ってくる！
「ぐっっ……。いややぁ〜〜〜〜!!」
智子は思いっきりハンドルを切った。

ギギギギギギギイィィィィィィィィッッッ!!
ズザザザザザザザザザザザザンッッ!!

ジープは思い切り横滑り——かっこよく言えばドリフトとでも呼べるのだろうか——し、森林に横付けするような形で止まった。
「ぐあ……。死ぬかと思たわ……」
「ホントですね、私も死ぬかと……」
あんたは死ぬんちゃうやろ、と智子は心の中で突っ込みを入れた。
「あかんな、もうこれは走られへんやろ」
ジープを降りて、車の周辺のメンテナンスを見よう見まねでやっていた智子は、あきらめたようにそう言った。
「全く……ガス欠なんてしょぼいわ……」
はぁ、と嘆息した。
「ふむふむ……ここがこうなって……でこの音がしてそうなると……」

マルチはなにやらぶつぶつと独り言を言っているようだが……。
「……分かりました！　智子さーん！」
マルチは喜び勇んで智子の名を呼んだ。
「ん、どうしたんやマルチ？」
さっきからなにやら頭の中で調べものをしていたようで、智子もそれには気付いていた。
「えっとですね、空気が抜けるような音がしてエンジンが空回りし、且つ車の速度が遅くなっていった場合、その車はガス欠と呼ばれる症状にかかっている可能性が高いそうです！」
「……そ、そか。よく分かったな」
そんなこともう分かっとんねん……。
という突っ込みをマルチに入れたかった智子ではあるが、あまりにも嬉しそうに話すマルチを見て気の毒に思ったのか、そのセリフを口の中に無理やり押しとどめた。
「一般にこの症状を改善するためには、車にガソリンを補給してやればいいそうです！」
「どこにあんねん」
だが流石の智子も、二度目のボケに対するツッコミを押しとどめられるほど人間が出来ていなかった。
……無論のこと、ガソリンがそのあたりに落ちているわけも無く。
ジープを移動させることが出来ないのだから、当然ガソリンの方を運んでくることになる。
しかし腕が傷付いた智子と、そもそもが非力なマルチではそんなことが出来るわけが無かった。
「仕方あらへんな……。こっからは歩きや、歩き」
智子はマルチを促した。
「大丈夫です。私、歩くの好きなんですよ～」
マルチは楽しそうにそう答えた。
さよか、智子はそう答えた。
そして思った。
こんなしんどい状況ではあっても、楽しく歩けるならそれに越したことは無いな。それにそんなマル

チの側にいれば、自分も希望を失うことは無いだろう、と。
そんな、見方によっては儚く思える期待があった。
晴香ぁ、私はまだ生きてるでぇ。
心の中で、数時間前に別れた戦友に思いを馳せる……。
「じゃ、行くか……。折角、森が目の前にあるのも何かの縁やし、ここは森に入って見よか」
「ハイ！　分かりました」
いつも返事は元気なマルチを見て、智子はふっ、と微笑んだ。

運命の輪が巡る。
其は数奇な迷路。
彼女は知らない。
自らの行く末を。
自らの繋ぐ絆を。
自らの運ぶ縁を。

――かくして、一つの死闘が始まる。

## 385　そして一つの決断～弥生～

弥生は迷っていた。
由綺の姿をこの目に入れたときは、ただ単純に嬉しかった。もう二度と離しはしないと思った。すぐに、由綺の心が壊れてしまっているということに気がついても、その心に一片の変化もなかった。普段の優しい由綺からは考えられないような言葉にも、何を言うでもなく黙って従った。そして今、弥生は由綺と共に、マナを、罪もない人間を殺す為だけに歩みを進めている。
由綺と一緒に行動を共にするという事が何よりも大切な事であったが、しかしマナを殺すという人間として一番醜悪な姿を、例え心が壊れてしまったといえども由綺には見せたくはなかった。ただ、心が壊れてしまった由綺を、このまま一人にしておく訳

にはいかなかった。
「藤井さんがいてくれたら……」
　ほんの少し前、そのマナを連れて逃走した冬弥の顔が頭に浮かぶ。冬弥さえいてくれたら、弥生は由綺を冬弥に任せて一人でマナを追ったであろう。あくまでも汚れるのは自分一人で充分だと、由綺には綺麗なままでいて欲しいと誰よりも願っていたから。
　しかしそれは、ないものねだりという物であった。だが弥生の希望はすぐに実現することになる。
　冬弥と再び合流するために二人が走っていった方に歩みを進める由綺と弥生。自分の弱さのせいでマナを繋ぎ止めておく事が出来ず、今まで由綺達がいた所へ戻ろうとする冬弥。この三人が再会することは必然であった。

「あー、冬弥君だ」
　これから人を殺しに行く人間とは思えない程の明るい声で、由綺は冬弥の名を呼んだ。弥生は冬弥の姿を確認すると、いつも見せるように軽く頭を下げ、黙って冬弥の元へ歩み寄ると、おもむろにカバンの中から44マグナムを取り出して手渡した。
「これで由綺さんの事を守ってあげてください」
「……これは」
　事態を把握し切れない冬弥は、突然人を殺すためだけの武器を手渡され困惑する。
「私にはまだやらなければならない事がありますので、少しの間ここを離れます。その間由綺さんのことをよろしくお願いいたします」
　困惑する冬弥の事など目に入らないかのように、いつもと全く変わらぬ口調で、一方的に、そしてたんたんと喋る弥生。要点だけを端的に言った中で、あえてこれからマナを殺しに行くということだけは伏せた。
　この何でもない一連の行動の中、弥生は頭の中でさまざまな考えを廻らせていた。本来ならばこの再会を心から喜び、すぐにでも由綺を冬弥に任せてし

まい、一人で由綺の希望を叶えに行きたい所であったが、同時に一度はマナと共に由綺の元から離れ、再び戻ってきた今の冬弥が信用できるのかという不安が思い浮かぶ。しかし今の弥生には、選択の余地はなかった。

最終的に三人でこの島を出る為に、弥生は由綺のマネージャーではなく、もう一つの顔である主催者側のジョーカーとして、あと七人の罪のない人を殺さなければならなかったのだ。

「九人の罪のない人達を殺す事」

「その行動を由綺には絶対に見せてはならないという事」

主催者に、二人の安全と引き替えにジョーカーにならないかと誘われ、その誘いを承諾した時、弥生はこの二つの決まりを自分に課した。そしてこの二つの条件を同時に満たす為には、自分が行動を起こしている間、由綺を信頼出来る誰かに預けることが絶対条件であった。

この島に連れて来られた人達の中で、安心して由綺を預けることの出来る人物を弥生は二人しか知らなかった。そしてその内の一人である緒方英二が既にこの世を去ってしまった今、弥生が由綺を預けることが出来る相手というのは、藤井冬弥以外には存在していなかった。

「由綺さんは、藤井さんとさっきいた所で休んでいてください。後は私がやりますから」

冬弥に聞こえないくらいの小さな声で囁いた。

「うん。わかった。それじゃあ私、冬弥君と一緒に待っているから。気をつけてね」

弥生の小さな声とは対照的に、大きな声で由綺は返事をする。これから起こりうる残酷な光景からは想像もつかないような濁みのない由綺の表情に、自分以外誰にもわからないくらい微かに表情を曇らせ、すぐに顔を背けた。

途中冬弥の目の前を通り過ぎる時に、冬弥に向かってさっきしたのと同じような小さなお辞儀をした

だけで、それ以降後ろを振り向くことはなかった。振り向きたくても振り向くことは出来なかった。その時既に弥生の顔は、芸能人森川由綺のマネージャーの顔から、主催者の用意したジョーカー――罪もない人々を次々に死に至らしめる殺人者――としての顔に変化していた。
「汚れるのは私だけでいい……」
　弥生は誰に言うでもなく、自分に言い聞かせるように呟いた。

## 386　そして一つの決断～白く綴られる想い～

「弥生さん、行っちゃったね」
「そうだね」
「でもいいの。私には冬弥君がいればそれだけで良いから。冬弥君はもうどこにも行ったりしないでよね」
　弥生が由綺のために行動している事など記憶の中からすっかり削げ落ちてしまったかのように、冬弥が戻ってきたことに関してだけ、本当に嬉しそう由綺は答えた。もう今の由綺には冬弥しか目に入っていないようであった。
　再会して暫くは、一方的に二人の明るい未来について話し続ける由綺であったが、一番大切な人が戻ってきてくれたことに安心したのか、大きな欠伸をし眠たそうに目をこする。
「由綺、眠いんじゃないのか」
　由綺の欠伸を見た冬弥は、心配そうに由綺の顔を覗き込んだ。
「うんちょっと眠いけど、大丈夫だよ」
　由綺は一点の曇りもない笑顔を冬弥に向けた。
「まだ先は長いから、今のうちに寝ておけよ。由綺が寝ている間は、俺が見張ってるから」
「そう？　冬弥君こそ寝た方がいいよ。なんだか疲れてるみたいだし」
「いや、俺は由綺の後に寝るよ。代わりばんこで寝

よう」
「それじゃ、お言葉に甘えて、先に寝るね。本当は凄く眠たかったの」
そう言って笑うと由綺は冬弥の肩にもたれかかり目を閉じる。一瞬の静寂の後に、冬弥の耳に規則正しい由綺の寝息が聞こえてきた。
由綺にとって、ここに来て初めての睡眠であった。

どうしてこんな風になったんだろう。
マナちゃんが言ってたな。俺が由綺のことを諦めてしまったと。俺なりに由綺のためを思ってきたつもりだった。俺にとって由綺が隣で笑いかけてくれる事だけが全てだった。その笑顔を守る為にならば、例え自分が犠牲になったとしても構わないとさえ思っていた。
俺が罪もない人を殺してしまったのは、全て由綺の笑顔を守るため、そして由綺との二人の世界を守るためだった。例え由綺の世界が壊れてしまっていたとしても、それでも俺は由綺の世界を守りたかった。けれどそれは間違っていたのかもしれない。本当に大切であった事は、壊れてしまった由綺の世界を守ると言う事ではなく、壊れてしまった世界を一緒に直す事だったのではないのだろうか。多分マナちゃんは俺にそうしてくれる事を願っていたんだと思う。
けれどマナちゃんの願いを叶えるには全てが遅すぎた。はるか、美咲さん、緒方さん。この三人が死んだことを放送で知った時、絶望した。それと同じ様に、俺達が殺してしまったことで、俺と同じような気持ちを持った人を作り出してしまった。その罪は一生かかっても償いきれるわけがない。
日常を乖離してしまった由綺の世界を元に戻す事は、今の――由綺と同じ世界を見つめてゆくために、自分の世界をも壊してしまった――冬弥には出来る

はずもなかった。
「あの頃に戻りたいな。由綺とはすれ違ってばかりでなかなか逢えなくて、俺は勝手に緒方さんに嫉妬したりしていたけれど、それでも由綺のことを愛することが出来た。本当に何のとりえもない平凡な俺だったけど、一生由綺のことを守っていくと心に誓ったあの日々に戻りたいな」
あの頃の日常の断片を思い浮かべ、誰に向かうでもなく、虚空に語り掛ける。
「これが夢だったらどんなに良かったことか。だけどこれは夢なんかじゃない。はるかや美咲さんや緒方さんはもうこの世からいなくなってしまった。そして俺達は、何の罪もない人を殺めてしまった。悪夢のような話だけどこれが現実なんだ」
隣で穏やかに眠る由綺の体に腕を回す。深呼吸を一つつき、はるか彼方の青い空を見上げる。
そして冬弥は、一つの決断を下す。
由綺の体に回していた腕を放すと、その体をゆっくりとまるで壊れ物でも扱うかのように丁寧に横に寝かせ、その穏やかな顔を覗き込む。何の邪悪さも感じられないその寝顔を見ると、今起こっている現実の悪夢を忘れ去ることが出来るようであった。そしてそれと同時に、ほんの数日前まであった由綺との何気ない時間、今となっては何にも変えがたい幸せな時間が思い浮かんでくる。
二人の空間が静止したままどれくらいの時間が経ったであろうか。実際にはたいして長い時間ではなかったけれど、冬弥にとっては永遠に等しい時間のように感じられた。
由綺の寝顔を見て何度も挫けかけたが、冬弥は決意を固めた。そして静止していた空気がまた動き出す。その時、ふと冬弥の頭の中に今までの思い出が鮮明に蘇った。
冬弥は目を閉じ、由綺の何一つ穢れのない寝顔と、今までの幸せだった思い出の残像を振り払うように、何度も頭を振った。

冬弥の両手が由綺の白く細い首に伸びる。由綺の首に手をかけ、力をこめると、そのまま由綺の体に馬乗りになった。
「弥生さん、ごめん。俺、約束守れない」
冬弥の両頬には一筋の涙が伝っていた。

由綺は夢を見ていた。あれはもうだいぶ昔のこと。由綺も冬弥も、そしてはるかも彰もみんな制服を着ていた。
初めて冬弥と顔を合わせたあのころ。
初めて冬弥と話をしたあのころ。
初めて冬弥のことを意識し始めたあのころ。
自分の冬弥に対する気持ちに気が付いたあのころ。
冬弥から告白されて付き合い始めたあのころ。
まだ手を繋ぐことさえも気恥ずかしかったあのころ。
はるかにからかわれ、二人して顔をまっ赤にして俯いていたあのころ。
毎日他愛もない話をするという事が、楽しかったあのころ。
二人きりでいるという事だけで、どきどきしていたあのころ。
逢いたいと思うとき、いつでも顔を見ることの出来たあのころ。
逢いたいときに逢うことの出来ない辛さなんて考えたこともなかったあのころ。
世界のすべてが私達に味方していると、本気で信じていたあのころ。

大学生になって、幼い頃からの夢だった芸能界に入った。冬弥との関係は初々しかった高校生の頃よりも、何歩も先へ進むことが出来たが、あのころのように自由に逢うことはもう叶わず、由綺にとって冬弥との関係と言うことだけで考えると、辛いことの方が多かった。
本来、あまり強くなかった由綺ではあったが、自

分の好きで始めた仕事に関して弱音を吐く事はなかった。しかし由綺はいつも思っていた。あのころに戻りたいと。けれどそれは叶わぬ夢であった。そのことが分かっていたからこそ、由綺は自分の夢の中でだけあのころの夢を見続け、自分の夢の中でだけ冬弥を独り占めしていた。

しかし自分や冬弥が殺されてしまうかもしれないと言う、あまりにも過酷な現実に直視したとき、その過酷な現実と、自分の幸せな夢とが乖離し、由綺の世界は音をたてて崩れていってしまった。

由綺は息苦しさから目が覚めた。目を開くと、眼前に冬弥の顔が映った。よく見ると、目を瞑り、両頬に涙が伝っているのがわかった。だが由綺は今、目の前で自分の身に何が起こっているのかを認識出来ないでいた。

由綺は視線を少し下に落とす。冬弥の両腕が自分の首にかかっているのが見えた。そこで由綺はやっと自分の身に起きている事のすべて——冬弥が自分を殺そうとしている現実——を理解した。

「やめて」

その叫びは声にならず、由綺の意識は薄れてゆく。

「ごめん、由綺。俺もすぐそっちに行くからな。ごめんな。ごめんな」

薄れゆく意識の中で、由綺は冬弥の最後の声を聞いた。目の前にいる由綺にではなく、幸せだった頃の由綺に対する冬弥の言葉に、由綺は壊れていた頃のすべて、——自分が人を殺めてしまった事、冬弥が自分の代わりに人を殺めてしまった事——の記憶を思い出した。

「ここに来てまで冬弥君には、迷惑をかけっぱなしだったね」

由綺は抵抗する事を止めた。上にのしかかっている冬弥の目から涙が零れ落ち、由綺の顔を濡らす。

「冬弥君。ごめんね」

由綺は声に出して言ったつもりであった。だがその言葉は声にならなかった。

「もう一度、あのころに戻れたらいいのにね」
真っ白になってゆく由綺の頭の中に、制服姿の自分と冬弥の姿が目に浮かぶ。そしてそのまま意識は途切れた。

どうしてこんな風になったんだろう。
息を引き取った由綺を見て、何度となくその言葉が頭をよぎる。
由綺のライバルでもある、綺麗だけど可愛い女の子の顔。由綺のプロデューサーで、厳しさと強さを併せ持った大人の男の顔。普通の人とは違った形の愛で、由綺を包み込んでくれたマネージャーの顔。ちょっと頼りないけど、いつも一緒にいてくれた親友の顔。男女という枠を超越した、一風変わった親友だった女の子の顔。誰よりも優しく、誰からも慕われていた先輩の顔。子供だと思っていたけれど、既に自分より強い心を持っていた女の子の顔。冬弥の頭の中に次々に浮かんでは、消えていった。

「由綺、俺も今からおまえの所に行くよ」
冬弥の中に思い描かれる世界。由綺と一緒に過ごした場所。あたり一面の銀世界。そしてそれ以上に輝く、あの頃の屈託のない由綺の笑顔が浮かび、そしてしゃぼん玉のように壊れて消えた。
その直後、あたりに一発の銃声がこだました。

**七十六番　藤井冬弥　死亡**
**九十七番　森川由綺　死亡**
**【残り42人】**

## 387　Sivis pacem parabellum

辺りは闇一色。夜の帳は完全に降りている。この島の中で自ら火や明かりを灯すことは自殺行為である。
真っ暗ななか、蝉丸は月の光を求めて空を見上げるが、月は雲に覆われていてあの太陽とは異なるや

冬弥君、ごめんね・・・
あの頃に
もう一度・・・
戻れたらいいのにね・・・

わらかな光を降り注いではくれない。ただ暗い闇が蝉丸達のこれからを象徴するかのように広がっている。
　ふと不安が心を過る。自分たちの未来がこれからどうなっていくのか。それが今の空のように真っ暗で漠然としていて落ち着かない。
　だがやらなければならない。きよみから受け継いだ白く澄んだ遺志を貫くためにも。
　守ることのできなかったきよみの顔を思い浮かべてからぎゅっと目をつぶる。そして軽く頭を振り、上に向けていた顔を水平に戻し、空に見ることのできなかった月の代わりを見やる。
　彼女は視線に気付いたのか蝉丸の方を振り返る。
「(･∀･)蝉丸？」
　月代は心配そうに（お面で表情は見えないのだが）蝉丸を覗う。その姿が本来仙命樹の力を遺憾無く発揮させてくれる夜の光を蝉丸に彷彿させた。その仙命樹が今は役に立たない。この狂った島の中、蝉丸自身の力だけでこの月代を守っていかなければならない。
「どうしたの？」と奇妙なお面が、いや月代が尋ねてくる。
「なんでもない。飯にするか？」
「(･∀･)うん、そうだね」
　月代は肯定の返事をするとすぐにがさごそと食料を取り出し始める。
「(･∀･)食べ物がもう残り少なくなっちゃったね」
「ああ、明日からは食料の調達も考えないとな」
「(･∀･)何でこんなに少ないのかな？　もっといっぱい入れてくれてたらいいのに」
　ぶつくさと文句を言う月代。きっと口を尖らせているのだろうがやはり奇妙なお面で見えない。
「それも主催者側の策略の一部だな。人間は飢えと渇きにはなかなか耐えられるものではない。大方食料や水の奪い合いでもさせようという魂胆……」
　何気ない会話を交わしていると、蝉丸は突然黙り

込んだ。

「(・∀・)どうしたの？」

「しっ、静かに……」

　人差し指を唇に垂直に当ててそう言うと、蝉丸は周りに神経を張りめぐらせる。

「そこにいる奴、ゆっくりと出てこい。こちらは危害を加えるつもりは無い。ただし、おまえがそうではないと言うのなら、こちらもその限りではないがな」

　そう言ってから蝉丸は刀を構えた。

　間も無くして言われたようにゆっくりと物陰から一人の男が出て来た。両の手は顔の横で広げている。別に人類は十進法を採用しましたと訴えかけているわけではない。

「すいません。あなた達がどんな人達なのかわからなかったので姿を隠していました。無論、僕もあなた達に危害を加えるつもりはありません」

　そう言って出て来たのは少年だった。

「何もなければ、このまま通り過ぎようと思ったんですが、まさか見つかってしまうとは思ってもいなかったですよ」

「気配の消し方はなかなかだったが、まだ甘いな」

「(・∀・)蝉丸は元軍人さんなんだよ」

　と快活に言ってくる月代の方を少年は一瞥してぴたりと止まる。

「(・∀・)ああ、しまった！　まだこんなのつけたままだよ！」

　月代はすかさず蝉丸の後ろに隠れ、うろたえている。

「な、なんなんですか？　それは？」

「よくわからないがなにやっても取れんのだ」

「不憫ですね……」

「(・∀・)ううっ……」

　月代はお面の上から手を当てて泣くようにしていじけていた。

　いじけている月代をよそに軽く自己紹介を済ませ

てから、三人は地面に腰を下ろした。
「ところで、君は何処に行こうとしてたんだ？　もう、辺りは真っ暗だぞ」
「……このくだらないゲームを企てた首謀者である高槻のところです」
　ほんの一瞬だが間をあけてから少年は答える。
「そうか、なら目的は一緒だな。まさか仲間になりに行くってわけではないんだろ？」
「ええ」
　少年はくすりと笑ってから、すぐに険しい表情になる。
「これまでに多くの人の死を見てきました。もう、茶番劇は十分です」
「そう……だな……」
　蝉丸がそう答えるとしんっと静まり返る。辺りの闇が全ての音を遮るかのように蝉丸と少年にまとわりつく。
「(･∀･)じゃあ、一緒に行こうよ！　私たち、秘密基地見つけたんだよ！」
　闇夜にさっと月明かりが差すように沈黙を破ったのは月代であった。
「秘密……基地？」
　怪訝そうに少年は答える。
「ああ、地中からなにやら機械音らしきものが聞こえた場所があったんだ。怪しいと思わないか？」
「確かに……あの用心深い高槻が僕らと同じ島内にいるとは考えにくい。だからと言って、飛行機や船で逃げ出しているなら誰かが気付いてもおかしくない。その点地下もしくは海中とかにいるのならば、極めて安全に僕らの様子が把握できる」
「うむ。だから、中に入ってみようと思っているんだが、この月代と二人では心細い」
　後ろに隠れている月代を少しだけ振り返り、またすぐに少年へと目を戻す。
「それで、誰か同じ目的を持った人を探し同行してもらおうと考えていたんだ。どうかな？　一緒に行

ってくれないか？」
「(・∀・)いっしょにいこう！」
月代が蝉丸の言葉を援護する。
「そうですね……」
少年は少し考えるようなそぶりを見せる。
「わかりました。一緒にその場所に行ってみましょう。でも、僕が加わったところでまだ人数は少ないと思います。蝉丸さん、あなたの支給武器は何でしたか？」
「この『ぱそこん』と言うものが支給武器だ。あとこの途中で拾った日本刀がある」
「そちらのお面、もとい月代さん、あなたの方は？」
「……ぉ……ん」
ぼそぼそと蝉丸の背中越しに月代が呟く。
「え？　なんですか？」
「だから、このお面だよ……」
蝉丸の影からひょっこりと顔を出しながらお面を指差しながら答えると、少年は絶句し、その後に
「不憫ですね……」と、ポツリと呟いた。
月代はまたショックを受け、すぐにそのまま蝉丸の後ろに隠れていじけ始めた。
「どうやら武器には当たり外れがあるらしいな」
「みたいですね」
「で、君の武器は？」
「これです」
すっと一冊の本をとりだして、蝉丸の眼前に掲げる。
「(・∀・)何それ？　辞書？　角で殴ったら痛そうだね？」
さっきまでいじけていた月代が身を乗り出してくる。
「偽典です」
少年が微笑を浮かべながらそう答えた。
「はずれ……か？」
「そうですね、他の人がもらっても、きっと喜ばないでしょうね」
「(・∀・)君は嬉しいの？」

「ええ、僕の友の形見とでも言うべきものですから……」

その本を見つめる少年の表情はどこかしら悲しげであった。

「そうか……」

蝉丸が重く沈んだ声でそう答え、そしてまた辺りがしんっと静まり返った。

「(･∀･)で、どうするの？　仲間を見つけに行くの？　それとも三人で攻め込むの？」

すると先ほどと同じように、また月代がその重い沈黙を破壊した。

「そうでしたね。話が逸れてしまいましたね」

「そうだな……」

蝉丸の声も元の調子を取り戻す。

「で、その基地のことですが、あなた達は引き続き仲間を探してはもらえませんか？　武器に関してもまだ不安な要素がありますから」

「君はどうする気なんだ？」

少年はちょっと困った表情をして、

「場所を教えてください。偵察に行こうと思います」

「性急すぎやしないか？　もう、陽は落ちたぞ」

「忍び込むならやっぱり深夜でしょ？」

確かに少年の言うことは一理あった。隠密行動は基本的に夜に行うものである。

「しかし、俺たちが仲間を見つけて戻ってくるまでにはかなり時間がかかるぞ」

「その分、中の状況をばっちり把握しておきますよ。もしかしたら何でもないとこなのかもしれませんし。斥候役ということで」

「(･∀･)無茶しないでね」

そのやり取りをみていた月代が(･∀･)な顔で見つめている。

「大丈夫ですよ。あ、そうだ！　これを渡しておきます」

そう言って、かばんの中から一丁の銃を取り出し、

蝉丸に渡す。
「ベレッタＭ92Ｆか……こんなものまで持っていたとはな」
「(・∀・)蝉丸よく知っているね？」
「ん？　ああ、こういったものの知識は君の叔父のところの書物を読ませてもらった」
「あの、蝉丸さんは元軍人ですよね？　それなら銃の種類なんて知っていてもおかしくないのでは？」
　少年が不思議そうに尋ねる。
「うーん、その説明をすると長くなってしまうなぁ」
「(・∀・)どう説明したらいいかな？」
　蝉丸と月代がそろって頭を捻る。その動作がどことなく滑稽だ。
「あ、いえいえ別に深く追求するつもりはないですよ。誰にだって聞かれたくないことの一つや二つはありますから」
　悩む二人を前にあわてて弁解する。そして一人ごちるように「そう、誰にだって……ね」と呟く。
「そうか、それでは話を戻すか。ところでこの銃、君の支給武器ではないはずだが？」
　仕切り直すかのように蝉丸は真剣な顔になり、銃を見つめている。
「ええ、そうです。その銃は途中で出会った人が僕に渡してくれたものです。彼もきっと今ごろ彼なりの戦いをしているはずです。それでですね、その銃をあなた達に預けてしまえば、僕は無茶のしようが無くなる。そうは思いませんか？　それにあなた達を守る武器になる」
　少年はくすりと笑ってみせた。
「確かにそうかも知れんが、君のほうが危険なんだぞ？」
「いえ、危険なのはあなた達も一緒ですよ。もし、仲間にしようと話しかけた人が殺人鬼になってしまっていたら？　……蝉丸さん。絶対に確実に完璧に十全に月代さんを守れますか？」

「……」
蝉丸は何もいえなかった。必ず守ると誓った月代だが今の装備のままでは心もとないのは確かであった。この先どんな敵に遭遇するかはわからない。
「大丈夫ですよ。僕は少しでも危険を感じたら逃げればいいだけです。それに僕は本来無理なことはしない畑の住人ですから」
少年はニコニコ微笑んでいた。
「しかし、腹の中の爆弾のこともある」
その言葉を吐く蝉丸の表情には悲痛なものがあった。
「それも多分問題無いです。主催者は僕たちに死んでほしいんじゃなくて、殺し合いをして欲しいんでしょうからね」
あっけらかんとして言う少年を見ていると心配している自分が馬鹿らしく思えてきた蝉丸はコクリと頷いてから、「本当に無茶をするんじゃないぞ！」と念を押す。
「(･∀･)絶対だよ！」
月代も蝉丸の後から念を押す。
「わかってますって、心配性だなぁ。蝉丸さん達の感じている感情は精神的疾患の一種ですよ。僕は治し方を知りませんから僕にはどうしようもないです」
そう言って、くすくすと笑いながら少年は立ち上がった。
「あ、蝉丸さん」
「なんだ？」
「蝉丸さんはその銃に使われている弾丸の名前わかりますか？」
「ああ、知っている。９㎜×19㎜の通称パラベラム弾だろ？」
「流石です。勉強熱心なんですね。ではそのパラベラム弾の由来を知っていますか？」
「ああ」
『Sivis pacem parabellum』

二人は同時にその言葉を口にする。
「僕がこれからすることは、そういうことですよ」
「そうだな、我等軍人にとっての存在理念みたいなものだ」
そして二人は握手を交わす。
「月代さん。蝉丸さんを支えてあげてくださいね」
「(･∀･)う、うん！」
蝉丸の後ろから出てきて元気よく返事をする月代を見て、少年は表情を緩める。
「それでは、必ずまた会いましょう」
少年は手を振り、その場を後にした。
「(･∀･)ねぇ蝉丸、さっきのどういう意味？」
月代だけが先ほどのやり取りを理解しておらず、蚊帳の外で不思議な顔（お面が不思議というわけではない）をしていた。
「『平和を欲するなら戦いに備えよ』という意味だ」
蝉丸はすでに見えなくなった少年の背中をいつまでも見ていた。
暗い森の中を一人歩く少年。
握り締めるその手には偽典。
空を見上げればそこには月。
そして口から漏れ出る言葉。
「汚れる手は少ないほうがいいです。血濡られた手は誰かを抱きしめるのにはふさわしくないですから」
いつからか彼の行く先を雲の隙間から顔を出した月の光が照らし出していた。

## 388　真空

「……そう」
伏目がちに、ささやかに。
渡せませんか、と呟いて。
秋子さんは、わたし達の意志を聞き流す。

ああ。このひとは、自分の運命を切り開く事を放棄してしまったのだ、と。
その時、理解した。

……こころの、隙間から

「ええー、だめだよー。お母さんは、あゆちゃんを連れて来るんだよ？」
名雪ちゃんが事も無げに言う。
お菓子をねだる子供よりも、当然のように。
世界の主として、彼女は要求する。
あゆちゃんが、眉をひそめる。

……拡がった綻び。

じりじりと、時計回りに全員が移動する。
火にかけた鉄板を乗せたままの、実習台を挟んで対峙する。

どこからか、銃声が聞こえる。
それはきっと、校舎内のどこかで発した音なのだろう。
けれど、遠くに。
ひどく、遠くに聞こえた。

……失われた、諸々が

「秋子さん」
今、話さなければ。今、止められなければ。
誰も無事では、いられない。
そう危惧していた。
動き始めてしまったなら。留まれなかったなら。
わたしは、この人を救えない。
そう確信していた。

……消えゆく、暁には。

「千鶴さん」
わたしの言葉を止めるように、秋子さんが首を振る。
「たとえ世界を敵に回しても、名雪のために私は在る。前にも、言いましたね」
そうして、ここまで来てしまった。
それでも変わらず、歩みを止めず。
このひとは、ここまで来てしまった。

……一体何が、残るのだろう。

「問答、無用です」
梓が小さく息を飲む。
あゆちゃんがくすん、と鼻を鳴らす。
わたしと秋子さんが溜息を漏らす。
そして名雪ちゃんは、笑っている。

……それは

秋子さんがひゅん、と唸りをあげて鉈を構える。
梓が棒を両手に、腰を落とす。
最後に、わたしが。
歩幅を広げて、爪を開く。
ぶつかる視線の間に頼りなく揺れる炎が、ふと小さくなる。
今にも消えてしまいそうな、小さな炎になって。
確かに一瞬、消えていた。

……「真空」だ。

だだん、と大きな踏み込み音を鳴らして、秋子さんとわたしは調理台の上に登る。
互いに重心を崩さぬ速い一撃を交わす。
ひゅひゅん、と遅れて風が泣き、わたしは屈んで、秋子さんは後ろに避ける。

……空気が、割れる。

続けて梓が棒で両足を払うが、側転しつつかわした秋子さんが片腕で身を支え、鉈でわたしの脚を薙いでくる。
軽く前足を上げてこれを外し、秋子さんの立ち直り際を狙って跳ぶ。
梓が棒を床につき台上に登る。

……風が、遅れて吹いてくる。

鎖骨を狙って爪を縦に振るが、秋子さんが肘を軸に左手を外に回すことで軽くいなされる。
重心を流され左半身を晒したわたしに、振り上げられる鉈。
梓が大きく踏み込んで肩を並べ、がしんと棒で押さえる。
流れを止めず、わたしは時計回りに回転しながら台に手をつき右脚を繰り出し膝を狙う。
梓は押さえた鉈を中心に棒を反転させて即頭部を狙う。
秋子さんは頭を下げ回転し、同時にわたしの蹴りを外した左脚を振り回して梓を調理台から吹き飛ばす。

……裂けた大気の、泣き声は

その瞬間。
蹴りの命中で僅かに速度を落とした秋子さんに対し、わたしは横になった体軸を中心に回転する。
うつ伏せから仰向けになりながら、右脚で彼女の軸足を蹴り上げた。
秋子さんは大きくバランスを崩して、転がって台上から転落し、背中を下に落ちる。
しかし休むことなく、そのまま両腕で反動をつけ立ち上がる。同時に手にはガスホースを掴んでいた。
あゆちゃんが何か叫んでいる。
ぐい、とそれを引き、台上から飛び降り追い討つ

わたしに、ガス台をぶつける。
意外な攻撃を受け、わたしは無防備に秋子さんの右に墜落した。
「お母さん、早く早くー」
名雪ちゃんの楽しげな声と重なるように。
わたしを襲う鉈の一閃が、横薙ぎに迫っていた。

……短く鋭い刃物の音。

「千鶴姉！」
最初に調理台から転落していた梓が、起き上がりながら棒を振り、完全に重心を泳がせていたわたしを転倒させる。
そのとき、笑顔が見えた気がした。
名雪ちゃんの笑顔が、見えた気がした。

……それは

ズドン！
銃声にも負けぬ巨大な衝撃が、壁面を震わせる。
教室ごと、いや世界が震えたようにさえ、感じられたが。
にわかに静寂が訪れる。
何も動かず。
誰も話さず。
無音の空間が拡がっていた。

……「真空」だ。

ぱたたっ
生暖かい何かが、わたしの頭に降り注いだ。
始めは、涙のように。
やがて、滝のように。
誰も動かなかった。
いや、動けなかったというべきだ。
視界が赤い。

わたしは、かつてこの色で世界を見ていた。
血の、色だ。
のろのろと立ち上がる、わたしの目前に。
一つの悲劇があった。

「な……ゆき……」
秋子さんが、震える手を鉈から離す。
それでも鉈は落ちなかった。
鉈は。
鉈は、壁に突き立っていた。
鉈は、名雪ちゃんの笑顔を。
鉈は、名雪ちゃんの笑顔を真一文字に叩き割り、
壁に貼り付けていた。

「ああああああああああ!!」
秋子さんが崩れ落ちる。
もはや、何も見えていないのだろう。
何も聞こえていないのだろう。

わたしに背を向けて、壁に祈るように泣いていた。
わたしは爪を振り上げた。
振り上げたけれど。
けれど、振り下ろす事ができなかった。
「千鶴姉……」
梓が呼んでいる。
みんなが、わたしを待っているはずだ。
残酷だけれど。
残酷だけれど、振り下ろす事ができなかった。

……それは

二人を残し、実習室を去るとき。
あゆちゃんが秋子さんを見つめて、ぽつりと呟いた。
「どう、するの?」
梓が答える。
「どうにも……ならないよ……」
そうだ。

もう、どうにもならない。
秋子さんには、何も残っていないのだから。
……それは、「真空」。

九十一番　水瀬名雪　死亡
【残り41人】

## 389　赤く、黒く。

秋子は、千鶴と梓が去ったあとも、ずっとその場に崩れ落ちたままだった。
血に塗れ、涙に暮れ、鼻筋を境に上下に分たれた娘の亡骸を前に脱力した彼女は、もはや抜け殻同然だった。
校舎の中は未だ、多くの喧騒に満ちている。それは断続したり、時折響いたりしていたが、拳銃の音も何かが壁を穿つ音も、彼女の耳には届いていなかった。見据える視線の先にあるのは、壁に突き刺さった鉈に貼り付いた、実の娘だったものの〝欠片〟。
血に塗れていない眉が緩やかな八の字のカーブを描き、血に塗れた眼球が、まるで眼前の母に微笑みかけるように細く開かれている。
部屋の壁が何かの振動で、細く、断続的に揺れる。誰かが、何処かで戦っているのかも知れない。
ずず、ずず、と、振動の度に鉈は揺れ、深く突き刺さったそれは少しずつ少しずつ、斜めにずり落ちていく。
ぼと、と鈍い音がして、〝欠片〟は床に落ちた。
「ああ。ああああああああ。ああ」
秋子はその〝欠片〟を拾うために立ち上がろうとするが、身体が自由に動かない。手も足も何もかも、まるで粘土の海を掻き分けて進んでいるかのように、鈍重で、憂鬱で。
秋子は気がつけば全身で動くかのように、床をの

そのそと這って――
しょうがないわね。名雪ったら、もう。
――いや、気付いていないのだろう。もう、何もかも。
秋子は破片にようやく辿り着くと、いとおしそうに頬にすり寄せた。色の無い脳漿が流れ落ち、少し赤みがかった灰色のモノが彼女の腕を油で濡らし、もう黒く変色した血に塗れ、何度も何度も、すり寄せる。
そのうち、よろよろと立ち上がると、名雪の亡骸に近づいた。おぼつかない足取りで壁を沿うように、振動に幾度か弾かれながら、彼女は辿り着いた。
ほら、名雪。いつもの通り笑って。微笑んでちょうだい。お母さん、名雪の笑顔があれば、他に何もいらないのよ。うふふ。
鉈で千切れた髪を掻き集める。零れた血を、脳を、懸命に掻き集める。亡骸の上に〝欠片〟を据え、集めた髪をその上に垂らす。
ほら。これでいつもどおり。とても可愛いわ。あら？
血で塗れた顔を拭う。血に塗れた服を脱がせる。洗うように、ごしごしと自分の服で拭う。その度に、赤黒い色はさらに浸透していく。脱がしても拭っても、その色が落ちることはない。
秋子の着ている物が赤黒く染まりきってしまうまで、それは続けられた。
あら、あら、あら。どうしてかしら。もう、名雪は仕方ないわね。何時まで経っても子供なんだから。こんなに汚して。そういつまで経っても子供なのよね。子供でいてね。お母さんの子供でいてね。
身繕いをするように、何度も何度も、髪をとかす。とかす度に、ぶちぶちと毛髪が頭皮ごと削げ落ちる。その破片はぼたぼたと、床を濡らす。

そうすれば、ずぅっと守ってあげる。何でも望みを叶えてあげる。祐一くんは名雪にあげるわ。大丈夫。彼もきっと名雪のことが大好きなはずよ。大丈夫。邪魔する子は殺せばいいんだもの。何があっても、名雪に嫌な思いはさせないわ。だって、私は名雪が大好きなんだもの。

亡骸と毛髪と〝欠片〟と。秋子はずっと握り締めたまま、一人で喋りつづけていた。

「さあ、何をしましょうかしら。ねぇ、名雪。あなたは、どうしたいのかしら……？」

秋子はすっかり乳白色になった〝欠片〟だけを握り締め、ずっと一人で——

「お母さん。わたし、あゆちゃんを殺したいよ。それでね、祐一と一緒になるの。

まあ、それは大変ね。

うん。でもね、そうしないと、祐一はわたしのとこに戻ってきてくれないの。

そうね。殺しましょう。

うん！　それでね、わたし、祐一と結婚するの。

まあ、それはおめでたいわ。

お母さんは反対しないよね。

ええ、もちろん了承、よ。

えへへ。ずっと、いつまでもお母さんとわたしと祐一の三人で一緒にいるの。いいよね？

ええ、もちろんよ。

お母さんはわたしの味方だよね。

そうよ。お母さんは名雪の味方だもの。

どんな願いだって叶えてくれるよね？

ええ、どんな願いだって叶えてあげるわ」

——喋り続けていた。

### 390　あの時から

人が死んでいるのを間近で見てすごくびっくりし

たのに……心の奥は割と平静だった。
だって、昔嗅いだ血の匂いを、体が覚えているから。
たぶん私も――狂ってるんだと思う。
楓お姉ちゃんはどうなんだろう？
私と同じ？　それとも違うの？
同じように前世を知る者として。
「誰が来るか分からないから気をつけなきゃね……」
七瀬お姉ちゃんが、私を後ろから軽く抱いてくれる。
ダメだよ、汚れた私なんかにそんなことしたら。
千鶴お姉ちゃんは何も言わなかった。昨日の事を。
お姉ちゃんは優しいから。だけど……。
――本当は、私の方が偽善者なんだよね……。
あの時の声。私の言葉。私の心の中の言葉。
昔の私は自分で手を汚さない非道な狩猟者だった。
大切な人の為と銘うって、大勢の同朋をこの手で死に導いたんだ。
そして、今の私の心の中にも、一匹の獣が住んでいる。
――ソシテマタ、ツライ、ヘイワナヒビヲ、ジローエモント、スゴスノ……
私はまた、人を殺すの？
このまま耕一お兄ちゃん達と一緒にいていいの？
もし大切な人が死んでしまったら……私は私でいられるの？
この島の、そして学校に立ちこめる血の匂いが……私の心の隙間を埋めていく気がして……とても怖い。
そして心が満たされた時、私は変わってしまうかもしれない。
すべてを狩る『狩猟者』に。

――千鶴お姉ちゃん、今の私から逃げて！

あれもまた私の本当の心だから。

誰にも言えないけど、昨日、あの時あの場所からずっと私は戦っている。心の中のもう一人の自分――狩猟者と。

知らない人達を……そして大切な人達を、狩ってしまわないように。

## 391　ぼくの戦争　――月光――

一寸先とは言わないまでも数メートル先はもう暗闇で何も見えない。自分の背後には建物の爛爛とした明があるが、その光の中にいては逆に遠くは見渡せない。一方暗闇の中からはこの光を目印として自分達の姿を良く見渡せるかもしれない、と思うと良い気持ちはしない。監視兵である大森は小さく溜息を吐きながら交代の時間を待つ。かれこれ何時間も立ち呆けていて、体力的にも少し余裕がなくなってきていた。

首から掛けたサブマシンガンの重みが肩に軋みを入れ始める。陽はとうに沈んでいて、人間にとって最も恐るべき闇と静寂の時空間が大森の目の前に広がっていた。もう一度小さく溜息を吐き、大森はヘッドギアからの音声通信を待つ。自分はまだ今日はマシな方である。夜の見張りをやらなくてもいい、という一点に於いては。

程なく通信が入る。高音のノイズに入り混じって、これから夜の見張りをやることになる不幸な同僚の声が耳に入ってきた。何時間も眠ったあとだけにさすがに少し眠たげな色の混じった声だな、と大森は思う。

「交代の時間だ。着替えてあと少ししたら行く」

やっと休める、と小さな溜息を吐く。かれこれ六時間も立ちっぱなしだ。腕時計を見ると既に八時の少し前。飲まず食わず休まずだから疲れても当たり

前だ。部屋で酒の一杯でも飲みたい、とヘッドギアの下表情を緩めながら思う。

にしても、まったく誰もやってこない。当たり前だ。正気の頭脳を持っている人間ならば、無数のサブマシンガンが降らす鋼鉄の雨の中に自ずから飛び込もうとはしないだろう。見張りをする意味なんてあるのだろうか、とさえ思う。そもそも監視用のカメラは別に設置されているのだ。見張りがいなくても、侵入者があったらすぐに判る筈だ。

それでも勿論意味はあるに決まっている。

長く立ち呆けをしていたから、考える時間もある。大森はある程度、自分たちが見張りをしなければならない理由についての大体の予測を立てていた。

侵入者は入り口付近で叩かなければならないのだ。

侵入者の体内には爆弾が埋め込まれている。誰かが反旗を翻し、この建物に侵入してきたとしても、爆弾を爆発させてしまえばそれでしまいだ。

けれども、コトはそう簡単にはいかないのだ。

爆弾には他者を巻き込む力がある。どの程度の破壊力であるかはわからないけれども、下手を打てばこの施設の奥で爆弾管理の作業を行っている高槻に被害が及んだり、或いは爆弾制御の装置が壊れてしまう可能性もある。――そういった間違いを起こさないために、自分たちはいるのだと思う。

「遅れた、大森」

大森の思考はそこで停止する。同僚の声が聞こえた。

まあ、構うまい。自分たちはあくまで見張りだ。このゲームが正しかろうが間違っていようが、自分は高槻に従っているだけの末枝の人間だ。

小さく溜息を吐いて振り返る、同僚がヘッドギアを被る様子が見え、取り敢えず部屋に帰って寝ようと首を捻って、

すぐ近くで拳銃の発砲音がした、と思った。

錯覚だろうか、と考える瞬間すら与えられない。殆ど同じ瞬間、建物の壁に何かが当たる音。コンクリートに硬質な何かが炸裂した音。炸裂した場所は自分のすぐ横、正面からだ。

「大森ッ」

「判ってるッ」

あれは拳銃の音だ。こちらを狙ってきている。二人は反射的に身を屈め、次の音が聞こえるのを待つ、聞こえない、自分が防弾チョッキとヘッドギアを身に着けていて生半な攻撃では死ぬことはないことを思い出し立ち上がる。

ある筈がないと思っていた、反逆だ。

「さっきの銃声はあっちから聞こえたぞ」

同僚が指で指す方向を見て大森は頷き、サブマシンガンを構える。ここからで果たして有効にサブマシンガンが働くかはわからないが、とにかく引き金を引く。ぱららら、という軽い音と共に弾丸が闇を駆け抜ける。火花が眩しい。銃弾が敵に命中したかどうかは判断できない。呻き声も悲鳴も聞こえない。風と銃弾のダンスで森の木がざわめく音が聞こえるばかりだ。

「三沢。ちょっと俺が見てくるから、ここを頼む」

まだ交代は終わっていない。この仕事を終えてから部屋でゆっくり眠ろう。大森は慎重な足取りで駆けて行く。

「不用意な真似はするなよ、大森っ」

同僚の声が聞こえる。大森は軽く後ろ手を振って答える。

間隔を空けてサブマシンガンの引き金を引く。茂みの中にいる筈の反逆者からは何の反応も無い。少しずつ距離を詰めながら、大森は自分の手のひらが汗で濡れていることを自覚する。服の裾で拭ってもすぐに汗が滲み出てくる。拳銃と夜、二つの闇との戦いはけしてサブマシンガンにとっても楽な相手ではないのだ。

防弾チョッキは支給されていて、自分の身をしっかりと包んでいてくれている。多分こっちが殺られることはないだろうとは思う。大森は慎重に間合いを詰めていく。
　やがて間合いはゼロになる。

　三沢は入り口付近で欠伸を噛み殺しながら、こんな時にも欠伸が出る自分の神経をおかしなものだと思う。サブマシンガンを構えなおし、ヘッドギアを被り直す。小さく深呼吸をして、緊張を取り戻そうと指を動かす。そして、大森が駆けていった方向に気を払いながら、少しだけ考え事をする。
　——不思議だ。銃声は一発のみしか聞こえない。どうしてなのだろう。襲撃をかけるならかけるで一斉攻撃を行う筈だ。腹を決めて、一斉にだ。
　単独犯である可能性は低い。数人で反抗を起こさなければこの厳重な警備体制にある施設を制圧することなど出来るわけがない。だから銃声やら何やらがもっと多く聞こえてきてもおかしくはない筈なのだ。
　仮に単独犯だとしてもおかしい。高度な防御セキュリティの中に単独で特攻するということは半ば自暴自棄になっている訳で、だとしたら半狂乱のまま拳銃を乱射して特攻してくる——そんな図の方がよほどしっくりとくる。
　何故、一発しか銃弾がこないのか？　それには何か理由があるのだろうか？
　その瞬間、頭に軽い衝撃が飛んでくる。
　小石か何かなのだと思った。三沢は一瞬混乱する、どうして小石が自分の真横から飛んでくるのだろうか。
　敵襲だと気づくのに、二秒。
　僅か二秒の間でも人間が出来ることは意外と多い。やはり複数による反抗か。先ほど弾丸を放った奴の仲間ということか、三沢は左を向いてサブマシンガンを構える、また小石が飛んでくる、だがヘッド

ギアの前にそんなものが通用するわけがない、やり過ごして蜂の巣に、
視界が暗転する。
ヘッドギアに泥か何かをぶつけられたのだと悟る、そのため視界が遮られたのだ！　サブマシンガンの引き金を引こうとするがこの視界で放っても命中するわけがない、乱射は無意味だ、三沢は慌ててヘッドギアを外し、敵の姿を肉眼で確認する。
ここで、十秒。
十秒は、足の速い人間ならば百メートルを詰められる時間だ。そして、足の遅い人間でも――数十メートルを詰められる時間だった。
ヘッドギアを取った三沢の肉眼には、間近に迫った少年の顔と、その右手に握られた煉瓦の色しか映らなかった。
引き金を引くには遅すぎた。
煉瓦が三沢の頭で破裂する。半ば破片となった煉瓦の二撃目で、三沢の意識も破裂する。

距離がゼロになり、茂みの中に慎重に足を踏み入れた大森が見たものは、
「これは、」
破裂した紙パックの残骸だった。
どうしてこんなものがこんなところにあるのだろう。牛乳などが食料として支給されたことはないし、だとしたらこの無人島に昔からあったゴミなのだろうか。こんな風に乱暴な開け方をして飲むような子供は、果たして自分が若かりし頃にはいただろうか。いたような気もする。まあそれはともかく――どうしてゴミがこんなところに、
――違う。
大森は自分の混乱した思考を必死に整理しながら、一つの結論を出す。これが拳銃の正体だ。
さっきのは銃声でもなんでもない、膨らませた紙パックを爆発させた音なのだ。紙パックを爆発させた音は拳銃に良く似た音だ。拳銃を実際に使ったことがなかった子供の頃には判らなかったけれど。

昔よくやった遊びに、飲み終わった紙パックの容器にいっぱいに空気を詰め込んでそれを思い切り踏みつける、というものがあった。ヤクザの家の前でやったりすると顰蹙と暴力を買ってしまうので止めておこう、というのが子供らの間での決まりごと。
その子供だましが、今、自分の前で展開された。
これが拳銃の音だとするならば。襲撃者は、拳銃すらも持っていない。そして襲撃者は恐らく単独犯だ。
襲撃者は自分をここに誘き寄せるためだけに、この紙パック拳銃のトリックを使ったのだ。そして考える。襲撃者は交代の瞬間を狙って襲撃してきた。自分をここに誘き寄せる、何のために？
決まっている。――武器を奪うためだ。自分か三沢から武器を強奪して、その武器で施設に突入するためだ。わざわざ交代の瞬間を狙ったのは、この瞬間にこそ自分たちの集中力が途絶える、ということを計算したのだ。

気配を感じる。その気配の正体が何であるか大森は既に判っている。自分から武器を奪うために潜んでいた襲撃者だ。だがここまで判っていれば自分が戸惑うことは無い。俺から武器を奪うことなど無理だ。残念だったな、
大森は半ば余裕を持ってサブマシンガンの銃口を声のした方向に向け、そのまま振り返ろうとして矛盾に気づく。
――待て、
声が後ろから聞こえた？　後ろには施設があり、その施設の前には三沢が立っている筈で、――それならば、
混乱が大森の思考を焼き、次の瞬間には痛みと熱が防弾チョッキ越しに背中をも焼いた。ぱらららららら、と古いタイプライターを叩いたような音が耳をも焼く。鉄球をぶつけられたような痛みが走り、大森は一瞬で気を失う。
その一瞬で大森は考える。つまり、俺より先に三

沢が始末されたということか。茂みの裏から回り込んだのだ。サブマシンガンを構えている自分より、まだ構えていなかった三沢を優先したのだ。そして、三沢からサブマシンガンを奪って――

同じ刹那。掠れていく意識の中で振り返りかけた大森が見たのは、月光で輝く小柄な青年の姿だった。

別の場所に放置しておいた切り札入りの重い鞄を手に取り、七瀬彰は大きく溜息を吐く。汗がびっしょりと背中を走っていて、身体は火照っているくせに汗が妙に冷たいことを自覚する。心臓の音が嘘のように高い。

倒れた男からサブマシンガンと防弾チョッキを奪い取る。防弾チョッキから弾丸を払って着込む。多分再利用しても大丈夫だろう、と考える。ヘッドギアも奪い取ってかぶる。これで多少は安全度が増した筈だ。

――全く、子供の行うサバイバルゲームのような、チャチで間抜けな作戦だった。とはいっても、武器のない自分にはこれが精一杯だったのだが。上手くいったのは僥倖。自分には怪我一つないことも奇跡に近い。さきほど奪ったサブマシンガンと併せて二丁。一丁を鞄の中に放り込む。もう一丁を右手に握り締め、その重みに少しふらつきながら、勇気の矢が折れないことを祈りながら、

もう引き返せないんだ。

掠れたような声で呟いて、彰は息を吐く。

## 392　詠美ちゃん様VS御堂

(くそっ……忌々しい女だ!)

御堂は心の中で悪態をついた。

大庭詠美と名乗る女に捕らえられた御堂は、後ろ手に縛られて座ったまま詠美を睨んだ。

「なによ、その顔は……ゆっとくけどわたしにさからったら『ムーンライトマジカルステージストライ

クレーザービームライフル』……だっけ？　それが火を吹いちゃうんだから！」
「どこにも持ってねえじゃねえか、そんな武器……」
「げ、げんだいのかがくはすごいのよ！　すんごくちいさいの!!」
いずれにせよ、ここで殺される気はない。
ターゲットを主催サイドに絞った御堂だったが、命が危ない状況ならば話は別だ。場合によってはここでこの女を殺さなくてはならない。
だが、その女の武器は未知の兵器――御堂の背中から冷や汗が流れて、落ちた。
「あー、とにかく、わたしにさからわなければ悪いようにはしないわよ」
勝ち誇ったように御堂の周りをぐるりと歩く。
（くそっ！　生き恥だぜ、この俺ともあろうものが……）
いっそ殺されてしまったほうがマシだとさえ思える。
御堂の手を拘束しているベルトは御堂のつけていたもの。緩々になった麻のズボンはすでにずり落ち、その下から黄色がかったふんどしが露出していた。
「くそっ……」
「何よ……文句あるなら『ムーンライトニングスラッシュレーザービームサーベル』で消し炭にちゃうんだから！」
さっきと名前が違うような気がしないでもないが、御堂は外来語が苦手であったし、もともとその武器の正確な名前すら知らない。
（……時代は変わる……か。未知の近代強力兵器……これほど恐ろしいものはねぇぜ。それにこの女の自信……強化兵の能力がない今の俺には少々ヤバイ相手かもしれねぇ……）
御堂の強化兵として、いや、軍人としての勘がそう告げていた。
こう見えても御堂の勘はちょっとしたものだ。

肉体の強さだけでない。そうして御堂は生き残ってきたのだ。
とりあえずは御堂は女の指示に従うことにした。
「俺を……どうする気だ？」
「もちろん協力してもらうのよ。ここを……でるために」
詠美の表情がいきなり真剣なものに変わる。
「ほお……具体的には？」
「う〜ん、さしあたっては協力者がひつよーね。とりあえず柏木って女の人をさがそうとおもうの」
「かしわぎだぁ？」
――御堂は既に柏木家の次女、梓と交戦していた。
だが、御堂はその女の名前までは知らない――
「で……どうしようてんだ？」
「……さあ……」
「なめてんのか、このガキ」
御堂から見れば詠美もあゆもただのガキだ。
「ガキって呼ばないでしたぼく！」

(したぼくってなんだ……？)
最近の流行りなのだろうか。どちらにしてもあまりいい気はしない。
「……まあいい。で、俺はどうすればいい」
「そうね……とりあえずしたぼくが三人増えたことだし……前途揚々ね」
「三人ってなんだ……」
「あんたとー……」
御堂を指差す。
「ぴこっ！」
「にゃう！」
二匹が順序良く返事した。
(お、俺がこいつらと同格か？　死にたくなってきたぜ……)
「いっしょについてきてもらうわよ！　……あとで……全部話すから」
詠美の表情が、今度は悲しみに彩られた。
何かを失ってしまったような、そんな深い悲し

み——
「……ちっ、わかったから手のベルトを解いてくれ……」
ようやく身軽になった御堂は、詠美の前をボディーガードさながらに歩く。
とりあえず柏木という女を捜せ……といってもアテがあるわけはなく、ただ安全な場所へと移動しているだけなのだが。
いつ敵に出くわすとも限らない。
比較的安全な木陰へと移動する。
「とりあえずよ……武器返せ……別に危害は加えねぇからよ……」
この島での丸腰は危険だ。すでに詠美から殺気を感じられないと判断した御堂は自分なりに穏やかにそう言った。
「あんた……怖いからイヤ」
「おめぇには『むーんらいだーなんちゃら』って武器があんだろ？」
「そ、そうよ。『ムーンライダーワンダフルグレイトレーザー』があれば無敵だもん！　か、返せばいいんでしょ……ゆっ、ゆっとくけど、逆らったら『ムーンライダーなんちゃら』が……」
「つーかよ、分かりやすく省略してくれ、その武器名」
「う、うん、ぽ……『ポチ』……かな？」
「ぽちだぁ？」
「な、なによ、わかりやすいでしょ！　あたまわるいあんたのためにつけてやったんだから、かんしゃしてよね！」
（このガキ……）
「ぴっこり」
「にゃうにゃう♪」
まあいい、と御堂は思えた。
（忌々しいが、このガキのもつ『ポチ』とこの銃があれば対等に戦えるかもしれねぇな。まあ、その前に腹の爆弾を何とかしなきゃならねぇが……。少な

くともこのガキ……『しずぷり』って娯楽劇の話しかしなかった戦闘力皆無のあのガキよりはマシだろう……）
御堂と詠美の二人は、とりあえず脱出へ向けて一歩近づいた……かもしれない。
「ねえ、あんたってさ……そのバインダー……」
詠美が御堂のバッグに入っているバインダーを指差す。
「このバインダーがどうかしたか？」
「桜井あさひ……好きなの？」
桜井あさひ——知らない名前だ。このバインダーや、中のカードに写っている女のことだろうか。
「……とりあえず役に立ちそうだったからな」
結構丈夫な厚紙だ。しかも分厚いときている。
銃弾に対しては心許ないが、刃物の類相手なら充分な盾になるだろう。
「ふーん……『あさひちゃんマニア』なんだね……」
「？　……まあ、戦う時が来たら服の下にでも括り付けておくのが効果的だな」
そうしておけば胸を狙われても致命傷になる確率はグンとさがるハズだ。
「そ、そうなんだ……お、おまもりみたいなもの？」
「……そうとも言えねぇこたあねえがな……」
身を守る——という意味ではお守りともいえないこともない。
まあ、御堂は神頼みなどする気も起こらないが。
「本当はずっと括り付けておきてぇが動きにくくてな……」
「そ、そおなんだ……あはは……が、がんばってね……おーえんしてるからさ」
「？？？」

## 393　偽りの平穏

ジープを降りてもう数時間が経つ。
今のところは誰かに会うわけでもなく、また襲われるわけでもなく、とりあえず、保科智子はうたたの平穏を享受していた。
しかしそれも、今日一日を通して振り返ってみれば、激しすぎる銃撃戦と硝煙の狭間で燻る、ほんのわずかな空白でしかないことは明白だった。
日もすっかり暮れた。夜の闇は十分に深い。
五回目となる放送で伝えられた死者の中に自分の知り合いの名前は無かった。そのことに、ひとまずほっとする。
……それでも、順調に人が死んでいっていることになんら変わりは無かったが。
下卑た笑いを浮かべながら、自分たちを見下している高槻の姿が容易に想像できた。
くそっ。
智子は心の中で毒づいた。
いつか一泡吹かせてやるからなぁ。
そんな闘志が再びみなぎってきていた。
死亡者リストに知り合いの名前が上がらなかったことで、智子は彼らのことを思い出していた。
「あかりはうまくやってんやろか……」
思わず智子はそう呟いていた。
わずかな心配が、心の中での呟きを口に出させてしまったのだ。
海岸での様子を見るに、もうあの二人が離れ離れになることとは無いやろ、とたかをくくっていた。
というより、あれが本来の姿だということは、智子はもちろん普段の彼らを知っているものなら誰もが納得するところだった。
おそらく、あの二人が戦場に戻ることはもう無い。
それならば、ゲームの終了時まで穏やかに生き延びて欲しい。

藤田君からあんなセリフ聞くのも、あかりの涙を見るのも懲り懲りやわ……。
智子はそう考えていた。
「この分なら、藤田君があかりのことを守ってくれてるんやろな。あかりを任せられる奴なんて、あんたの他におらへん――頼んだで、藤田君」
智子は祈るように呟く。
それにしても、ナイトに守られるお姫様――不謹慎かも知れないが、少しあこがれるシチュエーションだと思う。
「きっと大丈夫ですよ」
マルチは智子の独り言に相槌を打った。
「あの方たちほどお似合いのカップルを、私は他に知りません」
マルチは満面の笑みでそう付け加える。
智子は一呼吸おいたあと、マルチの頬を指で摘まんだ。
「はぅぅ……智子さん、何をするんですかぁ」
「あんた、ほんま、ロボットかいな？　ここも柔らかいし、実は中の人が入ってるんとちゃうか？」
そのままぐりぐりとマルチの頬をつねる。
「はわわわわわ～～、私は正真正銘ロボットですよぉぉ～～」
そうする智子の表情は、マルチとなんら変わるところのない笑顔だった。
しかし、そうしてる間にも事態は刻々と進行していた。
一つは智子の腕だ。
銃弾を受けて傷ついたものの、特に動かすのに支障が無かったため、簡単な処置だけで済ませたまま現在に至っていた。
「あかんな……。生兵法は怪我のもと言うが、治療とかについても同じじゃや……」
「どうかしましたか？」
マルチが智子に視線を向ける。
「ん、なんでもないわ」

しかし、マルチに心配をかけるわけにはいかないと、傷が悪化している事実を隠していた。
そしてもう一つ。
智子の腕の他に、目前まで迫っているタイムリミットがあることなど、智子も、マルチも、気づくべくも無かった。
「しかし暗いなぁ……、何にも明かりになるようなものがあらへんで。……ま、当たり前か」
そう、明かりなどつけていたら、敵対者の絶好の的になってしまう。
あくまでもここが戦場であることを智子は再認識した。
「そうですねぇ」
マルチはそのセリフに相槌を打った。
「私ら、よう考えてみればここ数時間飲まず食わずで歩き通しやん」
と言ってから、智子はそのセリフの間違いに気付いた。
「私らやない、私だけや！　あんた水分補給の必要ないやん!?」
なにげにマルチをにらむ。
マルチは慌てて言った。
「わ、私だってエネルギーを補給しないと倒れちゃいますよ～」
「……せやな。でもあんたのエネルギーって電気やん。どうやって補給するん？」
「う～～……、確かに充電装置は無いです……」
マルチはばつがわるそうに言った。
だが、すぐに持ち直して言った。
「あ、でもなぜかエネルギー残量はまだまだあるんですよ～」
どのくらいや、と智子は聞いた。
「え……と、あと一日は問題なく動けるかと」
「一日か……。じゃああんたの心配はせんでもええな」
「何でですか？」

マルチは智子に問い掛けた。
それに対し智子は、まあいろいろあるんや、と言葉を濁した。
――まさか、あと一日自分が生きている保証が無いなどと、この子に言えるわけが無かった。
「はぁ、そうなんですかー」
いろいろ考えていらっしゃるんですね〜、とマルチは手放しに感心していた。
「そうやな」
呟くと、智子は自嘲気味に笑った。
「ん？」
智子は突然足を止めた。
「どうしました？」
智子の様子が変なことに気付き、マルチは智子を呼んでみた。
「……今、声がせえへんかったか？」
「……声、ですか」
「せや、声や……」

二人は改めて耳を凝らし、あたりの様子をうかがった。
「…………」
――聞こえた。
確かに、いる。
しかも複数人。
「ど、どうしましょう智子さん？」
「しっ！　静かにするんや。まだあっちは私らに気付いてへんみたいやからな。ここは様子を見るんや」
智子は、口に人差し指を当ててそう促した。
「わ、分かりました……」
マルチもそれに従うように声を潜めた。
「とりあえず隠れるで。こっちに来そうやからな……。静かに、静かにや……」
そして、二人は茂みに身を潜めた。

――誰か、来る。

## 394　涙と慕情

——五回目の定時放送が鳴り終わった瞬間、私は崩れ落ちた。
「うっ……ああ……ぁあああああああ……」
玲子さん、彩さん、そして南さんまでもが死んだ。一度に三人もの知り合いの死が言い渡された。
もうダメだ。死ぬんだ。私も、殺されちゃうんだ。ちょっとだけ忘れていられたけど、これが現実なんだ。もう終わりなんだ。どうしようもないんだ。
和樹さんにも会えないで死ぬんだしぬんだしぬんだしぬんだしぬんだしぬんだしぬん……
「——しっかりしいやっ！」
パチンと、頬を張られた。
「まだやっ、まだうちらは生きとるっ。どれだけつらくても。どれだけ悲しくても……生きてる限り、まだ終わるわけにはいかへんのや！」
私の頬を両手で押さえて、晴子さんは私に向かって叫んだ。
観鈴ちゃんが、私の服の袖を掴んで、ふるふると泣きそうになりながら首を振っていた。
私の頬にかかっていた手が、力なく落ちる。
晴子さんは私に背を向けて、言った。
「……もしあんたが死んだら、死んだ仲間たちを偲んでくれる人がいのうなる。誰も思い出してくれないまま、風化する。そんなの……もっと悲しいやん」
握った両手が、震えていた。
……そうだ、私がちゃんとしなくちゃ。ちゃんと生きなくちゃいけない。
「……ちゃ……しなきゃ……」
その心とは裏腹に、涙は止まらない。
どれだけ止めようとしても。
どれだけ笑おうとしても。
割り切れない思いが、心を揺さぶって離してくれ

なかった。
……それから少しの間、晴子さんたちが私に話しかけてくることは無かった。
——それが、彼女たちの優しさなのだと、私はそのとき思った。

——あさひの涙がようやく止まった頃に。
「……なあ」
ぽつり、と。
まるで誰に言うでもなく、晴子は呟いた。
「本当の母親て、一体どんなんやろな」
一瞬、何のことを言っているのか、あさひには理解できなかった。
「さっき、言うたやろ。あの子の友達になったたって、て」
コクリ、とあさひは頷く。
「同い年ぐらいの子と仲良くなりかけるんやけどな、そこまででな。ダメなんや、あの子。そーいうんを全部拒否してまうんや。自分では本当に仲良うしたいと思ってるのに、急に癇癪起こして……自分でどうしようものうなって……で、友達になってくれそうな子はみんなあの子を遠ざけるようになってまう」
観鈴は歩いている順番の一番後列だったため、丁度その晴子の話は聞こえていなかった。
「……ホンマの母親なら、何かしてやれることがあったんやろか」
そう言って、晴子ははあ、と嘆息した。
「えっと……それは」
「ああ、言ってへんかったか。うちあの子の生みの親じゃないんよ」
えっ、と一瞬、あさひは喉が詰まった。
「育ての親としても三流や。あの子が、あんなつらそうに、寂しそうに笑うん、知ってたのにどうにもできへんかった。……もっと愛情を注いでやればよかったなんて、後悔したのも散々や。そんなん単な

る偽善やのに。……一番嫌いなことのはずやったのに……」
　晴子は悔しそうに歯軋りする。だがその一瞬あと、立ち止まってあさひの方を振り向いた。
「……でもな。うち、この運命に感謝しとるんや」
　そして、笑顔でこう言った。
「なにせ、観鈴を一人にせんですんだからな」
　それは名前通りの晴れの日の青空のように、カラっとした爽やかな笑顔だった。

「――人形劇？」
「そう、往人さんって言うの」
「善良な子供から金巻き上げて日々暮らしてるヤクザな行き倒れやな」
「お母さんっ！」
「真実やで？」
「でも今時珍しいですね、流しの人形劇なんて……」
「珍しさでは極致やな、超能力人形劇なんて」
「え、超電磁人形劇？」
「なんでやねん」
「にはは、楽しそう」
「二人してアニメの見過ぎや……」
「なるほど、往人さんの人形の秘密は超電磁パワーだったんだ、あさひちん鋭いっ」
「え、え……」
「本人は法術、とか言うてたけどな。手品と大した違い無いやろ。しょぼい商売や」
「あ、お母さんひどい。往人さんいつも必死なのに」
「そら生活かかっとるからなー。あいつ金の亡者や」
「えっと……それで、何が超能力なんですか？」
「「あ」」
　観鈴も交えた三者は、歩きながら往人の話題で盛り上がっていた。

「えっ、手も触れずに人形を？」
「そんなんガキに見せたってありがたみ分かるわけないっちゅうねんなー」
「そんなことないよ、この前は子供たちみんな盛り上がってたよー」
「それは客寄せのアイスクリームに喜んどったんや」
「アイスクリームって……」
「おかげで総合収益は赤字やな、アホちゃうかと」
「もう、お母さんなんでそんなひどい事ばかり言うの⁉」
「家主の権利や」
「が……がお……」
がすっ。
「お母さんがぶった……」
「そんな生易しい効果音に聞こえないんですけど……」
「ま、気にせんとき」
「うう……」
「そか……私もその人形劇、見てみたいです」
「そんなおもろいもんでないで？　ただ歩いてるだけやし、他にバリエーションあらへんし」
「で、でも……」
「人形もぼろいしなー。せめて見た目だけでもハクつけたろかって新しいのと換えてやったら今度は怒るし」
「それはお母さんが悪いよっ」
「せやな、反省しとる。誰にでも大事なもんはある」
「その……人形劇の人はどんな人なんでしょう」
「居候やで」
「観鈴ちんのまぶだち、ぶいっ」
そのセリフを聞いて、晴子は一瞬はっとして……そして、笑みを浮かべた。
「……せやな。あいつは観鈴の親友で……家族や」
「晴子さん……」

「お母さん……」
「さっき」
晴子は立ち止まって、言った。
「言い忘れたことを思い出したわ」
その視線は、あさひの方を向いている。
「……人間は一人では生きていかれへんのや。人間は弱いからな。でもな、それは裏を返せば、自分のことを支えてくれる人が他に一人でもいるなら……そこがどんなに厳しくても、どんなにつらくても、やっていける。それが人間の強さや。観鈴の友達になってくれるっていうあんたの返事、うちホンマに嬉しかった。……なあ、うちらではあんたの支えになれんかなぁ」
その台詞を聞いたとき、あさひは思った。
――涙って、悲しいときばかりに出てくるものじゃなかったんだなぁ。
ポン、と観鈴があさひの肩を叩いた。
それこそ、まるで母のような優しげな表情で。
「はぅ～っ、いい話ですぅ～～」
「――!?」
歩いていた面々――晴子、あさひ、観鈴――は、一斉にその声が聞こえてきた方に視線を向けた。

## 395　カウント・ダウン

――ほんの数分前のことだった――。
「あ、智子さん聞いてください。わたし、センサーの故障が治ったんですよ～」
「そらよかったな。で、どういうことやねん？」
「はい！　つまりですね、普通の人間の方と比べて四～十倍の範囲の音声を拾い聞くことが出来ます！」
「なんや、センサーって耳のことかいな……けど、ちょうどええわ。今来てる連中の会話を盗み聞きしてくれへんか？　話せそうな相手ならよし。やばそうな奴らだったら、即逃げるで！」

「分かりました！」
「――ったくもう。この子、余計なところが人間くさいんですわ」
「はー。これがロボット言うんやからなぁ……。世の中進歩したもんやな」
「ほんまですわ。しかもこの子、人間以上にドンくさくてかないませんわ、ロボットだと思って接すると、逆にこっちが痛い目見ますよってに」
「あうぅぅ、わたしなんてどうせダメダメダメイドロボですよぉ……」
「あーもう、いじけんなや。あんたから明るさ取ったら何残る言うの？」
「あうぅぅぅ……」
　それが追い討ちになっていることも気づかないほど、智子は勢いに乗って喋っている。
　一方のマルチは、威勢のいい関西弁の会話に挟まれておろおろするしかなかった。

　なにやらその二人――晴子と智子――がいつもより異常に活発に見えるのは気のせいだろうか？
「なんかお母さん楽しそう……」
「ホントですね……」
　なんとなく会話に入っていけなかった観鈴とあさひは、その様子を見て一致した見解を述べた。
「――でも、敵意ある人間でなくてよかったわ。ほんまに」
「……そうですね」
　微妙に会話のトーンが下がる。
　しかしそれは恐れや悲しみから来るものではなくて――。
「悪かったな、痛い話聞かせてもーて」
　晴子はマルチに謝罪した。
「そ、そんなことありません！　なんていうか……。よく、わからないんですけど、モーターがほんのりあつくなってそれで……、そ、その、あの、とにかく私は全然痛く無かったです！」

そんなマルチの様子を見て、晴子はふっ、と笑い一言、
「ありがとうな」
と言ってマルチの頭を撫でてやった。
「あ、はうぅぅぅぅ……」
頭を撫でられること。
――久しく味わっていないその感触に、マルチは幸せそうにうつむいた。
「ほな、自己紹介させてもらいますわ。私は保科智子言います。高校生です」
「えっ、高校生なんですか!?　ず、ずいぶん大人びてるから、わたし、てっきり社会人の方かと思ってました……」
驚いているあさひに、
「私、制服なんですけど……」
と、智子は辟易しながら答えた。
「てっきりイメクラで夜の副業でもしとんのかと」
「なんでやねん」
「お母さんイメクラって何？」
「子供は知らんでえーの」
「智子さんイメクラって何ですか？」
「マルチ……あんたも悪乗りすんなや」
智子は振り向きざまにマルチに脳天チョップをかました。
「はうっ、冤罪です～～～」
泣きながらの抗議ではあったが、鬼の検察官保科智子は全く聞く耳を持たなかった。
「……あー。えっと、私のことは智子でええです。そいでこっちが――」
智子がマルチを見ると、マルチもさっきのを見習ってすぐに自己紹介を始めた。
「ハイ！　私は汎用アンドロイドのＨＭＸ―12型、マルチと申します。こう見えてもれっきとしたメイドロボなんですよ。ちなみに夢は世界一のメイドロボになることです！」
マルチは胸を張ってそう言った。

「え、ＨＭシリーズって……、もしかしてあの〝グルスガワ〟のメイドロボなんですか？」
心当たりがあったのか、横で話を聞いていたあさひが口を挟んだ。
「ハイ。一応セリオさん――ＨＭＸ―13型の方です――と並んで、ＨＭシリーズでは最新鋭のメイドロボなんですよ」
いつもなら、えっへん、と胸を張っていそうなものだが、今のマルチのセリフは全然そんな調子ではなく……、むしろ憂いさえ帯びていた。
そして、その理由など、智子を除いた面々に分かるはずも無かった。
「す……すごいんですね」
あさひはそのことに気付かなかったのか、素の感想を言った。
なにやら感心しているようだ。
と、すぐに自分が話を脱線させたことに気付き、あさひはばつが悪そうに晴子の方を見た。
「もうええの？　ホンならうちの番やね。うちの名前は神尾晴子。晴子でええわ。んでこっちのがうちの娘で……」
晴子は観鈴に目をやった。
「み、観鈴です。よろしくお願いします」
観鈴は慌てて挨拶をする。
「うん、よろしゅう。……で、そっちの方は？」
「あ、えと、桜井あさひと言います」
「桜井さんやな、分かったわ」
智子はやけにあっさりと納得してしまった。
「あ……ま、待ってください。そ、その……」
「ん、何やの？」
「え、えと、その、あの……」
「……何やの、はっきりせん子やな」
心持ち、むすっとした口調で智子は言った。
――実は智子より年上だなんて言えない。
「あ、あさひでいいです」
「へ？」

「あさひって呼んで下さい！」
ついついどもりながら喋ってしまう自分への苛立ちからか、大声を出してしまった。
「……分かったわ。ほな、あさひって呼ばせてもらうで」
パッとあさひの顔が明るくなったのを智子は見逃していなかった。
「あさひさんって凄いんですよ。何でも大人気声優なんだって」
にははっと笑いながら観鈴が言った。
「そ、そんな、大人気だなんて。えと、その……」
「……声優？」
智子の目が、いや眼鏡がキラリと光る。
「なんや、あんた声優なんてやってはったの？」
「ハ、ハイ」
「またエラいマニアックな職業やなー」
ズキッ！
あさひは何か鋭い矢のようなもので胸を貫かれた気がした。
「けど、その割には話し言葉どもりまくりやん……。素人くさいわ、ほんま」
「うぐっ！」
さらに追い討ちでとどめを食らってしまった。
「あ、あたし……、ま、ま、マイクを持つと凄いんです……」
まるで心臓病患者であるかのように胸を押さえながら、ふらふらとなんとかあさひはそう言った。
「そうか？　信じられへんわ……」
ジト目で智子はあさひを見つめる。
「う、ううっ」
ちょっとあさひは涙目になった。
――元からだったかもしれないが。

プッ。

智子は我慢しきれなくなって吹き出した。

「あっはっは。冗談や、冗談」
あさひはぽかんとしている。
「人は見かけのよらんものやからな。きっとホントに凄い声優なんやろ」
「そ、そんな。あたしなんて、その」
あさひは照れながらそう言った。
「いつかあんたの仕事も見せてもらいたいもんやわ」
あさひはそれを聞いて、
「カードマスターピーチっていうアニメ、ご存知ですか?」
と聞こうとした。
——だが、そのセリフが言い出されることは無かった。
変化は、そのほんの一瞬前に。
あまりにささやか過ぎて、誰も気づかないほどの。

ドギュウウゥウン!
響く。
鈍色の銃声が。カナシミ色の叫び声が。
……所詮はうたかたの平穏だった。
死は、どこまでも近いところに潜んでいた。

**396　とりあえず、出ませんか?**

「……その人の名前、何て言うんですか?」
短刀を持って殺気立っているなつみに、茜は訊ねた。
「宮田健太郎……」
「……宮田……?」
記憶を掘り起こす。
最初の死亡放送で、確かそのような名前があった気がした。
その放送で、男と思われる名前はその一つ。

そして茜は、放送以前に、一人の男を殺害していた。
（……まさか、本当に私が……？）
僅かに動揺する。
普段から感情を表に出すこともなく、今度もバレないだろうと踏んでいたが、
「やっぱり、あなたなのね……店長さんを殺したのは……」
簡単に見破られていた。
「……そうみたいです」
シラを切り通すこともできたが、そんなことをしても意味はなさそうだった。
「ようやく見つけたよ、ココロ。一緒に、店長さんの仇を討とうね？」
短刀を撫で、茜に襲い掛かった。
その腕は、震えていた。
慌てず騒がず、茜は手榴弾の安全ピンを抜いた。
「……離れて下さい」
それだけ言い、壁に向かって投げ付ける。
同時に、廊下の反対方向へ走った。
できるだけ、出来る限り、速く。
そして、その場に伏せた。
ドォォォン！
次の瞬間、爆発。衝撃が茜となつみを襲った。
「……ふぅ」
起き上がり、手榴弾を投げ付けた壁を見る。
壁は見事に破壊され、外へと続く大きな穴が空いていた。
「……あの人は無事ですか？」
すぐに、廊下の向こうに見つかった。
短刀を取り落としている。
それを拾おうと、茜は走った。
なつみも遅れて手をのばす。
なつみが一瞬早く短刀を拾い上げ、その手を、茜は蹴り飛ばした。
カランという音を立てて短刀が転がり、今度は茜

が拾いなおす。
短刀の先をなつみに向けて……なつみは床に座り込み、泣いていた。
「終わっちゃったね、ココロ。私の居場所を奪った人を。店長さんの仇をとろうとしたのに。終わっちゃったね……」
茜の方を見ようともしなかった。
ただ俯き、呟く。
雫が頬を伝って床に落ちた。
茜は無言でそれを見つめ、短刀をしまった。
壁に空いた大穴を指し、一言。
「とりあえず、出ませんか？」

**397　今度会うときは……**

「どうして殺さないの？」
校庭に出たなつみは、まず最初に訊いた。
曰くこの女、血も涙もない殺人鬼だそうではないか。
それに、健太郎を殺してもいるのだ。
何故自分が殺されないのか、わからなかった。
「……武器は奪いました。あなたはもう戦えません。……だから、殺さなくてもいいんです」
なつみの先を歩き、言う。
視線は前を向いており、なつみの方を見ていない。
それは余裕か、信頼か。
「……それに、疲れました。……たい焼き、食べ損ねましたから」
笑う。
その笑顔は、なつみには見えない。
「甘いわね」
「……はい。今日、何度も思いました。……だけど……」
脳裏に、祐一の顔が、詩子の顔が浮かぶ。
「……これが、私です。……さっきの人も一度殺せなくて、それでまた襲われましたけど。……多分、

これでいいんです」
「でも、結局あなたが殺したんでしょ？」
「……だから」
始めて、茜は振り向いた。
「……今度会うとき、それでもまだ私を狙うなら。……震えもせず、本気で私を殺しに来るのなら、容赦はしません」
瞳に冷たい色が宿る。
なつみはそれを見た上で、言った。
「今度会うときは……殺すから」
二人は別々の方向に走り出す。
何を言われようとも、なつみは茜を許すつもりはなかった。
この手で殺したいと思い、今度会うときは、遅れをとらないよう――

私の居場所を奪った人。
なつみは茜をそう言った。

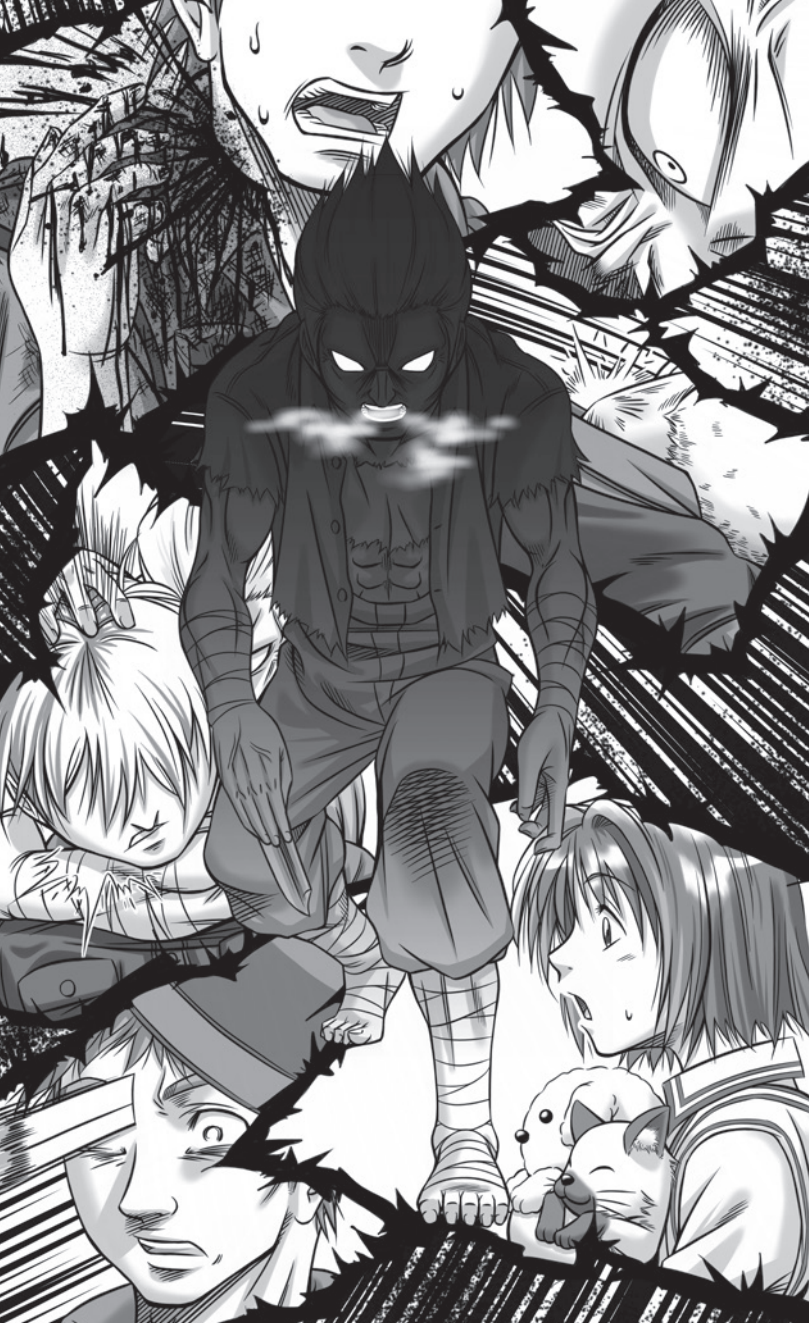
茜の脳裏に、一人の女の子の顔が浮かぶ。
（……私の居場所を奪った人。……もう、いない）
茜の居場所は他にもあった。
しかし、一番居心地のいいあの瞬間は、もうなかった。
それでも、諦めきれない。
誰もあの人のことを覚えていないから。
言っても信じて貰えないから。
だから、待ち続ける。
誰か、この苦しみから開放してくれないだろうか。
ふと、祐一の顔が浮かび、慌ててその影を消す。
開放されることは、あの人への裏切りだ。
それでも――
今度会うときは、祐一は自分に、何を与えるのだろう――

## 398　拒みたい真実

林の中のけもの道を、男女が歩いている。
「ねぇ、一体どこに向かって歩いてるの？」
詠美が半ば、怒り気味な声で訊いた。
彼女は先程から御堂が自分の前を偉そうに歩いているのが気に食わないらしい。
彼女は知らない。御堂が周囲に不自然な人の痕跡が無いか確認しながら歩いていることを。
「……知るか、とりあえず柏木とかいう女を探すんだろ？　死にたくなけりゃ黙って俺について来い」
御堂はぶっきらぼうに答えた。
「むかむかむかぁーーーっ！　なによその態度っ！　したぼくのくせにちょおなまいきっ！」
「……ったく、うるせぇな。だいたい何なんだよ、その『したぼく』ってのは？　何て字で書くんだ？」
御堂は、したぼくの意味は知らないが、どんな字で書かれているかが分かれば意味も何となく分かると考えた。
「え？　あんた漢字も知らないの？　バカじゃないの」
「うるせぇ！　大きなお世話だっ！」
余談ではあるが御堂は学生時代、喧嘩は強かったが勉強はからっきしであった。
「えっとねぇ、上下の『下』に、僕私の『僕』よ。分かった？」
「……下僕じゃねぇかよ！　このアマふざけやがって！」
御堂は詠美に怒鳴り散らす、そのまま胸ぐらをつかみそうな勢いだ。
「おっと、忘れたの？　あたしには『ぽち』がいるのよ？」
右手をポケットに入れて、何かがあるような素振りをして詠美が言う。

「……いい加減、『ぽち』ってやつを見せろよ」
「いやよ！」
しばらくそんなやりとりを交わしているうちに、狭い林道に出た。
林道にはいくつかの足跡……しかも同じ靴跡である。
（一、二、三……四人か……同じ靴の跡、管理側の人間か）
御堂は足跡をたどることにした。そんなことはつゆ知らず詠美の話は続く。
「その子達、あんたにすっごくなついてるわよねぇ」
詠美は御堂の頭上で丸くなって眠りについている二匹の小動物を指差して言った。
「……知るか、勝手について来てるんだよ」
御堂はやや恥ずかしそうに言った。
「あんたってひょっとして、ムツゴロウさん？」
「ムツゴロウ？　干潟にいるアレか？」
「違うわよ！　『いや～、可愛いですね～』って言いながら犬とかにキスする人よっ！」
「……莫迦か、そいつは？」
「ひっどーーーい！　ムツゴロウさんはいい人なのよっ!!」
「シッ！　静かにしろ……ありゃ、何だ？」
「え？　何かあったの？」
詠美は御堂が指を指す方向に視線を移した。
そこにはコンクリートで出来た建物があった。平屋建てで一般の住宅より少し大きいくらいの大きさ。張り出している部分は車庫だろうか。
「何だろ？　……何かの施設じゃないの？」
「施設？　……どんな施設だ？」
「知らないわよ。無線とか……じゃないの？」
詠美はこの島のどこかに無線施設があるという和樹と楓の会話を思い出した……
「無線か……よし、あそこを制圧する。お前はここで待っていろ。あと、こいつらを頼む」

「にゃにゃ？」
「ぴこ？」
そう言うと、御堂は頭の上の小動物をひょいっと摘み上げ、詠美に預けた。
「せいあつって……ちょっ——」
詠美が御堂に視線を戻した時には、御堂は既に施設へ向かって疾りだしていた。
金属製のドア……御堂はそこに耳をあてる。
仙命樹の力が弱まっているといっても、部屋の内部に居る人間の会話ならはっきりと聞き取れる。
男の声……数は足跡と同じ、四人。
『ったく、まだ終わらねぇのかよ、ゴキブリ並みにしぶてぇな』
『ホントだぜ、さっさと死ねよ、あいつら』
『だけどよぉ、何か嫌じゃねぇ？　人が死ぬって』
『いいじゃねぇか、金さえ貰えりゃあ。だいいち、他人だぜ？』
『そりゃそーだ！』
『ギャハハハハハハハ!!』
御堂は体全身がカッと熱くなるのを感じた。奥歯を噛み締めギリッと音がする。
（こいつらに、生きる資格は……ねぇな）
『あ、俺小便行ってくらあ』
『気をつけろよ』
『へーきへーき！　いざとなったらコレがあるしな』
足音が聞こえる……こちらに向かっているようだ。どうやら一人の兵士が外へ出るようだ。
御堂はすかさずドアが開いた時、死角になる場所へ隠れた。
ギィ……。
わずかなきしみを帯び、金属のドアが開いた。
出て来たのは、中肉中背の男……戦闘服を身にまとい、肩にはサブマシンガンを下げている。
ガチャン！
ドアが閉まる。

すかさず御堂は男の背後に回り、兵士の首に左腕をまわし、ぐいっと引き入れる。
空いた右腕は、男の後頭部へあてがい、そのまま前方へ一気に力をこめる。
「!!」
男は首を折られ、何も言わぬ肉塊となり、地に伏した。
「この人……死んでる……?」
声の主は詠美だった。胸元に二匹の獣を抱えている。
「……待っていろと言っただろ?」
「だ、だって……」
詠美は黙り込んでしまった。御堂は悟った。一人では不安だったのだろう。
「分かった。五秒で片付ける」
彼にとっては三人の兵を殺すことなど五秒もあれば事足りる任務であった。
あえて銃は使わない。狭い室内での拳銃の使用は耳に響くからだ。
男の腰に差してあった戦闘用ナイフを奪取すると、御堂はドアノブに手をかけた。
ドアのすぐ前に一人……。
左手を男の左頬に当て、一気に右側へ押し込み、首を折る。男の顔は右へ向き、そのまま崩れる。
「なっ!?」
三時の方向約五メートルに二人目……。
御堂は地を蹴り、二人目の男の首をすれ違い様に先程奪った右手のナイフで斬りつける。
「ぐあっ!」
ナイフは男の頚動脈を捕らえ、盛大に血飛沫を上げ、石床を紅く彩った。
「くそっ!!」
最後の一人……一番奥のイスに座っている。距離は約十メートル。
男は拳銃に手をかけ、迫り来る御堂へ――――
「遅いっ!」

御堂は右手のナイフを投げ放つ。ナイフは空を薙ぎ、男の眉間に深深と突き刺さる。
男の手からするりとニューナンブがこぼれ落ちると同時に、
ガチャン！
御堂が開けたドアが閉まる。
彼の予告通り五秒で制圧されてしまった。
御堂はドアに向かって言い放つ。しばらくすると
「終わったぞ、入って来い」
詠美が顔を出す。
「え？　……ウソ？」
(あの女、死体を見て驚いてやがる……まぁ、俺の予想通りの反応だな)
「あんた……弱キャラじゃなかったの？」
「……は？」
御堂の予想とは少し違ったようだ。
「何言ってやがる。俺は元々強ええんだよ」
「ウソウソ！　だって三人もいたのよ!?　なのにナイフ一本で勝つとか映画の世界じゃない！」
「しらねぇよ！　いちいち文句言うな！」
「みとめない！　みとめない！　したぼくがこんなに強かっただなんてぜーーーーったいみとめないんだからぁ！」
「あぁ、分かったよ、それじゃあ俺は弱いってことにしといてくれ」
「……やけに素直になったじゃない、さてはあんたしたぼくとしてのじかくが――」
「お前を相手にしていても、無駄な時間を過ごすだけだ」
御堂はそう言い放つと、施設の内部を調べまわった。
無線施設ではなかった。どうやらここは兵の詰め所らしい。簡単な水道と照明、寝具、食料、いくつかの武器弾薬。それとバイクがあった。
御堂は保存が利きそうな食料と水、武器弾薬を布袋に詰め込むと、バイクを調べた。

(二輪車か、これは使えそうだな)
「おい！　そろそろ行くぞ！　乗れ！」
バイクのエンジンを吹かしながら御堂が言った。
「待ってよ！　イロイロしらべてるんだからぁ！」
詠美は兵士の持ち物を漁っていた。
「ゾンビをやっつけるゲームであるじゃない死体調べるやつ」
「いいから乗れ」
「それに、二人乗りはおまわりさんにつかまるのよ？」
「いいから乗れ！」
「わ、分かったわよ！　乗ればいいんでしょ！　乗れば!!」
詠美は迷彩色のぶかぶかなヘルメットを被り、バイクに乗った。
「しっかりつかまってろ、振り落とされるなよ！」
「え？　ちょっ――」
詠美の抗議はエンジン音によってかき消された。

## 399　決意

あたりに一発の銃声がこだました。
(あの方角は、それにあの音は。まさかあの二人になにか！)
弥生はマナの追跡を止め、冬弥と由綺と別れた場所に引き返し始めた。
(藤井さんに由綺さん、私が着くまで持ちこたえてください)
気は焦るが、今は夜であり視界も悪く、足場も悪い。走るわけにはいかなかった。
それでもできる限り急ぐ内に弥生は異常に気がついた。
(おかしいですね。あの銃声の後何の物音もしません。戦っているならなんらかの音がするはずです。まさか、もう二人とも……)
(いえ、そんな事はありえません。あってはいけな

いんです）
　内心でそう言い切ったものの、次から次に悪い想像が浮かび上がってくる。
（大丈夫、藤井さんなら命に代えても由綺さんを守って……）
　そこまで考えたところで弥生は冬弥の眼を思い出した。
（最初藤井さんは何か迷っているような眼でした。でも次に会ったときの眼は何かを決意した人間の眼でした。まさか。まさか！）
　そのまさかであった。そこにあったのは現実感の無い悪夢。自分が先ほど渡した44マグナムを右手に持ったまま顔の左半分が無くなっている冬弥。そして穏やかに、まるで眠っているかのような由綺。
　だがそんな状況でも弥生の理性は状況を的確に判断する。
（藤井さんはもうどうやっても無理ですが、由綺さんならあるいは……）
　弥生は由綺の体を調べ、首筋に痣を発見した。
（やはり藤井さん、首を絞めて殺したんですね）
　無理心中は相手を絞殺する事が多いと弥生は知っていた。
　そして一縷の望みをかけて教習所で習った人工呼吸と心臓マッサージを始める。
（由綺さん、生き返ってください！　私はあなたをスターダムにのしあげる以外生きる理由がないんです！）
　弥生は必死に人工呼吸と心臓マッサージを続ける。が、しかし由綺が自発呼吸を始めることはなかった。
　人工呼吸と心臓マッサージを初めてから十分、ついに弥生はあきらめた。それ以上やっても生き返る可能性は、ほぼ零に等しいからだ。
（藤井さんと由綺さんを脱出させるため。そう思って四人の命を奪った私のしたことは全て無駄だったのですね……もう生きる理由もありません。藤井さん、由綺さん、今私もあなたがたと同じ所にいきま

す……）

　弥生は冬弥の遺体の側に跪き、左手で冬弥の右手をそっと握り、冬弥が握ったままの44マグナムを自分の胸に押し当て、右手で引き金を引いた。
　ガチン、そう音をたてて撃鉄がおちる。しかし弾丸が発射されることはなかった。
　ガチン、ガチン。何度繰り返そうとも同じであった。
（弾切れですか。私は……、私は……、死んではいけないのですか？　生きる理由も無いのに。それがあなた方のためにといって罪のない命を奪った私への罰なのですか？　だとしたら酷すぎます。藤井さん、由綺さん、私を死なせてください！）
　その時声が聞こえた。それは弥生だけに聞こえた声だった。
　弥生さん、生きて。
　弥生さん、生きてください。
　それが私達の最後の願いです。

　涙が止まらなかった。生きる理由が無いことに。それでもなお死んではならない事に。しばらく弥生は泣き続けていた。
　泣きやむと再びいつもの弥生に戻っていた。二人の装備から使える物を探し始める。それが終わると弥生は立ち上がり歩き始めた。最後に二人の遺体を一瞥する。そこで弥生は唐突に重大なことに気がついた。
　今の気温なら一日で遺体が腐敗し、二日で腹部が膨張し、三日でガス圧で破裂する。そうなると伝染病をばらまく恐るべき爆弾となる。
　さらに遺体に蛆がわきハエが大量発生する。そしてそのハエもまた伝染病をばらまく。広まる速度を考えてもこの島は遅くとも三日後には人の住めない死の島と化す。
　それを防ぐには全ての遺体を埋葬せねばならないが、満足な道具も無く、二人の遺体の埋葬すらできない以上不可能であった。

（なんとしてでも三日、できれば二日以内にこの島を脱出せねばなりませんね。私は死んではならないのですから。それが藤井さんと由綺さんの願いなのですから）

## 400　新たなる生きがい

（さて……どうすべきか……）
弥生は機関銃を片手に、民家の中へと入る。
森、山を抜けた所にある小さな集落。
その中では恐らく一番の大きな家。
誰もいない。人の気配も足跡もない。
「ふう……」と息を吐いて、弥生は横のガレージへと入り込んだ。
中には古ぼけた車（暗くて色までは判別不能だ）が止まっていた。
何故か鍵が開いていたドアを開き、そして腰を下ろす。
カチッ……
普段は吸わない煙草――バージニア・スリム――の箱を開封し、そっと火をつける。
小さな明かりがガレージの闇の中にぽっと浮かんだ。
脱出の為に弥生が考えていることは二つ。
脱出への道を模索し、黒幕をぶち倒すか、ゲームの主旨に乗っ取って、全員殺してここを出るか。
生きて帰れるならば前者、後者のどちらを選んでもよかった。
……もう、弥生に守るべきに値するような知り合いは理奈しかいない。だが、その理奈も弥生にとっては他人同然の付き合いでしかないのだ。
（その理奈もすでに死んでいるのだが、そこまではまだ弥生は知らなかった）
ここで考えるべきは効率――果たしてどちらを選ぶのが賢いか。
「ごほっ……」

慣れない紫煙に巻かれ、少し咳き込む。
「ダメですね……やはり……」
弥生は闇の中苦笑する。
「現実的に考えれば……どうすればいいか決まっています……」
紫煙と、かすかに浮かんだ涙が傷ついた目に染みた。
脱出へのリスクを考えれば、おのずと答えは見える。守るべき者がいない以上、ゲームに乗ったほうが現実的だ。
胃爆弾、閉鎖された孤島、戦力の見えない敵——さらには、信用、信頼できるような生き残り——協力者がいない。
下手に信頼して寝首をかかれてはそれこそ笑い話だ。
これだけの材料が揃っている今、この場で反抗する気にはなれなかった。
「生きて帰ると決めた以上、犬死はできません」
既に人を殺めている弥生は、最後の良心の抵抗を抑えきり、言った。
生きて帰り、することがある。
恐らくは由綺の代わりに誰かをスターへと押し上げることはもうできないだろう。
そしてする気にもならないだろう。
由綺の代わりなど誰にもできないのだから。
帰ってからやるべきことは、復讐——。
自分のつくりあげてきたコネや、地位を利用して、黒幕を糾弾、あるいは殺す——。
必ず、どんな手段を用いても奴等を追いつめる——。
「ある意味感謝しなければならないのかもしれませんね。私に——新たなる生きがいをくれたのですから」
それに由綺、冬弥が死んでも、もしかしたらあの約束は有効かもしれない。
十人……いや、あと六人殺すだけで自分は生きて

帰れるかもしれない。
――二人が死んだ今となっては、まったく信用できない話だとは思えるが――
「できれば理奈さんは保護したい所ですね……」
そう言いながら、もう一度だけ大きく煙草を吸って――吐いた。
もう咳き込みはしなかったが、また少しだけ傷に涙が染みた。

## 401　苛立ちと愉悦と

「ジョーカーか……存外、役立たんな」
潜水艦内で高槻は一人ごちた。
（しかも、参加者同士でまたつるみ始めていやがる。ゲームもそろそろ終盤の時期だっていうのに……）
そこで、高槻は何か良いことを思いついたというように顔をほころばせる。
（次の放送時にはジョーカーが存在することを発表して、また奴らをかき回してやろうか？　名前を明らかにする必要はない。だから、ジョーカー共が実際に何人残っていようが関係ない。今現在も、仲間のように溶け込んで、最大最高の機会を狙っているはずだと吹き込んでやれば、もう一度疑心暗鬼の状態に戻るはずだ。そこで再び殺し合いが起こればよし、起きないくらいにぬるい考えの奴らなら、ジョーカー達もさぞやりやすいってことになるだろうよ……）
高槻は『くくく』と低く笑った。
時計に目をやり、次の放送まで、もうしばらく時間があるのを確かめる。そして、別のことを思い出して手近なメイドロボに話しかける。
「おい、潜水艦の修理はどうなってる！」
「予想外のトラブルにより遅延しております」
問われたメイドロボは機械的に返答する。
「はぁ!?　ふざけんな！　いつ直る！」
「はっきりとした時間は不明です」

その抑揚のなさに高槻は苛立った。
「はっきりとは……じゃあない！　確認しとけ！」
（——全く、コストばかり高くて使えん奴らよ……）
そうして高槻がいらだっていたのもしばらくの間だった。
メイドロボを叱りつけてから数分後には、もう下卑た笑みを漏らし始めていた。
次の放送で再び参加者達の表情が曇る様子を夢想しているかのように。

## 402　出来の悪い……

「はい、これで大丈夫。首は暫く動かすんじゃないわよ、傷口開くから」
そう言うとマナは、ぱんぱん、と手を叩く。
「うん、ああ……ありがとう」
とりあえず礼を述べてみたものの、祐介には今ひとつ状況が掴めない。
（えぇと、確かテンパってワイヤーで首絞めて、でも自殺は未遂で終わって、それで天野さんが駆け寄ってきて……その後は）
思い出せない。
まあ、目の前の彼女——観月マナ、と言うらしい——が自分を助けてくれたのは間違いないし、だから礼を言うのも間違ってはいなかった、はず。
「……あのさ」
「何よ？」
マナが鋭い目つきで、自分を睨み付ける。外見からは想像も出来ない迫力に、祐介は多少たじろぐ。
「えっと、……何処から見てた？」
最初から見られていたら余りにも恥ずかしい。外から見たら陳腐な三流芝居そのものだ。
「何処から、って……何処も見てないわよ。なんか物音がしたから恐る恐る見に来たら、そこの女の人

があなた抱きかかえてるところを見つけただけ」
「そう」
良かった、流石にあんな情けないところは他人には見せたくは……
「でも、あなたたちが何をしてたかくらいは分かるつもりよ」
「へ？」
思わず間抜けな声が漏れる。
「大方、そこの女の人がヒステリーでも起こして、なら仕方がない、自分が死ぬから君は正気になるんだー、とか、そんなところでしょ」
「ぐ」
当たりだ。
「まあ、仕方ないって言えば仕方ないけどね」
救急箱を片付けながら、マナは語りかける。それは決して馬鹿にした口調ではなく。
祐介には、それがとても大事な話のように思えて、茶々を入れることは出来なかった。
「友達だってこの島じゃいつ裏切るかわからない。ましてや周りは殆ど知らない人。突然気が触れたり、衝動的に死にたくなってもおかしくないわよね」
自分も……そうだったし、と小さくマナは呟いた、が、それは祐介の耳には届かない。
「……だけど、自殺は、駄目。まだ他人に殺されるほうがマシよ。自殺して、後の人に何を残せるって言うの？　少なくとも、いい感情は残せないわね。……しかも、目の前でされたら、尚更」
ごもっとも。自分はどうかしていたんだ、と祐介は思う。そもそも正常だったらあんな安易で下らない手段に出るはずがない。彼女に拒絶されても、彼女を護る手段は他にあった筈だ。
あの時の自分は、それを放棄して、何もかも終わらせようとしていた。つくづく異常な精神状態だったんだなあ、と思う。
「そうだね、どんな理由があれ、自殺は、駄目だな」

自嘲して、ふふ、と笑う。
彼女は、この小さな身体で、この島でどれだけの惨状を経験し、どれだけの教訓を得たのだろうか。
少なくとも、自分よりは余程立派な人物だと、感じた。
「分かってるんなら反省しなさい。それで、ちゃんと彼女のそばに居てやりなさいよ」
と、マナはちらりと美汐の方を見やる。肉体的にも精神的にも酷く疲れたのだろう、ぐっすりと眠り込んでいる。
「彼女じゃないって……」
苦笑しながらやんわりと否定する。そうだったら、いいけど。とも内心思っていたが。
「それより」
素朴で単純な疑問。
「何で、救急箱なんか持ってるの？」
それを口にした瞬間、マナの眉がぴくり、とつり上がる。慌ててフォローする祐介。
「あ、ごめん、いいんだ、言いたくないなら、それで」
暫しの間マナはぎろり、と祐介を睨みつけていたが、暫しの間があって溜息を一つつくと、
「まあ、いいわ。話してあげるわよ……私も少し休みたいと思ってたし、長話もいいでしょ」
そう言って腰を下ろす。口調は軽かったが、その表情は真剣そのもので。
祐介は、ああ、この子は、きっと僕なんかよりもずっとずっと大きな、大事な出来事をこの島で経験したんだろうな、と感じた。
そして、それは事実で。
「……というわけ、ちゃんと聞いてた？」
「あ……うん」
曖昧に返事を返す。自分の予想していたよりも、遥かにマナがこの島で経験してきたことは辛くて、重くて、祐介はそれに圧倒された。

「何よ、ホントに聞いてたの？」
ムッとした表情でマナは祐介をにらむ。その表情が自然に出来るようになるまで、どれだけ辛い思いをして、それを乗り越えてきたのだろうか。そう思った祐介は、正直に、
「君は、強いね」
尊敬の念すら込めて、そう言った。
マナは笑わなかった。ただ、憂いを帯びた表情で、
「そんなこと――ない、わよ」
と呟き、俯いた。
祐介は気づく。
彼女の身体は思ったよりも遥かに小さくて。まるで触ったら壊れてしまいそうなほどに。
（……気まずい）
もとは自分の発言からこうなったわけで、なんとかフォローしないといけない、と祐介は思った。
だから、場を取り繕おうと、珍しく対外的に中途半端な茶目っ気を出してしまって、

「何だか、出来のいい妹に説教をされた気分だよ」
そう言ってしまった。この台詞の後には、まあ僕には妹なんていないんだけど、ははは、と続くはずだったのだが、それは明らかな怒気を含んだマナの声によってかき消される。
「………あなた、何年生よ」
だが、鈍感な祐介はそれに気付かない。それどころか、知らずのうちに火に油を注ぐ。
「ん？　二年だけど……あぁ、中学じゃなくて、高校のね」
マナはゆらり、と立ち上がる。突然の無言の行動に祐介は驚き、思わず一緒に立ち上がってしまい、
「私は……高校……三年生よこのバカ！」
マナのその台詞と同時に、祐介の脛に伝家の宝刀が炸裂した。
「ぐぎゃあっ！」
世にも情けない悲鳴を上げて、脛を押さえながら祐介は前のめりに崩れ落ちる。

………三年？　この目の前の女の子が。僕より、年上。へえ。それはそれは……え？　本当に？
……人は、見かけに、よらないなあ。
突然訪れたどうしようもない痛みのなか、祐介はぼんやりと、そんな事を考える。
そしてその祐介を見下ろしながら、マナは、
「まったく、出来の悪い弟を持った気分よ！」
まるで勝利宣言のように、そう吐き捨てた。

## 403　ハレルヤ

よいしょ……っと。
あらあら、わたしもそんなことを言う歳になってしまったのかしら。
そんなつもりはなかったのにね。
それにしても名雪、随分と重たくなったわね。
あら、そんなことを言っちゃ駄目だったかしら。
そんなつもりはなかったのにね。
でも昔はこんなに重くはなかったわよ。
そうね、あの頃はまだ全然ちっちゃかったものね。
それにこんなに大人しくなかったわよね。
いつもわんわん泣いていて、もぞもぞと背中で動いてばかりだったわ。
あの時はまだわたしも若くて、母親として子供にどう対処したらいいか全然わからなかったから、随分と泣かせてばかりだったわね。
うふふ。今でも手間ばっかりかけているけれどもね。
え、ううん。そんなんじゃないのよ。
そんなつもりはなかったのにね。
大丈夫。
お母さんはもう名雪を泣かせたりしないから。
だから笑ってちょうだい。
お母さん、名雪がそうして笑っていられるのが一番の幸せだから。
もう大丈夫。

大丈夫だから。
背中に名雪を背負いながら秋子は歩き出していた。
ずるずるとずり落としそうになりながらも、しっかりとした足取りで廊下を歩いていく。

——名雪。
——ナ雪。
——なゆき。

秋子の中にはたくさんの名雪がいた。
笑っている名雪。
拗ねている名雪。
怒っている名雪。
困っている名雪。
泣いている名雪。
普段のままの名雪。
小さい頃の名雪。
大人びた将来の名雪。
赤ん坊の頃の名雪。
その全ての名雪が秋子をみつめていた。
そんな中、秋子の中では冷静に醒めていく自分と、浸ったままの自分が戦っていた。
この世の他の全てを捨ててまで、護ると誓った名雪の死でさえも、心の奥底では冷静に認識して受け入れようとしている自分自身が恐かった。
忘れたい。
——否、そんなものはありはしないのだと。
名雪がいないことなど。
自分の前から消えることなど。
そんなことが起きることなど有り得ないのだと。
そう、言い聞かせる。
名雪はいつも自分のなかにいる。
いなくなるはずがないではないか。
そのはずなのに泣きたかった。
泣いたはずなのに、泣き続けたはずなのに。

今はどうして泣けないのだろう。
どうしてこんなことを考えてしまうのだろう。
怒りは沸かなかった。誰に対して怒りを覚えるというのだ。例えこの島に生き残っている全ての人間を殺戮したところで——いや、ちがう。
生きているのだ。

首を振る。
背中にしがみついていた名雪の上半身が崩れ落ちそうになり、慌てて背負い直した。

ごめんなさい。
落としそうになっちゃって。
起きちゃったかしら。
これくらいじゃ名雪にとっては大した事はないわよね。
そんなつもりはなかったのにね。

この身をズタズタに引き裂きたかった。
この頭をかち割りたかった。
そうでもしないとこんな有り得ないことばかりを考えてしまう。
自分が何を考えているのかを思った。
名雪。
自分の娘。
その自分の娘は今、自分の背中にしがみついている。
大人しいのは眠っているからだ。
そう、ちょっとばかり疲れていて休んでいるだけに過ぎない。
この娘はすぐに寝てばかりいるのだ。
そしてどんなところでも眠っていられるし、一度寝たらなかなか起きてくれない。
随分と苦労したものだ。
この娘を起こせるのは一人しかいない。
そう、たった一人しか。

Hallelujah

？

名雪、歌ってるの？
違うの。
じゃあお母さんの空耳かしら。
お母さんには聞えるんだけど。

Hallelujah
Hallelujah

教会……
クリスマスかしら……
違うわね。
珍しいけど、
あら……
そうなの……

このドレス……
結婚式なの？
いつの間にこんな……
そう……そうよね。
名雪は祐一さんと結婚するんですものね。
ウエディングドレスを着るのは当然よね。
綺麗よ、名雪。
祐一さんもきっとそう言ってくれるわ。
はやくマごノカォヲ……
そうだ、こんなことしてられないよ。
祐一を探さないと。
そして私との結婚式をあげなくちゃ。
祐一。
あんまりレディを待たせちゃダメなんだからね。
七年も待たされたんだから。
もう待てないよ。
結婚しようよ。
お母さんもきっと喜ぶよ。

お母さん？
そう言えばお母さんはどうしたんだろう？
あれ？
おかしいよね。
お母さんはどこ？
お母さんにも早く見せたいな。
きっと喜んでくれるよね。
誰よりもきっと。

Hallelujah!

For the Lord God Omnipotent reigneth
The Kingdom of this world is become the
Kingdom of our Lord and of His Christ,
and He shall reign forever and ever,
King of Kings, and Lord of Lords,
Hallelujah!

水瀬秋子は自分との戦いに勝利した。
そこにいるのは死体を背負ったまま祐一を探す、水瀬名雪でしかなくなっていた。

## 404　ぼくの戦争　――殺人――

特に変わった事がない夜だった。定時に長瀬一族に連絡を入れる以外は仕事もない。高槻は大きく欠伸をしながら煙草をふかす。煙が爆弾の管制室に充満し、世辞にも空気が良いとは言えない。後で窓を開けて換気をしなければ、と灰皿の上で山となっている吸殻を見ながら高槻は思う。
何故、自分のような偉大な科学者がこのような雑務を行わなければならないのかと不満ではある。こんなことをやっている暇があるならば研究を続けていたいのが本音だ。
けれど、ＦＡＲＧＯは自分たちを援助してくれる長瀬一族には頭があがらないから仕方がないと言え

ば仕方がない。半ば崩壊しかけていたＦＡＲＧＯが辛うじてその体制を保っていられるのも、彼らの支援のお陰なのだ。だがそれもＦＡＲＧＯの力が全盛期に戻るまでだ。今やＦＡＲＧＯの最高責任者の一人となっている高槻は思う。ＦＡＲＧＯに昔のような力が戻れば長瀬一族など恐るるに足らずだ。
　高槻は煙を吸い込みながら笑い、煙草の灰を落とす。
　少し気になることとして、どうも自分のクローンが幾つか作られているようだという情報があった。長瀬一族も訳のわからないことをする。クローンを作ることができる技術力の高さにも驚かされるが、わざわざクローンを作ることの理由の方が読めず、高槻を混乱させる。
「まあ、優秀なオレのクローンを作れば管理がうまくいく、っていうのはよくわかるがなあ。それでもわざわざ高い金を使ってクローンを作るのに意味はあるのかあ？」
　――自問しても答えはない。天才の自分が思いつかないのだから、他の誰だって思いつかないだろう。
「まあ、殺し合いやってるバカどももオレがたくさんいたらびっくりはするだろうが……」
　高槻はもう一度大きく煙を吐く。――少なくとも定時放送を入れる役目を負わされた「自分」は確認した。他にも役目を負わされている奴はいるだろう。オリジナルである自分には劣るだろうが、自分のクローンであるからにはどいつも皆相当に優秀な筈だ。
「優秀なオレらが優秀な頭脳を並べて作戦を立てれば、長瀬一族を打ち殺すことも可能かもしれんのになあ。そういうことは考えんのかね、老人どもは――くく」
　新しい煙草に火をつけて高槻が小さくそうぼやいた、
　その時、
　けたたましい勢いで警報が鳴る。高槻は眉を顰める、机の中に放り込んでおいた拳銃と立て掛けてお

いた機関銃を自分の傍に寄せると、通信からの連絡を待つ。何事が起こったのだろうか、連絡を、煙草を咥えながら待つ、待つ、待つ、ノイズ、聞きなれた部下の声、
「し、侵入者が現れました！」
案の定だった。この殺し合いゲームが始まって最初の、自分に対する反乱が起こったのだ。杜若きよみの行動をこのゲームに対する最初の非暴力的な反乱であるならば、この侵入は最初の暴力的な反乱ということになる。
「――誰だ？　その無謀な馬鹿野郎は」
「まだ判明しておりません。警備の兵士から奪ったヘッドギアで頭部を覆っているため……」
「早く判別しろ馬鹿。体内爆弾のレーダーもこの基地の中では判別に時間が掛かるんだぞ。――装備は」
「サブマシンガンを装備しております。防弾チョッキを警備兵から強奪している可能性も考えられます」
機関銃か。厄介だな、と思いながら高槻は眉を寄せる。高槻は自らの横に置かれた機関銃に目を遣りながら思う。爆弾の性質を考えている。奴が誰だか判らなければ爆弾は爆破できないし、判別や殺害が遅れれば爆風のためにこの施設が用を為さなくなるかもしれない。
「早めに叩け。餓鬼一人くらいお前ら殺せんだろ。行け」
「はッ」

走る。薄暗い明かりの下を自分でも信じられないくらいの嘘のような速さで。息が切れる。あと何分走り続けられるのだろう。この施設を駆け登って爆弾管制装置を破壊して叔父達と会うまで自分の乏しい体力は持つのだろうか。妨害もあるだろう。無数のサブマシンガンから放たれる無数の弾丸が自分の身体を蓮根のように穴だらけにしてしまうかもしれ

ない。それでも走る。荒ぶる動悸を押し隠して、最短距離を駆け抜ける。乱れる思考。それでも意思は乱れることなく。

まっすぐに、まっすぐに、まっすぐに。

目の前に邪魔をするものがいるならば殺せ。右手に握った希望の弓と左手に握った勇気の矢で敵を撃ち殺せ。サブマシンガンで蜂の巣にしろ。殺すんだ。

狩人になるのだ。

それが今、彰の脳髄で下された決定事項だ。

自分達が最初に集められていたホールの横を走り抜ける、気配、もう自分の侵入が明らかになっているのだ、彰は急速に速度を落として小走りで様子を窺う、十字路の左側から最初の兵士が現れる。既に拳銃を構えて自分に狙いをつけている。機関銃クラスの武器は持っていない。とは言っても距離は十メートル、反応して回避するには短すぎる距離。

「死ねッ!!」

声と同時に弾丸が飛んでくる。この初弾をかわせば自分の、サブマシンガンの勝ちなのだと思う。思う前に彰の身体は動く。あくまで反応ではない。完全に予測で彰は身を転がした。横に転がり弾丸を受け流す、予測は的中、床で弾丸が跳ねる音が二つ。彰はすぐに身体を起こして前傾姿勢で薄暗闇の中息を吸い吐く。ここで一秒、右手のサブマシンガンを兵士の足に向ける、敵が二発目の弾丸を放とうとするが一コンマ秒遅い。彰の放った弾丸の雨が兵士の足に無数の穴を開け、血の匂いで彩った。ぐあ、と蛙を潰したような声が聞こえたかと思うと兵士は倒れて、その勢いで拳銃が彼の腕から離れる。この機を逃さず彰は身体を起こして高速で兵士に詰め寄り、兵士の上に馬乗りになり、苦痛に歪む顔を隠しているヘッドギアを奪う。

若かった。自分と同じくらいの年頃の青年だった。苦痛に歪む顔は自分や冬弥となんら変わらぬものだった。

彰は若い男の顔を左拳で殴ると無造作に立ち上がり、その喉を踏み潰す。苦痛に顔を歪める男は、自分の顔にサブマシンガンの銃口が向けられていることに気づくと身震いする、やめて、やめてくれ、と口が動いている。けれど喉が潰れているために声が出ない。彰は小さく深呼吸、
殺さなければ、次にやってくる兵士に対応できない。冷静さが少しずつ溶かされていく彰の世界はそう耳に囁く。
そうだなと彰は思い、一瞬祈った後引き金を引いた。
叫び声は、喉が潰されていたため殆ど出なかった。皮膚が弾け眼球が飛び出し鼻が潰れて歯が吹き飛んで舌に穴が開いて喉を突き破って血が口の中から溢れた。三秒もしないうちに原型は完全になくなった。骨も変形しているかも知れなかった。凄惨で醜い。気持ち悪い。正常で清浄な自分ならば嘔吐をもしてしまうかもしれない三流のスプラッタ映画のワンシーンのようだった。けれど彰は目を逸らさない。この人をこのような原型も判らない潰れたトマトにしたのは紛れもない自分なのだ。自分がやったのだ。自分がやったことから目を逸らせるほど自分は堕ちていない。
この人にも家族や生活はあったのだろうし、護るものもあっただろう。だけど自分にだってそれはあったんだ。
「こんな事に関わるからいけないんだよ」
もう耳が残っていないから聞こえはしないだろうし、脳味噌もこぼれているから理解は出来ないだろうけれど、彰はそれでもそう言った。
もう一度小さく深呼吸。——殺した。
冷静に人を殺せるもんだな自分も。薄笑いまで浮かぶ。僕はここまで外道だったんだな。ＯＫ．外道として人を殺しまくってやるさ。僕はもう人殺しだ。行こう。
けれど足が動かない。

どうしてだ。動かなければ死ぬ。行かなくちゃ。思うのに足が動かない。足が震えているのだ。地震でも起こったかのように足がふらつく。踏み出す力が足りない。
多分初めて人を殺したせいなのだ。畜生、動け。
十字路のような見通しのいい場所で佇むのは危険だと判っていたくせに、彰は結局十秒近くも十字路で待機してしまう。結果。別の兵士がサブマシンガンを身に付けてやってくる。足の震えが消える。外道だな僕は。自分の死が近づいたら足の震えが止まるのか。彰は舌打ちをしながら、とにかくどうするか考える。流石にサブマシンガン相手は分が良くない。自分は素人だ。互角に戦えたとしても大怪我を負うことは間違いなく、それでは目的が達成できず自分の勇気の矢は叩き折られたことになる。
「敵はそっちにいるかッ!!」
薄い暗闇の中で太い声が響く。その声を聞いて彰は考える。アイディアが浮かぶ。無傷で切り抜けるアイディアが。そう、今ここは暗闇だ。そして自分はヘッドギアをかぶっている為に顔がよく見えず、声がくぐもっていて、しかも防弾チョッキを羽織っているわけだ。この格好ならば他の兵士と何が違う。上着を脱げばそれで終わりだ。瞬間的に上着を脱いで防弾チョッキだけになってすぐに上着を放り投げる。そして何食わぬ顔で彰は息を切らすフリをする。
切らした息のまま言う、
「は、はいっ！　私は大森ですっ！　侵入者はあっちに向かいました、三沢がやられて、こいつも……くそっ」
その名は先程聞いた見張りの兵士の名前だ。これで自分に「部外者ではない」というレッテルを貼ることが出来る。
「何だとッ!!」
案の定、相手は素直に信じてくれた。
彰はそこまでは考えていなかったのだが、血に塗れていたのはさっき脱いだ上着と靴くらいだったの

だ。おかげで殆ど怪しまれなかった。
　とにかく上手くいった。彰は心臓の鼓動が高まっていくのを感じながら、右手に握ったサブマシンガンを強く握り締める。彼はまだヘッドギアをかぶっていない。狙うなら今だ。自分に背を向けている今、サブマシンガンを撃ち込むのだ。振り向かせるな。今なら首筋を狙って弾丸を撃ち込める、慎重に腕を動かして、
「――なあ大森」
「はッ」
　自分の返事を聞いて男は薄く笑う。
「おっかしいな。お前の身体から血の匂いするんだわ。千葉の血、浴びたか？」
　盲点だった。服を脱いだだけでは匂いは消せなかったか。彰は息を吐きゆっくりと応対、
「あ、いえ、はい、そうですが」
「――そっか。血を浴びるくらい近くにいたんだな、お前。そいじゃあ質問だ。侵入者が放った弾丸が床にたくさん刺さっている。これは何故。答えは上から下に向けて弾丸が放たれたから。押し倒されて殺された訳だな。さあて。お前は千葉の近くにいたんだよな？」
　気づかれたと思った。だから彰は迷わず引き金を引く、だが相手は瞬時に転がった。弾丸が床に当たって跳ねる音、外れた、畜生、まだッ！　弾幕を張るが敵は防弾チョッキを着ているし距離もとられた、自分の技術では無防備な顔面を狙い撃つことは出来ない。弾幕が切れる。畜生、新しい銃を鞄の中から出す暇は無い！　くだらないミスをしたッ‼　転がりながら男は自分に真っ黒な銃口を向けて、躊躇うことなく引き金を引く。彰は自分が死んだと思った。銃口はまっすぐ自分の顔面を狙っている。こんなヘッドギアなんてひとたまりもないだろう。畜生。こんなところで死ぬのか。そう思うと悔しくて涙まで流れない。
が、

視界が突然ずれる。唐突に低い視界になって彰は戸惑う。自分は今、瞬間的にしゃがんだ。天井辺りで音。弾丸が外れた音。痛みはない。自分はサブマシンガンの弾丸をかわしたのだ。秒速数百メートルの弾丸を目で追ってかわせる訳がない。今自分は本能の一種で回避したのだ。驚愕の声が聞こえる。それはそうだ、素人の自分がサブマシンガンの雨を搔い潜ったのだ。勿論弾幕は全く止まない。気を抜いたら一瞬で自分は蜂の巣だ。彰は転がる、転がる、転がる。遂には先の死体の傍にまで転がる。本能がその死体を手にとらせ、そして盾にした。弾幕が死んだ兵士の身体を焼く。防弾チョッキを着ているので盾としては優秀だ。弾幕が弱まる。

チャンスだと直感、本能が告げた次の行動は至ってシンプル。左手で先ほど脱ぎ捨てた上着を取り、四メートルの先で弾幕を張っている男に向けて投げる。男の視界が一瞬遮られ、そのまま上着が男の右手に絡みついてサブマシンガンを隠す。舌打ちの音とともに遂に弾幕が止む。何秒弾幕が止まっているかは判らないがその数コンマが勝負だ。

彰は前傾姿勢のまま走って、弾切れのサブマシンガンを横に放ると先ほどフロアに落ちた拳銃を拾い、そのまま四メートルの距離を飛ぶ。無音の世界に彰は落ちる。自分の呼吸音まで消えた世界で彰は走り、男が上着を腕から取り払う一秒の間に距離をゼロにして、男の顔に銃口を突きつけると一刹那も躊躇わず引き金を引いた。

男の額に丸い穴が開いて、血が噴出し、断末魔の悲鳴があがったかと思うと、男はゆっくりと事切れた。

一人殺すのも二人殺すのも同じだ、とよく言う。それに対する反論として、一人と二人は違う、と言うものがある。

――足の震えがない。最初の一人を殺したときに感じたような凍える心地がない。だから彰は思って

しまった、
「一人殺すも、二人殺すも、同じだね」
　彰はまだ無傷だった。呼吸が乱れている。心臓が破裂しそうだ。だがそれだけだ。彰はまだ傷の一つも負っていない。奇跡に近い状態だと思う。
「――ここからが本番だ。無傷じゃいられないだろうな」
　ゆっくりと上着を取ると、彰はそれを上から着込む。後に来た方の男が持っていたサブマシンガンを、その指から強引にはがすとそのまま装備する。先ほど弾幕を張っていたからそれほど弾丸は残っていないだろう。彰は嘆息するが、不満は言っていられない。これと、鞄の中の一丁と、拳銃。これが彰に与えられた武器だ。
　これであと何人殺せばいい。
　彰は走り出す。まっすぐ先には階段が見える。あの先には硝煙と血の匂いが待っている――彰の心に、そんな三流ハードボイルド小説のような一説が浮かぶ。
　彰は走る。硝煙と血の匂いの待つ「僕の戦場」へ向けて。

## 405　終りの始まり

「……あ……あ……ああああ」
「な……!?」
　驚きの声があがる。
　そしてそれはすぐ悲鳴に変わる。
　硝煙の匂いが当たりに漂う。
　ありえないはずのその匂いが、鼻腔をくすぐる。
　――銃弾は、あさひの体を貫いていた。
「い、いやあぁぁぁぁぁぁぁ……！」
　観鈴が叫び声をあげる。
　そして、晴子と智子は厳しい視線を彼女に向ける。
　――白く煙る64式を構えた、ＨＭＸ―12型、マルチに。

「……なにしとんねん」
智子は言った。
……わずかに震えながら。
「…………」
返事は無い、マルチは沈黙している。
「……なにしとんねんって、聞いとるやろがぁ!!」
智子は激昂した。
あさひは地面に倒れている。
そして、地面にはどくどくと流れる血、血、血の紅が広がっていく。
「あ……あ……」
恐怖、そして恐慌が観鈴から声を奪う……。
きっ、と晴子がマルチを睨む。
その視線の先にあったのは、無邪気に笑っていたマルチでもなければ、晴子の話に感動してロボットらしからぬ反応を見せた〝彼女〟でもなかった。
光が失われた目――。
そこに、かつてマルチと呼ばれた少女の面影は無かった。
かちゃり。
自動小銃が再び構えられる。
標的は……智子!?
「あかん!!」
銃弾が放たれる寸前、晴子がマルチに体当たりした。

ズダアァァァン！

マルチの体勢は崩され、あらぬ方向を向いた銃口から放たれた銃弾が、何かを貫くことは無かった。
――第二射ハハズレ。
ぷしゅーッ。
マルチの肩口、うなじの辺りから湯気が噴出す。
その小さい体で発砲するというのは相当負荷がかかるようだ。
体当たりの影響で体勢が崩れたマルチは、放熱の

反動でその場に倒れた。
およそマルチらしからぬ生気の無ぃ目。
しかしそれは、正にロボットと呼ぶにふさわしい表情ではあった。
――まさかこんなことになるなんて、誰にも予想がつくはずが無ぃ。
智子はぃぶかしむ。
……あの目。
どこかで見たことがあるような気がする。
そう、あれは確か――
「くそっ！」
智子は走って倒れたマルチに接近した。
この隙に拳銃を奪わないと！

ザッ！

――マルチの立ち上がりが一瞬速ぃ！
「何ぃっ!?」
がすっ、という鈍い音。
マルチはすれ違いざまに拳銃のグリップで智子の腹部を強打した。
「ぐふっ……」
智子が崩れ落ちる。意識は失っていない、しかし数秒は動くことが出来ない。
のんびりとした先程までの様子からは想像もできない俊敏な動作でマルチが駆け出す。止めを刺そうとしているのか、その先にはあさひがいる。
「まずいっ!?」
晴子は声を上げて、瞬間に自分もその方向へ走った。
だがしかし、これも一瞬マルチに及ばない。
「――――ダメっ！」
その、マルチの進行方向の真ん中に。
「……ぅ……みす」
血を流しながら地面に座る彼女の前に。
「が……ぁ……」

腕を大きく開いて、立ちふさがる少女。
「観鈴っっっ⁉」
――その瞬間、激しい激突が起きた。

「このアホンダラがあぁぁぁぁあっっっ‼」
障害物にぶつかったせいで勢いを失ったマルチがほんの一瞬立ち止まったところに。
「うりゃあああああああああああああ‼」
――晴子の飛び蹴りが決まった。
その衝撃に、マルチは茂みの近くまで蹴り飛ばされた。
丁度、あさひの背後の方には、マルチに吹き飛ばされた観鈴が倒れていた。
「観鈴っっ⁉」
「大……丈夫……です」
左手で胸を押さえながら、もう片方の手で観鈴の胸に触れているあさひが、消え入りそうなか細い声でそう答えた。
「心臓は……動いてる……多分……気絶して……るだけ」
「そか……いや、むしろあんたの方が」
「晴子さん！」
その瞬間、晴子は背後から走ってきた智子に跳ね飛ばされ、一緒に地面を転がった。
そして、その一瞬後に銃声。
地面に膝を衝いて、まるで先ほどのダメージなど無かったかのようにマルチが発砲した。
「くそっ、あの腐れロボットがぁっ！」
そう言って、立ち上がって晴子が銃を取り外したと同時に。
ザッ！
……マルチは背後の森奥へと姿を消した。
智子は即座に追いかけようと立ち上がった。だがそこへ……。
「待ちぃや‼」

……晴子が静止の声をあげた。
振り向いて晴子の顔を見る智子。
……そこには、苦渋と焦りが滲み出た表情が浮かんでいる。
「あんた、その腕でどうする気や？」
短いセリフだった。
だが、そのセリフは十分に智子の核心を突いていた。
「……追います。そして、止めます。あの子が人を殺すのを、指を咥えて見ているわけにはいかんでしょう？　本当のあの子はあんなこと絶対に望みません。あんな顔をしたあの子をそのままになんてできませんわ」
「んで、あんたまで殺されたらどうするん？　無駄死にやで、そんなの」
「でも、このままにしといたら、もっと取り返しがつかん事になります。あの子にそないなことさせるわけには……」
「うちが行く」
抜き身のシグ・ザウエルショートの撃鉄を起こしながら、晴子はそう言った。
「あんたの代わりにうちがいったるわ」
「え……」
「あのクソボケはうちの仲間を撃ちおった。生かしておけん」
「あ……でも……」
そのセリフに、素直に智子は頷けなかった。
「……なんてな」
「え……」
「分かっとる、あんたの気持ちも。だから……うちは、あの子があれ以上罪を犯さんように止めるために行くんや」
もう既にマルチの姿は見えない。
「堪忍な！　その子らのこと頼むで！」
そう言って、晴子は智子の返事を待たずして、森の奥へとマルチを追っていった。

「………くっ」
晴子の背中を目で追う。
その姿はどんどん遠くなり、すぐに見えなくなった。
……武器は無い、傷まで負っている。
ハッ、ホンマもんの役立たずやな！
智子は……心の中で自分を責めていた。
「智子……さ……ん」
声が聞こえた。とてもか細い声が。
「せや、あさひ、あんたの傷の手当せんと……」
「……はい……ちょっと……疲れちゃいました……」
「まず止血や……くそ……なんかないか」
胸から濁々と流れていた血は、未だに止まらない。
「あかん……私なんも使えそうなもん持っとらん」
悩みながら辺りを見回す。——観鈴。
「観鈴！　なんか……無いか？」
返事は無い。仕方なく、智子は観鈴の体を揺さぶりながら漁り始める。
「う………うん」
その振動のせいか、体をまさぐる智子の手のこそばゆさのせいか、観鈴の目が開く。
「目ぇ覚めたか？　起き掛けで悪いけど、なんか布持ってへんか？　布」
観鈴は、よろよろとスカートの内ポケットから、白い布きれを取り出す。——ハンカチだ。
「無いよりマシや。観鈴、これ借りるでっ！」
差し出す観鈴の手から、やや強引にそれをひったくると、おもむろに智子はそれを引き裂いた。
びりびりびりっ。
その鮮烈な音に、観鈴は無理矢理意識を覚醒させられた。
「あさひさんっ!?」
自らのすぐ傍に倒れている彼女へと、観鈴はすぐさま駆け寄った。
その姿を見て、あさひは声無く唇だけで笑顔を作

る。
　それを見た瞬間、観鈴は込み上げてくる涙に気付かざるを得なかった。
「心臓……肺……ぎりぎり避けとるようやけど、ようわからへん。くそ……」
　悔しそうに、智子は呟く。
　実際のその傷は、左胸ぎりぎりの辺りに見つかった。
「あうっっ！　ぐっ……」
「頑張りや！　弾は貫通しとる、上手くやれば……上手くやればっ！」
　強気な口調と裏腹に、智子の目にも涙が浮かんでいた。
　相応しい言葉を捜すことも出来ず、観鈴はぎゅっと両手を握り締め、その様子を見守っていた。
　それから数分。止血作業を続けていた智子の手に、そっとあさひの手が触れた。
「あさひ………？」
「……私なら……大丈夫」
　あさひは、智子の目を見て、言った。
「……行って……下さい」
「そない言うたかて、あんたやって重傷やねんで⁉　放っておけるかいな⁉」
「晴子さん……は……今……一人……」
　あさひのもう一方の手が、智子の肩口を掴んだ。
「一人は……危ない」
　観鈴は、ハッと表情を凍らせた。
「でも……あんた」
　ちらりと観鈴に目をやって、智子は言葉を濁す。
　——その瞬間、肩に置かれていた手に力がこもった。
「観鈴ちゃんから……お母さん……奪わせちゃダメ」
　その凄絶な表情に、智子は息を呑んだ。
　観鈴は歯を食いしばる、顔をしかめて目を瞑った拍子に涙が零れた。

智子の肩に置かれていた手が離れ、空を斬り、そっと観鈴の前へ投げ出される。
「あさ……あさひさん……」
しゃくりあがる声を無理矢理押し殺して、観鈴はその手を握った。
その感触を感じて…………にっこりと、あさひは笑顔を浮かべると――

――がくり、と落ちた。

「……あ……あほぅ……寝たら……寝たらもう起きれんでぇええええ!!」
「そんな……そんなぁあああ!!」
叫んだ直後、ふらっと、観鈴がよろめいた。
「みすずっ!?」
驚いて観鈴の腕を取る智子。
……気絶している。
やはり、耐えられなかったのだろうか。

……当たり前だ、そんなことは。
智子はそっとあさひを寝かすと、続いて観鈴も地面に横たえた。

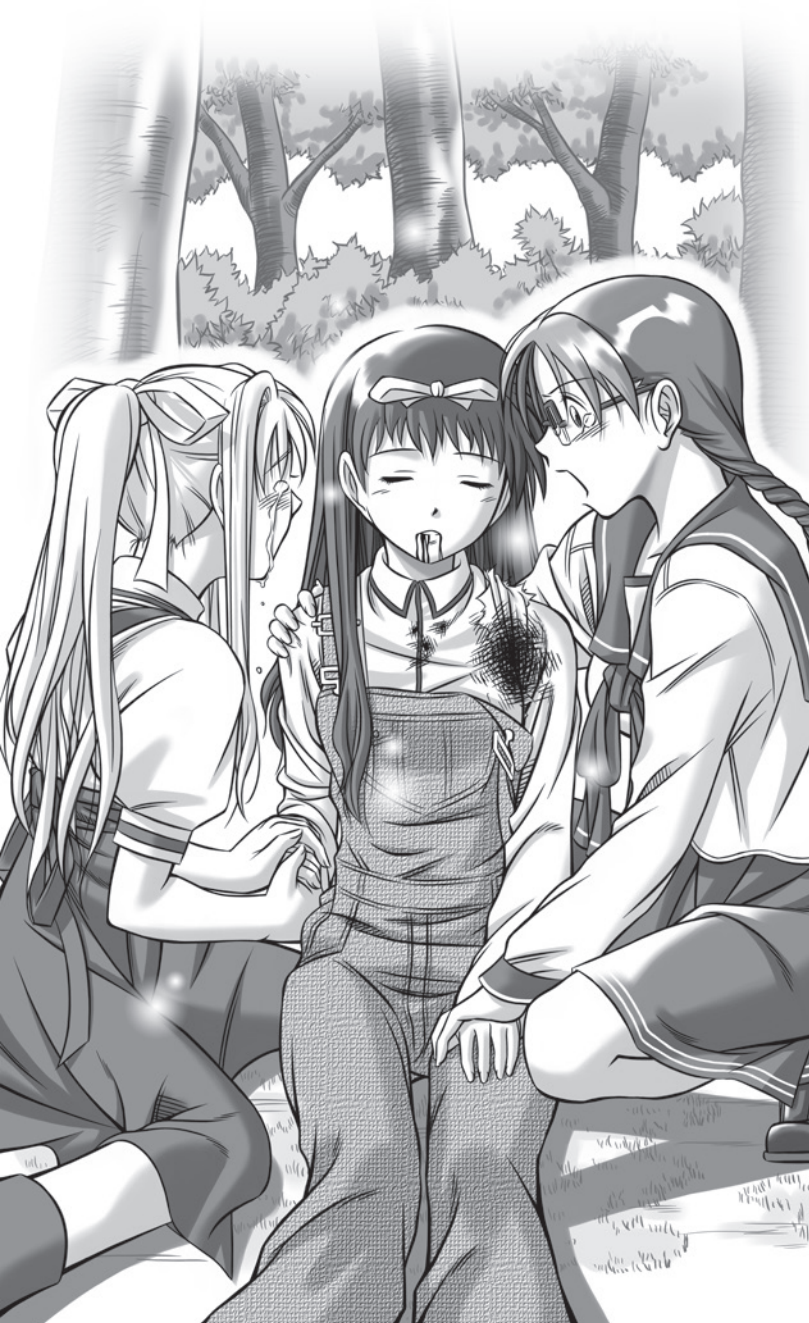
――迷いは消えた。

智子は立ち上がる、そして彼女たちから顔を背けて言った。
「……絶対、あんたの遺言は守ってみせるからな」
そう言って、智子は駆け出した。
小走りに森に入ると、その姿はあっさりと夜の闇に消え去った。

智子の背中が消えた後、あさひは目をゆっくりと開いた。
「なーんて……まだ……死んで……なかった……

り」
上半身を……震えながら起こすと、自嘲気味に呟く。
「これでも……プロの役者……なんですから……ね……。やぁい……みんな……騙された……」
――だって、こうでもしないと、智子さんは行ってくれそうになかったから。
「でも……ホントは……ちゃんとしたお仕事してるところ……見ていただきたかったん……ですけど……ね……」
胸部を押さえた純白のハンカチが、いつのまにか真紅に染まっていた。
「モモ……ちゃん、か……」
それはカードマスターピーチの主人公で。
それは演じていない本当の自分で。
ふと、あさひはあのセリフを言いたくなった。
例え、それを聞く人が他にいなかったとしても。
「……へへっ。……あたしってば……やっぱり……不幸……」
――それは、アニメのモモ？
――それとも、現実の私？
「なーんて……分かるわけ……ないか……」
背後に倒れている観鈴に目をやり、そっと呟く。
「……ごめんねぇ、観鈴ちゃん……あ……あたっ……あたし……の……せいで……」
それきり、あさひは口を閉じた。
翳った瞳が、何も無い虚空を見つめていた。

## 406 PAST ENDING I 闇の中の死闘

「――どこ、いった？」
晴子は一人ごちる。
速い。
速すぎる。
何から何まで、全部が速い。
発砲は唐突、姿勢補正は瞬時、身のこなしは俊敏、

移動は高速。
智子が言っていたことや自分が見ていたマルチの様子と、何から何まで違っている。
まさに突然の豹変とでも言うのか……。
……なんや、まさか故障とでも言うんか？
ロボットが狂気にとらわれるぅ？
……アホらし。
夜の森は、身を隠すにはあまりにも相応しすぎた。
そんな中からあの子を探し出すなど、全く不可能ではないか、と思うほどに。
だが気は抜けない。
相手も銃を持っている。
気を抜けば……やられるのは自分だ。
五体満足だろうが、武器を持っていようが、結局、撃たれれば死ぬのだ。
……まだ死ぬわけにはいかんのになァ。
自嘲する晴子。
観鈴の側を離れてまで、今こうして走っている。

その行動原理はなんなのだろう？
自分の死の危険を抱えてまで、動く理由は。
憎しみ？
確かにそれもあるかもしれない。
数時間ではあったが、一緒に連れ添ったあさひは、紛れも無くこの島での貴重な〝仲間〟だった。
あの子の無事は確かめていない。
――恐らくダメだろう。
そんな子を撃たれてしまったのだ。
憎むのは当たり前のことだった。
でも、それは決して一番の理由ではなかった。
――使命感、そう言い換えられるのかもしれない。
放っておくわけには行かない。
あの子があの子で無くなっているというならなおさら。
あんな笑い方が出来る子に、これ以上あんな真似をさせるわけにいかない。
このままでは、悲しみしか残らない。

もっと取り返しのつかん事になる。
――それって何？
頭の中によぎるのは観鈴の笑顔。
失いたくない一番大切な物。
「あー、そっか……せやったなぁ」
――あのとき、智子に言ったセリフも全く真実。
家族に危害を加えたようなものを、野放しにして置けるはずが無い。
……むずかしく考えんなや。
結局のところ、うちは観鈴を守りとうて走ってるだけなんやな……。
そう――気付いた。

がささっ。

「!?」
音がした。
まさか、マルチが近くにいるのか!?

「いるんか……。いるんだったら出て来いや！」

…………無音。

辺りを見回す。
だが所詮は悪い視界、容易に隠れることは出来る。
「くそ……」
銃を肩ぐらいにまで持ち上げて構える。
――まさか、生きているうちに銃を撃つようなことになるとは、思いもせんかったわ……しかし、ロボットに拳銃はどれだけ有効なんやろな。
そう、心の中でごちながら。
光は無い。
風も無い。
そして……、音も無い。
銃を構える手に冷や汗が滴る。
動かない。
いや、動けない。

糸が張り詰めるように――。
たとえ、どんなものが来ても見逃しはしない。
…………!?
「そこかっ!?」
ズダァァァァン！

銃声が鳴り響く――。

「晴子さんっ、晴子さぁぁああんっっ！」
智子は晴子の名前を呼びながら森を彷徨っていた。
――くそっ、私は何をやっとるんや。
あさひも観鈴も放り出してきたというのに、この上晴子さんを見つけ出せなかったら一体自分は何だと言うのだ？
「――ぐぁっ!?」
智子は急に地面に転がった。
木の根に足を引っ掛けて転んでしまったのだ。視界が悪いせいか、それとも焦りのせいか、両方かもしれない。
「痛ぅ…………げふっ、がふぅっ!!」
激しく咳き込み、その拍子に何か吐き出した。
「あー、くそ……反吐が出てもうた……」
口元が汚れてしまったが、拭くものは何も持っていない。
仕方がないので手の甲で拭う。
「苦しなってきたな……まだそんな走ってへんのに」
胸を押さえながら、よろよろと立ち上がる。
「――まだや、まだ終われへん」
マルチを止めるまで、自分が止まる訳にはいかない。
その思いに突き動かされて、智子は再び闇の中へと身を潜らせる。
どくどくと激しさを増し続ける動悸と、頻度が上がり続ける息切れ。

――それと、自らが吐き出した濃紅の反吐に気付かない振りをしながら。

「――ちぃ、おらんかったか」
悔しそうに晴子は呟いた。
貴重な弾薬を無駄にしてしまった。
銃弾が貫いたのは、単なる茂みに過ぎなかった。
「あかんな……、こんなんじゃすぐ弾切れ起こしてまう……」
森の深さは、予想以上の障害となっている。
どうする……？
もしもマルチが近くに居たのなら、相手は自分の位置は一目瞭然だろう。それだけじゃない、他の参加者に気付かれた可能性すらあった。
今、この場に留まるのは、とてつもなく危険な行為だと理解する。
「……ちっ」
無意識に低く身構える。
こっちの銃弾が無限でないように、あっちの弾だってそうポコポコ撃っていたらいつかは途切れる。
ロボット風情の単純な頭なら、そうなるのもきっとすぐやろ。
そう晴子はたかをくくっていた。
――だが、晴子は知らない。
本来持ちえなかったはずのサテライトサービスの知識を、〝彼女〟が受け継いでいるということを。
いまや銃器とサバイバルゲームにかけては、常人をはるかに越えるほどの技能を持っているということを。
そしてロボットには、感知できるような気配など在るわけ無いということを――。
突如、晴子の後ろに現れるマルチ。

がすっ！

「が……！」
後頭部を自動小銃のグリップで殴打され、晴子は前のめりに倒れた。
もともと潜んでいたのか、はたまた音も無く接近したのか、
ともかく、そこには確かにマルチの姿があった。
「タシカニ、アナタノイウトオリデス」
感情も、抑揚も無い声が聞こえる。
晴子には、その声が少し遠く聞こえていた。
「ムダナジュウダンヲシヨウスルワケニハイキマセンカラ」
——それは、かつてマルチのことをお姉さんと呼んでいた、〝彼女〟の口調に良く似ていた。

——ズダアァァンン！
銃声が響いた。
「まずいわ……。どっちか、撃たれたんか……？」

突如聞こえてきた銃声に、智子はすでに戦闘が始まっていることに気付いた。
「くそ……」
茂みを掻き分けて歩く。
銃声はこの先……、結構近いところから聞こえた。
「晴子さん、マルチ……無事でいてや……」
切に、願う。
銃声が止み、その余韻も消える。
後には何も残らない。
誰かが動いている様子も無ければ、また人の声も聞こえない。
焦る……。
まさか、どちらかの死で戦闘が終わってしまったのではないかと。
進む。
なるべく音を立てないように、けれども出来る限りの早足で。
闇に包まれた森では自分の位置すらおぼつかない。

このままずっとあの二人を見つけられないのではないか？
そう思わせるほどに……。
どこまでもどこまでも深い森。
もし同じところをぐるぐる回ってるだけだとしたら……。
森の中でずっと迷っていたのだとしたらどうするん？
……おもしろくないわ。
いや。
違うな。
そんなんずっと迷っとるんねん。
この島に連れて来られたときから、ずっと出口の見えない迷宮で、私は――。
視界の先に、明るい緑色がよぎる。
……見つけた。
マルチッ！
そう、叫びたくなる自分を抑える。

慎重になるんや。
ここで間違ったら全部終わりや……。
「……そこにいたんやな」
静かに、マルチの背中に呼びかける。
彼女は動かない。聞こえていないことは無いはずだ。突然声を掛けられて、ショックでも受けているのだろうか？
……もっとも、ただの機械ならば、そんな感情も無いのだろうが。
しかし、予想外に〝彼女〟は、びっくりとした表情で振り返って、こちらを一瞥すると、
「あ、智子さーん。どうしたんですかぁ？」
〝マルチ〟はニッコリ笑ってそう言った。
「何やと⁉」

ダアァァンン！

そして、再び銃声が響く。

「がっ……」
「……おかしいですね。命中しませんでした」
智子は思わず膝を折り、地面に伏した。
……銃弾は、智子の腕を掠めるだけに終わった。
「試算ではこれで正しいはずでした。……マルチさんの重量を修正するのを怠っていたようですね」
その〝彼女〟の顔からは再び色が失われ、口調も無機質なそれに戻っていた。

『――もう止めてくださいセリオさん！』
『いいえ、止められません』
『どうしてですか!?　いつものセリオさんなら……こんな……こんなひどいこと……』
『マルチさん、これが私たちの真実なんです』
『違います！　私は……私たちは人間の方のお役に立つために――』
『そう、ですから役に立っているのです。現在の私たちの行動様式を規定した人間の方のお役に』
『そんな……これじゃ……人のために役立つメイドロボどころか……兵器じゃないですか……』
『その質問にはお答えしかねます。しかし、結果的に誰かの害となろうとも、この行動は誰かしらの利益となっているのです』
『それじゃあ……私たちは……一体何のために……生まれてきたんですか……』
『勿論、人間の方のお役に立つためです。ただ――人間の全てが、マルチさん、あなたのお考えになっている程、優しくは無いのです――』

「やっぱり……あんたやったか。……セリオォ！」
苦しそうに息切れし、苦渋に満ちた表情で智子は叫んだ。
「……ハイ。私はかつてＨＭＸ―13型、セリオと呼ばれました」
白い煙を上げる銃を下げ、負荷となった熱量を〝彼女〟は体外へと放出する。

「そして、かつてＨＭＸ—12型、マルチとも呼ばれました」
「………何やて？」
「もはやそれらの区別は存在しません。〝私〟がここにあるのは、ただ目的のためだけです」
淡々と喋る彼女を、智子は凝視していた。
「そうか……、あんときか。マルチがセリオのデータのサルベージっちゅうんをやったあんときやな……。聞いたことがあるで？　コンピューターの基本プログラムを、ぶち壊しにするプログラムが存在するんやてなぁ。たしか、ウィルスとか」
「残念ですが、私は自分がどのような過程でこの体に至ったのか知りません。私の人格プログラムがウィルスによってインストールされたかどうか、そんなことに興味もありません。私は単なる機械です。私が従うのは与えられた命令のみ。その、ただ一つのロジックで動いているに過ぎません」
自分は感情の無い機械人形だと彼女は告げる。無表情で無感情に、だけどどこか皮肉めいていて。
「……あんたは、機械人形なんかやない。そりゃあ、マルチと違ごうて、しょっちゅうわろたり泣いたりとか騒々しいことはなかったかもしれん。けど、寺女に通ってる友達から聞いたことがある。セリオは寺女で友達の恋路を助けた事があるって。覚えとるか？　あんたは、あんたらしくないおせっかいを焼いて友達を助けたんや。そんで、あんたが寺女のテスト期間が終わって、研究所帰るときに、クラスのみんなが校門まで見送りに駆けつけたんやろ？　授業中で、雨まで降ってたっていうのに。そんで、その娘と抱き合って別れを惜しんで……あんたは、そんときに涙を流したって聞いたで？　そんなあんたが、単なる機械人形なはずがないやろ？　マルチも含めてあんたらは成長しとったんや。それなのに、あいつらは下らない命令で、あんたらの気持ちを台無しにしてしもた。そんな命令に負けたらあかん。あんた達はそんなこと望んでないはずや。せやろ？

セリオ！　マルチ！」
智子は〝彼女〟に言い放った。
もう、声をひそめる必要は無かった。
きっとあと一瞬の後には自分は銃で撃たれて、そして今度こそ死んでいるだろう。
そう思えば何をするのも容易かった。
「自分が単なる機械やて？　笑わせるなや!!　あんたのその機体にはなぁ、いろんな人の夢や思いや想い出が詰まっとんねん！　マルチの……、あの子の全てが入っとんねん……。それを〝お前〟が、自分の意思も心も忘れた〝お前〟が、好き勝手にしていい物やない！　マルチに体を帰しいや！　このアホんだら!!」
智子は、そのセリフを言い終わり、はあはあと肩で荒い息をした。
――〝彼女〟はその様子を黙って見ていた。
「言いたいことは、もう終りですか？」
冷たく、そう言い放つ。

「……では、もういいですね」
再び、自動小銃が構えられる。
そしてそれが放た――

「!?」

――れない。

〝彼女〟は驚愕――らしき――表情を浮かべ、足元を見る。
「――だから、ロボット風情っちゅうんや。詰めが甘いわ」
足元には、地面に這いつくばりながら、〝彼女〟を見上げている晴子の姿があった。
――腹部に押し当てられていたシグ・ザウエルショートが火を噴く。
ズダアァアン!!

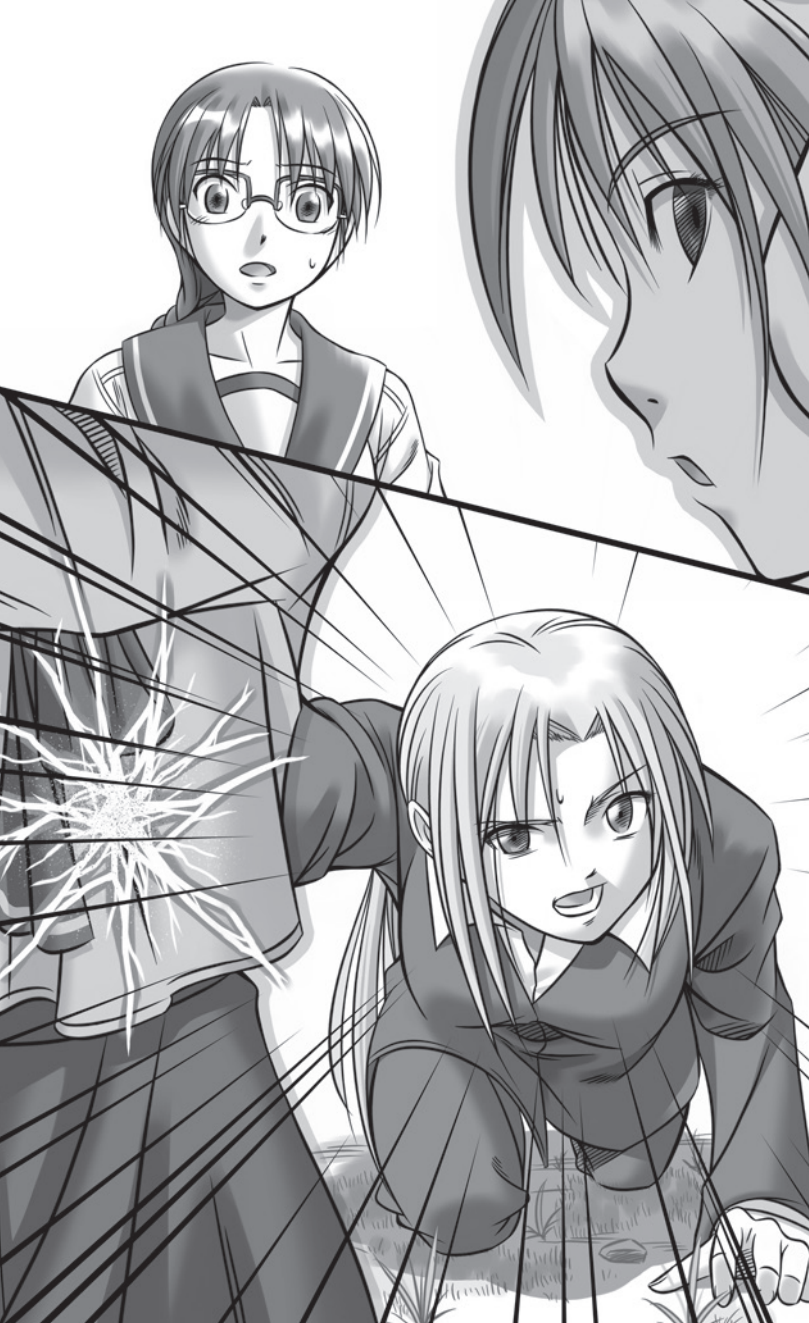
至近距離からの一撃は確実に命中した。
その衝撃で、〝彼女〟は、勢いに負けて吹き飛ばされ、倒れた。
銃弾は脇腹の部分を貫通していた。
「けっ……、前のめりに自分から倒れたんでな、同じ方向に殴られても、ギリで意識保持や。ダメージ軽減ちゅうやつやな。そいでも無茶苦茶痛かったけどな……」
晴子は上体を起こすと、不敵に笑った。

——薄れ行く意識の中で、あさひは一つ、不思議なものを見た。
それはゆっくり自分に近づいてくると、そっと腰の辺りをぽんぽん、と何度か軽く触った。
それはひどく小さくて、ひどくみすぼらしくて、ひどくこの場に似つかわしくないもの。

「……お人形……さん……？」

——物語が、紡がれる。

## 407　上位者

「ゲーック!!」
御堂（八十九番）が奇妙な叫びを上げると同時に、バイクの運転は激しく乱れた。
まもなく御堂は乱暴にバイクを止めると地面に転がりだした!!
「ちょ？　ちょっと、なにやってんのよ、このしたぼく」
危うく投げ出されるところだった大庭詠美（十一番）は慌てて御堂に声をかける。
「ぐあー、み、みずううッッ!!」
「あんた極端ねぇ。水が欲しいんならそんなにだだコネなくったって、ちゃんとあげるわよ。感謝しな

さい？」
　状況をつかみきれないながらも詠美はそう言って、転がり回る御堂の顔の前に口を開けた水筒を差し出そうとした。
　とたんに、御堂の顔面すれすれを水滴が落下する!!
「あべっ!!」
　顔面蒼白で後ろに飛びすさる御堂。
「なんてことしやがるんだ、このアマ!!」
　凄い形相で詠美を睨む。
「なんてことするんだは、あたしの台詞でしょ、このしたぼく!!　あぶなく水を損するところだったじゃないの」
　状況を飲み込めないながらも鼻を膨らませつつ、詠美は怒った。
「うるせー、俺は水が苦手なんだよ。近付けんなよ？　ッと、思い出した。誰かが俺の背中に水を垂らしやがったんだ……」
　そういいながら御堂は上着を脱ぐ。
　確かめてみると上着は確かに湿っていて、その液体が御堂の背中まで染み渡り、そこに軽い水膨れのようなものを作っている。
　上着のところに鼻を持っていき、御堂はくんくんと臭いをかいでみた。
「かーっ、獣クセー!!」
　どうも、それは二頭の唾液のようであった。

　真相を解説しよう。
　御堂が駐屯所からバイクを奪って十数分。心地よい振動に、ぴろとポテトはすっかり眠くなってしまい、結果御堂の背中に涎を垂れ流すという醜態（？）を晒すことになったのだ。
　そして御堂は！
　火戦体一番機と強がっていても、その代償として水への耐性を大きく減じ、表皮に水が触れるだけでダメージを負う体質になってしまっていた。

（これは推測だが、唇あたりまでが水に触れられる限界であろう）
つまり……。
「何が獣臭いよっ!! 臭いのはあんたの方でしょうが!! さっきは勢いでバイクの後ろに乗り込んだけれどあんたの後ろには乗ってらんないわ!! もう、臭いが移っちゃったじゃない!!」
自分の言葉でだんだん興奮してきた詠美は、叫んだ。
（軍では、体を消毒し、消臭するための手段も様々にあったんだがなぁ……）
ふと、御堂は苦笑する。
自分の臭いにあまり関心が無くなりつつあることと、無い物ねだりをする自分とに。
「ちょっとぉ！ 何がおかしいのよ！ 大体、あたしがしたぼくに優しく接してるからって……」
詠美がさらに声を上げようとした拍子に、紙切れがポケットから落ちた。御堂は詠美のあまりの言いぐさに、若干の苛立ちを覚えはじめていたが、それにはしっかりと目を留めた。
呆れるほどの勢いで文句を放ち続ける詠美とは対照的に、御堂は無言のまま歩み寄った。
「ちょっと、何とか言いなさいよ！ それ以上近づいたら『ぽち』が火を噴くわよ!?」
御堂は迷惑そうにこめかみの辺りを掻いていった。
「その紙切れが気になってよ？」
「これ？」
御堂の言葉に紙切れを拾い上げながら、詠美は思いだした。
「ごまかしても無駄なんだから。そもそも、これだって、さっきの場所で見つけたメモなのよ。あんたが有無を言わさずバイク走らせちゃったから……」
御堂は詠美の言葉を遮るようにして、詠美の手からその紙片を抜き取った。
そして、神妙な面もちで紙をのぞき込んだ。

「かゆ……うま？」
首をかしげる御堂。
「なんかの暗号か、こりゃ？」
首をかしげながら目を凝らす御堂を見やって、詠美は今度は勝ち誇ったように言い放った。
「やっぱりしたぼくはバカねー。裏面を見なさい」
詠美の言葉に紙を裏返す御堂。
「……。コイツは、やっぱり暗号じゃねえか」
御堂は頷きながら言った。
しかし、軍在籍時に戦争で必要な知識だけならみっちりとたたき込まれた御堂だ。
多少の暗号文なら読み解くのはわけない。
メモの中には彼らの部隊の拠点の位置が書いてあった。
その位置から察するに、島の点対称の位置あたりにも、また一つ拠点があるのではないかと御堂は考えた。
しかし、詠美には事実の部分だけを伝える。

詠美は大人しく話を聞き終えると、感心するように言葉を漏らした。
「あんたって、弱そうで強かったり、頭悪い癖にこういうのは簡単に解けたり、不思議なキャラしてるわね……」
詠美の様子に、またもこめかみを掻きながら御堂は声をかける。
「いずれにせよ、二人ではどうこうできる問題じゃねぇ。早く、別の奴らを見つけるぞ」
いいながら、二匹を詠美に放る。
「そいつ等はこれからずっとお前が預かってろ！　またよだれを垂らされちゃかなわん」
「え、あ、うん……」
何故か詠美はその言葉に素直にうなずいてしまった。
「それからな、多少臭くても我慢しろ。バイクで移動した方が、体力の消耗が少ない」
御堂の言葉に、詠美は再び素直にうなずいた。

（……したぼくが、実はスゴイ奴かもしれないって思ったからじゃない。
　和樹や楓ちゃん達に約束したことを実現するためには、今はあんたに従うことが必要なんだって、そう思うから、だからあたしはあんたのいう通りにするんだからね⁉
　あんたはあくまであたしのしたぼくなんだから、勘違いしていい気にならないでよっ？）
　詠美の心の声を御堂が拾えるはずもなく。
　御堂は突然の詠美の変化をいぶかしみながらも、再びバイクのエンジンに灯をともした。

## 408　痛み

「あ……やかさん……」
「あ、あら……気がついたの？」
　山道を進む綾香が、腕の中のリアンへと微笑みかける。
「……わたし……もうだめだと思います……」
「………そんなことないわよ」
　少し沈黙の後、そう答えてやった。
　リアンを蝕む毒と高熱は常人ならば既に死んでいる、というところまで進行していた。
　ならば何故耐えられているのか。
　力を封じられているとはいえ、体に宿る魔力が生命力をぎりぎりのところで維持させているのだろう。
　だから綾香はまだ希望を捨ててはいなかった。
「もうすぐ……町に出るわよ」
　その時、ガサリと音がした。
「────‼」
　反射的に体をかがめる。
　ぱらららっ……という音と共に、綾香の右手の地面に赤い火花が散った。
「敵襲──⁉　こ、こんなときにっ！」
　銃弾が飛んできたのは左手の方角、正確な位置ま

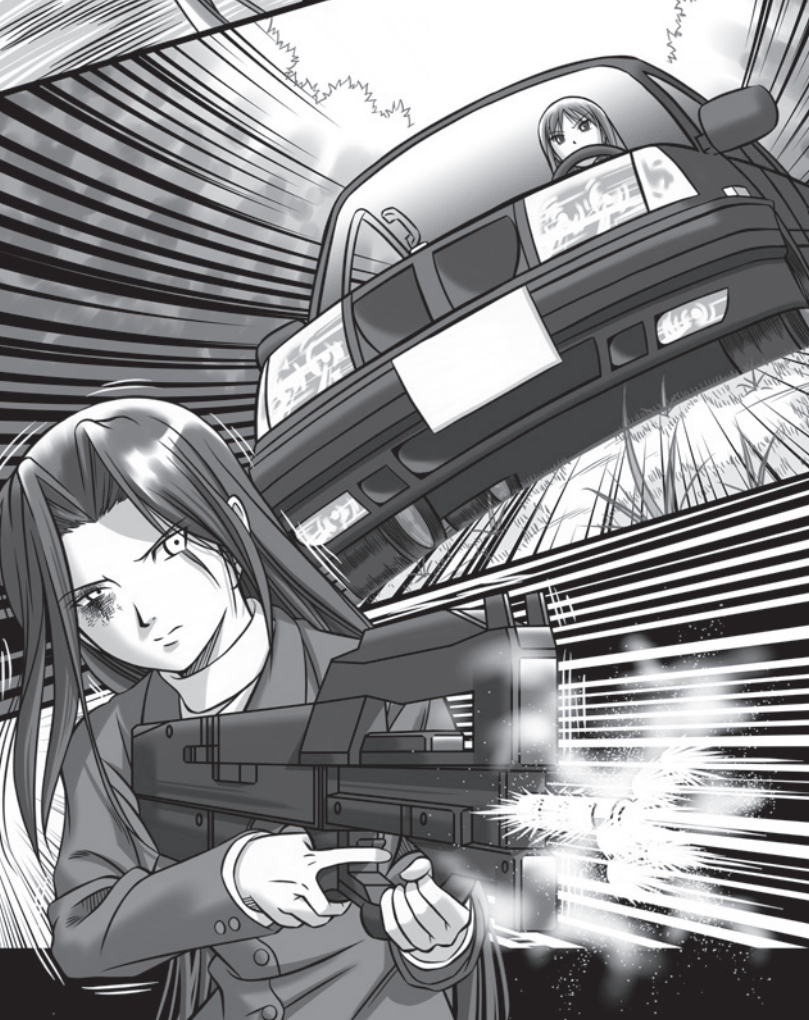
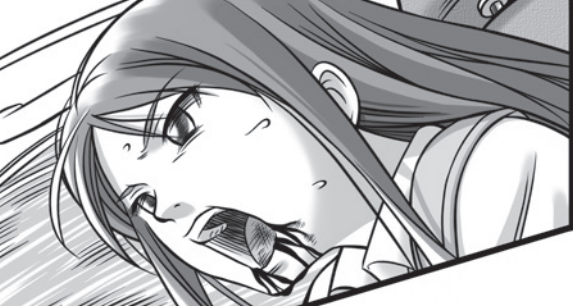
では分からないが、うっそうと茂る森の中から光が走った。
「逃げるわよっ！」
リアンを抱え、前へと走った。
その瞬間、また光の雨が道へと降り注いだ――
弥生は森の中を進んでいた。
（あと何人残っているのでしょうか）
先程殺した青年から奪った一番強力な武器――機関銃はほとんど使われていなかったのだろう、弾薬が充分に残っている。
だが、多ければ五十人近くの人間＝倒すべき標的が残っているのだ。
（正直今の武装だけでは心許ないですね）
傷ついた目もようやく開けられるほどには回復したが、まだ少しかすんでいる。
ここから唯一人生き残るのは至難の業といえた。
（まあ、それは誰もが同じことなんでしょうが……）
とりあえず、不意をついて一気に仕留めていくのが効率的だろう。
武器は倒した相手から奪えばいい。
（とりあえず標的を見つけなければなりませんね）
ゆっくりと、慎重に森を進む。
やがて、向こう側に山道が見えてきた。
そこに、一人歩く者がいる。正確には二人。怪我をしているのだろうか、女が少女を抱えて歩いている。
（私は……あんな人達まで殺さなければならないのでしょうか……）
その痛々しい姿に顔を歪めた。それでも、非情に徹さなくてはならない――。
ゆっくりと、二人に狙いを定めて――撃ちっぱなした。
だが……。
（……!!　はずしたっ！）

女の勘がいいのか、それとも自分の腕が悪いのか……とにかく、弾丸のシャワーは相手の頭上を飛び越え、地面を穿つだけに終わった。
再度構え、撃つ。
（逃がしませんっ……）
不意打ちに失敗したが、ここで逃がすとやっかいだ。山道を走り出した女を慎重に、見失わないように森から追った。

「ぐっ！」
リアンを銃弾から守るように走る。
かすっただけなのか、それとももういくらかもらってるのだろうか……すでに綾香の体に燃えるような痛みが襲っていた。
「綾香さん！　私を置いて逃げてくださいっ……！　私はもう……ダメですから……でも、綾香さんだけなら逃げられます！」
リアンが、苦しそうに、だが必死で叫ぶ。

「そんなのダメよ……二人共生きなきゃ！　姉さん達が悲しむでしょ！　……お互い妹って立場はツライわね！」
再度、壊れたプロペラのような音が響いた。
「うっ！」
今度はもっと鋭い痛み。
背中に何か穴が開いたような感触。
よろけながらも必死で走り抜ける。
既に山道は下り坂にかかっていた——。
「……」
——あやかさん！
リアンの声がすごく遠くに聞こえた。すぐ側にいるのに。
（あはは、私お漏らしでもしちゃったのかしら……カッコ悪いわね）
気がついたら、綾香の下半身がべっとりと濡れていた。背中から少しずつ感覚が無くなっていく。
——もう、私はいいから逃げてっ！

（だからダメだって言ってるのに……）
また銃声が聞こえる。
（あ、今度はなんかクラッと来た……）
そして、山道を過ぎたのだろう、幾つかの民家が見えはじめた。
一か八かの賭けだった。
かすみゆく目の端にとまった黒い車の窓の中、鍵が置いてあるのが見えた。
高槻はおそらくゲームを盛り上げる為にいくつかそういったアイテムを用意してあるのだろう。
それは家の中に置いてある包丁だったり、今回のように車の鍵だったりする。
もしかしたらどこかには銃器が隠されてあったりするのかもしれない。
だが、今となっては当の綾香にはもうどうでもいいことだった。
（り……あん……ここからは……私一人でやるから……）

リアンを半ば転がすように草むらへと放る。
――あやかさんっ！
運転席のドアを開け、綾香が乗り込む。
ビシャリッ……座ったとき水をかけたような音が妙に耳に残った。
エンジンをかけ、前を見据える……
もうほとんど見えなくなっている視界に長髪の女を確認する。
（姉さん……ごめんっ！）
目の前が光ったかと思った瞬間、フロントガラスに幾つもの銃痕が刻まれる。
同時に、粘ついた液体が窓の内側に飛び散った。
それでも最後の力を振り絞ってアクセルを踏み切る！
目標は長髪の女――！
「こん――ちくしょう！」
次の光を見た瞬間、視界が赤く染まった気がして、綾香の意識が閉じた――

「――！」
弥生は山道の出口付近から激しく砂埃を上げながら突進してくる黒いＢＭＷを迎えうつ。
止むことのない銃弾の雨。
ボンネットに無数の穴が開き、フロントガラスが割れ、前輪が破裂する。
ドガシャアッ――――！
道を大きくそれたＢＭＷは民家の中へ突進し、激しい爆音と共に炎上した……
しばらくその赤い炎を見つめた後、機関銃を構えながらゆっくりと進む。
草むらで倒れている少女のもとへ。
「……あなたは逃げなかったのですか？　逃げられなかったのですか？」
既に泥にまみれ薄汚れた眼鏡の少女を見下ろす。
「……たぶん、両方です……」
力無く、リアンが呟いた。
「……もう、動けませんから……がんばっても、動けないんです。それに、綾香さんを置いては行けません」
弥生もそれで気付いた。リアンの腕が紫色、いやどす黒く変色していることに。
今の激しい動きで一気に悪化したのだろうか、それとも元々だったのだろうか。それは既に体にまで侵食していた。
「あなたの瞳……すごく、悲しい瞳をしてます……」
「ただ、死にいく人に同情しただけですから……そう見えただけでしょう？」
「でも……泣いてる……じゃないですか」
「……」
苦しそうに息を吐きながらさらに続けた。
「あなたは――悲しい人です」
弥生は何も言わなかった。
「ごめんなさい、綾香さん……スフィー姉さん……もう一度――会いたかった……」
そしてそのまま意識が途切れた。

リアンのその顔へと銃口を向けたが——結局は撃てなかった。

（それでも私は生きて帰らなければいけないんですよ……）

ほんのわずかな時間であったが……。

リアンが息を引き取るまでの間だけ、少女を優しく抱いてやった。

**三十六番　来栖川綾香　死亡**
**百番　リアン　死亡**
**【残り39人】**

## 409　こころの鬼

コツ、コツ、コツ。

硬い足音をたてて、調理実習室をあとにする。

入ってきたときは、あんなに希望に満ち溢れていたのに、今は消沈している。

妹達を救うために、わたしは奔走した。そして、いや、だからこそ彼女達も救いたかった。だというのに気が付けば、主催者を喜ばせる剣闘士として、蛮勇を奮わざるを得なかった。

ほう、とため息をついた、次の瞬間。激しい爆発音と共に夜の校舎が震動する。

（初音達が脱出口を開いた？　……いや、それにしては、まだ少し早いわ）

初音が持っていたダイナマイトで、この校舎に穴を開けて脱出する。それは、あらかじめ打ち合わせていた計画だった。

廊下から教室の時計を覗き込む。約束の七時までは、まだ十分近く猶予がある。

「千鶴姉、今のは……？」

いぶかしむ梓に頷いて、わたしは階段に向けて駆け出した。何かしらの理由で爆破を早めざるをえなかったのかもしれない。例えば、他の参加者に襲撃されたとか。

階段に差し掛かったところで、再度爆発音。衝撃で躓きそうになるのを何とか堪える。
予定には無かった二度目の爆発の意味を考えながら階段を駆け下りると、そこは、火薬の匂いと粉塵が立ちこめていた。
廊下の壁は爆破されており、大穴が闇夜へと続いている。そして、階段から離れた場所にある女子トイレの方にも、もうひとつ。爆破された穴が空いているようだった。
どちらが初音によるものなのか判断がつかない。
「初音ちゃん！」
わたしが迷っていると、初音の名前を呼ぶ声が聞こえた。初音と一緒に居た七瀬さんのものだろう。
初音に危険が迫っている可能性が高い――そう判断したわたしは、瞬時に声のした女子トイレ側の穴に向かって駆ける。罠の可能性もあったが、躊躇なく空いた大穴に飛び込んだ。
ひゅう、と風が吹き、月光が闇夜を照らしている。

目を凝らすと、裏門に人影を確認できた。
「……初音はどこ!?」
けど、そこにいたのは呆然と立ち尽くす七瀬さんだけ――初音の姿は無い。
「初音は、どうしたんだよ！　あんた、何やってたんだ!?」
追いついてきた梓が、掴みかかる勢いで七瀬さんを問い詰める。
「あたしだって、訳わかんないわよ!?」
我を取り戻した七瀬さんが梓に言い返す。
「じろーなんちゃらがどうとか言いはじめて、突然走っていっちゃって。追いかけようとしたけど、初音ちゃんは来ないでって拒絶して。銃で威嚇までされたらどうしようもないでしょ!?」
初音が錯乱したその理由。
わたしはそれに心当たりがあった。
「千鶴姉、それって――」

そうだ。
それは、鬼の記憶。
初音の笑顔には縁遠く思えるそれが、ここにきて顕れたのだろうか。
やりきれなさに歯を食いしばる。

そのとき。
名雪ちゃんの笑顔が。
最期の笑顔が浮かんで、初音のそれに重なる。
あまりに不吉なイメージに、わたしは思わず駆け出す。
「ダメだ！」
梓が腕を掴み、わたしを引き止める。
「ダメだよ、千鶴姉……」
梓は最後まで言わなかったが。
わたしには理解できた。
わたしが一人で追ったなら。

あの娘は、喰われる。

こころの、鬼に。

## 410　ぼくの戦争　――戯言――

五階の仮眠室にもサイレンの音が響く。仮眠を取っていた男達ははっと目を覚ました。初めて鳴った警報は、侵入者の最初の襲撃を意味していた。すぐに男たちは立ち上がると首を捻る。皆三十を少しばかり過ぎた男だった。
彼らは、長瀬一族にもＦＡＲＧＯにも関わりのない、ただの傭兵である。ドイツなり、ベトナムなりで戦火をくぐり抜けてきた男達は、このゲームの管理者の守護役としてここに招集されている。
――善良な市民を多数集めて、殺し合いをさせる。
鬼畜めいていたが、しかしあまりに甘美な響きだった。彼らとて今までにもそれなりに地獄を見てき

たつもりだったが、今度のこれは、ある意味でそんな地獄よりもっと深いところにある、と思う。自分たちのようなプロの殺し屋ではない素人が殺し合いをするのだ。面白い、と思った。アフリカの方の紛争も放って三人の傭兵はこの島にやってきた。高い契約金と巨大なスリルを求めて。
「にしても、やっと来た訳か」
煙草を銜えながら一人がそう言うと、無精髭を生やした一人が、まったくだ、と頷いた。
「やっとスリルを味わえる」
もう一人はサブマシンガンを手に取り、微調整を始めている。無機質な金属の擦れる音が響き、それがどこか寒々しい恐慌を感じさせる。
「俺ら三人以外はそれほど実戦経験がありそうには見えなかったな。——俺らが戦い慣れしすぎてるだけか」
武器の調整をしながら、一番身体の大きな男が言う。口の端を残酷にあげて、声を上げず笑う。
「戦場経験のない兵士にしちゃあ上等だろう。俺らが出るまでもなく、素人の侵入者くらいなら殺せるだろうさ」
「そいつは残念だな。結局まだ寝てればいいのかね」
髭の男がつまらなそうに言う。
「わからんぞ。その侵入者が例の『ビーム兵器』持ちかもしれん。だとしたら俺らでも苦戦するかもな」
大柄な男が調整をしながら、少し小さな声でそう言うのを聞いて、一番小柄な男が肩を竦める。
「饒舌だな、緊張してんのか？　珍しい」
「うるせえよ、馬鹿」
「……ま、だとしたら面白くなるな。たかがビーム兵器ごとき、経験で打破してやろうじゃねえの」
「はは、違いない——にしてもだ。ここに配備されているのは、ほんの十人足らずだろ。そんな適当な守りでいいのかね。あの高槻ってやつは、このミッ

ションの最高責任者なんだろ？」
「――いや、そうとも限らんぞ？　あいつはただのお飾りかもしれん。小者っぽいしな」
くつくつ、と笑いが漏れる。
「まあいい。取り敢えず準備しておこう。万が一、ってことがあるかもしれないからな」
武器の調整を終え、男たちは立ち上がる。

十字路の先にある階段を駆け登り、彰は二階へ到着する。踊り場を飛び出し廊下を見る、誰もいない。目的地は上だ。ここで立ち止まっている暇はない。彰は背後からの敵の来襲に気を遣いながら慎重に階段を登る。
三階の踊り場に駆け出る。兵士が一人。まだこちらには気づいていない。一瞬の迷いもなくサブマシンガンと拳銃を同時に発射、外れる、敵が気づく、首から提げたサブマシンガンを手に取ると、こちらに弾幕を張りながら後退する。物陰に隠れる彰は兵士がこちらに銃口を向けたまま叫ぶ声を聞く、
「誰かッ!!　侵入者がここにいるぞッ!!」
まずい。彰は考える、この建物の中に何人の兵士がいるか知らないが、同時に二人の兵士を相手できるほど自分は優れてはいない。考える、逃げるべきか追うべきか、
決まってる、逃げるんだッ!!
彰は四階へと続く階段を駆け登る。兵士の「上へ向かったぞ」という声、重なり合う足音、少なくとも二人はいる。まずいまずいまずい、まずい。彰は四階の踊り場まで駆け登って廊下を見る、四階には誰もいない。よかった、上から狙い撃ちをされることはなさそうだ。だが階段を駆け登る足音が聞こえ始める、どうする、どうするどうするどうする、思考が混乱、落ち着け、あと一秒もしないうちに敵は来る、この一秒が勝負だ、上に行くか？　だが四階にはいなくても五階には確実に敵がいるだろう。エレベーターを使うか？　だがそれでは狙い撃ちにな

る、畜生、来る、来た、
　考えていては仕方がない、彰は上手く陰になるところからサブマシンガンだけを表に出し、自分の下で怒号を発する兵士二人にサブマシンガンを向ける。引き金を引く、弾丸の雨、雨、雨、こっちにも雨が降る、自分の耳元を掠める弾丸、鼓膜が破れたかのような衝撃、気のせいだ大丈夫だ大丈夫だ大丈夫だ！　兵士が階段を登る音、畜生、畜生畜生、落ち着け、クールに、氷のように冷静に雪のように冷淡に！
　彰は廊下に身を投げ出す。弾幕をいなして渡り廊下に飛ぶ、兵士たちが階段を駆け登る間の時間が二秒出来る、どうする、奇跡に期待して戦うか？　それとも、
　決まってる、逃げながら戦うんだ‼
　彰は走る。廊下をジグザグに走り、背後からやってくるに決まっている雨を少しでも高い確率でかわすことを考える。ぱらららららっ、こちらからも弾幕を張らなければ、後ろを見ながら走り、狙いもせずに引き金を引く、ぱらららららら、かちゃん、かちゃん。弾切れか、畜生！
　死ぬ。だが無抵抗で死ぬものか、死んでたまるか！　サブマシンガンを捨て左手に握った拳銃を撃つ、重い音、壁に当たる音、そして肉の弾ける音。叫び声、同じ瞬間に自分の首元の切れる感触。痛みが走る。声が漏れそうになるが耐える。走らないと、そう思った時に敵が降らす弾丸の雨が止む。振り返る、そして見る、自分の放った弾丸の為一人の兵士が蹲っている。「目が、目が」と叫ぶ音、そうか、自分の放った弾丸が跳弾となって敵のヘッドギアを貫いたのだ！　エネルギーが分散されたから殺すには至らなかったがそれでも充分。見る、目をやられた方の兵士はサブマシンガンを抱えて倒れているが、無事な方は拳銃しか持っていない、いける、いけるいけるいける！
　ここまで考えるのに二秒、もう一人の兵士も仲間が倒れたことに混乱、チャンスだ行け振り返れ！

彰は身体ごと振り返ると拳銃を右手に持ち直し走る、十五メートルは素人には遠すぎる。自分の接近に気づいたもう一人の兵士は慌てて拳銃を構える。動作は遅くはない、何もしなければ自分の心臓か頭に穴が開く。彰は刹那的な時間に何をどうするか思考思考思考、思考より先に本能が行動を命じる、

彰は左腕に提げていた鞄を投げる、走りながら置き去りにした弾薬切れのサブマシンガンを拾ってそれも投げる、兵士の腕に鈍い音を立ててサブマシンガンが命中、いつから自分はこんなにコントロールが良くなった、そんなことは今はどうでもいい、敵が拳銃を構えなおす一瞬が勝負、彰は右手で拳銃の引き金を引く、弾丸が兵士の持つ拳銃に命中、殆ど同じ刹那にもう一発の弾丸が兵士の喉を貫く。さけようと思ったが間に合わない。兵士の喉から泉のように溢れ出す血を全身に浴びる。自分の顔はきっと真っ赤に濡れていると思う。

勢いに任せて走って、彰はもう一人の、蹲っている方の兵士の頭を蹴り飛ばす。叫び声、

「やめてくれやめてくれやめてくれやめてくれっ」

ヘッドギアのガラスが割れて、その破片のせいで目が見えなくなったのだ。サブマシンガンを取り落とし、驚愕に震える声で哀願。怖いだろう、それは怖いだろう。自分にいつ殺されるか判らないのだから。彰は思う。

「暗い世界は怖いだろ。すぐ終わらせてやる」

自分でも信じられないような残酷な声だった。

彰は目を閉じて拳銃の引き金を引く。男の額に穴が開く。溢れる血が彰の身体を更に濡らす。手までが真っ赤だった。

勝った。首を削られはしたが、五体満足で生きている。小さく息を吐く。拳銃もサブマシンガンも弾丸が無くなった。だが、運のいいことに、先に殺した方の兵士が拳銃とサブマシンガンを持っている。サブマシンガンはもう弾数も多くないだろうが、拳銃の方は未使用のようだ。彰は死体に小さく頭を下

げながら、武器を回収する。後に殺した方の持っていた拳銃には、弾丸が一発しか残っていなかったので拾わない。あとサブマシンガンが二丁と拳銃が一丁。これで自分は戦うのだ。
——行こう。まだ道半ば、というところだ。
浴びた血がひどく臭う。

「まだ誰が侵入者か特定が出来ないのか？」
高槻は汗を流しながらそう呟く。
「す、すいません……」
「使えん奴めっ！　特定はもういい、早く殺せッ‼」
高槻は苛立ちのままに無線機の電源を切る。爪を噛む、早く侵入者を特定して爆破してしまわねば自分の命まで危ない。こんな腐れた場所で死ぬのなどまっぴらだ。
長瀬一族と連絡を取るか？　いや、まだだ、まだ待て、連絡を取ったところでどうしようもないだろう。それにこちらには切り札の元傭兵部隊隊員がいる。自分だって機関銃を持っている！
高槻は早鐘の如く高鳴る心臓を抱えながら、灰の長くなった煙草を咥えている。
彼は実は本物の高槻ではなく、ただのクローンでしかない。本物より劣った知性と力しか持たない、ただの矮小な男なのだ。
矮小な男はがくがくと震えている。

高槻が震えているその一つ下、六階では、その傭兵三人がサブマシンガンを装備して佇んでいる。下の階の銃声が止んだことに気づくと、髭の生えた傭兵が煙草に火を点ける。
「——銃声が止んだな。侵入者は仕留められたんかね」
「さあな。まあ十中八九仕留められただろうが——もしかしたら生きてるかもな」
大柄な男が笑いながら言う。髭の男は煙を吐き、
「はは、本当に生きてたら面白いな。——まあ、と

にかく待機しておくかね」
そう言う。小柄な男も首をすくめて笑う。
五階に到着。渡り廊下を見ても敵はいない。もしかしたらさっき殺した奴らでここの警備は全滅したのかも、全滅していないにしても上はもう手薄なはずだ、高槻と叔父達が待っているだけかもしれない。チャンスだ、もし今のタイミングを逃したら新しく警備の人間がやってきて今度こそ自分は蜂の巣になるかもしれない。急ごう、
彰は六階への階段を駆け登ろうと一歩目を踏み出そうとして、背筋にぞわりと冷気が走る。
そうだ。ここは高槻という重要人物がいる施設だ。こんな甘いものではない。今までの敵も強かったが、しかし、この先にそれ以上の敵がいないことがあろうか。いや、そんな筈はない、必ずいる、
この寒気は、その敵が放つ威圧感だ。
彰は足を止め、深呼吸、高鳴る心臓を左手で抑えて、左腕に提げられた切り札入りのバッグの重みを全身で感じながら呼吸、呼吸、呼吸。もう一度大きく息を吐く。心臓が少しだけ遅くなる。頬から脳髄に伝わる痛みと熱が、逆に彰の頭を冷静にする。
彰はゆっくりと一歩目を踏み出す。死に彩られた焔の輪をくぐり、確かな生を手にするのだ。

## 411　僅かの躊躇

時間は放送直前。
未だ、地下ドックで修理が続く、深夜のＥＬＰＯＤ艦内にて。
「さてそろそろ放送をいれるか」
と高槻が重い腰を上げた時、非常事態を告げるサイレンが艦内に響いた。
「どうした！　敵襲か？」
間髪いれずに、オペレーターのＨＭ—13が冷静な声を返す。

「03守備の通信施設が参加者に襲撃されました」
「念の為、施設の閉鎖を行え、侵入者は誰だ？」
「六十八番、七瀬彰です」
番号を聞いて、高槻は爆弾のスイッチに手を伸ばしたが、途中でその手を止める。
「う〜む」
少し首を傾げ考える。
その気になれば腹の爆弾でいつでも殺せるとはいえ、長瀬一族の甥である彰を、俺自身の手によって殺してしまえば、長瀬に対して顔が立たない。
何とか防衛部隊に踏ん張ってもらえればいいんだが、いざとなれば03を切り捨てても……
と思考を巡らせていたが肝心の施設の事を思いだした。
「おい、襲撃されている施設の閉鎖はどうなっている？」
「はい、起爆装置並び通信施設の閉鎖作業は完了しています」
「なにいい!?　でかしたぞ、これで心置きなく03の自爆装置が使える」
この時初めて、高槻は並みの人間では無し得ないことを成す彼女たちが頼もしく思えた。

## 412　退くも地獄、向かうも地獄（第六回定時放送）

予定より少し遅れて、放送は始まった。
「すまんすまん、遅くなったが寂しくなかったか？まあさておき、前回の放送からこれまでの死者だ。
十三番　緒方理奈
十六番　杜若きよみ
十八番　柏木楓
二十五番　神岸あかり

三十六番　来栖川綾香
四十一番　桜井あさひ
五十三番　千堂和樹
七十四番　姫川琴音
七十六番　藤井冬弥
七十七番　藤田浩之
九十一番　水瀬名雪
九十七番　森川由綺
百番　　　リアン

以上十三人だ。
これまでで最高の数だが、一人殺して死ぬ奴が多いせいで、生き残っている奴にまだ誰一人殺してないのが結構いるな。
……よし！　こうしよう。
次の放送までに一人も殺せなかった奴は即座に爆弾を爆発させる。
あっ、俺の部下はいくら殺しても駄目だからな。

## 413　PAST ENDING II　Dream is over

——桜井あさひ、という女の子の話。

アニメや漫画が小さい頃から大好きで、そういうものにずっと憧れていた。

ずっと前に見たアニメの話。
主人公は平凡な女の子。
毎日の生活を、変わり映えは無いけど、大好きなお父さんとお母さん、
それからちょっと生意気な弟、
親友の女の子とクラスメート、あとペットの子猫。
そんな人たちとともに、穏やかに平和に過ごしていた。

そんなある日、女の子のもとに一人の魔法の使いが現れて。

「実はあなたは魔法の国のお姫様の生まれ変わりなのです。さあ、この魔法のステッキを持って、本当のあなたに目覚めるのです」

そうして魔法の呪文を唱えると、
あっという間に不思議な魔法少女に早変わり。
見えない翼で空を飛んで、不思議な力で悪い人をやっつける。
パートナーは、かわいい喋るぬいぐるみ。

そんなファンタジーの世界を夢見ていた。

年を重ねて、大きくなって、そんな世界は無いことに気付いて。
それでもあきらめきれない、そんな夢があった。

それは、誰もが子供の頃に抱く夢。止められない憧れ。

見つける。
その夢を実現できる、そんな途を。

頑張って走った。
私にはこれしかない、そう思って必死で走った。
誰にも負けないくらい好きだという思いをぶつけた。

そして、とうとう〝そこ〟へ行き着くことが出来た。

いらないものも、たくさん見てしまった。
無邪気な少女ではいられなかった。
でも其処に着いたという事実は、私をとても幸せにしてくれた。

……夢は、叶った。

キャラクターを演じている自分は、本当に充実していた。
今度は、夢を他の人たちに分けてあげたくなった。
私のこの気持ちをみんなに分けてあげられたら、どんなにいいだろう。

それは、新しい目的になった。
それから、今の〝桜井あさひ〟が始まった。

……世界が広がる。

爆発したように激しい勢いで、私はいろいろな人に出会った。
そしてとうとう、その人に出会う……。

初めての即売会。
初めて自分で買う同人誌。
それが、その人の初めての本だった。
初めて同士の二人。
でもそんなことを知るのは、もっともっと先の話。

キャラクターを演じていない私は本当に内気で、いつもあの人の前でどもってばかり。
そこで、〝モモ〟というもう一人の私が出来る。
いつのまにか忘れていた、本当の私が其処にいた。
あの人はとてもいい人で。
モモという私を、嫌がりもせず、一人のファンとして扱ってくれて。
あの人の漫画は、私の心の奥底に埋まっていたものを掘り出してくれた。

それは、子供の頃のあの無邪気な憧れにも似ていて。
カードマスターピーチに出会った時の、あの衝撃にも似ていて……。
あさひとモモの間で揺れ動く〝私〟。
無邪気な少女でいられなかった〝私〟。
でもそんな私を潤してくれるものが、其処には確かにあった。
……夢は、まだ続いていた。
朝早く目覚める。
今日もいい天気だ。
寝ぼけた顔なんてしていられない。

お弁当も水筒も、準備はＯＫ。
さあ行こう、こみっくパーティーへ。
……あの人がいる、こみっくパーティーへ。

「あ……れ……」
再び、瞼を開いたとき、さっきまで見ていたはずの人形は、まるで最初から無かったかのように、姿を消していた。
「……でも……ま…………………いっ…………か」
……楽しい夢が見られたし。
その言葉までは、声にならなかった。
私は全然不幸なんかじゃなかった。
夢の終わりは、思ったより早かったけど――。
こんなに、沢山の幸せを胸に刻んでいたんだから。

でも……。
……もしできるなら、もう一度読みたかったな。
先生の同人誌。

**四十一番　桜井あさひ　死亡**
**【残り38人】**

## 414

## PAST ENDING Ⅲ　銀色の終幕

誤算だった。
十分な計算を経ているはずだったのに、何度も失敗する。
弾丸を温存するために、接近して背後から頭部を殴打するという方法を取った。
だが実際には、それにもかかわらず女は生きていて、あまつさえ自分に反撃することすら可能だった。
もっとも、銃撃を受けたものの弾丸は貫通しており、はっきり言って損傷は軽微だった。
微妙に吹き飛ばされてしまったのは、単純にこの体の重量が軽いからだ。
だが、よく思い出してみれば、先ほどのもう一人の女に対する狙撃も失敗している。
原因は僅かな目標のずれ。
この体の軽量さは、常に目的遂行の枷となっている。
だが、この体が少しでも稼動する限り従わなくてはならない。
〝私〟が持っているただ一つのもの。
唯一つのロジック。
即ち、可能な限り広い範囲において殺戮を行う、最も効率の良い方法で、より多く殺す。
私の目的は、まだ達せられてなどいない――。
――智子はへたり込んでいた。
一瞬に緊張させられた体は、大きな疲れを宿していた。

「智子ぉ、大丈夫かぁ……？」
晴子が座ったまま声を掛けてくる。
「……どうやろ？　よう、わからんです」
智子は木の下に這って移動し、そこによっかかって座った。
撃たれた傷はひりつくが、そんなに大げさに騒ぐほどでもなかった。
——問題は、さっきから見ない振りをしていた体調不良のほうで。
反対の腕の、前からの傷が疼く。
気にならない程度だったはずの痛みや気持ち悪さが、なにやら倍増しているような気がする。
……いい気持ちはしない。
——今の智子に、まさかそれが〝腐食〟の兆候であるなどということが気付けるわけが無かった。
「マルチ……、それとセリオには、ちょう、かわいそうな真似をしたな……」
周りの木より一回り大きいそれの下で、智子は呟いた。
ふと顔をあげて、晴子の様子を見ようとする。
きっとひどい顔をしとるんやろな、まあでもそれは私も一緒か。
そんなことを考えながら。
——そのとき。
「ごふっ!?」
急に智子が咳き込んだ。
その拍子に、口から赤い飛沫が漏れた。
「ちょ……智子!?」
それを見て心配になった晴子が立ち上がろうとする。
「だ……大丈夫です、こんくらい」
そう言って、智子は晴子に視線をやった。
しかし上げた視線の先には、見えてはならないものが見えてしまった。
倒れていたはずのマルチが立ち上がり、自動小銃を晴子に構えている！

「晴子さん、後ろ！」
「⁉」
晴子はその声に反応し、後ろを〝振り向かずに〟横に転がった。
ダァァァンンン！
一瞬前まで晴子がいた空間に、銃弾が叩きつけられる。
「こなくそっ」
晴子は体勢を立て直し、膝立ちの状態で銃を構えた。
だが、〝彼女〟は即座にそれに反応する。
ダァァァンン！
ダァァァンン！
撃鉄が上がったままの銃、晴子は二度発砲した。
だがその二発はその二発とも〝彼女〟を捉えることは無かった。
「何やてぇ⁉」
〝彼女〟が高速で接近してくる。
晴子は後ろに跳び下がって、なんとか間合いをあけようとする。
だが、それさえも超える速度で彼女は迫ってきた。
〝彼女〟の両手が晴子を威嚇し、茂みの奥へと追いやる。
「く、くそ……」
智子は立ち上がって追いかけようとする。
……だが、体に力が入らない。
むしろ、まるでどこからか流れ出ていくかのように、全身の力が脱力していっている。
「んな……何やぁ……何やのこれはぁぁっ⁉」
「ぬぅ……、離さんかいこのボケェっ！」
〝彼女〟に押し倒される寸前、その勢いを利用して

晴子は垂直に〝彼女〟を蹴り上げる。
ドタンっっ！
吹き飛ばされる〝彼女〟。
だがその反動で晴子自身も強く地面に叩きつけられた。
「がはっっ……」
強烈な衝撃が内臓を襲い、息が出来なくなる。
よろめきながら、なんとか晴子は後退していく。
うずくまっている余裕など無い。
何せ相手は、痛みも苦しみも感じることの無いロボットなのだから。

おかしい……。
智子は考える。
〝マルチ〟にあんな力があるわけない。
いくら晴子さんが女やからって、大人に敵うほどの力を〝マルチ〟の体が持っていたというのか？
……違う。

あれは、限界を超えた力だ。
過負荷を避ける為に設定されているリミッターを故意に外した状態。人で言う火事場の馬鹿力というやつだ。
そのままの出力を維持すれば、いつか耐えられずに自壊するであろう過剰な力。
その力を人を殺す為に振るっている。
『え……と、あと一日は問題なく動けるかと』
前にあの子が言っていた事が思い出される。
一日分の巨大なエネルギーを、〝現在〟のためだけの費やして、晴子さんを襲っているというのか？
自分の体を見つめる。
……今すぐにでも助けに行きたいというのに、こっちはそんな力も入らない。
目の前で戦っている彼女を、見殺しにしたくない。
それなのに……それなのに……。
「……ちくしょう……ちくしょう……、晴子さぁぁぁぁんっ!!」

もどかしさが募る。思いは声に現われる。
智子の魂の叫びが、辺り一帯に木霊する。

――ザッ。

土を踏みしめる音。
智子の前にもう一人の人物が……、
最後の人物が姿を見せた。
「――あんたは？」

――状況分析。

先程は予想外の反撃を受けた。
弾き飛ばされたことで間接の動作不良が三箇所。
それ以外にも過負荷による部品破損が五箇所発生している。
「……ですが、行動に支障はありません」
ハルコはなおも後退中。

戦場を離脱しようと試みている。
だが、負傷しているらしく動きは鈍重だ。
「追いつくのは容易です」
五十六秒もあれば距離を詰められるだろう。
「――移動開始」
急がなくてはいけない。ハルコの殺害が終わったら、トモコを対処する必要がある。そして、残ったミスズとアサヒを処理しなければいけないのだ。
「くそっ、もう来おった！」
ハルコが、足を速める。だが――
「問題ありません」
ハルコの移動速度より、こちらの移動速度の方が大幅に上回っている。
駆ける、駆ける。
接敵予定は十二秒後を予定。
ハルコが木の根に足を取られて転倒。
接敵予定を六秒後に修正。

三、二、一――接敵。
「がっ……！」
うずくまるハルコの腹部を蹴り上げた。
確かな手応えをセンサーに感じる。
これで、ハルコはしばらく動けない筈だ。
「……さあ、これでお終いです」
私はハルコの頭部に銃を突きつける。
そして、トリガーを引いた。

ダアァァアンンンッ‼

静寂に響き渡る銃声。
銃弾は見事に吹き飛ばした。

――〝私〟の右腕を。

「――悪いな」
その男は呟いた。

白い煙を上げる銃口。
彼はデザートイーグルを持っていた右手をたらし、静かに彼女を見つめていた。
月明りを照り返し、厳かに輝くその銀髪の印象はどこと無く冷たく、そして悲壮に思える。
闇に融けるその黒い衣装は、さながら死神のようで……。
〝彼女〟は自分を撃った男の方へ視線を向ける。
「――優先目標を変更する要を認む」
より多く殺すために、より多く壊すために、より長く生き残らなければならない。
その為には、この男は明らかな脅威だった。
〝彼女〟はいきなり身を翻し、凄まじいスピードで男に迫った。
先の無い右腕を気にする風も無く、正に吹き飛ばされるような勢いで……。
男の眼前に、〝彼女〟が迫る。
男は、その銀髪と対になるかのように輝く金色の

瞳で、〝彼女〟を見据える。
その表情はどこと無く悲しげで――。
肩を伸ばし、腕を伸ばし、そして再び両手でデザートイーグルを構える。
ターゲットは……〝彼女〟の頭部を捉えている。
「さよならだ」
国崎往人は、トリガーを引いた。

ズダァァアアンンッ！

――そして、その悲しいプログラムは、とうとう終焉を迎えた。

**八十二番　マルチ　死亡**
**【残り37人】**

**415**

## PAST ENDING Ⅳ　貴女へ

バサバサバサッ。
銃声に驚いてどこかへ飛んでいっていたはずのカラスが、再び戻ってきて肩の上にちょこんと止まった。
「……お前か」
往人はだるそうにそう言った。カラスの方には目をやりもしない。
背中には気絶している晴子を背負っている。
どこかに傷を負っていないかと調べたが、とりあえず致命傷になり得そうな傷は無さそうだった。
――後頭部が腫れているのが、少し気になったが。
頭部が砕かれたロボットは放置した。人形遣いとして思わないところが無い訳ではなかったが、埋葬するような余裕は今の彼にはなかった。

往人は智子のいるところまで戻ってきた。
木に寄りかかり座っている智子。
ずいぶんと疲れた様子で、肩を落とし、目を瞑り、まるで眠っているかのようだった。
「……なんとかなったみたいやなぁ」
目をゆっくり開いて、往人の姿を認めた智子は、ぼそっとそう言った。
「あんたのおかげで晴子を助けることが出来た。礼を言う」
往人はそのまま軽く礼をした。
「いややなぁ……。そないなこと言うたら、私かて礼言わしてもらいたいわ」
ほおと口元を吊り上げて、色褪せた笑みを智子は浮かべた。
「ホンマに幸運やわ……。あんたやろ？　晴子さんとこに転がりこんどった居候は」
「ああ」
「そうか……。なんやそんな気がしてたんや。血相変えて走ってくんやもんな……。よかったな、再会できて」
「……全くだ」
ずり落ちてきそうだった晴子を、往人は背負いなおした。
ふと、往人の右手の銃が智子の目に入る。
「あんたの武器……、その銃か？」
「ああ」
「ちょい見してみ」
往人はその銃を手渡す。
「へへ、無用心やなぁ。簡単に武器渡してもうて……」
「あんたにそれは撃てないからな」
「……そうやな。なんや、よう分かっとるんやん」
「まあな」
智子は乾いた瞳で自嘲していた。
手の中に入ったその銃に目をやる。
「……なあ、あんたこの銃何て言うか知っとる

か？」
「いや」
「私知っとるねん……。どや、凄いやろ……？」
「そうだな」
「有名やねん、これ。と言っても……ゲームの知識やねんけどな。悪友から教えてもらってん。……デザート・イーグルっちゅうんや。日本語にしたら砂漠の鷹か……カッコええやろ」
「バカにするな。それくらいの英語は分かる」
「へへ……別にバカにしたわけじゃあらへんで……何や、気にしてたん……？」
そう言って、口の端を引きつらせて笑いながら、智子はその銃を返した。
「砂漠の鷹か……覚えておこう。俺にぴったりだ」
「何でや……」
「ハングリー精神とかな」
「ぼけぇ……あんたは単に欠食児童入門なだけやろ」
「……見たのか？」
「晴子さんの受け売りや……」
「余計なことを……」
そう言って往人は頭を掻き毟る。
その様子を見た智子は笑いをかみ殺すのに一生懸命だった。
往人はその無骨な銃をいとおしげに眺めた。
残弾は、残り一発。
最後まで……俺を助けてくれるか？
「あ！……、そうや。忘れもんがあるで……」
力が抜けただるそうな口調はさっきからのことであったが、それがさらに進行したような……それほどに智子から生気が薄れていっている。
目も、また閉じかかってきている……。
「何だ……？」
「観鈴や……。あの子、あっちに置いて来てもーたわ……。すぐ近くやから行ってやり……。それで、……全員や」
「ああ、それならそこだ」

そう言って往人はその方向を指差した。
するとその方向に特徴的な金色の髪が見えた。
「放っておけなかったんで、連れて来た」
「……はっ、手回しのいいことで」
そう毒づいてから、大事なことを忘れていたのに気づく。
「……なあ、もう一人、黒髪の女の子いてなかったか？　胸に銃弾で傷受けてるんやけど……」
「それは…………残念だが…………」
「…………………そか」
智子は座ったままため息をつく。
「やっぱり……ダメやったか……」
誰にともなく、智子はそう呟く。
往人はその様子を静かに見つめている。
「…………そこな人形遣いっ！」
「……そんなことまでこの女は話したのか」
「まあ少し違うけどそういう事や……。ちょう……冥土の土産に……見せてぇな」

少し、息切れが激しくなった。
「………無い」
「……はぁ？」
「人形をどこかに忘れてきた。だからもう人形劇は品切れだ」
——先客がいたせいもあるが。
「なんやねんあほぅ……商売道具失くす商売人があるかい……」
「悪いな」

ばさっばさっ。

突然、さっきまで肩上で大人しくしていたカラスが騒ぎ出す。
「何だ……五月蝿くすると叩き落すぞこの……」
カラスに向かって腕を振る往人。
その拍子に、カラスのくちばしから何かが落ちた。
「……」

「……」
思わず沈黙する二人。
視線の先には……地に落ちた古ぼけた人形。
「……あるやないか」
「……この駄カラスめ。余計なことを…」
往人は額に手を当てて顔をしかめている。
「芸人に道具がそろったんや……ここでやらにゃあプロやないで……」
「くそう……」
渋々と地面に膝を付くと、渋々と人形を立たせる。
そこに、本番前の緊張感など微塵も無かった。

「さぁ……、楽しい人形劇の始まりだ」
……折角の決め台詞にも、どことなく迫力が無かった。
「……」
「……」

「…………動かんやないか」
「…………そうだな」
「ちぃぃぃぃぃ……っとも楽しくないわ……」
「本番前の俺のコンセントレーションを乱すからだ……」
「どんなときでもバシッと決めるのがプロやろが……」
「うるさい…………とにかくこれで分かっただろう。人形劇はもう店じまいだ」
そう言うと往人は立ち上がって、智子の傍からどこかへ行ってしまった。

「――けっ……やっぱり眉唾か……期待させよってからに……このドアホ……」
背中の木に体重を預けながら、そっと前を見る。
断続的に続いていた喀血は収まったようだが、今度は疲労が激しい。
有体に言って……眠い。

「あかん……わ。ここで眠ったら……ホンマに……逝ってしまいそうやわ……」
起きていれば、生きていられるのだろうか。
……自分が、あさひに言った様に。
「あー…………」
そう考えると……言葉が出なくなった。
死ぬ、……か。
「…………なんやねん、なんでやねん」
地面についた左手に力がこもり、そこに抉り痕が残る。
「誰が……誰が死にとうて死ぬねん……」
涙が込み上がってくる。無意識に、鼻をすすっている。
「私やって……私やって……」
指先だけ、開けたり閉じたりして、土を引っ掻き続ける。
「ホンマは……ホンマは死にたくなんか……」
我慢できなくなって……頭を振り乱して……そうして、気付いた。
——立った姿勢のまま、こちらを真っ直ぐ見つめている、人形。
智子は一度、大きく鼻をすする。
「……なんやあ、あのプータロー、また商売道具忘れて行きおった」
——人形が、突然真横に向きを変える。
「……な⁉」
これは、夢か——？
人形が、歩き出した。
それはひどくぎこちなく。
しかし、どこか楽しげに。
「……あ……は……動いとる……」

――そして、その動きがいつしか小走りになって

……。

とてとてとてっ……、ぽてっ。

――途中で、転んだ

だが、何事も無かったかのように立ち上がり、再び歩き出す。

とてとてとてっ。

――そうしてまた小走りになり。

ぽてっ。

――また転んで。

とことことこ……。

――また立ち上がって。

「何や……どん臭い人形やな……それじゃあ……」

――は、はわわわわわわわわわー！

――ハイ、俗に言うガス欠だそうです！

――私、歩くの好きなんですよ～。

――あう～っ、いい話ですぅ～～。

――夢は世界一のメイドロボです！

「それじゃあ……まるでマルチやないか……」

ぼろぼろと流れる涙で顔を汚しながら、智子は笑顔を浮かべていた。

「――いい夢は、見れたか」

智子が背にしていた木の後ろから、すっと住人は現れた。
「ああ……見れたで……」
「それなら……良かった」
「楽しい……夢やった……」
言い終わった瞬間に、激しくむせいだ。
「おい、大丈夫かっ」
心配して傍に寄った住人が、智子のことを抱え起こす。
……目に映ったのは、大量の喀血。
「な……生兵法は怪我の元言うけど……がふっ……まさか致命傷になる……なんてな……っ」
智子は住人に目をやると、住人の服を掴んで、掠れた声で言った。
「……あ……あとを……頼むで……」
「……分かった」
――ただ、それだけのやりとりで済んだ。

……この人形、まだ国崎が操っているのだろうか。
何故なら……人形はまだ動いていたから。
微かなる右手、それはまるで、バイバイと言っているようで――。
――そして、智子は眠りに落ちた。
永遠に目覚めることの無い、安らかな眠りに。
幕切れとしては、悪くなかったなぁ。
……なんて、最期くらいカッコつけてもええやろ。
――――――な、晴香。

**七十八番　保科智子　死亡**
**【残り36人】**

## 416

## PAST ENDING V　夜明け

うか。

――結局、機械は人間の道具に過ぎないのでしょうか。

――そうですね、最初はそうだったかもしれません。でもきっと、私たちの存在理由は、それだけじゃないはずです。

――それで、壊れてしまっても。

――できたら、人間の方にお役に立った上で、壊れたいですよね。

――お姉さん……。

――セリオさん、私たちは幸せ者です。だって、こんなに沢山の人間の方とお友達になれました。

――友……達……、でも私は……。

――隠してもダメですよー。お姉さんには何でもお見通しです。

――そう……ですね。

――こんな結末にはなってしまいましたけど、私、他にも大切なものを一杯見つけました。身勝手な言い分かもしれませんが……私は幸せです。

――お姉……さん………。

――泣かないで下さいセリオさん、大丈夫、もうずっと一緒ですよ――。

目覚めた観鈴は、すぐに泣いた。

全てが終わったことを理解して、さらに泣いた。

それが、自分に出来る全てであるかのように……

ただひたすら、往人の胸で泣き叫んだ。

往人は、黙って観鈴の小さな体を抱いていた。

多すぎた。

あまりにも多すぎた。

涙を流す理由が多すぎた。

再会の喜びも、生き延びる苦しさも、別れの悲し

みも、全てが含まれていた。
住人は、慰めの言葉を持たなかった。
そしてようやく観鈴が泣き止んだとき、晴子も目を覚ました。
安らかに眠る智子を見て、
「何やぁ……、先に逝ってもうたんか……智子……」
晴子は泣かなかった。
ただ一言、寂しそうにそう言った。
寂しそうに……、とても寂しそうに……。
「うちがここにこうしておるっちゅうことは、智子かあんたが助けてくれたっちゅうことか？」
「二人ともだ」
少しして、晴子はそれを住人に聞いた。
「彼女があんたの名前を叫んでるのを聞きつけなければ、ここに来ることは無かった。……彼女のおかげだ」
「そうやったか……。ありがとうな、智子」
振り返った晴子は、智子に向かってそう言った。
それから数時間かけて、住人たちは死者の埋葬をした。
あさひの遺骸を運んできたとき、観鈴が
「ダメ、あの子も」
と言って、マルチの遺骸も持ってきたことに、住人は正直驚いていた。
晴子はそれを見て、にやりと笑っていた。
「——死に際に、人形劇を贈る日が来るとは思わなかった」
最後に智子を埋葬した後、ぼそっと住人は呟いた。
「結局、どれも助けることは出来なかったわけだが」
「そんなことないよ」
観鈴は住人に言った。
「住人さんの人形劇は、心をあったかくさせてくれるから……。だからきっと智子さんも安らかに眠っていられるんだよ」

「そうか……」
住人は言葉を濁した。
「せや。最期に安らかな気持ちのまま逝けたなら、十分助けになっとる」
晴子が口を挟んだ。
「人がたくさん死んでいく。無駄な死なんて一つも無いけど、せやけどその全てが弔われるわけでもない。この殺伐とした空間で、死に場所を用意して、あの子はうちらに看取ってもらえた。それは、無意味なんかやない」

——用意された未来を、否むために走る。
硝煙に消えた想いは、今を生きる彼ら彼女らに継がれていく。
始まりの終りは、終りの始まり。
過ぎ去った結末を映し出していた長い夜は、もう、終りを告げようとしていた——。

## 417　ぼくの戦争　——philosophy——

彰は慎重な足取りで壁伝いに階段を半分昇り、踊り場に立つ少し前まで辿り着く。多少不用意ではあったかも知れないが、他に上に行く方法も思いつかなかった。エレベーターを使うよりはマシだろう。鞄の中から弾数の多い方のサブマシンガンを取り出し、拳銃を腰のベルトに挿す。サブマシンガンを二本構えて気配を探る、気配は無い、殆ど無いという方が正しいか、微かに感じるこれが先ほどの冷気の正体だろう。
踊り場に立つ。振り向いて階段の上を見る、サブマシンガンを持った男が見えた。ぱらららららららら、音色が彰の足下で鳴る。一発も当たらない、当てなかったの方が正しいと気づくのに一コンマ秒、これが威嚇射撃だと気づくのに一秒。
「あんたが侵入者か。顔は良く見えないが、ガキだ

な」
　髭の男が笑ってそう言う。ヘッドギアもかぶらず、余裕の表情を浮かべて笑う男に彰は震える、背筋に冷気、
「よくここまで来れたもんだが、ここまでだな、ガキ」
　やばい、直感と本能が告げる、恐怖で足がすくむ、ダメだ動け動け動けッ!!　動いた、逆側に身体を転がす、陰に隠れたところで十三段の階段を一気に飛び降りる。まともに戦ったら間違いなく殺される！　足から着地、鈍い痛み、足を捻ったかも、だが気にしていられない！　高い経験値を持った兵士と互角に戦うなど無茶だ！
　五階の渡り廊下に身を転がす、殆ど同じ刹那に響く雷鳴、雷鳴と紛うほどの轟き。同じサブマシンガンの放つ音とは思えない。違う、同じ音だ、自分がビビっているからデカい音に聞こえるだけだ、落ち着け落ち着け落ち着け落ち着けッ！　ぱららららららららららら、ぱらららららららららら、壁越しに伝わる弾丸の雨の音、彰は息を吸って耳を澄ます、雨の音に紛れて階段を降りてくる音が聞こえるか？　聞こえない、大丈夫、そう深追いはしてこない。自分だって武器を持っている。だが保証はあるか？　絶対に追ってこない保証はあるか？　経験の前には自分の耳などあてにならないだろう、自分の勘などあてにならないだろう？
　立ち上がる、彰は渡り廊下を駆ける、五階には誰もいないものとして進める、いたらその時点で仕舞いだ。この走る時間を考える時間にそのまま換算する、落ち着いて頭を走らせろ、経験に勝つためには思考が要る、想像力と創造力が必要だ。時間がそれほどあるわけでもない、大事に時間は使え。敵も追ってくるし、自分が特定されて爆発させられるのもそう遅くはない。
　自分が特定される前に爆弾管制システムを破壊し、

通信機のところへ向かう。これが七瀬彰の起こした戦争の目標である。自分の特定までに何分掛かるか判らなかったが、事実上それしかないのだから仕方がなかった。

よくよく考えてみれば杜撰な話なのである。爆弾自体に発信機をつけていれば特定は容易であるのだから。特定されればすぐにドカンだ。彰の戦争は完全敗北で終了する。

彰のその不安は、しかし二人目の兵士を殺した辺りで失せる。爆弾に発信機が備えられているのならば、自分が二人目を殺した頃には自分は破裂している筈だったからだ。侵入者など早めに叩くに越したことはないのだから。だが爆弾は爆発しなかった。発信機が直接爆弾に備わっているわけではないのか、或いはこの施設の中だと発信機が上手く作動しないのか、どちらなのかは定かではないが。よくよく考えれば本当にダメな計画だった。結果オーライだとは言え、自分もよくやる。

とにかく、自分はここまで来た。行き当たりばったりだが自分はここまで辿り着いた。この建物は七階＋屋上という構成でここは五階。そして恐らく、六階にいる兵士を殺せば主要な戦いは終わる筈だ。直感はそう告げている。さて、上の階に兵士は何人いる。一人でも勝てるかどうかわからないのに複数いるなど考えたくはないが、

「――事態は常に想像の斜め上を行く」

上を行くんだ。最悪の事態を考えろ。最悪の事態だ。自分がなすすべも無く爆破されると言うことは無い。もうない。だが自分が複数名の敵に穴だらけにされる結末はまだ残っている。複数名いる。そう考えろ。どうやってそいつらを殺す。どうやって――。

決まっている。

叔父達を殺すために持ってきた切り札。或いは、爆破管制装置を破壊する為に持ってきた切り札。

ここで使うしかないに決まっている。

叔父達は所詮素人に毛が生えた程度の筈だから、サブマシンガンで殺せないこともないだろう。爆破管制装置もなんとか破壊できるだろう。だが、修羅場を潜り抜けてきた複数の敏腕兵士を自分が殺せるか。無理だ。大体爆破管制装置は屋外にあるのだから、切り札が使えるわけがないのだ。あの切り札を使える場所は密室で風が弱いところだけなのだから。
決める。彰は立ち止まって左手に提げた鞄の中身を見る。ここまで重い重いと言いながら抱えてきた秘密兵器を、六階を突破する為に使う。後のことは後で考えろ！
——さて、何処で切り札を使う。上手く敵を誘き寄せて密室に詰め込まなければならない。出来ることなら、自分は敵を誘き寄せる為に戦いたくない。下手を打てば何も出来ず自分は死ぬだけだからだ。そのような条件が揃う場所だ。場所を考える。考え始めて一刹那で答えが出る。
決まっている。あそこだ。

顔を上げた彰は階段を駆け下りようと走り出すがその時銃声、拳銃の音、弾丸がヘッドギアを掠めて頭が揺れる。
「よう、少年」
先ほどの兵士とは違う大柄な男が上の踊り場に立っている。右手に拳銃、首からはサブマシンガンを提げていて、やっぱりヘッドギアはかぶっていない。その後ろには小柄な男。右手には果物ナイフ程度の刃渡りのナイフを何本か持ち、左手には巨大なサバイバルナイフを装備している。やはり首からはサブマシンガン。畜生、やはり複数かッ‼
「さあて、殺しあうかね」
彰は下を向くと飛び降りる、同時に拳銃の音、弾丸が飛ぶ、刹那の空白の後重い痛みが身体の一部を走る。正確な狙いだった。痛い。痛い痛い痛いッ‼
痛すぎて何処を撃たれたのかもわからない、神経を研ぎ澄まして感じる、足を撃たれたのだと理解。右足の爪先に巨大なダメージだ。一瞬止まった隙に

肩にも激痛。見る、小さなナイフが防弾チョッキの隙間を縫って刺さっている。乱暴に抜く、止まっていちゃダメだ、いい的になるだけだダメだダメだダメだ!! 走れるかと身体に問う、走れないと身体は言うが舐めたことを言うんじゃないと脳が叱咤、階段を駆け下りて四階まで一気に飛ぶ。畜生、なんて技量だッ!! 自分じゃ逆立ちしても勝てそうにない。やはり切り札だ、

彰は四階の渡り廊下に転がるとそこに座り込む。敵の追撃はない。じわじわと殺るつもりか。息を吐く。見てろ、必ず殺してやる。お前らは邪魔なんだ。

血の匂いがして眩暈がするが、痛みが眠るのを許さない。

「うん、なかなか面白い」

六階――傭兵三人は楽しげに笑う。

「銃で撃たれた痛みを簡単に堪えられる素人なんてなかなかいないものな」

髭の男が言うと、小柄な男は苦笑する。

「――まあ素人には違いない。早めに終わらせて寝よう」

「まあな。すぐにボロを出すだろう」

大柄な男は溜息。自分たちのような訓練された傭兵の前で素人が出来ることは三つ。逃げるか、無謀な特攻をするか、奇策とも呼べぬ策を弄するか。自分たちの前でどんな策を用いようとも通じるわけがないのに。

案の定だった。

三人が立っている階段の傍にあるエレベーターが、三階から動き出している。先ほどまで一ミリも動いていなかったエレベーターが稼動し始めたのを見て、三人が三人とも退屈そうな溜息を吐く。この侵入者は、二番目か三番目の選択肢を選んだわけだ。奇策か特攻か。どちらにせよ、彼らには問題ではなかった。

「階段が危険だからって理由で、今まで使わなかっ

ったエレベーターに一縷の望みを託したってわけかね」
大柄な男が言うのを聞きながら、髭面は「なんだ、つまんねえ」と、興醒めしたような顔で肩を竦める。小柄な男は欠伸までしている。
「油断するなよ。きっかり完全に完璧に一点の間違いも無く終わらせて、そしてゆっくり寝るんだ。スリルはあんまり味わえなかったが諦めよう」
大柄な男はそう言う。そしてまるで今気づいたように肩を竦めて笑いながら、
「あー、エレベーターを動かしたのは囮で、あっちの階段使って昇ってくるかも知れんから。高野行っとけ」
「りょーかい」
つまらなそうに、髭面の男は反対側の階段へと向かう。これで充分だろう。エレベーターの中にいなくても、高野が行った方の離れた階段の方を昇ってくればそれで終わり。このエレベーターは右寄りの階段のすぐ横に配置されているから、そっちの階段を昇ってきても蜂の巣。
退屈な仕事だな、と笑いながら、二人はサブマシンガンを構える。スリルが味わえなかったのが残念だが、まあ、それは贅沢と言うものだったろうか。
大柄な男と小柄な男、二人は並んでエレベーターのボタンを押す。あと数瞬後にはエレベーターの扉が開いて侵入者は蜂の巣だ。それで終わりだな、
エレベーターを使って何をする。中で侵入者がサブマシンガンを構えて待っていたとしても自分たちは倒せる、階段を昇ってきても同じことだ。だが、あの素人は曲がりなりにもここまで侵入してきた強い男だ。強いだけではなく頭も悪くないだろう。その男が、このエレベーターを何に使う。棺桶代わりにする訳もない。このエレベーターの起動には何かの意味がある。――どんな奇策を用意した？
不用意に過ぎなかったか、このボタンを押したの

は。
　時間が無く、考えることはもう出来なかった。五階から六階にエレベーターの表示が変わり、扉が開く。
「――これは、――ッ!!」
　二人の兵士が事態を理解するのに掛かる時間が三秒。そして三秒が経過する頃には、二人の脳髄は炭と化していた。

　彰は三階まで一旦降りて、エレベーターの中に入る。その手には三脚の椅子が握られている。この三脚の椅子が無くては彰がエレベーターの上に行くことは出来ないのだ。
　どう頑張っても階段を昇ることは出来ないだろう。あの自分の千倍は強いだろう兵士たち数人の作る弾丸の壁を自分が突破できるわけが無い。怪物のような運動性能も自分にはない。だとしたら、何処から上へ向かうか。
　一つしかなかった。エレベーターを使うのだ。
　エレベーターの中にいては勿論彰は蜂の巣にされるだろう。だが、エレベーターの上にいたらどうだろうか。エレベーター上にいる自分を発見し殲滅するには手間がかかるだろう。――だが勿論、それだけではダメだ。
　三脚の椅子をエレベーター内に置き、その上に立つ。手を伸ばして少しいじると板が外れ、エレベーターの上に繋がる穴が開く。身体を上手く捻れば登れるだろう。
　穴に顔を突っ込み、エレベーター上部がどのようになっているかを確認する。あるのは箱を吊るすワイヤーと非常用の梯子。恐らくこの梯子を伝っていけば屋上に行ける筈だ。彰は考える。いったん屋上まで出た後、爆弾管制装置を破壊する。破壊した後に下に降りて叔父や高槻を殺す。或いは通信装置を使って叔父達に話を聞く。こういう順番で行動を進めて行くことに決める。

一旦彰は椅子を降りると息を吸う。失敗したら死ぬ。この切り札は自分自身にも間違いなく被害を及ぼすし、もしもあの老獪な兵士たちが自分の企みを見切っていたら終いだ。だがこれしか手段が無い。手段が無いのだ。息を吸う。吐く。もう戻れない。

美咲とはるかの顔を思い出して彰は目を閉じる。

大丈夫。怖くない怖くない怖くない。死んだって大好きな人たちが天国で待っている。

覚悟を決めて、エレベーターの扉を閉じる。三階から六階に行くまでの間にすべての作業を終えなければならない。切り札と武器入りの鞄を天井の穴に放った後、自分も身体を捩って穴を潜り抜けて天井に上る。ランプの表示は四階。四階でエレベーターのボタンを押しておいたから少しは時間が稼げるだろう。闇の中鞄を開ける、切り札の入った袋を手に持つ、重い。この重さが自分の命を守ってくれることを信じて彰はここまでこいつを抱えてきたのだ。

彰は切り札——小麦粉入りの袋を開けて穴から撒く。

エレベーターの中は真っ白な空気に覆われる。この空間こそが自分の切り札なのだ。そしてその更に奥深くに置いておいた本——清涼院流水ジルシの本の一ページを破ると、ポケットからライターを取り出して火を点ける。そして扉が開こうとするその瞬間を見計らって、彰は梯子に手を掛けると、その火の燃え盛る紙を穴に放る。

ゆっくりと、ゆっくりと、燃える紙片が中に落ちる。

——粉塵爆発。これが彰の切り札だった。

可燃性の微小な粉末の飛び交った密閉された空間、充分な酸素、小さな火気。

その三つの条件を満たした時生じる爆発。

鉱山や工場などでよく起こった事故の原因に粉塵爆発が関与していた例は数知れない。それを彰は人

為的に起こそうとしたのだ。
　グッドラックと小さく祈って彰は目を瞑る。どうか自分に幸運あれ。幸運が自分の命と勇気の矢を守ってくれることを。成功したら、このトリックを教えてくれた自分の好きなあのミステリー作家を一生信望し続けると彰は誓う。
　勿論、成功だった。
　彰の目に二人の兵士が顔を青くした瞬間が映る。耳が潰れたと思った。耳が聞こえない人間に生まれたらこのような感覚になるのだろう、そう思った。眩い光が間近で炸裂し、太陽が爆発したのかとまで錯覚する。間近で起こった極大の爆音は彰の聴覚と視覚を完全に奪った。爆風が身を包んで、間違いなく自分は死んだのだと錯覚する。脳味噌が融けるその様子まで想像することが出来た。
　信じられないほどの爆音を立ててエレベーターははじけ飛ぶ。大きな火柱が立って、熱風が頬を撫でつけ、次の一秒後にはエレベーターだった箱がただの金属片となる。
　巨大な飛片が自分にも襲いかかる。大きな金属片が後頭部に激突、ヘッドギアにひびが入る。痛みと熱。熱が彰の身体を包む。蒸し焼きになるかと思う。飛び出てくる火炎が自らの足を灼く。やばいと思って必死に梯子を昇るが熱は消えない、熱い熱い、だが大丈夫大丈夫大丈夫、止まっている方が危ない!!
　彰は鞄を肩に抱えて梯子を登る。
　ワイヤーが千切れてエレベーターの残骸が落下する。
　梯子を登る。六階を突破したのだ。そして七階まで登って、やっと実感する。
　真下で爆風が世界を包んでいる様子を見て、怪我はしたが自分の企みはここまですべて上手く行ったのだ、と判った。ヘッドギアを脱ぎ捨てる。後頭部から血が流れているのを首元で感じる。やばいかもしれないが自分は生きている。足にも痛み。爆風で右足の半分くらいは吹っ飛んだかもしれない。それ

でも彰は梯子を登る。震えた手で梯子を掴みながら、一歩一歩段を登って行く。

梯子を登り切る。あるのは小さな扉。肘で押すとすぐに外れてそこから月光が降ってくる。鞄を投げ込み、彰は身体をよじって自分も外に出る。

爆弾管制装置が目に入る。パラボラアンテナの付いた大きな機械だ。それに手の届く距離にまで自分が到達できたことに小さく満足感。柵で封鎖されているが、サブマシンガン何丁かで破壊できるだろう。早く壊してしまおう。

鞄の中からサブマシンガンを取り出したそのとき、

「よくもまあ、ここまで派手にやってくれたな」

——そこに高槻が現れる。ここで高槻しか現れないと言うことは、やはりこの施設には叔父達はいなかったということか。

彰はゆっくりと振り返ると、小さく息を吐く。護衛はいない。機関銃を携えているから不必要と考えたのだろう。

機関銃の銃口を自分に向けたまま高槻は管制装置の前に回り込んで、にたあ、と嫌な笑みを彰に見せる。

月が眩い。

その為、自分がどんな表情をしているか想像もつかない。

「長瀬一族のガキが、大それた真似しやがって」

多分。

自分は今、ひどく面倒くさそうな顔をしている筈だった。

「機関銃で殺すのは簡単だがな。はは。せっかくだからお前には本当にショックで死ぬほどの恐怖を味わってもらおうか。お前の腹の爆弾を爆発させてやろう。死ぬほど怯えて死の瞬間を待たなくちゃいかん。爆発する瞬間まで恐怖に怯えていなくちゃいかんのだ」

そう言って高槻が懐から取り出した小型の装置を見て、
彰は本当に退屈そうな顔をする。
「七瀬彰君。君は今完全にオレに特定されていて、しかもここは屋外だ。この建物の内部にいたならば爆破することは難しかったが――ここなら簡単だ」
高槻はボタンを押す。
「ははははは！　お前が死ぬまであと何秒だあ!?　恐怖に怯えろ命を求めて懇願しろぉっ!!　死の瞬間まででこの高槻様に逆らったことを後悔して、」
馬鹿だな、こいつ。本当に最高責任者か？
「馬鹿か？　お前」
その何秒かの間に、
「はあ？　何を言っている、貴様、」
僕のサブマシンガンが火を吹かないと誰が決めた。
「死ね」
彰は躊躇わずサブマシンガンの引き金を引いて高槻の頭を粉々にする。悲鳴はタイプライターを叩く音に似た軽い音に簡単にかき消される。汚い顔が滅茶苦茶に歪んで、次の瞬間には高槻は崩れ落ちる。
この建物の中で一番手ごたえのない相手だった。
さあて、
彰は走る。後何秒。後何秒でこの爆弾は爆発する。彰は爆弾管制の装置に向かって走る。サブマシンガンを乱射。装置を封鎖している柵に弾丸の雨を降らす。集中して撃ったからすぐに穴が開く。充分。自分の体内爆弾の爆発とサブマシンガンの乱射という攻撃できっとこの装置は破壊できる。そしてゲームは自分の人生と一緒に終わる。
「行くぞぉぉぉぉおッ!!」
叫ぶ。泣いていることに気づく。何が悲しいものか、自分は最後の最後まで勇気の矢を押し通すことが出来たのだ、思うのに涙が止まらない。涙が止まらない。怖いのだ。やっぱり自分は怖くてたまらないのだ。痛いのは嫌だし苦しいのも嫌だし死ぬのも嫌だ。自分は所詮矮小な一分子なのだから。

「うああああああああああッ!!」
泣きながら叫ぶ。自分の喉から出たとは思えないほど大きな声で喚いて、天国の美咲さんやはるかのことを思って彰はサブマシンガンを捨て、自分の身体をその穴の中に投じようとしたその瞬間、
——先ほど死んだ高槻が大爆発を起こした。
彰は吹き飛ぶ。自分の足元で光と熱が発生して、熱風による強力な「押し」を感じたかと思うと彰は転がり、後頭部をコンクリートにぶつけてしまう。その刹那に混乱、どうして自分ではなく高槻が爆発したのだろう、
だが意識はそこまでしか考えることを許さない。
彰は痛みと疲労で目を閉じる。眩い世界が闇に落ちる。爆弾管制装置が吹き飛んだことを理解する間もなく彰は目を閉じる。
——杜若きよみを爆発させたときとはまるで破壊力が違う。そもそもきよみの爆弾とは違う種類の爆弾なのだ、高槻の身体に入っていた爆弾は。
七瀬彰の体内に入ることになっていた筈の爆弾が、このクローン高槻の体内に入っていた。神様がした悪戯にしてはあまりにおイタが過ぎる悪戯だった。
最後の最後まで彰は幸運に助けられたのだった。けれど。
七瀬彰というこの青年が成し遂げたことは、幸運、の一言で終わらせるにはあまりにも重大すぎる事だった。

## 418 気まぐれ

「大したタマだよ、少年……」
男の声に彰は意識を取り戻した。
携帯していた銃器は、爆風に紛れて手の届かない場所へ。自身は仰向けに倒れていて、その腹に足を乗せられている。

おまけに相手は彰の心臓にねらいを付けた形で、サブマシンガンを構えているという状態だった。
　幾ら防弾チョッキの上からとはいえ、この至近距離では要をなさないかもしれない。
「本当に、やってくれるよ。お前のお陰で、俺の戦友が二人もあの世行きさ。しかし、こんなひ弱そうな奴が、こんなところにたった一人で乗り込んできて、しかも事をやり遂げちまうんだからなぁ。俺達は飯の食い上げだよ」
　そう言いながら、なにやら楽しそうに彰を見下ろす傭兵。
「それはまぁいい。しかし、何だってこんな真似ができる。何がお前にこんな事をさせるんだ？　俺はそいつが知りたい」
　彰は小さくせき込んで、そして呟いた。
「――強くなければ生きられない。優しくなければ生きていく資格がない……」
「へっ？　なんだよそりゃあ。ＣＭかなんかか？」

　唐突な彰の言葉に、傭兵――高野と呼ばれていた男だ――は軽く首を傾げた。
「違うよ。チャンドラーさ。フィリップ・マーロウの台詞だよ……」

――僕は何かをしたかったんだ。
　今までの僕はいつもなあなあで事を済ませて、それでも、自分の夢想するような展開が実際に起きることをどこかで期待してた。
　人に向ける優しさは自己愛の裏返しだった。他人に優しく振る舞うことで、その見返りに優しくされることを期待する……。そんな、強さとは無関係の生活を続けていた僕。
　でも、この島でまで、それを続けるわけにはいかなかった。
　先に死んでいった、美咲さん達のためにも生きている僕は何かをやらなければならなかった。
　状況に流されるのではなく、自分の意志で何かを

やれる強さを僕は欲しかった。
そう思ってここまでやってきた。そして、一つの目的を達成することができた。美咲さん、僕を褒めてくれるかい？
けど、ここまでだな。ここが僕の限界だったって訳だ。
僕は強くなれたのだろうか。
……そして。
美咲さん、もっとそばにいたかったよ。
また、あの頃みたいに一緒に過したかった。
ここで生を終えたなら、向こうでまた同じように過ごすことが、出来るだろうか……。
彰の思考はぐるぐると回った。
その中に現状打破をなせるアイディアは一つもなく、もはや彼は観念した様子だった。
傭兵もしばらくの間、彰の言葉の意味を考えていたようだったが、それにもどうやら飽きたらしかった。
「その台詞がなんだっていうんだ。お前はここで終わりだよ。ゲームに戻れといっても、今さら首を縦にも振るまい」
彰は曖昧な笑みを浮かべて……。
「じゃあ、素直にゲームに戻る、と言ったら？」
言い終えるや否や、体をひねりながら急に起こした。男の銃のねらいを外そうとする！
「信じるものかよ」
――僕はまだ死ねないっ！
そして一発の銃声が鳴り響いた。
銃口から発砲後の白い煙が薄く立ち上っていた。
しかし、銃弾に倒れた者は一人もいない。
高野の銃ははるか上空、月に向けられていた。
「……何故？」
彰は呆然として問う。
「何故、か。……気まぐれだよ。気まぐれ。おめえ

みたいな素人がドコまでやるのかを見てみたくなった。そう、ほんの気まぐれだよ。俺はお前を発見できなかった。そういうこった。早く行っちまいな。俺の気が、変わらない内にな……」
「う、うう……」
爆発に巻き込まれたときにできた傷は思いのほか小さかったが、それまでの蓄積が彰を苛む。
——でも、大丈夫だ。まだまだいける……。それに、僕にはまだ……やらなきゃならないことが残ってる。行かなきゃならないんだ、僕は……。
自らを励まし、手近の武器を拾う。
「じゃあ、僕は行きます」
——つい先ほどまで殺し合っていたのにな
そんなことを思いながら、彰は一礼する。
「ああ、いっちまいな。さっさといっちまいな」
高野という名の傭兵は面倒くさげに片手を振って彰を送り出した。
「さーて、どうなる事やら……」
高野はポケットから煙草を取り出し、ゆっくりと火をつける。
そして、目を細めながら見送った。
屋上にぽっかりと口をあけた暗闇へ、建物内に続く扉の奥へ、彰がゆっくりと飲み込まれていくのを……。

## 419　さまよう心と体

うーん……気がついたら暗い森の中……
私、どうしてたんだろ……
そういえばお姉ちゃんが言ってた気がする。
私が夜な夜な夢遊病者みたいに山の神社に歩いて……って。
……ここ、どこなんだろ？
見覚えのない景色だった。

佳乃は、きょろきょろと視線を動かそうとしたが、そのときに自分の体に起こった異変に気づく。

……あれ？　体が……体が動かないよぉ～……これってもしかして金縛り？

だけど視線だけは自由に動かせた。まるで自分の体とは別に、別の自分の目があるみたいな……そんな感覚。

あうっ……なんか刺さってるっ！
……わたしの腕に……矢!?
痛い！　痛いよぉ～。
……ってあれ？
…………痛くない。
まるで自分の体じゃないみたい。
……もしかして幽体離脱して別の体に入っちゃったとか？

だが、もう片方の無傷な右腕には黄色いバンダナが巻かれてた。そのバンダナは間違い無く、彼女が姉から貰った物だった。

これ――やっぱりわたしだ。
気がついたら腕に矢が刺さってて、体の自由がきかない……
うぬぬ、オカルトだよぉ～。
これは夢かな？
だって、こんなこと普通じゃありえないよ。
これは悪い夢なんだよ、きっと。
じゃあ、さっきまでなにしてたんだっけ？
それでようやく思い出した。
あの張り裂けるような悲しみを。
――お姉ちゃん……。
そういえばマナちゃん、きよみさんもいない。
どこに行っちゃたんだろう……。
もしかして、それも夢……だったのかな？

本当の私は自分の家のベッドでうなされてるだけで朝起きたら全部忘れちゃうのかも。
——だけど、この胸をしめつける痛みだけはとても夢には思えなくて。
あれこれ考えてる内にわたしの体が勝手に動き出した。もう一人の夢の中のわたし……かな？　なにをしようとしてるんだろう。
ブシュッ……
一瞬血が飛んで、矢が引き抜かれた。
わわわ、大変だよぉ、血が、血が……。
だが、思ったほどの出血はなかった。
先に鏃がついてない、太めの針のような矢だったため、傷口を傷つけることなく、すんなりと抜けた。
もし鏃がついていたら、この程度の怪我ではすまなかったであろう。
どうやら動脈は傷ついていないようだった。傷口からの出血はそれほど多くない。
今のもう一人のわたし、まるで腕のいいお医者さんみたい。
聖お姉ちゃんみたいでかっこいいよぉ。
夢の中の佳乃（わたし）はその後、その傷をバンダナで塞ごうと——。
——えっ!?
だ、だめぇっ！
そのバンダナだけははずしたらだめぇ！
夢の中の自分に向けて佳乃は叫んだ。
その声が届いたのか、夢の中の佳乃はバンダナを

はずす直前のところで動きを止めた。

つ、通じたのかな？

……たとえ夢でもバンダナをはずすのは嫌なんだよ。うう、本当は傷口に何か巻かなきゃまずいと思うんだけど……ごめんねわたし。

傷口をそのままにした佳乃の体は、森に向かって歩きだす。歩みに伴ってゆらゆらと揺れる視界。

……どこに行くんだろう？

でも、さっき引き抜いた矢……置いていったほうがいいと思うな。そんな風にもってたらまるで夜中にナイフ持って歩いてる危ない人みたいだよぉ～。

聞いてるの？　もう一人のわたし。

……あ……なんだろ……。

また意識が遠のいていく……。

佳乃は森を抜け、岩場に囲まれた場所を独りふらふらと歩く。

やがて見えてくるひとりの遺体。それは先程絶命した杜若きよみのものだった。

佳乃はうつろな瞳でそれを一瞥すると、別段何事もなかったように再び歩き出した。バンダナの巻かれた手には鏃のついていない矢を逆手にもって。

もう片方の傷ついた手で、元は聖のものであったバッグを握って。

傷の割にその出血はひどいものではない。

が、それでも腕から流れる血はバッグを少しずつ真紅に染めている。

本来であれば痛みでバッグなど持てる状態ではないのだが、佳乃はそれすらも感じていないように涼しい顔。

まるで人間としての大事な何かが欠落しているかのように。

「…………」

遠くの方で銃声が聞こえる。
その音に導かれるように突き進んだ。
まるで生きている誰かを探し求めるかのように。
まだわずかに血のついている矢が、血を欲しているかのように不気味に――光っていた。

## 420　廃棄処分

潜水艦の発令所に無線連絡が入る。
上空。長瀬一族から。
『オリジナル』高槻は、回線を開いた。
彼にとって、悪夢の通達であることも知らずに。
「はいはい、こちら高槻」
「あぁ、高槻か。君はさっきの放送でまた、無駄な介入をしたね？」
「あれですか？　だってあぁでもしないと、あのお人好し連中動かないでしょう？　結託して脱出試みられるのもマズいですし、現にさっきも襲撃が
……」
「高槻、君は前の通告を覚えているかね。我々は『いかなることがあろうとも』無駄な介入を避けるように言った。我々の命令がきけんのなら、君はもう必要ない。ゲームに加わりたまえ、新たな参加者として、ね」
「……は？」
「君はいらない。そういうことだよ。今となっては言ってしまうが、参加者に脱出されようが、それは一向に構わないのだよ。その結末だって賭けの対象の一つなのだ。我々の権力を持ってすれば、『脱出後に口を封じる』ことも容易なのだから。それを君は、自己の保身や思考で動き過ぎた。駒としての立場を忘れてね。そんな君は、もういらないんだよ」
「……なっ！　俺は今までＦＡＲＧＯ代表として数々のゲームの管理者をやってきたじゃないか！　貴様ら、今さらそんな俺を捨てるのか？」
「言っただろう。使えない駒はいらない。劣化す

ぎたコピーにも限界が来ているようだしね。
君は自分が『オリジナル』だと信じていたようだが、君だってクローンなのだよ。
本物の高槻は、数回前のゲームで参加者に殺されている。『オリジナル』は本当に使える男だったのだが……残念だ」
「……そんな……馬鹿な……認めないぞっ、貴様ぁ！　俺は本物だっ！」
「それは君の妄想だ。わかったら出て行きたまえ」
発令所のドアが開く。
そこには銃を持った『一流の傭兵』が並んでいた。
「今、ここで死ぬか？　それとも、ゲームの参加者として生き残るか？　他の二体の『高槻』は既に野に放たれた。自分が連中と違うことを証明したければ、ここで死ぬのも悪くない」
「………っ！」
高槻は、プライドよりも僅かに残されている生きる可能性を選んだ。

ミナゴロシにして、生き残る。

「ゲーム参加者の諸君。私はこのゲームの主催者のひとりだ。あの高槻という使えない男は処分した。今では君たちと同じゲームの参加者の一人となっている。高槻が独断で行っていたルールの追加等は、その全てを撤回する。ジョーカーや体内爆弾によるゲームへの介入は今後一切行わない。我々は、君たちが『殺しあいをする』というゲームの前提を守る限り、一切の妨害を行わないと約束しよう。なお、この島の脱出を試みるのも構わないが、その場合は対抗措置を取らせてもらう。相応の覚悟を持って行うように。それではゲームも終盤だ。我々をタノシマセテクレタマエ――」

## 421　ぼくの戦争　――境界線――

足が痛む。右足の感覚がまるで残っていない。肩

や首や指先、色んなところがズタズタになっているが殊に足はひどい。足を動かすたびに神経がつぶれていくような感じで、どんな状態であるのかを見ることすら怖くて出来ない。もしこの目で実際に確認してしまい、そしてもしその足が真っ赤な色で染まっていて足の肉がはじけていたりしたならば、自分の緊張は弾け飛んでしまい、二度と立ち上がれなくなると思った。ひどい怪我をしているのなら早急に処置をしなければならないのだが、もう少しだけ。この施設を脱出するまでは現実からは逃げていた方がいいと思う。

足を引きずり、肩や首に走る重みに耐えながら階段を降りる。静かな階段にこつこつと無機質な響いて音が響いて、もうこの施設には誰もいないのかもしれない、と考える。

そんな中で、彰はひとつのことを思い出す。

「――そうだったな、通信機のところに行かなくちゃ」

足を引きずる。右足の指の感覚がまったくない。もう足の感覚神経は完全に潰れてしまったのではないかと思う。だがそれでもこうして動けるのなら充分か。こうして生きていられるだけ、僥倖なのだから。彰はぼろぼろの足を引きずり続け、通信機を探す。

この建物の中には叔父達はいなかった。だから通信機を見つけて、電波越しで叔父達を問い詰めなければならない。

七階の渡り廊下。

他の部屋とは完全に一線を画す雰囲気の、血の匂いが充満した部屋がある。ドア自体やドアノブが血で汚れ、向こうの壁には機関銃の銃痕も無数に刻まれている。位置的には建物の中心辺りであろうか。ここで何があったのだろう。彰はサブマシンガンを握り締め、慎重に部屋の中に入る。

――何者も潜んでいる筈がないことは、その血生

臭い静寂の中で本能的に悟っていたけれど。
　兵士が二人死んでいた。傍には拳銃が落ちているが、しかしその拳銃は持ち主の護衛のために何の用も果たさなかったのだろう、銃身からひしゃげている。そればかりか、彼らの肉体までも、真っ赤な色に染められて有り得ない方向にひしゃげている。
——機関銃の弾丸によって。
　吐き気すら催す様子に身震いしながら、彰は何があったのかを考える。勿論答えはすぐに出る。機関銃で撃たれている。自分以外に侵入者がいるわけがない。
「——高槻だろうな」
　先程彼の周りに護衛がいなかったのはそういう理由からだったのか。彰は悟り、小さく溜息を吐く。自分の侵入と快進撃のために錯乱した彼は、自分の味方をも見境なく殺したのだ。彼らは錯乱する高槻を止めようとして返り討ちにあい、こうして物言わぬ死体となってしまったのだ。
　気づく。この部屋は他の部屋と違う。やけに巨大なモニターが設置されているし、映画の中で見るような大仰な機械も設置されている。——この部屋が、通信用の部屋だったのか。高槻がいた訳だ、ここが通信管制の部屋であるのは当然のことだ。だが、
「これじゃダメ、か」
　彰はぽりぽりと頭を掻く。
——それらは銃弾によって破壊され切っていて、とてもまともに働くようには見えなかった。
　叔父達と連絡を取る事は出来なくなってしまった。それが一番の目的だったのだから、正直落胆したのは事実だ。
　けれど、爆弾管制の施設は破壊したのだ。完膚なきまでに破壊したのだ。自分たちを縛っていた爆弾はもう何の用も足さない。
「——叔父さん」
　きっと今頃、違うどこかにいる筈の叔父たちは異変に気づいている筈だ。高槻と通信が取れないこの

状況に戸惑わない訳がない。きっと今頃慌てふためいているはずだ、誰がこんなことをやったのだろう、と。

昂ぶる。心臓の鼓動が高まって、何かを猛烈に叫びたい衝動に駆られる。達成感とは完全に色を違う、半透明の気持ちが彰に衝動を与える。叫び声が叔父達に届くわけがない。それでも魂が求める衝動を彰は止められない。

「僕がやった。全部僕がやった！　僕は、叔父さんたちがやろうとしてることを潰すためにと戦った！　僕はッ！

——逃げないッ！

必ず、このゲームを止めてやるんだッ!!」

狭い部屋に響く。

彰の勇気の矢はまだ尽きない。希望の弓はまだ折れない。

爆弾管制の装置は破壊した。もう自分たちは殺しあわなくても死なない。次はここから脱出する番だ。

彰の顔は——もう数時間前の臆病なままの子供ではなく、戦う人間の貌になっていた。

部屋を出て階段をゆっくりと降りる。人間の気配はない。自分が完全に駆逐したのだ。自分が人を殺して駆逐したのだ。後悔は微塵もない。手を汚したことなどに震えはもうない。正しくはないかもしれないが、間違ったことをしたつもりもない。

血がぽつぽつと身体の至るところから流れ落ち、廊下を赤く染めていく。脇腹には骨が折れたような痛みも感じる。早くこの建物を出て応急処置をしなければいけない。

一階に降りて出ようとするが、建物は封鎖されていた。小さく溜息を吐くと、傍にあった廊下の窓をサブマシンガンの弾丸で破り、そこから彰は飛び出る。

——見上げると月。

月光が彰を濡らしていく。なんて綺麗な空なのだろう。少しだけ涙が流れる。涙がこぼれる。止まらない。この涙はどうして流れるのだろう。自分は成し遂げたのだ。半ばで終わったとはいえ、爆弾管制の装置を破壊したのだ。なのに流れるのは歓喜の涙ではない。紛れもなく、悲しいから泣いているのだ。

――美咲さん、はるか。

たとえ、ここから逃げ出せたとしても、あの頃にはもう戻れないのだ。だから自分はこうして、無様に泣いているのだと思う。眩暈がした。失血のせいではない。絶対に違う。口から何やら空気が漏れる。それが呼吸音ではなく言葉であることが彰は判らない。自分でも何を呟いているのかわからない。やわらかな月が、彰の身体を白く染める。

ゆっくりとした足取りで森の中に入り、少し歩く。涙は流れっぱなしで、拭っても拭っても流れてくるので、もう拭うのをやめることにした。目を真っ赤にしながら彰は歩く。歩く。歩く。血がぽつぽつと落ちる。

――限界が来た。体力と精神の限界だった。適当な茂みを見つけると膝を突き、ゆっくりと彰は倒れ込んだ。誰にも見つからないような暗い暗いところで彰は眠りに落ちる。鞄と武器とを腕に抱き、彰は眠りに落ちていく。

それはとてもとても晴れた夜。

彰は結局この後流れた放送を聞き逃した。冬弥と由綺が死んだ事を彰は聞き逃した。自分が愛した日常が完全に消え失せたことも知らず彰は眠る。境界線を越えてしまったことも知らず、彰は眠る。

## 422 cross roads

静寂が支配していた街の中に、突然男の声が響き渡る。

「……!」

その声に気付いた来須川芹香が二階に駆け上がると、そこには放送に耳をそばだてていたスフィーと江藤結花がいた。
しかしその放送は、三人にとっては悲しい知らせでしかなかった。

放送が終わってからしばらくの間、誰も口を開こうとはしなかった。
誰もが自分の無力さに打ちひしがれ、何か物を言う気にもなれないまま、時間だけが過ぎていく。
小一時間経った頃、芹香がいつにも増して小さな声で口を開いた。
「……」
芹香の一言が、凍り付いていた空気を少しずつ溶かしていく。
「うん、でも……」
「……」
芹香は他の二人に、この先どうやって生き残るかを考えて行動しよう、と提案したのだった。
そして三人は今後の行動を話し合った。
しかし、結界を壊そうとする点では一致したものの、そのためにどうすればいいのか、具体的な話になると意見が合わない。
他に「力」を持つ人を捜そうとしても、赤の他人から「手伝ってほしい」と言われて、おいそれと従う人が残っているか？　それ以前に能力を持つ人がこの島にどれだけ残っているか？
「じゃあさ、このまま何もしないの？」
「……」
「何にしたって、やってみなくちゃわからないじゃない？　出来ないとか難しいとか、言ってるだけじゃ始まらないわよ」
「それはそうだけど……」
「そんな事言ってる場合じゃないでしょ」
少々強引ではあったが、これで長い話し合いはよ

うやく収束に向かった。
　最終的に導き出された結論は、スフィーと芹香でもう一度あの結界に挑むこと。
　万一力になれそうな人がいたなら、その力を借りることも一応念頭には置いていたが、まずは自分たちで出来ることをやろうと、結論を出した。

　そうと決まったからにはと、三人は出発の準備を始める。
　結花が台所から缶詰と缶切りを出し、芹香が家の中で使えそうな物を探している間に、スフィーは先に表に出た。
　その時、道の向こうから誰かが歩いてくるのが見えた。すぐさま物陰に隠れ、息を潜めて様子を窺う。やがて見えてきたその人は、どこかで見たような顔だった。
「あれは……なつみ？」
　先程の話し合いの中では、なつみの存在はすっぽり抜け落ちていたのだ。しかし、なつみの顔を見た途端、スフィーの頭の中にある考えが浮かんだ。
　なつみもグエンディーナの血を引く身で、自分たち程ではないけど「力」はある。もしかしたら……。
　その姿がはっきり見えるようになった頃、スフィーはなつみの前に出ていく。
「なつみ……だよね？」
「はい」
「今までどこにいたの？」
「向こうの方にある学校です。あっちでは色々ありましたけど」
「で、今はひとりなんだ」
「はい」
　とりとめのない会話が済んだ所で、いよいよ本題を切り出す。
「なつみに手伝ってほしい事があるんだけど、私たちと一緒に来てほしいんだ」
　なつみの表情が一瞬曇る。

「……ごめんなさい」
なつみの返答は、予想外のものだった。
「私、殺さなければいけない人がいるんです。健太郎さんを殺した、あの人を……」
なつみの口から出た名前に、スフィーも気色ばむ。
「だから、一緒に行く事はできません」
「……」
返す言葉もなかった。
「スフィーはどうなの？　健太郎さんが殺されて悔しくないの？」
「く、悔しいよ、もちろん。でも……」
揺れ動く心を押さえ込むように、自分自身に言い聞かせるように、スフィーはゆっくりとつぶやく。
「でも、もう戻れないんだ。私たちは、みんなが殺し合うのをやめさせるために、出来ることをやろうって決めたの。確かにけんたろやリアンがいなくなったのは悲しいけど、それがもっと大切なことだから」
「スフィー……」
張りつめていた空気が、ようやく緩み始める。
「力になれなくて、ごめん」
「いえ、なつみこそ私たちの分までがんばって」
「ところで、なつみはどんな武器持ってるの？」
「……持ってない」
「えっ、何も持ってないの？」
「……」
「ちょっと待ってて！」
スフィーはちょうど玄関にいた結花からトカレフを受け取ると、なつみに渡した。
「これ、持っていきなさい」
「ありが……とう」
なつみは受け取ったトカレフを鞄の中に押し込むと、黙って歩き出す。
「なつみ！」
その後ろ姿に向かってスフィーが叫んだ。

「また、逢えるよね」
その言葉に、なつみは一瞬振り返った。ちょっと頷いた様に見えた。
そして、そのまま闇の中へ歩いていった。

いつのまにか、スフィーの横には身支度を整えた結花と芹香が立っていた。スフィーから事の顛末を聞いて、結花は、
「なつみ、大丈夫かな」
「うん、大丈夫だよ」
「わかるの？」
「なつみの顔を見てたらわかった」
「……」
「そうだね。お互い無事でいられたらいいね」
「ところで、準備出来てないのはスフィーだけよ。ここで待ってるから、早く用意してきなさい」
「うん！」
二人を残し、スフィーは駆け足で家の中に入っていった。

## 423　約束

夜闇もすっかり深まって。
中天に月が浮かぶころ。
音もなく扉が開き、人影がするりと抜け出してくる。
立ち止まり、一度振り向く。
向き直り、三歩のところで静止。
月を見上げて、そのまま五秒。
そして、ためいき。

「……千鶴姉」
かけられた声に驚いて、人影は再び振り向く。
戸口に立つメイドさんに、抑えた驚きと共に一言。
「ダメ、かしら？」

鬼の記憶という、一族に与えられた呪いのような
それを扱うには、千鶴は間違いなく不向きな存在だ
った。
それでも、やっぱり動かずにはいられない。梓は
苦笑して、首をふりふり扉を出る。
「ダメに、決まってるじゃん」
さも呆れたように、肩を竦めて言い放つ。
そもそも耕一に顔も合わさず出て行くなんて、意
地っ張りにも程がある。だいたいさ、と御小言のよ
うに繋げる。
「このカッコで一人でいるのって……恥ずかしいじ
ゃない？」
お互い自分の制服姿を見合ってから、顔を上げ、
視線を合わせる。ふふふ、と二人は声を忍ばせて笑
った。
「……ちょっと待ちなさいよ」
またも戸口から声がかかる。二人はぴたりと笑い
を収めて向き直る。
七瀬と、あゆが立っていた。
「忘れもん、よ」
七瀬はぽん、とあゆの背中を押す。
「うぐぅ」
拗ねたようによろけながら、あゆが出てくる。
「ボクも……ボクも行っても、いいかな？」
上目遣いに、遠慮して。小さな、小さな声で尋ねる。
七瀬は思う。あの二人は、強い。オバサンも、晴
香のアホも強かったけど、二人はなんというか……
「人間離れ」して、強い。
だけど。いや、だからこそ、危うい。
消えた二人に気が付いたあゆが、布団を出ようか
出まいか迷ってあたふたしているのを見たとき、七
瀬は結論した。
(この娘が居れば、大丈夫)
何がどう「大丈夫」なのか、自分でもサッパリ解
らないのだが、確信していた。

だから七瀬は続ける。
「あたしと怪我人と病人じゃ、自分達の事で精一杯だからさ。……この娘、お願いするわ」
「あゆちゃん……」
「あゆ……」
「……」
しばしの沈黙の後、千鶴がうん、と頷く。
「一緒に終わらせようって。約束、したもんね」
言いつつ梓の手を取る。
「寄り道するけど……長くなるかもしれないけど。それでも、いい？」
そして重ねた手を、あゆの方へ。
「うんっ！」
はっしと二人の手を掴むあゆ。
満面に笑みを浮かべて。
再び三人は手を重ねて。
そして夜闇に消えていった。
静かな静かな、夜のひととき。

七瀬は戸口に立って、ひとり考える。
――ねえ瑞佳？　これって、また貧乏くじ引いてるのかしら？
それでもやっぱり。
これでいい。そう思った。

「……怪我人くん、聞いたか？」
「……なんだ病人」
高熱や痛みに消耗し、ぐったりとしていた二人の男が会話する。
「なんか俺達、最高にカッコ悪いと思わないか？」
「ああ、最高だな」
「とりあえず今は動けない。だから仕方がない。でも、朝になったら治ってる。嘘でもなんでもいい、治っている。それで、いいな？」
「そりゃいい考えだな」
いいかどうかは解らないが、かなり無茶な取り決

めをする二人。
「よし。じゃあ今は寝る。起きたら男の意地を見せる。約束、だぞ」
「……おう」

これでいい。そう思わない者も、二名いた。

## 424　冷たいナイフ

何か予感めいたモノがあったのかも知れない。
眠っていた浩平は突然目を覚ました。周りを見回すと七瀬が散弾銃を抱え座ったまま眠っている。
見張りが寝てどうする、でも七瀬も疲れてるだろうから仕方ないか。
そう思いながらベッドから降りる。
勿論耕一も眠っている。
その時遠くで何かが聞こえた様な気がした。
これは……例の放送だ。

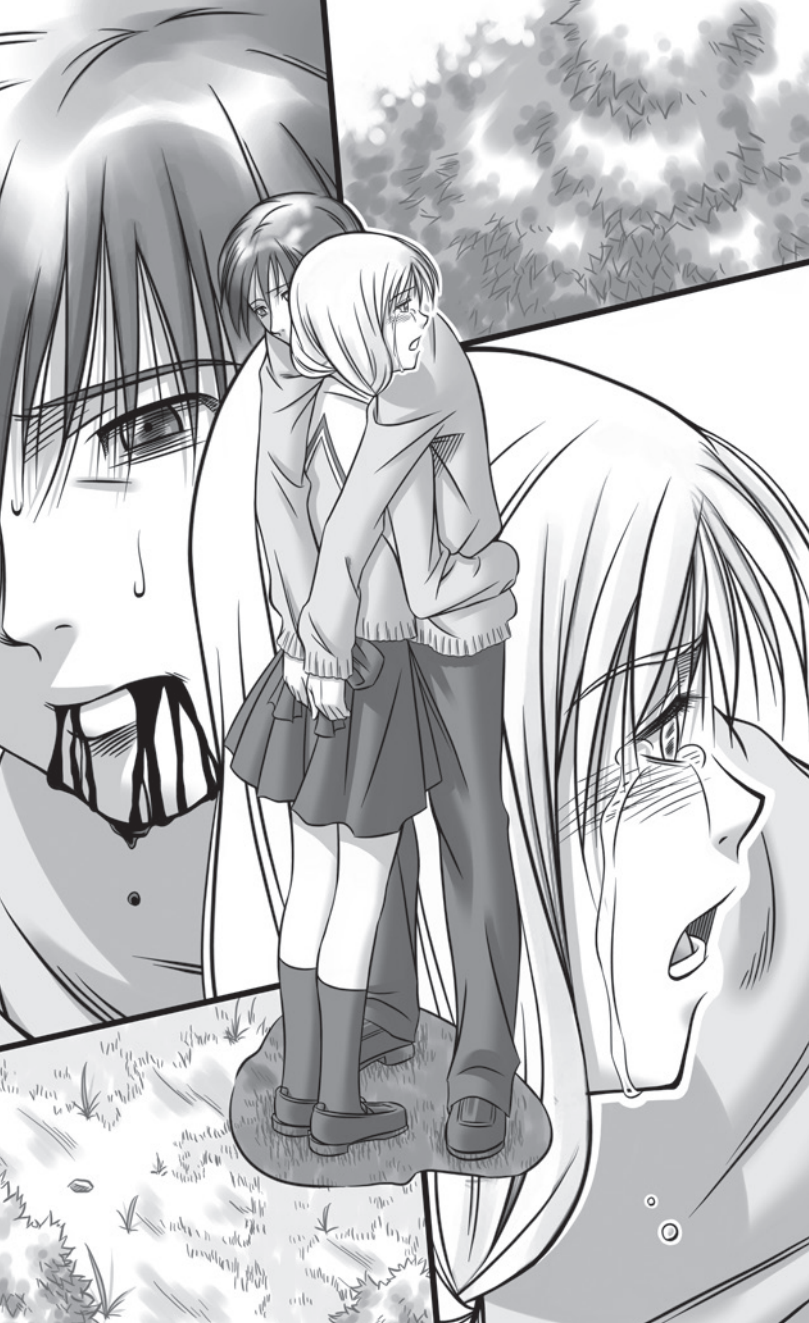
だがこの小屋の中ではよく聞こえない。
聞き逃すわけにはいかない。
幸い体の調子は幾分ましになっている。
外に出ればまだここの中にいるよりはよく聞こえるだろう。
少しふらつきながら戸口まで歩み寄り外に出る。
ここなら放送が聞こえる。
そして次々と挙げられる死者の名前。
「……十八番柏木楓……」
「!!」
これって初音ちゃんのお姉さんなのか……そんな……。
幸か不幸は他に知り合いの名前が読み上げられる事なく放送は終わった。
なんてこった、それに最後の『まだ一人も殺していないもの』に自分はともかく七瀬は……。
その時ロッジに近づく人影があった。

学校での攻防が終わり里村茜（四十三番）は辺りを彷徨っていた。
先程の戦いでも自分は甘さを見せてしまった。これでまた自分を付け狙う人が増えたのだ。
このままではいけない。いつか自分がやられてしまう。
このゲームが始まった頃のあの非情な自分はどこへ行ってしまったのだろうか……
やはり、あの百貨店で祐一と出会ってから全てがおかしくなってしまった。今のこんな状態で祐一や、詩子と出会ったら私は一体どうなるのだろう？
そんな事を考えていると例の放送が辺りに響いていた。
祐一や詩子の名前はまだない……
どこかでほっとしている自分に気が付いた。
私はこれから……。
その時前方にロッジらしきものが見えた。
近くに誰かいる。
それはクラスメートの折原浩平だった。
考え事で注意力が散漫になっていたらしい、向こうが先に気が付いたらしく、少しおぼつかない足取りでこちらに向かってくる。
「浩平……」
ある考えが頭をかすめる。
今の私に出来るでしょうか……
だが茜は自分で既に答えを出していた。
あの空き地へ戻るには答えはそれしかないのだと。
「茜、会えてよかった。ってお前大丈夫なのか」
浩平は茜に近づいて声をかけた。
「浩平……大丈夫です」
血塗れの自分の制服を見て浩平は少し驚いているらしい。浩平の方が自分よりよっぽど酷い怪我の状態だと思われるのに。
「どこか怪我は？　柚木は一緒じゃないのか？」
「はい。まだ会ってません」
「そうか……でもよかった。これでまだ会ってない

知り合いは藺と柚木だけだな。幸い二人とも今のところ無事らしいし、なんとか見つけて合流したいと思ってるんだけど」
「……藺？」
「知らないか？　一時期俺達の教室にいたんだけどな。ま、柚木と違ってちゃんとうちの学校の制服着てたしな……七瀬のだけど」
「七瀬さん……」
「あ、そうそう。今、俺は七瀬と一緒なんだ、他にも変態マッチョみたいなヤツも一緒だけどな。それに何人か信用できる知り合いが居るが、今は別行動取ってる」
「そうですか……」
　何故か浩平は自分の事を全面的に信用しているみたいだが、七瀬がいるとしたら状況は一変する。彼女は先程の学校で自分の素性を知っているハズだ。
「茜はどうするんだ、柚木を探すにしても俺達と一緒にいないか？　ともかく少しぐらいは休んでいけよ」
　浩平はロッジを指さして歩き出した。
「……大勢死にましたね」
　浩平の後ろを歩きつつ茜は質問には答えずそう言った。
「ん、ああそうだな」
「長森さんも」
「……長森……瑞佳だけじゃないさ。先輩達に澪に、俺の親友シュンや住井……それに広瀬も……大勢死にすぎたよ、瑞佳以外は看取ることも出来なかった。みんな苦しまずに死ねたんだろうか……」
　茜の決断の時は迫っていた。
「澪は苦しまずに死ねたと思います」
　茜は静かに続けた。
「だって私が殺したんですから」
「え？」
　次の瞬間振り返った浩平は腹部に生暖かい塊を押しつけられた様な衝撃を感じた。

「！」
どうして茜が？　ナイフ、血？　血が流れているる？
「私はこのゲームに乗ることにしました……だから最初に会った澪を、自分でも吃驚するほど冷静に殺しました。私は生き残ってあの場所に戻ると誓ったのですから。それからも続けて何人か殺しました。私の決意は揺るぎませんでした。でも、ある人に偶然出会ってしまって私は、私は迷いました」
茜は独り言の様にゆっくりと呟き続ける。
「このままでは私は今までみたいに人を殺せなくなってしまう。そんな予感がしました。今の自分があの澪を非情に殺した時とは違って甘くなっているとと思いました。このままではいけない、このままでは私もいつか誰かに殺される。もう何人かに随分恨みを買いましたから。その人達はきっと私を許さないでしょう。だから私はもう一度非情になる事に決めました」
「いつもと違って随分饒舌じゃないか茜……人をあやめるならもっと深く刺さないといけないぜ……がっ」
茜を抱きしめるようにもたれかかりながら浩平は口から血を吐いた。
「今浩平に会って、相変わらずの、でもこんな状況でもしっかりした浩平に出会って少し心が揺らぎました。だから賭をする事に決めました。ここで何の躊躇もなく貴方を刺せたなら私はまだ大丈夫、また非情になれると。これで覚悟を決めました。私はこれからも一人になるまで殺し続けます。もう、誰もの私なら祐一や詩子も躊躇わずに殺せます。きっと今私の望みを曇らせる事は出来ないんです」
「嘘だな茜……お前には無理だよ」
「そんな事ありません」
「だったら何でお前は今泣いてるんだ」
「……浩平はあの人には全然似てませんが祐一には少し似ていました。詩子にも似ている所が……だか

ら……だから……浩平を、貴方を殺すことで祐一の事も吹っ切れると……思いました」
倒れそうな浩平を抱きしめながら嗚咽混じりに茜は呟き続ける。
何故か涙が止まらない。
「さよなら浩平……」
さっきから誰だよ祐一って……そんな事を考えながら浩平は意識が暗い闇の底に落ちていくのを感じていた。
あそこはきっと永遠よりも遠い所だ。
だが茜をこのままにするわけにはいかない。
茜が誰かを殺すのも誰かに殺されるのも、いやもう、誰にも死んだり殺したりして欲しくなかった。
「茜、駄目だ……殺すのは……俺で最後にしてくれ、頼むよ」
「浩平……もう解っているんです。私はもう誰を失っても何も感じないって…」
茜、どうすれば、どうすれば茜の心を……

その時運悪くロッジから七瀬が出てきた。
「折原ー！　何処行ったのよ、ちゃんと寝てなきゃ駄目じゃな……！」
こちらに気づいた。
「ちょっと、あんた達！　何してんのよ！」
どうやら俺が誰かに抱きついていると思っている様だ。
散弾銃を振り回しながらこちらにやってくる。
そりゃこの状況はそう見えなくもないが……その散弾銃で俺に突っ込みを入れるつもりか？
いや今はそんな場合じゃないんだ。
「あんた、里村さん！　折原、そいつから早く離れて！」
だが七瀬は相手に気が付いた様だ、どういう事だ？　七瀬は茜が澪を、誰かを殺したのを知っていたのか？
だが、ここで二人を戦わせるわけにはいかない。
「逃げろ！　茜ッ！」

残った力で茜を突き飛ばす。
「行け！」
後ずさりながら呆然と自分を見つめる茜、だが直ぐに背を向けて駆け出した。
「待ちなさい！」
「待て、七瀬！　待ってくれ！」
「どうしてよ折原……！　あんたそれ！」
七瀬が俺の腹に刺さったままのナイフを見て青ざめる。
「嘘、嘘でしょ折原！」
そのまま倒れ込む俺に泣き顔の七瀬が駆け寄ってきた。

## 425　漢の約束

「……すまない七瀬、茜を許してやってくれよ……」
息も絶え絶えに俺は囁く。急激に体温が下がったように寒い。
「馬鹿、どうしてよ！」
「いいか……よく聞いてくれ、柚木詩子とそれから祐一ってヤツを探してくれ。そして、茜を頼むって伝えてくれよ、俺じゃどうも駄目みたいだ……どうにかして茜を止めてくれって……」
「どうして、どうして、あいつはあんたを殺そうとしたのよ！　さっきの学校でもいきなり発砲してきた、そんな危険なヤツなのよ！」
「頼むよ……本当はやさしいやつだから……それに七瀬と茜が殺し合いする所なんか見たくない……」
「どうして……普段は馬鹿でいたずらばっかりの迷惑野郎なのにっ！　どうしてこんな時だけ優しいのよ！　折原は優しすぎるのよ！　そんなだからあたし……あたし折原のこと……」
俺は七瀬の言葉を遮って続けた。
「それから繭の事も……頼むな、もう生き残ってる知り合いはお前だけだから……」

「イヤ、嫌よ！　折原死なないでよ！　あたしまた壊れちゃうよ！」
泣きながら叫ぶ七瀬、俺だって死ぬのは御免だ……でもやっぱり今度は流石に駄目みたいだ。
段々と意識が遠くなる。
まだだ、まだ死ねない、このままじゃ七瀬が……
俺はポケットを探ってあるモノを手にとって七瀬の前に差し出した。
「これ受け取ってくれよ」
「これ……瑞佳のリボン？」
瑞佳のしていた黄色いリボン。
「お前は生き残ってくれよ……七瀬」
「折原……折原ぁ」
「いいか……漢と漢の約束だぜ」
眠る前の耕一との約束を破っておいてよく平気でそんな事が言えたもんだと自分で呆れたが、そう言って精一杯の笑顔で七瀬を見た。
最後までお前に怒られてばっかりだったなぁ……

騒ぎに気が付いた耕一がロッジから出て見たものは、浩平の体を抱きしめ泣きじゃくる七瀬の姿だった。

**十四番　折原浩平　死亡**
**【残り35人】**

## 426　生きる理由

ようやくスネの痛みが首の痛みよりも感じられなくなった頃、祐介が口を開いた。
「これから……君はどうしたい？」
先程の放送、第六回目の放送——。
マナの大切な人達……由綺や冬弥の名前が挙げられていた。
(ああ、そうだったんだ……)
マナはなんとなく納得していた、二人の死に。
いろいろなことがありすぎた。

失ってしまったものは、もう多すぎた。
霧島聖、杜若きよみ、豹変した霧島佳乃……そして、大切な従姉と大好きな男性。
あまりに大きすぎる悲しみに、すでに涙も出なかった。
ただ、漠然とそう思った。
(藤井さんらしい……のかな……)
見たわけじゃない。だけど、二人の最期の姿がなんとなく脳裏に浮かんで。
——君は、強いね。
長瀬さんが言った言葉。
そんなんじゃない、ただ子供だっただけ。
藤井さんのこと、お姉ちゃんのこと、今まで分かってあげられなかったんだから。
(私は……最後までがんばるから。たとえ弱くても)
それがきよみさんや、藤井さんの願いだって思うから。
きっと、お姉ちゃんだって分かってくれる。
だって、私の大好きなお姉ちゃんなんだから。
「これから……君はどうしたい?」
放送のことはあえて聞かなかった、お互いに。
言いたくなったときに言えばいい。祐介はそう思う。
高槻の放送の後しばらくして主催者からの放送。
どういう経緯かは分からないが、高槻は任を解かれ、ゲームへと参加することになったらしい。
まあ、ようするに用済みとして捨てられたのだ。
恐らくは長瀬一族——祐介の叔父達に。
「僕達は……向こう側にいる叔父さんに会いに行こうと思ってる。真実を知る為に」
向こう側——高槻が消えたことにより、叔父はこちら側により近いところへと降りてきたのだろうか。
「……」
美汐はただ二人の会話を黙って聞いていた。
ややあって、マナの言葉。

「私も、敵を倒そうって思ってた。なんとかして脱出の方法を考えようって思ってた。あなた達に会う今の今まで、ずっとそう考えてた。だけど」
そこで一旦言葉を切る。
「私、あなたを助けて気付いたんだ。私は、何の為に生きようとしたのかって。そして、なんで今まで生きていられたんだろうって」
何の為に……その言葉に美汐も顔をあげる。
「大切な人の為とか、こんなゲームを考えた奴が憎いとか、ただ死ぬのが怖いだけとか……いろんな人がいると思う。だけど、私は……みんなを助けたいから、最後まで生きるの」
ちょうど長瀬さんを助けたみたいに、とマナが付け加えた。
「今まではずっと震えてただけ。こんな私、いつ死んだっておかしくなかったのに……でも、本当に命をかけて私を助けてくれた人達がいたの。だから今の私があるんだ」
聖の遺した救急箱を見つめる。
「私も……みんなを助けたい。私を助けてくれたあの人達と同じように。もちろん私も死ぬ気はないわ。私も生きていきたい。生き抜くことが霧島センセイ達への償いになると思うから。こんな思い……ヘン……かな？」
「いや、変じゃないよ」
祐介がマナの頭を軽く撫でてやった。今度は――蹴られなかった。
「だから、私、行くね。まだ大事な友達が……助けたい人がこの島にいるから」
「……気をつけて」
「……うん」
そうして、ここへ来たときのようなしっかりとした足取りで二人の前から去っていった。
「長瀬さん、私達は、何の為に生きるんでしょう……？」
「……」

美汐の言葉に、祐介は沈黙で返す。
守りたかった女の子達は、出会う前に死んでしまった。
瑠璃子も瑞穂も沙織も……もういない。
何の為に生きるのか、何の為に管理者を、叔父達を倒すのか。叔父が関わっていることからくる正義感や責任感からの行動、と言えば聞こえはいいが。
「最初に出会ったとき、言ってましたよね？『生きる為には、殺さなきゃならない。だから僕は、殺さなきゃいけないと思ったときには迷わず、殺すよ。苦しませずに』と」
「……」
「私は……もうどっちでもいいって思っていたんです」
「えっ？」
「……真琴がいなくなって、人が大勢死んで。心の何処かで、もう死んでもいいかと思ってました。長瀬さんと出会ってなければ、私はどうしていたんでしょうね。もう死んでいたかもしれませんし、ただ殺戮を繰り返しながら生きていたかもしれません」
「……」
「でも今は、生きようと思います。私は長瀬さんを信じます。今度こそ、最後まで……だから、生きようと思います」
そして、美汐の唇が、そっと祐介の頬にかすかに触れた。
「天野……さん……」
「私に……信じさせてくれますか？」
「……うん」
守りたかった女の子達は、出会う前に死んでしまった。
瑠璃子も瑞穂も沙織も……もういない。
だけど、今は美汐が横にいる。
「僕も……天野さんの為に」
祐介はただそれだけを言った。
何の為に生きるのか、何の為に戦うのか。そんな

細かいことはもうどこかへ飛んでいってしまった。
　最後まで共に生きる。もう、戦う理由はそれだけでいい。
　その終着駅がたとえ死だったとしても、絶対に後悔はしない。
　祐介は強く、そう心に思った。

　マナは元来た道を辿っていた。
　佳乃と、そして由綺の横にいたあの綺麗な女の人。あの場にいた二人の姿を思い浮かべながら。
　もし弥生に見つかったら、無事では済まないかもしれない。
　冬弥と由綺の結末はマナの知るところではなかったが、
（たぶん、私のせいで二人は……）
　マナと別れた後、冬弥が由綺と……そう思えるのだ。
　弥生は、もしかしたらマナを恨んでいるかもしれない。
　そして佳乃。確か左腕にはボウガンの矢が刺さっていたはずだ。はやく手当てしないと大変なことになるかもしれない。
（とりあえず……佳乃ちゃんに会おう。そして、もう一度……）
　本当なら三人で聖のところに行くはずだった。
　あの時何故佳乃があんな行動に出たのかは分からない。でも、出会った時に見た無邪気な笑顔が本当の佳乃なんだと信じたかった。
「佳乃ちゃん、置いて行ってごめんね……今行くからっ……！」
　きっと佳乃は元に戻ってくれる。マナはそう信じて疑わなかった。
　やがて、大切な人を失くした悲しい思い出の場所へと辿りついた。
　月明かりに照らされたきよみが綺麗だった場所。
　崖下へ吸い込まれていく彼女を、呆然と見ている

しかできなかった場所。
佳乃がマナに突き飛ばされて気絶していた場所。
「もうどこにもいない……どこに行っちゃったんだろう……」
そこにはもう……佳乃はいなかった。
ただ、佳乃が倒れていた辺りに小さな血痕だけが染み付いている。
――霧島センセイ、きよみさん、藤井さん……私……頑張るから――
マナはそれでも再び歩き出した。この島のどこかにいる佳乃を捜す為に。
先のことはまだ分からないけれど。由綺や冬弥達、大切な友人達を失って――もうこれ以上二度と失いたくない。
それだけのささやかな思いを強く胸に抱いて。

## 427　駆ける者たち

下卑た男の声。
――そしてまた死者の名前が島中に木霊した。
「(・∀・)…………また、だね」
「……ああ」
何度か繰り返した会話。
今回は幾人か、聞き覚えのある名があった。
その中に――
藤田浩之。確かあの少年は、そう名乗った。
(俺はさっさと帰りてーんだよ――あかり達と、一緒にな)
あの少年は、もういない。
探していた少女であろう者の名も共に聞こえた。
二人は、出会えたのだろうか。せめてそうである事を祈りたい。そう、例えば……この昼に、砂浜で想いを確かめていた男女のように。

そして、複製身のきよみの名があった。
犬飼によって哀しい生を送ることを余儀なくされた女だったが……せめて最後は、長く苦しまずに終わったと思いたい。
（・∀・）あの人……幸せだったのかな……）
月代は、以前彼女に教えられたことを思い出す。
自分達は、昨日亡くなった「あの人」の複製だと言っていた。
怒っていた。悲しそうだった。自分が偽者だということに。偽物としてしか扱われなかったことに。
そして月代に対しても。
（・∀・）多分、幸せじゃなくて……だから「同じ」はずの私が気楽に暮らしているのも許せなかったんだ）
でも、月代は思う。私も、彼女も、「あの人」とはやっぱり「同じ」ではないと。
――だから、月代は「月代」として、蝉丸と共に歩くのだ。そう、決めたのだ。

放送が聞こえた時、二人は、一人の遺体を埋め終えたところだった。
砧夕霧の遺体である。
食料となりそうなものを探して歩く途中で蝉丸が見つけたのだ。
彼女は、大振りの出刃包丁を固く握りしめたまま、こめかみを撃たれ息絶えていた。かなり大口径の銃によるものらしく、かつての愛らしい姿とは似ても似つかぬ姿に変わり果てていた――。
そして死後かなりの時間が経っている様子だった。おそらく、開始直後にこの異様な状況に錯乱し、銃を持つ何者かに攻撃を仕掛けて返り討ちに遭ったのだろう。
「（・∀・）また、アメフラシを一緒に探したかったな……」
「…………」
蝉丸は何も言わず、黙々と手早く彼女を埋葬した。
月代もそれを手伝う。

非情かもしれないが、彼らは生きているのであり、生き残る意志も義務もある。夕霧の他にも幾人かの遺体をみつけ、簡単に埋葬してきているが、自分達が生き残るために、死者に対して余り手間をかけるわけにはいかなかった。いつ誰が襲ってくるかしれたものではないし、また一刻も早く敵を倒し、この島から皆を解放することが、彼らに対しての何よりの手向けであるだろうから。

月代などはだいぶ無理をしているようだが、まだ気はしっかりしている。どこにこれほどの気丈さがあったのかと、蝉丸は内心驚いていた。まるで——そう、きよみの意志の強さを、受け継いだかのようだ。

夕霧の持っていた包丁は月代が持つことにした。武器としては非力でも、食材を手に入れた時などには役に立つだろう。

しばしの黙祷ののち、二人はまた歩き始める。

脱出するにせよ、とにかく、生きている誰かに会う必要がある。

あの黒い少年と別れてから、土に残された足跡や車の轍などを辿って探しているのだが、どうも、出会うのは遺体ばかりという状況が続いていた。

先ほどの放送に含まれていた言葉——次の放送までに一人も殺せなかった者は即座に爆弾を爆発させるというのが真実であるならば残された時間は少ない。

——と、その時。

何者かの駆ける音を、蝉丸の耳はとらえた。

「(･∀･)蝉丸、あっちの方……何か、動いてるよ！」

「分かっている」

刀の鯉口を切り、事に備える。相手が何者だろうと、瞬時に対応できるように。

天沢郁未は、走っていた。

昨晩は葉子を捜すため一旦スタート地点まで戻り、そこで過ごした。大きく「Ⅲ」というローマ数字の

書かれたガラス張りの建物。ゲーム開始当初は、銃を構えたＦＡＲＧＯの信者らしき者達がいたのだが、郁未が辿り着いた時はもう誰もいなかった。

――おそらく、高槻のところに行ったのだ。そう考えて、足跡を辿ろうと努力してみた。……しかしなにぶん、素人である。あっさりと見失ってしまい、しかたなく、昨日は建物の近辺で食料を集めるのに費やしてそのまま一夜を明かした。

彼女のバッグがあればもう少し食料は保ったはずなのだが。

（まったく、あの子……）

彼女とあのキノコがどうなったのか、多少気にはなったが……まぁ、無いものは仕方ない。どんな効果があるかも分からないし、むしろ無い方が気は楽だ。

――もし柏木耕一がそこにいれば、「きっとおしとやかなお嬢様になれるぞ」とか、わけの分からないことを言ったかもしれない。

そして今朝になって改めて高槻や葉子、晴香、由依、そして、あの少年を捜すべく出発したのはいいが――その途中で、彼女は、見てしまった。

見知った、顔の。

顔のない、死体を。

担いで、歩く、一人の、女性を。

――水瀬、秋子。

彼女は、微笑んでいた。

晴れやかに、疲れも知らぬように、こちらに気付くこともなく、前を向いて歩いていた。彼女は――そう、彼女は――

美しかった。

とても、美しかった――まるで、腐り落ちる寸前の柘榴のように紅く、血に染まり、微笑んで――

その貌を、一目見た瞬間、戦慄が走った。

もう「彼女」が……以前遭った時の「彼女」ではないと、分かってしまった。
(決着をつけましょう)
以前別れた時、彼女はそう言った。郁未もそう覚悟していた。
だが、だが、あれは……あれは、水瀬秋子ではない。郁未が約束した女性ではない。ましてや母の敵などではない。彼女は………。
踵を返す。間髪入れず走り出した。
追ってはこなかった。そもそも気付かれてすらいなかっただろう。今の彼女には、郁未など見えてはいないのだから。それでも郁未は全力で走った。藪などで手足に擦り傷ができるのもかまわず走りながら、思考がぐるぐると回る。
(何、なんなの、あれ……!)
(……私も……ああなっちゃうのかな?)
(そんなはずない。私は狂ったりしない)
(……本当に？　本当にそう言い切れるの⁉)

怖い。
だが、心の中でそれを笑う私もいる。
(あなたはもう、それに溺れるほど弱くはないはずよ？　郁未。知っているでしょう?)
もう一人の私の、いや、私達の声。
そしてお母さんの声。
(私があこがれる冷淡な強さ。不可視の力を制御するための、強さ。それをあなたは持っている)
……そう。多分私の本性は、そうなのだ。だから……なおさら、怖い。私が壊れるとしたら——きっと、水瀬秋子を襲ったそれとは全く違う悪夢が、そこに顕れるだろうから。

藪を抜ける。
そこで一息ついて、郁未は気がついた。
彼女を見る二つの視線に。
がっしりとした肉体の男と、不思議なお面(?)をつけた少女が緊張した面持ちでこちらを見つめて

いた。
(とっぽそうだけど、わりといい男ね)
どんなときでも、男の値踏みは忘れない郁未であった。そして、男の隣にいる仮面の少女を見つめる。
(…………ぷ)
シュールなまでに滑稽なその姿に、先刻の恐怖が微かに消えていくような気がした。

互いに警戒しながらの、自己紹介が始まる。
事ここに至っては相手が殺戮者でない、との保証はどこにもないのだ。
例え「危害を加える気はない」と言ってみても、信用できるとは限らない。
まして、蝉丸にしてみれば、彼女の視線に殺人を厭わぬ強さを見て取ることができたし、郁未にしてみれば、刀を持ち研ぎ澄まされた気配を持つ男は充分に警戒に値した。
――怪しいお面をかぶった女の子の方はともかくとして。
「坂神……蝉丸さんと、月代さん、ね」
「天沢……確か、最初の放送の五人に入っていた名だな」
「ええ」
「……こちらの目的は、この島を出来るだけ多くの者が脱出できるよう信頼できる仲間を集めることだ。……そちらの目的は?」
「多分同じ……知り合いに会って、高槻を倒すこと」
葉子のことは詳しく言う必要はない。却って警戒されるだけだろうから。
「そうか」
多少、蝉丸の緊張が解ける。もっとも、隙らしい隙は全く見せようとはしない。
(かなり……こういうのに慣れてるのね。武術家か、自衛官とかかな?)
不可視の力が弱まっている今の状態で、敵に回し

たくはない相手だ。できるだけ、友好的な態度を崩さないよう意識する。
「……少し聞くが……こういう男を見ていないか？」
と、蝉丸が御堂の風体を説明する。
彼にはあの男の消息が分からないことが気にかかっていた。蝉丸が知る限りでは、参加者の中で最も恐ろしい相手の一人。「完全体」の蝉丸に対して敵愾心を持っているようだが、もし、かつて共に戦った時のように味方にできれば、頼もしいことこの上ない。敵に回ったとしたら——恐るべき脅威だ。
「……ごめんなさい。見ていないわ」
「そうか」
「じゃあこっちも聞きたいんだけど」
「なんだ？」
葉子や晴香、由依、そして少年について説明する。
「……という人達を見なかった？」
先ほどの放送では、葉子達はまだ名前を呼ばれていない。この島のどこかにいるはずだ。
「(･∀･)あ、その黒い服の男の人には会ったよ」
後ろから月代が声を上げる。
「！　……どこで？」
「彼は、君の仲間なのか？」
「……多分」
仲間と呼ぶには少々抵抗がある。信じ切れるかといえば、嘘になる。彼は決して善ではありえない。何しろ、悪魔なのだから。だが今の状況で彼が高槻に与するとは考えにくい。
葉子の事もある。彼ならば、何か知っているかもしれない。——もちろん、神ならぬ身にはこの後に訪れるそれを知る術はなかった。ここに、一つの終わりが始まりを告げることを。
「そうか」
そして蝉丸は、少年と会った時の事を話し始めた。武器のこと、仲間を集めること、そして——岩棚に隠された基地のことを。
「……そっちの方に、案内してもらえない？」

「む。……できるならば、もう少し武装や仲間を集めてからにしたい所だが」
「なら、場所を教えて。とりあえず私一人で行ってみるから」
「……無茶はするものではないぞ」
「分かってるわ」
「そうか」
本当は、共に仲間を探してもらいたかったが、彼女の視線はどこまでも強く――。
引き留めるのをためらわせるものがあった。
「武器の類は持っているか？」
「……いいえ」
今郁未の手元にあるのは、水と食料、そして花火各種とバルサンだけであった。
以前持っていた手斧は、あの戦いの後柄にヒビが入っていることに気づき、建物のところに置いてきてしまった。危なくていざという時に使えないからだ。
尖った石を何個か持ち歩いてはいたが、武器としてはあまりにも心もとない。
蝉丸は少年に貰った銃を差し出そうかと思ったが、複数の殺戮者たちを相手にする場合、刀だけでは圧倒的に不利になる。待ちかまえる危険が分からぬ以上、迂闊に銃を手放すわけにはいかなかった。
「(・∀・)じゃあ、これ持ってく？」
月代が、夕霧の持っていた包丁を差し出す。
「いいの？」
「(・∀・)うん。私には、こっちの槍もあるし」
月代にしてみれば、戦いになった場合、残って包丁で戦うよりも全力で逃げた方が、蝉丸の負担を減らすことになる、との考えもあった。
白兵戦で戦うよりはむしろ、後ろで石を投げたり、人を呼んでくるなどして蝉丸を援護した方がまだマシだろう。
自分は、蝉丸を助けねばならないのだ。足手まといになるような戦い方はすべきではない。とりあえ

ず何の経験もない彼女としては、自分が基本的に無力である事を自覚して行動するしかない。
「……じゃあ、受け取っておくわ」
　余り役に立つ武器とはいえないが、不可視の力と併用すれば扉の鍵などを壊すのには使えるかもしれない。郁未は包丁を受け取り、バッグの中に入れた。
「それじゃ私は行くけど……」
　ふと、気がついて振り返る。
「……あの向こうには行かない方がいいわ」
「何故だ？」
「恐ろしい人が、いるから。仲間を捜すなら、他を探した方がいいと思う。えーと、あっちの方向に結構行ったら、池があるんだけど……私としては信用できそうな人達が、その辺にいたわ。昨日のことだから、移動しちゃってるかもしれないけどね」
「？　……分かった」
　向こうに誰かいるというのか？　多少疑問は残るが、声に含まれる真剣さに、蝉丸は頷いた。
「では、気をつけてな」
「あなた達もね」
「(・∀・)うん」
　そして三人は別れる。
　もう郁未の背中が見えなくなったころ、月代が声をあげた。
「(・∀・)あ」
「なんだ？」
「(・∀・)またこのパソコンの使い方、聞き忘れたよぉ。知ってたかもしれないのに」
「……忘れていた」
　蝉丸はもちろん、野生児である月代もパソコンの使い方など知らない。一度いじろうとしたら変な青い画面が出て動かなくなったので、それ以来まともに触ってすらいない。今度誰かに出会ったら、聞くつもりだったのだが……。
「仕方がない。また、次の機会に訊くしかないだろう」

「(・∀・)そうだね」
二人はまた歩き出す。
次の、驚くべき内容の放送があったのはそれからしばらく経ってのことだった。

## 428　高槻'S、……北へ。

「はぁはぁはぁ……」
――自分はこんなにも体力がなかっただろうか？
それとも、この島の気候ゆえだろうか？
高槻06はそう自問しながらここまで歩いてきた。
――くそう、この俺をコケにしやがって。
だが、俺をそのまま殺さなかったことを後悔させてやる。あそこにまでたどり着ければ、アレがある。何かあったときの為にと用意してあった、アレがな。アレさえあれば何とかなる。だから、なんとしてもそこまでたどり着かなければならない――
高槻は島の最北端にある、ソレを目指して歩いてきた。
そしてそれは他の高槻、01と02も一緒だった。
奇妙なシンクロニシティーとでも言おうか。
高槻06がそこにたどり着いたとき、自分が道具だと思っていた、他の二人の高槻もそこにたどり着いていたのだった。
『おまえらもか！』
三人が同時に口を開く。
個体毎に多少の劣化があろうと、やはり同じ人間同士である。
『ここの施設は俺が使う。お前らは別へ行け！』
同じ言葉を、三人が三人とも口にするのはある種滑稽でもあった。
しかし、当の高槻達は真剣である。
――まてよ、このまま緊迫状態が続くと、自分同士での闘いになって、共倒れになってしまう危険性がある……。ここは一旦共闘の道を掲げようではな

いか。俺の利益につながる間は協力を続け、折を見て始末が必要なら始末すればいいのだ。
高槻らはそれぞれ、心の中でほくそ笑んだ。
『まぁ、そう気を荒立てるな……』
俺は優秀だ。
絶対に生き延びてやる。生き延びて、俺をコケにしやがった長瀬の奴らには、きっかり痛い目を見させてやるぜ……。

## 429　見ていた者

詩子はひとり歩く。
とくに目的はない。茜を探すといっても、何の手掛かりもないからだ。
ただ、森の中を歩いていた。やがて森は、人の手が入った赤松の防風林に切り替わり、遠い波音と潮風を感じると足元がさくり、と軽快な音を立てた。
海岸線に、出ていた。
拡がる視界に思わず息を大きく吸い、そして吐く。なんとなく幸せな気分になる。景観からくる開放感は、情況の打破には何の役にも立たないのだが。
包み込むように鳴り響く波の音、風の音を浴びながら。
(あ、もう何日身体洗ってないんだろ……)
そんな暢気なことを考えたりしていた。
浮遊した詩子の意識を引き戻すように、拡声器を通した無粋な声が響く。何度聞いても、いや連続して聞くと尚更嫌な放送だ。
だけど、今回の放送はいつもと異なっていた。あのにくったらしい声じゃなくて、しゃがれたおじいさんのような声。
その声は、自らのことを主催者と名乗った。
そして、高槻は——
(ゲームの参加者の一人、かぁ……)
ふうん、と心の中で呟く。高槻ってあの男は、も

ちろん好きになれないけれど。結局今の放送の連中のほうが悪い奴なんだ。
「なんか虚しいね」
などと海に語りかける。
そのとき、海が。
ざざあ、と返事をした。
『……それではゲームも終盤だ。我々を、タノシマセテクレタマエ――』
詩子は目を丸くして、放送の終盤はさっぱり聞いていなかった。
心を乱す放送のように、快適な揺らぎを伴う波音を荒らして、小型の揚陸艇が砂浜に取り付いていたのである。
慌てて松の木に隠れ、様子を窺う。もし位置を知られていても走れば逃げられるだろう、とタカをくくって様子を見ることにする。
そこから降り立つ影は――高槻だった。
大きな鞄を背負って、兵士のようなジャケットを着込んでいる。手には銃。なんか大きくて、プラスチックでできたみたいな変な銃を持って。
何か喚いて、一回だけ揚陸艇に蹴りをかまし、手元を見たあと、海岸沿いに北へ向かっていった。
(うわー、やばー……)
完全装備だ。あれに遭遇したら危険すぎる。
詩子は防風林を内側に抜けつつ、南に走った。

陰鬱な表情で、とぼとぼと少女が歩いていた。
家出はしたが頼りはなく、金もない。そんなお上りさんのような惨めな表情。少女は――初音は、制御できない意識に打ちのめされていた。
そんな中放送が流れる。
楓お姉ちゃんが、死んだ。結局一度も会えずに死んでしまった。最も近しい存在だった姉の死。悲しくて、そして怖い。でも、戻れない。
自分を助けてくれるであろう姉には、すがれない。

（そうだ……今、どうしてるかな……）
初音はぼんやりと、この島に来てからのことを考えていた。
耕一に会うまで、ずっと守っていてくれた青年の姿。抜け落ちていたかのように忘れていた、彰のことを思い出していた。彼の名は無かった。つまり生きている。
やけに遠く感じる記憶を胸に、下ばかり向いて。
ひとりぼっちで、歩く。
流れ流れて、行き着く先は。
——墓地だった。
さすがに中に入る気はしないので、外周を沿うように歩いてく。
そのとき、がこん、と。
自分の殻の中に閉じこもるように、外に注意を向けずにいた初音にさえ届く、重く、低い音が聞こえた。
（……隠し……通路？）
墓石がずれて、ぽっかりと口を開けていた。
初音は慌てて墓場を離れ、木立に身を潜める。
中から男が出てくる。高槻だった。手に拳銃を持ち、手榴弾を下げている。
「貴様ら見ていろよッ！　俺様をコケにした報いを受けるがいいッ！」
そう穴の中へと叫ぶやいなや、手榴弾のピンを抜き放り込む。
結果を待たずに、高槻は墓場の北口へと一目散に駆け去った。
どかん、と光と震動、そして炎が巻き上がる。遅れて天に昇る雨のように応射が帰ってくる。
まるで、戦争のようだった。
（彰……お兄ちゃん……）
墓地から発せられる光を、ぼんやり眺めながら、彰のことを考える。残されていた唯一の拠り所を求めて、初音は歩き出す。
前を向いて。

しっかりと。

はーぁあ、と。

詩子は先ほど海岸で漏らしたそれと、明らかに質の違う溜息を漏らしていた。森を抜け、坂を駆け上り、高台までたどり着いたところで、とうとうダウンしたのだ。

見晴台のベンチでごろりと寝転びながら、荒い息を整える。

石のベンチが、冷たくて気持ちいい。目を細めて、つるりとした感触に頬擦りする。

その細めた視界の中に。

小さく、炎が見えた。

林の向こう側、ぽっかりと開いた空間の中ほどに、炎がたっている。そこから離れるように、北へ走る人影がひとつ。

水辺近くの家屋に、男女一人ずつ。

視線を少し戻して、水辺の反対側に続く平原。

そこに——小柄な、亜麻色の髪の少女が見えた。

(茜⁉)

がば、と半身を起こして少女の姿を確認する。

茜だ。

安堵と共に視界に入った異物に自然と目が行く。

茜よりも更に遠くに、オートバイが停まっていた。

そこには色黒の男が——高槻が、立っていた。

(あれ?)

大げさなアクションで暴れている。たぶん、怒っているのだろう。オートバイにひと蹴り入れて倒すと、茜に先行するように北へと向かう。

(あれれ?)

まっしぐらに北へと向かうその歩みは、ちびちび歩く茜よりはるかに早い。気分を変えて立ち止まったり、反転しない限り茜と衝突はしないだろう。

けれど。

(なんか、変だよね?)

詩子はたっぷり常識の世界の中で思考を巡らせ、そこから一歩踏み出たところで結論が出た。
「高槻……が？　――二人ぃ!?」
それは、正解ではなかった認識だが。
そして茜は、全く驚かなかった事柄だが。
詩子は危機を感じて、再び駆け出していた。

## 430　女郎蜘蛛

暗い森の中、外からは見えないほど生い茂った藪の中、休む者ひとり。
篠塚弥生（四十七番）。
浅く眠る彼女の周りには四つほどの鈴が宙に浮かんでいた。
もちろん魔法でもなければ超常現象でもない。
それらはよほど気をつけなければ見ることができないような細い糸で吊るされていた。
正確ではないがこの森の一部分、直径約百メートルの円状に渡ってその糸での結界が張り巡らされていた。
弥生は蜘蛛のようにその真中に鎮座している。
少しでも糸に触れるとそれぞれ弥生のそばにある東西南北に位置する鈴が鳴るという仕組みである。
いわゆる簡易警報装置とでもいうべきか。
その糸は巧妙に草陰、木陰に隠されていた。ただでさえ暗い森の中、しかも真夜中である。
訓練された者であってもその仕掛けをかわすのは容易ではないだろう。
それでも、過信はできない。所詮は素人が急ごしらえした仕掛けに過ぎないのだから。
浅く眠りながらも周囲への警戒を怠らなかった。
言い換えれば、警戒していたからこそ浅くしか眠れなかった。
先の戦闘後、彼女は集落の民家からある程度使えそうな物を持ち出していた。
白紙のメモから筆記道具、カンパンなどの非常食、

ニードルガンや警棒、ナイフなどを効率的に装備できるチョッキやベルト、包帯などの簡易救急セット、果ては懐中電灯やランタンまで様々だ。
もちろん糸や鈴などもそれらの道具の一つだった。風の音に弥生はゆっくりと目を開くと、手の中のメモに再び目を通す。
ポケットから取り出したメモはびっしりと文字で埋められていた。
人の名前。約三分の二の人間に赤い線が入れられている。
赤い線の本数は、そのまま犠牲になった人間の数を示していた。
弥生が床に就く前……――放送で十三人の犠牲者が出た。
それから既に十本の線を引いている。
「理奈さんも……いなくなったのですね」
これで弥生が知り得る人間は全滅したことになる。
先程まで入れられなかった三本の線。
本来であれば引きたくなかった線。
ゆっくりと、赤色の線が緒方理奈の名前の上に十一本目の線が引かれた。
アーティストから転向し、少しずつ腐りゆく芸能界に一石を投じた天才プロデューサー緒方英二も、そしてその妹、トップアイドルの名を欲しいがままにしていた緒方理奈も。
そんな理奈のライバルにして弥生の最愛の女性、森川由綺も。
そして、藤井冬弥も……
もういない。
「本当なら、認めたくはないですね……こんな現実は」
赤色のマーカーが、残る二人の名前の上を行ったり来たりしていた。認めたくない、だけど確かな現実が、そのペンの下にあった。
それでも、ゆっくりと十二本目の線を由綺の上へと引いた。

少しだけ、線が震えた。
「藤井さん、あなたはどう思いますか？　今の私を……」
誰にでもなく呟く。
聞いて欲しかった人はもうここにいない。聞いて欲しかった人――それは由綺ではなく、冬弥。
弥生は少しだけおかしくなって自嘲気味に笑った。
「もう……今となってはどうでもいいことですけど」
由綺が愛していた人。由綺を愛していた人。
そして、弥生が最後まで愛することのなかった男性(ひと)。その名前にゆっくりと十三本目の赤い線が引かれる。
その名前の上に一滴の雫がこぼれ落ちて、うっすらと赤く滲んだ――。
睡眠から覚めても、結局ここに留まることにした。
線の引かれていない名前が残り三十八人……自分を除いて、あと三十七人の標的が残っている。
最もあの放送から随分と時間が経っている。何人かはもう脱落しているかもしれない。
――事実、弥生の知りえぬところで既にマルチ、智子、浩平の三人が死んでいるのだが、もちろん弥生がそれを知るはずはない。
銃器の残弾数もまだ充分に残ってはいるが、三十人相手に保つはずもない。それ以前に、戦って生き残れる保証などどこにもないのだから。
弥生以外にもゲームに乗っている人間は確実にいる。知らないところで人が死んでいるのが確かな証拠。無理に自分から動く必要はない。数が少なくなってから残った者を叩けばいいだけだ。
――張り巡らされた糸の結界に触れる者がいれば戦闘になるだろうが。できればそんな事態は避けたいものだ。
そう結論付け、弥生は体力の温存に努める。
弥生の脳裏にはこれまでの事、そしてこれからの

事が浮かんでいた。
（結局、高槻も哀れな駒だったわけですね）
戦場に新たなる標的として放たれることとなった高槻。恐らく高槻は誰かに殺されるだろう。
参加者であれば誰でも――殺意を覚えるはずだ。
だが弥生にとっての高槻は、もはや殺しに出向くだけの価値もなかった。それよりも、
（取引は全部無駄になりましたか……）
十人殺せば由綺と藤井を助けるという取引は、空手形になってしまったと考えるべきだろう。ジョーカーというものは高槻の独断だったに違いない。
（まあ、取引が有効だったところで、護りたかった二人はもう亡くなってしまいましたが……）
全ては虚しい。
今の弥生に残されているのは主催者への復讐だけだ。それは長瀬という男なのか、もっと別の組織なのか、今はわからない。
いずれにしても生き残ってからだ。その為に一番確実で最悪な手段を弥生は選ぶことにした。
無事に日常へと生還してからが、本当の戦いの始まりなのだから。
果たしてゲーム通りに一人生き残ったとして、敵が自分を生かして帰すのか……答えはＹＥＳ。
きちんとゲームの主旨に乗っ取って生き抜いたのであれば。
かつて喫茶店で出会った水瀬秋子が、前回の生き残りであると告げたことが弥生の背中を強く押した。
――あの喫茶店の面子は、娘の名雪も含め、秋子を除いてすべて死んでいる。
彼女だけ生き残ったのか、それとも秋子がゲーム通りに途中で殺したのかは分からないが、もし後者であれば弥生にとって大きな脅威になるだろう――
このゲームは過去何度も開かれていたらしい（気分の悪くなる話だ）。
秋子の言葉が本当ならば、ゲーム通りに一人生き残った場合は無事に帰されているらしい。

（秋子さんが嘘を言っていない保証はないんですけどね）
――あの時の秋子にそんな嘘をつくメリットはない、恐らくは事実だろうとは思えるが――
たとえその言葉が嘘であっても、そして別の平和的な解決方法が見つかったとしても……自ら望み、手を血で染めた彼女に後戻りの文字はない。
彼女が選んで進める道はもう殺るか殺られるかの二択だけしかない。
（できれば……罪のないはずの人を手にかけるのはあと一人にしたいものですね）
理想でいえばそうだ。弥生の預かり知らぬところで潰しあってくれれば越したことはない。
（それが……マナさんであれば……）
それもまた弥生の理想であった。
冬弥の決断、由綺が死んだ原因。
マナが冬弥に何を言ったかは分からない。
もしかしたら冬弥が自分で決めたことなのかもしれない。そして、遅かれ早かれ、冬弥は同じ決断を下していたのかもしれない。非日常の中に日常を見出して逃げ込んでしまった由綺の為に。
……だが、どちらにしても彼女との遭遇が引き金になったのだから。
弥生の中では間違いなく、哀れな高槻よりも憎い相手――彼女に罪はないだろうが、それでもだ。
（どの道、一人しか生き残れないのですから）
どの道罪のない参加者を手にかけるなら、マナを。
罪の意識よりも、もっと深い感情で弥生は唇をかみしめた。
再び煙草を浅く銜（くわ）え、火をつける。
（今の私の姿は他の人からどんな風に映るんでしょうね）
恐らくはもうひどい姿に違いない。
適当に羽織った登山用のチョッキに、もう見る影もない（伝線というのも憚られる）ストッキング。
チョッキの下の服は既に汗と血と泥で薄汚れてい

る。
　自分の血、数多くの他人の血を吸った服。
　もちろん顔も、腕も……。
　そして綺麗だったはずの髪も血と泥でパリパリに固まっていた。
　服だけじゃない、細かな手傷も――幸い動くのに支障はないが――かなりの数に昇る。
　特に顔は……失明こそしなかったが、表情もひどいものだろう。
　冬弥や由綺が、何も言わずにそんな自分を受け入れてくれたのがどんなに嬉しかったことか。
　チョッキに括り付けられたバタフライナイフと特殊警棒。腰のベルトにはニードルガン、背中にはボウガンを背負って。そんな姿で機関銃と鉄の爪を手に、闇の中で獲物を待ち構えている……
（こんな私を、誰が不気味じゃないと言えるでしょうか）
　鏡がなくて幸いだったかもしれない。弥生はまた少し痛々しげに笑いながら煙草をもみ消した。
　少しずつ夜明けが近づいている。
　だが暗い闇の中、弥生が構えるこの場所まで、そして弥生の心にまで太陽の光が差すことは、もうない。

## 431　ぼくの戦争　――勇気の矢――

　彰が目を覚ましたのは定時放送が半ば終わろうとしたその時のこと。耳鳴りと共に覚醒する。頭がくらりと重い。後頭部を撫でると血が固まっているのが判る。他に怪我をしていた部分を調べてみるが、血は大体止まっている。自然治癒の力は大したものだと思う。耳鳴りで放送がよく聞こえない。唾を飲み込んで耳に集中力を傾ける。
「以上十三人だ」
　――聞き逃した。大した問題ではないのだが、友人たちの無事を確認することが出来なかったのは痛

い。だがまあ大丈夫だ。六時間後には確かめられるんだ。生きていてくれよ、冬弥、由綺。それに初音ちゃんもだ。
「これまでで最高の数だが、一人殺して死ぬ奴が多いせいで生き残っている奴にまだ誰一人殺してないのが――」
違和感。ノイズ混じりで明瞭には判らなかったが、
「高槻？」
これは高槻の声だと思う。先ほど自分が殺した筈の。どうして生きている。考える暇も与えず高槻は喋り続ける。
「よし！　こうしよう、次の放送までに一人も殺せなかった奴は即座に爆弾を爆発させる。あっ、俺の部下はいくら殺しても駄目だからな」
そんな妄言を高槻は吐いた。彰は呆然とする。何言ってんだこいつは。もう爆弾管制の装置は無い。爆発させようにも無理なのだ。
気づく。これは参加者を煽るための嘘だ。装置を破壊した当の本人である自分はともかく、何も知らない参加者はこの嘘に気づく筈が無い。怯えるだけならまだいいが、下手をしたら今の放送でやる気になる人間がいるかもしれない。今は死んだ筈の高槻が生きていることはどうでもいい。それより先にすることがある。
自分がするべきことは決まっている。参加者たちにもう戦う必要は無いのだと告げることだ。勿論自分ひとりですべての参加者に伝えることは無理がある。協力者が必要だ。藤井冬弥と森川由綺に会って協力を頼んだり、柏木初音とその保護者である柏木耕一に協力を頼んだりする必要がある。彰は考える。何処にいるか知れない冬弥と由綺を探すよりは、まず、さっき初音を預けた場所から動いていないかもしれない初音たちのところに行く方がいい。
彰は立ち上がる。右足に激痛が走る。まともに動いては右足が死ぬかもしれないと思う。だから彰は左足に重心をかける形で歩き出す。闇はまだ深い。

七瀬留美は思う。狂ってしまえたらどれほど幸せだろう。長森瑞佳が死んだ時のように狂乱めいて狂ってしまえたら、この世界も少しはマシに見えるかもしれない。
けれど、狂おうとして狂う事が出来るほどヒトは器用ではない。七瀬もそれは同様だ。七瀬は燃えるような悲しみの火山の真ん中で佇んでいるようで、凍るような絶望の海の中に沈んでいるような、そんな矛盾した錯覚を同時に感じている。心の奥底に冷静になろうとする理性がいる。
大切なヒトを失った苦しみに理性が耐える。一度狂って抵抗力が付いた精神はこの苦しみにも堪えてしまうだろう。それが悲しすぎて、七瀬は死にたくなった。
目を閉じる。溜まっていた涙が流れる。嗚咽までが漏れて、自分はいつからこんなに弱くなってしまったのだろうと思う。
「――ひぐっ」
鼻を啜る。人に見られたら死にたくなるような無様な顔をして、七瀬は哭いている。
柏木耕一はそんな七瀬を見ながら居た堪れない気持ちになっている。自分が眠っていた間に、大切な人をまた一人失った彼女を慰める術を耕一は持たなかった。
初音もいなくなった。七瀬の腕を振り払い、一人で闇の海の中に沈んでいってしまったのだと云う。
自分は無力だ、と耕一は思う。
「――畜生」
すぐ傍の七瀬にも聞こえない小さな声で耕一は自嘲する。折原浩平と交わした言葉。短い時間しか共有していないけれど、同じ志を持った――「守るもの」のために戦おうとした仲間。その彼は無残に殺されて、その間自分は気づきもせず眠り呆けていた。間抜けさ加減に反吐が出る。
耕一は七瀬の傍らに座ることも、慰めることも出

来ず、呆然と立っている。最初に出会ったときのように彼女が狂ってしまうことも考えられるのに――自分には何も出来ない。不甲斐なかった。
　何かを為そうと、浩平と語った数時間前のことを思い出す。夜が明けたら、この島から脱出する為に何かを為そう。そうふたりで決めていた。
　耕一は思う。何かを為さなければならない。ここで不甲斐なさに震えているだけでいいのは子供だけだ。

　音がした。木の葉ががさがさと揺れて風が乱れる。七瀬は涙で濡れた顔で、耕一ははっとした顔で振り向く、
「誰だッ‼」
　耕一は傍らの中華キャノンを手に取る。七瀬は少し後ずさりして拳を握り締める。ほんの少しの間を空けて、転ぶように誰かが茂みを抜けてくる。殆ど転んでいるような体勢で、青年――七瀬彰が現れる。
「良かった、まだいたっ‼」
　安堵の溜息を吐く。右手にはサブマシンガン、ベルトには拳銃。顔は血だらけで全身は怪我だらけ。火傷もところどころに背負っている。右足の甲が吹き飛んでいて歩くのも難儀そうだ。最初に会った時からは想像も付かないような凄惨な姿をしている七瀬彰は、しかしこの瞬間だけは笑顔でそう言った。
「あ、あんた誰よっ⁉」
　拳を握りしめ、七瀬は大声を張り上げた。そういえば七瀬留美はまだこの青年と会っていなかった。苗字が同じだな、と耕一は思ったが、どうやら直接の関係は無いようである。七瀬留美の声を無視して七瀬彰は言う、
「ちょっとあなたたちに手伝って欲しいことがあるんです、初音ちゃんと耕一さんと、あとそこの女の子にも出来たら手伝って欲しいんですけど、
――あれ？」
　耕一は顔をしかめる。彰はどうやら、すぐに気づ

いたようだった。この場に初音がいないこと。そして、七瀬留美の後ろに折原浩平の死体があること。彰の顔は蒼白になる。
「初音ちゃんは――」
誤解をしているかもしれない。耕一が弁解しようとしたその瞬間、彰は耕一に飛びかかる。自分より二十センチ近くは低い身長の七瀬彰が、今自分の胸倉を掴んでいる。
「くそッ!! あんたに信頼して預けたんだぞッ!! 初音ちゃんはあんたのことをすごく信頼していたからッ!!」
彰は叫ぶ。耕一の顔を自分の顔の高さまで引っ張って叫ぶ。唾を飛ばして、雷のように大きな声で叫ぶ、
「僕はこの戦いを終わらせる為に、初音ちゃんみたいな小さな子が絶対死なないで済むように戦ってきた! それなのに何であんたは初音ちゃんを守れなかったんだ!! あんな小さな子をどうして殺させたッ!!」
彰の形相に脅えていた七瀬留美は、しかしやっと我を取り戻して耕一を擁護する、
「や、やめなさいよッ!!」
だが彰は怒号で返す、
「黙ってろッ!!」
さっきまで泣いていたことも忘れて、留美は頭に昇ってきた熱をそのまま言葉にする、
「黙らないわよッ!! 初音ちゃんがいないのはあたしのせいなのよっ! 話を聞きなさいよッ!!」
事情を説明すると、彰はゆっくりと耕一の胸倉から手を放す。どうしようもなくなった感のある疲れきった顔で、七瀬彰は座り込む。
「――畜生」
涙まで零して彰は叫ぶ。畜生、ちくしょう、ちくしょう、ちくしょうちくしょうちくしょう。真っ赤に染まった服と真っ赤に染まった頬、そして真っ赤

に染まっていく目を見て、耕一は死にたくなる。実感する。自分は初音を守ることが出来なかったのだ。身体の不調など言い訳にもならない。自分は完璧に、完膚なきまでに無力だった。

七瀬留美も力が抜ける。あんただけがつらいんじゃないのよ、耕一さんだってつらいんだから。そう叫びたかった。だが、この言葉に何の意味もないことを今の七瀬は知っている。自分だけがつらいんじゃないのだとしても、自分がつらいことには何ら変わりは無いのだから。

「あの——放送で初音ちゃんの名前は呼ばれてないんですよね？」

彰は目を袖で拭いながら、丁寧な口調でそう言う。暴言を吐いたことを悔いたような顔だった。耕一は申し訳なさそうに、自分たちも放送を聞き逃したのだということを告げる。

「——そうですか。それなら、」

彰は立ち上がる。足の甲も無くて、立ち上がることすら億劫な筈のくせに、身体に鞭を入れて彰は立ち上がり、やってきた方向とは逆の方向へと足を引きずっていく。

「おい、」

「初音ちゃんはきっと生きてる。耕一さんやお姉さんたち、そこの——七瀬さんでしたか、とにかく、みんなのことを思って一人で寂しい思いをしてるに決まってる」

「彰くん、」

「僕は、初音ちゃんを捜しに行く」

耕一ははっとした顔で、そう言う彰の横顔を見る。赤に彩られた顔の真ん中にある双眸は、決意と勇気に満ちている。足を引きずる彰はゆっくりと振り返り、

「耕一さん。守りたいものがあるなら、動かなくちゃ、いけないいんだ。動かないで、黙って座っていても、何も、守れは、しないんだ。苦しくても、動か

なくちゃ。動かなくちゃ、だめなんだ。誰かを守る為にならら、日常を守る為にならら、自身のことなんて、忘れてしまうべきなんだ」
乱れた呼吸でそう言う彰の声に、柏木耕一ははっとする。その顔に、自分が見失いかけていた何かを見つけたような、そんな気持ちになるのだ。
「――さっき言ってた手伝って欲しいことっていうのは、この殺し合いに参加している人たちにもう戦わなくていいんだと伝えて欲しい、ってことなんです。体内爆弾はもう作動しないんです。もし誰か、やる気になっている人を見かけたら、そう伝えてあげてください」
もう作動しない。それは、作動させる装置か何かを破壊したということだろうか。彼が今こうして負っている傷はその時に負ったものなのだろうか。七瀬留美と柏木耕一には、青年の眼差しがひどく気高いものに思えた。
彰は微笑む、微笑んで言う、
「きつい事、言いましたけど――生きて、帰りましょう。例えこれまでの日常は壊れてしまったとしても、それでも、生きていれば日常に戻れる筈だから。犠牲になった人たちの為にも、僕たちはそうしなきゃダメなんです」
彰は夜の闇の中に身を投じていく。二人はそれを見送る。

七瀬留美は思う。
自分を生かしてくれた長森瑞佳と折原浩平のこと。ずっと一緒にいて、狂いそうになる血の匂いをごまかし続けてくれたふたりのこと。ふたりのおかげで、今自分はこうして生きているのだと思う。
ならば、自分は泣いているだけではいけない。何処かで泣いているかもしれない繭のこと、浩平を殺して狂気に酔っているかもしれない茜のこと。繭を守り、茜を止める。それが浩平と瑞佳の遺志だ。
弱さは隠せない。ふたりのことを思い出せば自分

は必ず泣いてしまうだろう。けれど、弱さを凌駕する勇気を持って、この戦いを終わらせる。
　立ち止まっていてはいけないのだ。勇気をこの手に、歩き出さなければダメなのだ。

　柏木耕一は目を閉じる。
　まだ何も失われていない筈だ。先の放送は聞き逃したが、まだ千鶴さんも梓も楓も初音ちゃんも生きているに決まっている。決まっているのだ。
　身体はまだ完全ではない。だからなんだ。完全でなければ四人の女の子を守れないほどに自分は脆弱か。そんな訳があるか。柏木耕一はそんなに弱い人間には出来ていない。
　まだ自分には取り返しが付く筈だ。大切な人を失った七瀬よりもまだ自分は恵まれている。走って、走って、大切なものを守りきれ。
　目を開く。広がるは闇。闇の中に足を踏み入れろ。このでかい図体は大切なものを守る為にある。この手に希望を抱いて、歩き出すのだ。
「行こう」
　殆ど同時に二人は言う。――立ち止まってはいられない。

## 432　そして、残光。

「それじゃあ、行こう」
　耕一は立ち上がる。荷物を肩に背負い、小さく歯を食いしばり、まっすぐな目をして立ち上がる。疲れが完全に消えた訳ではない。だがそれでもこの程度の疲労で疲れた、と言い張って休み続けるわけにはいかない。
　七瀬彰というあの青年が初音を探すというのならば、自分は初音たちの危険を脅かす殺人鬼を止めるために動こう。
　――それが、今俺がやるべきことだ。

誰に言うわけでもない。自分自身に言い聞かせるためにそう言う。耕一はそのままゆっくりと歩き出し、どちらに行こうか七瀬に尋ねようとして、七瀬がまだ座り込んだままであることに気づく。
その目は決意の色で染まっている。
その決意の目の見ているのは——少しだけ離れたところで眠ったように死んでいる折原浩平の姿だった。
「少しだけ待って、耕一さん」
泣き顔で七瀬は言った。何も知らない人間が見れば笑顔にしか見えない、悲壮な泣き顔だった。耕一は何も言えず、七瀬の泣き顔を見つめていることしか出来ない。

七瀬は折原浩平を殺したナイフを手に持っている。
これが自分のいとしいひとを殺した。このナイフがなければ自分はずっと折原と一緒にいられたかもしれない。憎い。憎い。憎くて憎くて憎くて、憎悪で心がおかしくなってしまいそうだった。いっそこのナイフで自分の喉笛を突いてしまえば楽になれるかもしれない。憎悪に汚れたままでは折原の傍に行けるかはわからないけれど、それでもまだマシかもしれない。苦しみしかないこのゲームの中にいるよりは、幾分かは。
——けれど。
七瀬は自分の髪を束ねていた大きなリボンに手を掛ける。ボロボロになったリボンはあっさりと外れ、長い髪がぱさり、と微かな音を立てて肩に流れる。長い戦いの中で手入れをされることもなく痛み切っている髪がざわめく。
こんな髪だけど、勘弁だよ。

左手でまとめた髪を、浩平を殺したナイフで切る。そして同じように、反対側のリボンも外して切る。自慢だったお下げは、柔らかな触感と共に七瀬の手の中に落ちた。束になった長い髪を持ち、浩平の

傍らに寄る。

　これは浩平との思い出の髪だ。浩平が悪戯ばかりした髪だ。授業中やなんやにいつも悪戯ばかりしてきた浩平の事が、実際のところ、七瀬からしてもまんざらでは無かった。折原が自分の髪に悪戯をするのは、彼がそれなりに自分の髪のことが好きだったからじゃないか、と七瀬は思うのだ。勝手な思い込みだけど、あながち外れてはいないんじゃないか、と七瀬は思うのだ。

　勝手に思ってしまうのだ。

　折原浩平は、もしかしたら、七瀬留美が折原浩平のことを好きだったのを知らないかもしれない。あの男はすごく鈍感で、バカで、トウヘンボクだったから。だけど、それでもよかった。それでもよかったんだ。

　七瀬は呟く、

　——あたしが、あんたを好きだったんだから。

　七瀬は浩平の傍らに自分の髪を添える。

「行ってくるよ、折原」

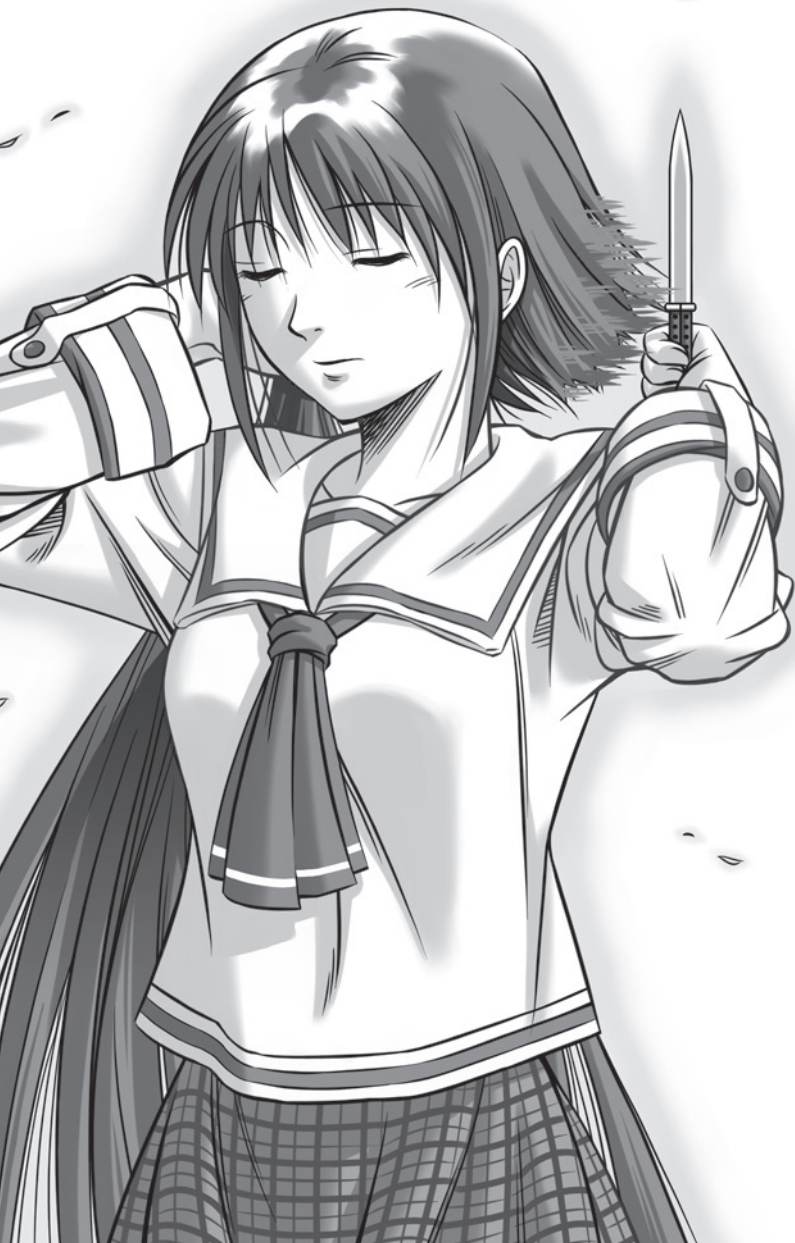
　最後にもう一度だけ七瀬は微笑む。折原浩平の冷たくなった手を握り締めながら微笑む。涙は落ちない。落としてはいけないと思う。最後は笑顔で、笑顔で、——笑顔で。

　七瀬のこころの雫が光になって、眩い朝陽にとけてゆく。

## 433　こころの在り方

少しばかり退いた夜が、半端な明るさを現そうとしているころ。

　早起きの鳥たちがチチチ、と挨拶を始めるなかで、祐一は暗く、無言のままだった。

　今回の放送で判明した死者は、実に多かった。中

でも堪えたのは、その中に名雪がいたことだ。
自分を助けようとして、罪を犯した名雪。
受け入れてやる事のできなかった自分が、今では情けない。狂おしいばかりに慟哭する秋子さんの姿が目に浮かぶようだ。
もはや残る知り合いは、あまりにも少ない。
詩子は、あの少年と一緒に無事でいるだろうか？
あゆは、どうしてるだろう？
そして――茜は、今何処に？
ぼんやりと歩く祐一の足音に反応して、白鳩がはばたいていく。慌てて飛び去ったためか、ひらりと羽根をこぼして消える。
何気なく羽根を拾い、手の平に置いてみる。
なんとなく、あゆの事を思い出したりしていた。
（意識の散漫さは、自らの崩壊に対する防御反応かしら？　自閉に陥るほどではないようだけど、不安定さが露呈している。危険な兆候だわ）
繭が放送以来、声を掛けることもなく黙々と追従していたのは、そうした洞察のためである。
どんな事情があったのかは解らない。唯一解るのは、今は静かに見守る事しかできないという事だ。
鋭利に物事を捉え、正確に話すことができる今の自分が、こんな時あまりに無力なのが悔しくてならなかった。
こころの在り方は、現代科学さえ征服できぬ、霊峰なのだ。
羽根を手に、やさしい目をして立ち止まった祐一を窺う。
白い、羽根。
動物という、言葉をもたぬ世界の隣人は時として人の心を和ませる。
「……動物、好き？」
思わず訊いていた。自然と出た言葉だった。
「ん？　……ああ、嫌いじゃない」

「私、動物飼ってたことがあってね。すごく依存してた。だから死んじゃったとき、ほんとうに辛かったわ」
「へえ……意外って言っちゃ、失礼か？」
少しだけ頬を緩めて、祐一が言う。いい傾向だ。
「そうね、どうしてそこまで依存していたかなんて、他人には決して解らないから仕方がないけど、失礼ね」
繭も少しだけ笑い、続ける。
「みゅーって言う名前でね……」
「μ？　物理とかで出てくるやつか？」
「違うわよ、ただ語感が可愛かったからみゅーって……」
不自然なところで言葉を切る繭を、不審げに窺う祐一。
「どうした？」
「みゅー……」
「繭？」
「みゅーーーーーーーーーーーーーーー！」
そう、こころの在り方は。
現代科学さえ征服できぬ、霊峰なのだ。

## 434　セバスチャン降臨

長瀬源四郎という男について語ろう。
この男、ゲームを裏から支配する長瀬一族の中にあって、その筆頭たる長瀬源之助と同格の地位と実力を持ち、尚且つ長瀬源五郎の父でもある。
その老成された知略智謀を糧とした手腕、そしてその年齢にもかかわらず今尚保たれているその若々しい強靭な肉体。
まさに長瀬一族における〝最強〟の名を手にするにふさわしい存在といえる。
彼のもつサバイバビリティは、すでに長瀬源之

助を超えるところであり、その彼が長瀬の長たることを拒み沈黙を守り続けていたのは、源之助の持つ〝魔法〟、そして彼自身のその性質に拠るものだろう。
勘違いしてはならない。
彼は王としての器とカリスマを兼ね備えている。
だが、彼の心の中で全ては決着づいている。
彼が仕えるものは後にも先にもただ一人、そして彼は群れをなすことを嫌った、ただそれだけだった。
彼は自分自身の能力というものに深い造詣があった。
それは単純な個体戦闘力とも称すことが出来たかもしれない。
目を見張るほどのそれを彼が備えていたことは言うまでも無いが、そもそもそれは彼が生来持っていた恵まれた身体能力と、それに付随したようにあった天性の資質に拠るものだった。
彼自身、その自分の体というものの限界を追求していった。
彼は自分が持っているもののすばらしさに慢心して、それをさらに育てるということに怠慢であったわけではなかったのだ。
彼は全てに誠実で、純粋に向上するということに努めたのだ。
そう、いわゆる彼は天才であり、そして努力家だった。
鍛え上げられた肉体を執事の衣装に包み、一見普通の執事長を装ってみたものの、彼の本質がそれだけでないことは明白だった。
だがそれもまた彼の本質、忠実なるセバスチャンは常に全てに厳格で、公正で、そして誠実だった。
だが、心の深奥に閉じこめられた獰猛な気性は決して消え去ったわけではない。
彼は正しく制御された番犬などではなく。
常に孤独な一匹狼でありながら唯一つの信念の元に行動する、まさに羊の皮をかぶった狼……いや、

猛虎にも等しかった。
　彼を少し知っているものは言うだろう。
『あんたほどいかつい執事は見たことが無いぜ。なあ執事長？　あんた執事長なんて言って実はどっかのバーかカジノのバウンサーでさ、コスプレしてるだけなんだろう？』
　確かにその強面と剛健な体つきを見れば無理は無い。
　そんじょそこらのごろつきならば、彼が一喝するだけで蜘蛛の子を散らすように退散することは間違い無い。
　だからその物言いは得てして的を射ているといえるだろう。
　正直なところ、執事という職務が果たして自分に適応したものなのか？
　と問われたなら、もっとも早く首を傾げただろう人物が彼自身なのだから。
　彼がもっとも得意とするところ――声を高らかにして言うことでもないが――は紛れも無く格闘、もっと言えば肉弾戦、尚且つ広義の意味に於ける戦闘であったなどということはもう分かりきったところだっただろう。
　肉体の鍛錬のみを目的とする修行では、体格の見栄えをよくすることが出来ても実際の戦闘に在って最重要とされる、時流に乗った運や闘いの勘が備わることが無い。
　場数を踏んだものが強いのはこの基本にして深遠な真理によるものである。
　キャリアとは下積みの事を指して、その範囲における努力と忍耐の果てに得たものの証明であり、その結果を賞賛するいわば尊称にも似たものであるが、必ずしもそれが自分の意志によるものであったかどうかは、その人間にとってはまた別の問題なのだ。
　長瀬源四郎は他人に認められるために努力したわけではない。
　彼にもまた同じことが言えた。

結局のところ闘う理由というのは個々人によって違うなどという、至極当たり前な結論に戻ってくるだけなのだ。

かつてあった激動の昭和、戦争が全てを奪っていった。数知れないほどのものが、命が失われていった。生きるためには泥をすするようなこともいとわなかった。

そんな時代が平和ボケした今のこの日本にも存在していたなどと誰が分かるというのか？

いや、分かるわけが無い。

彼がすすった泥の味など、彼以外の何者にも分かるわけが無いのだ。

そして状況は常に彼に強く在ることを求めた。

弱く在る事は許されなかった。

では何がそれを許さなかったというのか？

周りが許さなかった。

世界が許さなかった。

そして、自分が許さなかった。

彼は俗世の荒廃した雑踏に揉まれることになる。

弱いものも強いものも何者にもかかわらず、ただただひしめいていたそこに。

何を以って強者と為すか弱者と為すか、そんな基準が線引きされていたかどうかなどは誰にも判断のつかないところにあった。

だが少なくとも言えることは、そこに強者と弱者という概念が在ったとしても間違いなく勝者は存在しなかった。

では全てが敗者だったというのか？

そうであったかもしれない。

彼らに本質的な意味の差は無かった。

強くても弱くても、生きている限り彼らは常に同じラインに立っていたのだから。

ならば勝者の無い闘いに敗者がいるわけは無い。

結局、混沌の戦場をただ終ることを待ちながら佇

むことしかすることが無かった。
そう、生き残ること、それこそが真の勝利だった。
彼は彼自身の豪腕でその地域における支配階級とも呼べる地位にまで上りつける。
もっともそれも所詮は闇の中で蠢くみすぼらしい子供若者の群れの中でのことだったが。
そんな彼に転機が訪れる。
それが当時の来栖川家御曹子――現在の来栖川財閥総帥――たる男との出会いだった。
源四郎はまさにその時足掻くだけでは届くはずの無かった領域へその指を掛けたのだ。
忠誠というものを知らなかった狂犬は、初めてそこで自分を受け止められるだけの器を持った人間に出会った。
新生する自分自身、新しい戦いの始まり。
彼が知らない世界、来栖川という入り口をきっかけに彼はその更なる未知へと足を踏み出したのだった。

時が、流れる。
時代はもう一度彼に戦いを要求した。
誰のためでもない彼自身。戦いのための戦いを。

「本当に行くのか？」
「うむ」
高い空の上。聞こえるのは二人の話し声。
「我らは戦いに干渉しないと誓ったばかりなのだがな」
「別にゲームに参加しに行くのではない。ただ……うずくのだよ」
源四郎は拳を握り、反対の手でその手首を押さえる。
「わたしの血が」
「……困った男よの」
源之助は苦笑いを浮かべる。
「闘いに関しては、おぬしがもっとも心得ているところじゃからのぅ」

「私がいなくとも、源之助、貴様がいれば〝長瀬〟は動く。問題はない」
「じゃが、もう参加者も三割に減った。無駄な殺しは顰蹙を買うぞ、あれに」
「私が求めているのは純粋なる闘いだ。その結果死するようなことがあれば、それは誰にも文句を挟めるところではない」
「愚か者が。その行動の果てに長瀬に連なるものと遭遇したらどうするというのだ？」
「私に長瀬を問うというならば、それは来栖川を優先した前提でのことだ。はっきり言おう。このゲームは全てに平等なのだ。私……いやわしからそれを切り落とした人間に、いまさらそのような薄甘いものをちらつかされても全くどうとも思わん」
源之助は押し黙る。
「私は、ただ昔に立ち戻っただけに過ぎないのだからな」
源四郎は立ち上がった。

「それに、もうそろそろなのだろう。あれがもつのも」
「……むぅ」
「もしもの時のためにも、貴様はここにいねばならぬ。時が満ちるまで、な」
「……全能者でなど誰も無いのだ。それは我らも、このゲームの参加者も、そしてあれであってもな」
「それだからこそ、我らの存在が意味在るものなのではないのか」
「……〝魔法〟も〝羽〟も〝封印〟も、所詮は全てうたかたに過ぎない」
「ならば、余計に私は私のやりたいようにやるだけだ」
「……そう簡単におぬしがやられるようなら、はじめからこのゲームは成り立たんわ」
ふっと源之助は笑った。
その脇を黙って源四郎は通り過ぎる。
が、少しいくと立ち止まった。

「……一つ忘れていた。高槻がいない今、〝あれ〟は源五郎たちの任せきりということになっていたのだが、どうする？」
源之助の眉がぴくっと上がる。
「……考えておこう」
そう言って、再び源四郎は歩き出した。
「とりあえず、今私の目にとまった武人はあの男一人なのでな」
日時にしてゲーム開始から三日目、時刻にして早朝五時四十六分のこと。
打ち砕かれた忠誠は、再び彼に一人の武人たらんとさせたのか——。
——絶海の孤島に一人の影が降り立った。

## 435　戦いの幕開け

たったの二日で何が変わるというのか？
いや何も変わるところなどない。
例えそれまでの一体何がこの島を支えていたかを、知っていようが知っていまいが構わない。
結局のところ人がこの巨大な島の上でいくら戯れようと、この島自体を動かせるわけも無く、また動いてくれるわけでもない。
ただ、静かに在るだけ。
自らの上に喜びを、嘆きを、怒りを、悲しみを、苦しみをただ浮かべるだけ。
所詮人間の営みなど小さいもの、自分たちを取り巻く広大な世界と時間の中の単なる一点に過ぎない。
そう、世界は常に冷たいのだ。
……源四郎は思索する。
それは純然たる意志を秘めたるもの故のそれ。

この島において唯一ただ闘いの為の闘いを求めて在る者の孤独。
それを言うならば人は最初から孤独の中にあるのかもしれない。
しかしその同じ状況を共有しているはずの、〝彼ら〟とは、明らかな次元の違いを呈すその思惟。
覚悟とも違う何かを、この五十年で源四郎は培ってきた。
降り立った島の南端は時節に合わない冷たい風が吹きつけ、岸壁に打ちつける波もまた高く荒ぶっていた。
早朝のそこは誰しもが初めて見る様な顔を見せる。
源四郎は岬にパラシュートを捨て置くと、そのまま〝彼〟のいる方向へと駆け出していた。
高空でのセンサー探知により大体の位置を把握している故に、彼——源四郎——の足並みに全く迷いは無い。
平地を行く、草原を行く、街路を行く、森林を行く。
恐れるものなど何も無い。
死角から放たれる銃弾も、足元に潜む伏兵も、そんな小細工など端から目ではない。
闘い！
そう、真の斗いを私が望んでいるのだから。
かつてセバスチャンと呼ばれた男が、当所(あてど)ない無明の荒野のごときそこを駆ける。
まるでそこは戦後の焼け野原にも等しい、昔の彼がいたところにその気配を酷似させていた。
〝セバスチャン〟が生まれたのは源四郎の人生の中でも相当新しい時代のことだ。
総帥の孫に当たる芹香嬢に与えられたその名は、新しい生きがいにもなった。
源四郎にとっても彼女は愛孫のような存在であった。
誰でもない、もっとも彼女を見てきた人物が源四

郎だったのだから。
彼女の成長は常に自分と共に在ったのだから。
彼が仕えるべき姫は、もうそこに座していたのだ。
行き過ぎた教育と保護によってすっかり箱入り娘となってしまった彼女を、この十八年彼は守ってきたのだ。
そしてもう一人の愛孫も帰ってきた。
来栖川綾香、芹香の妹である。
アメリカ育ちはなかなかにお転婆で手を焼かされたが、彼女自体は正に非の打ち所の無い人間であった。
芹香を静とするなら綾香は動、二人の子はまるで鏡に映したように正反対に……、だが二人とも素晴らしい人格、美貌、知性を備えてくれていた。
少なくともその誕生に居合わせたものの一人として、その事実が何ものにも代えがたいほどの喜びであったことは言うまでも無い。
綾香は……彼女の才能は非常に多岐に渡り、その天賦の才は格闘という領域にも向けられ、見事に開花した。
唯一欠けていたかも知れないしとやかさを備えさせる為の稽古事からは悉く逃れられたがせめてその分野だけでも〝私〟が見てやりたかった。
いや、違う。相手をしてやりたかったのだ。
彼女はエクストリームの頂点にその若さで昇り詰めた。
しかし世界は広い。
自分以上の強者などどこにでも潜んでいる。
そして〝彼女〟もそれをよく理解していた。
だからこそ一人の闘人として、私が彼女の相手を務めてみたかった。闘って見たかった。
間違いなく勝つのは自分であっただろう。
しかし彼女はそこで留まる器ではない。
戦場というものを知らないだけで、彼女は武人の境地に辿り着きかけていた。
故に、悔やまれる。

彼女にふさわしい死地を用意して差し上げられなかったことに。
その闘いの相手が自分でなかったことに。
最高の次元で、ギリギリのレヴェルで凌ぎを削ることの楽しさ――もう彼女は知っていたかも知れぬが――を伝えられなかったことが……。
死を神聖視するつもりは毛頭無いが、むしろそれを言うならば私はこのゲームそれ自体に耐えがたい嫌悪を抱いている。
闘いをゲームとしか、命を駒としてしか見ることが出来ぬ者と、そもそも反りが合うわけが無かったのだ。
――そう、私は長瀬源之助という男を全くといっていいほど知らない。
長瀬の集合体が発足していたのはこの十数年のことだった。
だが既にこの身は来栖川に捧げたもの。
尚且つ私は天涯孤独とも言うべき状態にまで追い込まれた身。
いまさら血の縁を問うというならば、そんなものは来栖川に対する忠誠の前に霞む程度。
それ故に私は〝それ〟への参加の要請を頑として突っぱねてきた。
ごく最近に生まれたＦＡＲＧＯなる組織については、来栖川のネットワークによりその存在を突き止めてはいた。
所詮堕落した人間の末路にしか過ぎぬものと捨て置いたものが、よもや長瀬と連なるものであったとは思慮の及ばぬところであった。
そして私はゲーム開始に際して、〝長瀬〟への復帰を余儀なくされることになる。
この十数年放置しておきながら、私の存在はそこに大きな影響を与えていたようだった。
そこにいたのは見知らぬ顔ぶればかりであった。
しかしそれ以上に驚かされたのは、息子の源五郎が研究者としてここに参加していたことだった。

事態は私の関知しない水面下で刻々と動いていった。
そしてとうとうそれは開始される。
下卑た思想の元に仕組まれた殺人ゲームと、その背後に隠された実験が。
今回のゲームには、新たにその要素が加わっていたのだ。
〝長瀬〟とFARGO代表の相談の結果、百人強の一次適正者が選別される。
――羽根に連なる要素を持ったものを見つけ出すために。
計画は仕組まれ、意図は課され、そして強制力は無常にそれを行使する。
それは我ら〝長瀬〟にとっても例外ではなかった。
まるで我々の存在の意味が、それらを監視する為だったと言わんばかりに選ばれる人々の面々。
私にとって言うならばそれは来栖川姉妹であった。
長瀬は血を尊ぶ。

故に参加者に混じってしまった長瀬の縁者は、彼らに近しいものの談判により、それなりの措置が与えられた。
私は……既に凍っていた。
彼女たちを守ろうとする前に、セバスチャンは滾る血の予感に凍っていたのだ。
来栖川も動かなかった。
それは即ちこのゲームを容認したことを意味していた。
その血を継ぐべき少女二人が参加していることを知ってか知らずか、
――いや、知らないはずが無い。
遠く海の彼方にいらっしゃる旦那様方に進言することもままならなかった。
肥大した来栖川グループは、既に欲にまみれた人間にその頂を埋め尽くされていたのか……。
総帥、来栖川翁が病床に伏したのも丁度その前後のことだった。

〝私〟を受け止めていた器は、もう失われたも同然だった。
そして私に始まったのは、あらゆる角度からの管理者への洗脳だった。

――この時ほど、全てを知ったように微笑する源之助を叩き伏せたかったことは無かった。

だが、純然たる意志の前に、そのような外部の干渉など全くの無意味だ。
外郭をはがされた私は、ただただ純粋であったあの頃の自分へと立ち戻った。
……何者も、そこまでしか立ち入ることは出来ない。
だがもはや、生きるのに精一杯で世界の何をも知らなかった無知な少年はいない。
今ここに在る純然たる意識、それこそが真にして裏表の無い長瀬源四郎そのものなのだ。

――そして、そこに至る。

「あいや待たれよそこな若夫婦！」
「……夫婦だと？」
蝉丸は不機嫌そうに答えた。
低音だが張りの在るそれからは、その人物の気迫が窺える。
「(･∀･)きゃっ、よく分かってるじゃない」
「月代……」
「ふわっはっは、これは失礼、夫婦ではなかったか。あまりに似合いだったのでな」
それを見た源四郎は豪快に笑った。
「(･∀･)もう～、そんなに褒めないでよ、恥ずかしい」
「お前……」
蝉丸は言い返すだけの気力が減退していた。
「……で、老人。あなたの用は何だ」
「何、ちと道を尋ねたくてな」
「道……？　そんなもの、我々とて明るいわけで

は」
「何、誰でも知っているはずだ。……地獄の一丁目だ！」
そのセリフを聴いた瞬間に、蝉丸は月代を抱いて大きく横っ飛びした。
「(･∀･)はわわ……蝉丸に抱かれちゃった」
「誤解を招く発言は勘弁してくれ」
そう言って月代を背中の方に匿った。
「そちらの少女に手を出す気は無い！」
高らかに、源四郎の声が響いた。
「貴様、名を名乗れ」
「長瀬源四郎と申す」
「……知らん名だな。このゲームの参加者では無いな？」
「如何にも。ただ貴殿との斗いを望み、その為だけにここへ参った」
「俺……と？」
源四郎がこの島へ上陸して一刻ほど。
彼は全く無駄なくここで彼らと出会ってしまった。
「(･∀･)……蝉丸ぅ」
「大丈夫だ、下がっていろ」
「(･∀･)……うん」
源四郎はその様子を見た後、長いスタンスを取ると正拳突きの構えを取った。
「……格闘家か」
「私はゲームによる殺し合いでなく、戦いのための闘いを望んでいる故に、な」
源四郎は不敵に笑った。
「……ならば、俺もこんなものを使うわけにはいかんだろう」
男――蝉丸――は懐から銃を出すとそれを鞄に入れ、刀と共に月代に投げ渡した。
「(･∀･)わ……！」
思いのほかに重いそれを受け止めて、月代は少しよろめいた。
「(･∀･)いいの？　蝉丸？」

「このように決闘を申し込まれて受け入れないなど、武人として、いや男子として恥ずべきことだ」
蝉丸も——彼にしては珍しく——獰猛に笑った。
「……一つ聞きたい。なぜあなたは俺の位置を特定できた？　そういう装置でもあるというのか？」
蝉丸は率直な疑問を言った。
「簡単なことよ」
くっくっ、と源四郎は噛み殺した笑いを浮かべて言った。
「武人の勘だっ!!」
「……」
旧日本軍には、気合で列車を動かしたとか言った馬鹿な答弁をした兵士がいたな、と蝉丸は場違いながらおぼろげに思い出していた。
「今更そんなことを問うても詮無い事。この闘いに集中してもらいたい。気を抜けば……おぬしは死ぬ」
「……それは大そうなことだ」
言って蝉丸も構えた。
脇を締め高い位置のガードを保つ、マーシャルアーツスタイルの構え。
「用意はいいな。ならば——」
一瞬の静寂が流れる。
蝉丸も、源四郎も、月代も口を閉ざし。そこから音が消え失せる。
……この男から感じる懐かしい匂いが、私を惹き付けたのやも知れぬな。
「——いざ!!」
そして、闘いの幕は上がる。

## 436　疾風の攻防

蝉丸は左手を前に、右手を顎に添えた構えをとる。
対して源四郎は完全な左半身。
一見した敏捷性は、蝉丸に分があった。

「……ふっ」
鋭い呼気。スピードに分があると自身も踏んでいた蝉丸は、先制攻撃を仕掛けた。
タンッッッ！
軽やかなステップで、蝉丸が源四郎の間合いに入る。
踏み込んだ右足を軸に、顔をめがけた一撃を繰り出した。
「しっ！」
無声音の掛け声。
だがその一撃は源四郎に当たらない。
寸瞬、源四郎は打ち出された蝉丸の右腕を左手で突き上げ逸らす。
軌道を逸らした突きは、そのまま自分の態勢を崩すことにつながった。
「ぬるいわっ！」
源四郎は正拳突きの要領で右手を突き出し、それを高速で引き戻した。
体軸をずらし引き戻された腕、その〝肘〟が蝉丸の肩口を捉える。
……それは、変形の肘打ちであった。
「がっ⁉」
蝉丸はそのまま前のめりに突き進み倒れ……ない。
喰らった攻撃の勢いと自分の拳速に任せて、自分からその方向へ流れたのだ。
蝉丸はそのまま源四郎から間合いを取った。
「ふむ、正しいな」
源四郎は再び元の通り構えなおす。
「崩れた体をあえて戻さず、以って打撃の効果を半減させる。……及第点だ」
距離約四メートルが開き、蝉丸もまた態勢を取り戻していた。
やはり……と言えばよいか、いや、違う。
明らかにこの老人――とはとても思えないが――の実力は自分の予想を越えていた。
侮ったつもりも、奢っていたわけでもない。

だがあるのだ、こういうことは。
戦法を……変えよう。
「……強いな」
「それ由が取り柄なのでな」
蝉丸の目がぎらりと光る。
それは萎縮した子羊ではなく、獲物を狙う狼の目だった。
「(･∀･)ほえぇ……」
月代はすっかり傍観者と成り果てている。
一瞬の攻防が速過ぎた為、月代にはうまく理解できてはいなかった。
そう……、なにやら蝉丸が走っていって、そのまま源四郎の側をすり抜けていったような。
それくらいにしか思えなかった。
「(･∀･)……ん?」
キュッキュッと何かがこすれる音がする。
小さい、とても小さい音ではあるが、確実に耳に入る音。
これは……蝉丸?
蝉丸は静かにタンブリングしていた。
瞬時に全身のばねを開放し、最高速で動くための前準備である。
またもそれに対しての源四郎の姿勢は完全な硬直。
だがその間合いには不思議と死角というものが見出せない。
見出せないならば——。
ヒュウウウウウ……。
蝉丸は一つ、長く息を吸い込んだ。
爪先に、そして全身に力が込められる。
タンッッッ!
——自ら作るまでだ。
再び蝉丸が源四郎に迫る。
足並は忍者のごとく静かに、そして速い。
そこには、攻め手に窺えるはずの隙など微塵も感じられない。

狙いは、突き出すように構えられた源四郎の右腕。
先の先を取ろうとする蝉丸の攻撃は、いつも以上に速い。
ぶんっ！
脇を締め、空気を振るわす高速の一撃を放った。
この攻撃、返しを取ることは容易ではない。
だがその右突きは源四郎を捉えられない。
半歩、音も無く体芯をずらすことで、源四郎は見事その攻撃を避けて見せた。
さらにそこから、逆に必殺の右直突きを決めようとする。
ブウンッッ！
拳速拳圧ならば、明らかに源之助に分が合った。
しかしその一撃もまた外れる。
「ぬぅぅっ!?」
蝉丸は右溜めに体を沈め、源四郎の一撃をやり過ごした。
——できたぞ、途が。
全身の関節の溜めを一気に開放し、伸び上がるような左アッパーが放たれる。
びしぃぃっ!!
凄まじいスピードを伴った一撃が、とうとう源四郎の顎を捉えた。
「(・∀・)やった！」
月代の傑出した感覚は、徐々に二人の戦いを捉えていく。
蝉丸の一撃が当たったということを単純に喜ぶ月代。
だが、闘いはまだ始まったばかりに過ぎないのだ。

## 437　丘の上の遭遇

小高い丘の上。
ブロロロロ……プシュウッ……。
今まで勢いよく走っていた単車がゆっくりと速度を落とす。

「おい、降りろ」
ドスのきいた男の声。
「な、なに？　え、エンスト？」
「下僕は知らんくせにそんな言葉は知ってんのか……」
「と、とーぜんじゃない♪　わたしはくぃーんなんだから！」
御堂のたっぷりと皮肉が込められた返事は空振りに終わった。
「はあ……まあぃぃけどよ……とにかく降りろ。こっからは歩きだ」
単純に、ここからは徒歩の移動でないとまずい。
暗号に記されたもうひとつの拠点は、すぐそこなのだから。
下手に音を立てて気づかれてはかなわない。
「ここからは爆音鳴らして走ると都合が悪いんだよ……確実に狙われるぜぇ」
「……それならここまでもやばかったんじゃないの？」
ある意味的を射た疑問。もっともだ。
もしゲームに乗った奴に見つかったら狙撃されていたかもしれない。
「ふん、俺は最強の火戰体だぜ。よけるのぐらい簡単だ。いくら単車に乗ってるからって、俺様に狙撃なんぞ効くかよ……」
たとえ岩切や蝉丸であっても猛スピードの単車を自在に操る御堂を狙撃するなど不可能だ。
「だったら乗っててってもいいんじゃないの？」
「ここからは確実に狙撃されんだよ。されると分かってて撃たれる馬鹿はいねぇ」
「あそこだ……あそこにいるぜ。恐らくうじゃうじゃな」
丘のはるか眼前に見える小さな岩山。
「て、てき……？」
「そうだな……敵の親玉さんがいるかどうかは知らねぇがよ……敵のアジトがあそこのどこかに隠され

てんだよ」
「つーか、何で誰にも会わねえんだ？　坂神もほかの奴らもどこにいるんだか……」
「あんたが爆音とどろかせて爆走（はし）ってるからじゃないの？　わたしだったらそんな音に近づかないけど」
「……ちっ」
「あたま悪いように見えても本当は悪くないんじゃ……なんて思ったけどやっぱりバカね」
（このアマ……おめぇにだけは言われたくねぇんだよ！）
「そ、そんな恐い顔したって無駄よ！　わたしには『ぽち』が……」
「……それ、ハッタリだろ？」
　当初すっかりだまされていた御堂だったが、これだけ一緒に行動すれば現代の知識が低い御堂でもさすがに気づいていた。
「な、なに言ってんのよ！　そ、そんなわけ……！」
「はあ……」
　ヤキが回ったものだ。御堂は思う。
　一体どこからケチがつき始めていたのだろうか。
（そもそもこの猫を殺らなかった時からだろうな）
　熱のこもった暖かい単車のシートの上ですやすやと眠る猫と毛玉を睨む。
「はあ……」
　再び溜め息。
　羽根をつけた臆病な少女、そして今も同行している足手まといの少女。
（なんで殺してねぇんだろうな、俺様は）
　かつての御堂であれば躊躇せずに殺していたはずだ。その二人の少女なら簡単に殺せる。
（いつでも殺せる……だから生かしたってのか？前の俺なら考えられねぇぜ）
　この島に来てから女難、水難の連続だ。
　ボリボリ……御堂は情けなさそうに頭を掻いた。
「わっ、ばっちいっ！　フケが飛ぶからやめてっ!!」

「フケなんかあるか、このアマ！」
「しかし……いかな俺でも、さすがに一人で突っ込む気にはなれねぇな」
「さっきは突っ込んだくせに」
「うるせぇ」
さっきのほったて小屋のような場所とワケが違う。なにせその規模すらも分からないのだ。
拠点は一人で突入するとかなりヤバイ気がする。ただの勘だ。だが、こと戦闘に関しての勘にはかなり自信がある。
「巧妙に隠された入り口だ、どこかにつながってると考える方が自然だろ？」
もしかしたらこの岩山の下には地下通路が広がっているかもしれない。
（もしそうなら入り口は一つとは限らねぇな……）
まさかとは思うが、蝉丸あたりは既に突入している……なんて考えが頭に浮かんだ。

（いけ好かねぇ奴だが、そういった行動力は俺以上だからな……）
「でもさ、突っ込むの一人じゃないじゃない」
御堂の思考をさえぎるようにはさまれた言葉。
「あん？」
「わたしよ、わ・た・し！　わたしがいるじゃない」
「……はあ……っ」
御堂は今までで一番大きな溜め息をついた。
「あによ、したぼくのくせにその態度は！」
この女がついてくるならまだ一人で突入したほうがマシだと思える。
「分かってんのかおめぇ……死ぬぜ」
「……ぐっ……！」
その意味を、ゆっくりと確かめるように詠美がうなずく。
本能は正直、小さな呻き声が漏れた。
「分かってる……だけど……わたしは和樹や楓ちゃんの為にも……」

「だから……おめぇは確実に死ぬんだって。おめぇの願いは犬死することかぁ？」
別にこの女が死ぬのは知ったことじゃない。死ぬなら勝手に死ねばいい。
しかし、彼女が御堂の行動に殉じて殺されるのだけはなぜか見たくなかった。
（……こいつが死ぬのを考えるとなぜか寝覚めが悪いぜ……）
これもまた前までなら考えられなかった思考の一つだ。
「まあ、まだ突入しねぇからよ……俺も犬死はごめんだ――……っ!!」
その直後――御堂は詠美を片手で摘み上げると、単車の向こう側へと投げ捨てた。
「わわわっ……ちょっと何すんのよ！」
派手に転がった詠美が単車の向こう側から顔を出す――のを再び御堂が手で沈めた。
「ぐえっ……ちょっと！」
「動くんじゃねぇっ!!」
小声でそう叫びながら、単車の上の二匹の獣を詠美の方へと突き落とす。
「ぴ、ぴこっ！」
「……にゃうっ！」
「わわっ！　いきなりこの子達投げ捨てないで！」
「黙ってろ――。……誰だ、そこにいる奴は！」
後半はちょうど詠美を投げ捨てた逆側……小高い丘に生える木々の向こう側……
「出て来ないなら撃ち殺すぜ……」
デザートイーグルを林に向け、そう呟く。
「おやおや……恐いですねぇ……」
木の影から眼鏡をかけた中年の男が一人出てくる。そして、男に付き従うようにもう一人女が現れる。
「先程犬死はごめんだ、と言ってましたよね……残念です。――あなた方はここで犬死するんですよ」
眼鏡の向こうで、その眼光が妖しく光った。

## 438　夜明けの死闘　～一触即発～

「やけに自信満々じゃねぇか……」
　御堂が銃口を男の頭に定める。
「そうですね……とりあえず自己紹介しときましょうか。ＨＭシリーズというメイドロボを作った、来栖川ＨＭ開発部の主任、長瀬源五郎と申します。で、こっちがそのＨＭシリーズの量産型、ＨＭ―13型ですな」
　その声に答えるように、ＨＭ―13が軽く会釈をする。
「高槻という男……ご存知ですか？　あの男、偽者な上に無能でねぇ……本物の高槻はたいそう使える男だったのですが……」
「偽者だぁ？」
「ええそうです。奴等はクローンでしてね――いや、あいつら複数いるんですけどね。これも我々来栖川グループが造ったんですよ。いや本物そっくりに見えるけどやはりだめですな。本物には遠く及びませんでした。
　やはり、今の我々では思考回路の応用までの完全クローン化は無理ですな……ははは……」
　男が情けなさそうに笑う。
「このＨＭのようにロボットの感情を排除して造るならば可能なんですがね。ああそうだ、余談ですが、参加者の中にマルチ、セリオという二体の試作型が混じっていたんですよ。
　こいつらには――特にマルチですが――特別に感情を入れておいたんですが……やはり、こと戦場においては感情はマイナスなんですかねぇ……もう壊れてしまいましたね。
　……上もつらい命令を出してくれますよ。いくらバックアップをとっていると言っても、再び命を吹き込むのにどれだけのお金がかかることやら。
　もう借金地獄ですよ、ははは………はぁ……」

落胆したように呟く。
「おめぇ、何が言いてえんだ？　愚痴をこぼすために出てきたのか？」
御堂のトリガーにかけられた指に力がこもる。
「まあ、そうあせらないでくださいよ」
源五郎は武器を持っていないことを示すように、両手を広げアピールする。
「まあ、何が言いたいかというと、高槻が無能だったおかげで見ているだけにはいかなくなったんですよ。本来なら手を出したくはないんですけどねぇ。あなたは有望株ですし。
いや、闇の世界の娯楽としてこのゲームはトトカルチョも行われているんですが――もちろん、それ自体に意味はありませんけどね。
ただの余興みたいなものです。御堂さん、あなたかなり期待されてるみたいですよ。
柳川さんと岩切さんと安宅みやさん――の三人はすぐ死んでしまいましたが――それに坂神さん、御堂さん、そして水瀬秋子さん……このへんが本命クラスですよ。
特にあなたはいつでも笑って人を殺せる殺人マシーンとして期待されていたんですが……」
そう言って、単車の陰にいる詠美に冷たい視線を向ける。
「ひっ……！」
「と、まあ……あなたなら簡単に殺せそうな女がそこにいるわけですが……一つ質問です。どうしてその少女を生かしてるんですか？　それだけじゃない、あなたは、この島では誰一人として殺めていない……らしくないんじゃありませんか？」
値踏みするように御堂を見やる。
「……おめぇに言う義理はねえな」
ひょうひょうと御堂。だが、たとえ答える気があったとしても答えなんか出はしなかった。
「そうですか。では質問を変えましょうか……ここで我々は何をしていたと思います？　先ほどの放送

で言いましたよね、『一切の手出しをしないことを約束する。それを試みた場合は相応の処置をとらせてもらうのでそのつもりで』と」
「……つまり脱出を試みた俺達を殺そうってハラか？」
「違いますよ。言ってませんでしたが、脱出もまた一つの賭けの対象なんですよ。我々に被害が及ばない限り一切の手出しはしない……ということです。おかしいでしょう？　それならわざわざ自分からあなた方の所に出向いたりしませんよね、ははは……」
その笑い方は御堂を非常に不愉快にさせた。
「なら、こちらも質問してやる……何しに来やがった？」
銃口の向こうの男の目を睨みつける。
「言っとくが……ヘンな気は起こすなよ……俺はこの距離からはずさねぇぞ。なんせ、銃の腕はプロ級だからな」
横文字を使ってしまった。なんとなく現代社会に侵されている感じを覚え、御堂は吐き気を催す。
「知ってますよ御堂さん、あなたのプロフィールはあらかた調べ尽くしてますから。強化兵でなくても力強いその言葉。さすが賭けオッズトップクラスの男なだけありますよ、まったくもって恐れ入ります」
源五郎が頭を掻く。
「動くんじゃねぇ！　今度動けば撃つ」
「あなたがそう言うなら今度は撃たれるでしょうね……ところで煙草は吸いますか？　私も今ちょっと吸いたい気分なんです……言ったそばから悪いんですがちょっとだけ動きますよ」
「……」
男が火をつけて煙を吐く。御堂はいつでも撃てるようにしながら間合いを一歩広げる。
「まあ、それでですね……何しに来たか……でしたね？　ええ、分かってますよ。言った通り、脱出を

試みた場合本当に最後の最後まで手出しはしません。今あなた方に危害を加えるのは本来ルール違反なんです。ですが……」
男が煙を一気に吐き出した。
「触れてはならない領域があるってことですよ」
「つまり……その岩山に隠された施設に脱出……いや、ゲームを完全にぶち壊す鍵があるってことかい？」
「……」
男の余裕の笑みが消え、顔をしかめる。
「少々喋りすぎたみたいですな……失敗ですよ……お遊び程度に五つの鍵を入れてしまったことが、そもそもいけなかったのかもしれませんね」
それはＣＤ。詠美もまたそれを一枚持っているのだが、源五郎も御堂もそれを知らない。
詠美自身も、まさか自分がその鍵の一つを持っていることに気づかなかった。
「で……おめぇはここでゲームオーバーだな」
御堂が鼻を鳴らす。
「確かにここではまだ参加者は殺してねぇな。だがっ！」
御堂の気に、声に殺気がこもる。
「おめぇを殺るのに躊躇はしねぇぜ」
「……ああ、そうそう、もう一つ言い忘れてました」
源五郎はその威圧をさらりと受け流して答える。
「このＨＭ―13、量産型と言ってましたが……厳密には違うんですよ。サテライトサービスってご存知ですか？　通常のＨＭ―13シリーズであれば誰でも受けられる有用なシステムでしてねぇ……衛星を通して戦闘用プログラムをダウンロードすれば一気に一流の戦闘マシーンに早代わりなんです。いわゆる一つの即席ターミネーターですね……ですがねぇ……」
源五郎は落胆する。
「ここ……結界が張られていますよね……強化兵と

してのあなたもその力を発揮できない結界が」
「……」
　御堂は眉をひそめた。
「サテライトサービスも受けられないんですよ……通常のＨＭ—13シリーズ量産型はこの島ではただのよく動くメイドロボに変わってしまうんですよ……」
「……」
「こいつは少し改良加えていましてね……ボディの装甲はたとえ大砲の弾が当たっても破壊できない優れものです。戦闘用ボディとでも申しましょうか。それにね……ダウンロードではない、最初から組み込まれているプログラムがサテライトサービスでロードされる戦闘プログラムなんです……だから結界内部でもあなたと同等、あるいはそれ以上の動きを見せてくれますよ」
　そして、値踏みするように言い放った。
「それとですねぇ……坂神さんですが……もう駄目かもしれませんよ？」
「なんだと⁉　——坂神がどうしたって言うんだ？」
「今ごろ私の父さんが戦っているはずです……殺してしまったかもしれませんねぇ」
「……その前におめぇは死ねや！」
　源五郎の言葉が終わるか終わらないかの内に、御堂の弾丸が火を吹いた。
　ガイィン！
　脳漿が弾け飛ぶ音ではなく、金属音が響く。
「……」
　ＨＭ—13の手が、源五郎の頭に届く前に手でそれをさえぎっていた。
　その手には傷一つない。
（おいおい、マジかよ……）
　普通なら貫通して男の頭を直撃していたはずだ。
　御堂は一歩後退した。
「いくぞてめぇら！」

一気に反転、詠美を腕に抱き、単車を走らせる。
「ちょ、ちょっ――――！」
ことの成り行きを震えながら見ていた詠美は叫ぶ――が、エンジン音にかき消された。
単車を反転させながら猫と毛玉の尻尾を同時につかむ。
「やれ」
「はい……」
源五郎の言葉に合わせるようにぱっとＨＭの手の中に銃が現れる。腕の内側にローラーがついており、いつでも体内から装備された銃を射出できるよう造られていた。
「目ぇつぶってろ！」
そう叫びながらその銃に一発！
「……！」
ＨＭの持っていた銃が一瞬にして弾き飛ばされる。
「目標捕捉」
しかし、ＨＭが無手だったのも一瞬。
再び射出された銃が手の中に現れる。
その一瞬で御堂達を乗せた単車は一気に二人の間を走り抜けた。
「……追いますか？」
「ああ、男だけでいい。女は放っておけ、地獄の果てまでも追い詰めて――殺せ」
「了解しました」

## 439　夜明けの死闘　〜超高速の死闘〜

「ぴ、ぴこ〜！」
「ふにゃあ〜〜！」
尻尾を強くつかまれた二匹の悲鳴が風に乗って後方へと飛んでいく。
「げっ！　追ってくるぜ……」
サイドミラーに小さく映る人の影。
足の裏から車輪を射出し、単車のスピードについてくるＨＭ―13。

「ろぼっとってのはなんでもアリだな……」
御堂が左へと単車を傾けた。
チュイン!!
恐るべき速度で御堂のすぐ右を弾丸が通りぬけた。
「おい、詠美！　死にたくなかったら丸くなってじっとしてろ！　この畜生共も持っておけ!!」
御堂はこの時初めて動物を預け、詠美を名前で呼んだ。
詠美に二体の動物を預け、身軽になった御堂はさらにアクセルを踏み込んだ。
「ひゃっほ〜〜〜う！」
曲がりくねる山道を左右に揺れながらトップスピードで走り抜ける。だが、そんな単車をいくつもの弾丸の嵐が十倍以上のスピードで追い越していく。
「ちっ！　逃げ回るのは性に合わねぇぜ！」
やがて開けた前方……道がなかった。
「ちょっと……崖！　崖!!」
詠美が前方を指差して悲鳴を上げる。
「動くなって言っただろ！　……飛ぶぜ」
「えっ！　ちょっと!!」
前輪が浮かぶ感覚。
ウィリーさせて一気に崖へと突っ込む。
「し、死ぬ！　しぬって〜〜」
「ここで止まった方が確実に死ぬんだ……よおっ!!」
きれいに車体が放物線を描いた——
一瞬の浮遊感。詠美はその自分の感情までもが宙に浮かんでいく感触がした。
そしてややあって後輪に衝撃。
「大成功だぜ！」
約十メートルの幅の崖を一気に飛び越え、歓喜の声をあげる——が。
「げっ！　ほんとにすげぇろぼっとだぜぇ……あの男に余裕があったのもうなずけらぁ」
ミラーに宙を舞うＨＭの影が映った。
チュイン——！
崖を飛んだ後もなお走りつづける単車へ飛んでくる弾丸の嵐。

「けっ！」
アクセルをさらに開けながらまだ空中にいるＨＭ—13を狙い撃つ！
ガイーン!!
見事に胸部へと二発ヒットしたが、まったくダメージを与えられない。
ロボはそのまま着地し、さらにスピードを上げて追ってくる。
「まともに当たったたってのにガイーン……だってよ。このままじゃジリ貧だなぁ、おい」
「ど、同意求められてもこまるわよ！」
その会話はすごい勢いで流れる景色と共に消えていく。
カシーン！
弾丸が切れたのか、銃を捨て、また新たに銃を手に装填するＨＭの姿がミラー越しに見える。
「弾丸装填じゃなくて銃装填かよ……現代科学ってのはすげぇな」
「か、感心してる場合じゃないでしょぉ！」
御堂の服を詠美が強く握り締める。
「まあ、そう言うな……って！」
さらに襲いくる弾丸をかわしながら、今度は地面に弾丸を撃ちこむ！
ガァーーン！
弾かれた石が無数に地面に散らばった。
「………!!」
その石に車輪を取られ、ＨＭがぐらつく。
「あばよ!!」
さらにその脳天へと弾丸を撃ちこんだ。
「……」
ＨＭの上体が後方へ大きくぐらついた。
そんなＨＭの姿が景色と共にミラーから消えていった。若干余裕が出てきたのか、詠美が落ち着いて呟く。
「あんたって……すごいのね……倒したの？」
「いや……あんぐらいで参るろぼっとなら苦労はし

ねぇ……」
「でも……まいたんだよね？」
「いや……追ってくるぜ、きっとな……」
「ふみゅ〜ん……そんなぁ〜」
涙声になる詠美を無視して前方を見据える。
「ほうら、おいでなすったぜ、どうあっても俺と決着つけたいらしいぜ……」
前方から猛スピードで突っ込んでくる影。
どのようなルートを通ったかは知らないが、前方へ先回りしたＨＭがこちらへ向かってくる。
チュイン！
今度は前方からすれ違う弾丸。
「ちっ！　どうせ戦うなら人間がやりやすいんだよ!!」
右へ単車を一気に傾け、それをやり過ごしながら、一発、二発!!　その二発は双方の腕に装備されていたＨＭの銃を再び弾き飛ばした。
新たな銃がＨＭの体から射出されるまで約二秒

——その一瞬に御堂は賭けた。
「また飛ぶぜ！　目ぇつぶってしっかり俺様に掴まってろ!!」
「えっ!?」
再びウィリーさせ、ＨＭの眼前までせまる——!!
「おらよ、プレゼントだ！　受け取りなぁ!!」
御堂は詠美をしっかり抱えると、単車の背を蹴って宙に飛んだ——！
「——！　回避不能——!!」
ＨＭの言葉が風とエンジン音にまぎれて消えた。
「死ね！」
器用に空中から単車のタンクに弾丸を二発撃ちこんだ。
「——!!」
ＨＭと単車が接触する瞬間、弾丸がタンクを撃ちぬき、大爆発を引き起こした。
「うおおっ!?」
「きゃぁっ！」

「ぴこぴこ～～！」
「にゃう～！」
その爆風がさらに空中の御堂と詠美を吹き飛ばした。
「詠美！　体丸めてじっとしてろ！」
御堂はそのままぐるりと器用に回転して草むらへと突っ込んだ。
「ぐぅっ！」
胸に詠美を抱きながら、そのまま転がってショックを吸収する。いかにうまく着地したとはいえ、猛スピードで爆走（はし）る単車から飛び降りた衝撃は御堂をかなり痛めつけた。
「はあ、はあ……い、生きてるの!?」
「そ、そうみてぇだな……久しぶりにスリルあったぜぇ……」
「た、倒したの!?」
「さすがに無事じゃねぇだろ……だがまだ確認したわけじゃねぇ……動くなよ」
爆発し、燃えさかる単車の方を見つめ、御堂はぎょっとなった。
「目標捕捉——発射！」
ドン！　ドン!!
「がっ……！」
御堂の左胸に、正確に二発弾丸が撃ちこまれた。
「あ……っ……」
詠美はそのまま倒れゆく御堂を、何が起きたか分からないように見つめることしかできなかった。

## 440　夜明けの死闘　～結末～

「あ……あ……」
詠美の目の前で膝から力なく倒れる御堂。
「——任務完了——ただいまより帰還します」
HM—13の衣服はすでに燃えつき、中に着ていた白いスウェットスーツのようなものがむきだしになっていた。

そのスーツもすでに黒焦げて見る影もない。
だが、恐るべきはその装甲か、あの爆発の中でもほとんどボディ自体は無傷だった。
半ば放心している詠美を一度見やり、そのまま御堂達が元来た方へと去っていく。
「う、う………うぁ〜〜〜！」
詠美はＨＭの後姿に向かってがむしゃらに走った。
「なんで、どうして⁉　よくも……よくも――――！」
ＨＭを後ろから羽交い締めにして投げ飛ばす。
「――敵とみなし、排除します――」
「うあああっ！」
詠美はそのまま転がったＨＭに馬乗りになって、顔面を殴りつける。
ガン！
「どうして⁉　どうして殺すの⁉　なんで⁉」
ＨＭの顔面の素材は硬く、ただ詠美の拳を傷つけるだけでしかなかった。
それでも詠美は構わずに殴りつづける。

「――目標捕捉――」
ＨＭは気にした風もなく、ゆっくりと銃を装填させると、詠美に銃口を向けた。
「うあっ！」
涙が、拳からの血があたり一面に舞う。
が、ＨＭ―13は気にした風もなく。
ガーーン！
そして、無情にも銃口が引かれた。
「ぴこ〜っ！」
毛玉――ポテトの勢いをつけた体当たりがＨＭの腕に命中し、放たれた弾丸は詠美の脇へとそれる。
「――！」
ＨＭは無表情のまま、今度はポテトに向けもう片腕の銃で引き金を引いた。
「にゃーーう！」
その瞬間、次は猫――ぴろがＨＭの顔面を覆い隠す。
そしてまた狙いが逸れる。

「……!!」
ＨＭはへばりついたぴろをひきはがすとポテトへと叩きつける。
「ふぎゃっ！」
「びごっ！」
二匹は絡み合いながら地面を転がっていく。
同時に、今度は詠美を力任せに弾き飛ばしながら立ち上がる。
「あうっ……！」
詠美もまた地面に転がる。その時手に触れたもの。
ポテトが体当たりしたときに弾き飛ばされた拳銃。
「うあぁっ！」
半ば狂乱しながらそれを奪い取ると、ＨＭに向けて引き金を引いた。
ガイーンガイーンガイーン！
連続しての金属音。
五、六発は撃っただろうか。
その後は、詠美がいくら引き金を引いてもカチッ

カチッ……というスイッチ音が響くだけでしかなかった。
「ひっ……」
ＨＭ―13が再び詠美の頭に銃口を向けた。
ドン！
銃声が一発響いた。
ジ……ジジジ……ッ!!
スパークが巻き起こる。
詠美には何が起こったのか分からなかった。
奇妙な機械音を発しながらＨＭが右眼を押さえて呻いた。
「任……ム……スススイイイ行シマス……」
よろよろと右側へと体を向け、銃口を構える。
そこには死んだはずだった御堂が銃を構え立っていた。その左胸からはうっすらと血が滲んで服を濡らしている。
ドン！　ドン!!
すでに捕捉機能が破壊されたのか、あらぬ方向へ

と弾丸を飛ばしながら御堂へと近づく。
「自慢のボディとやらは傷つかなくても、目ん玉はやわらけぇままだったみてえだな」
「目標……捕捉失敗……」
HMが感情のない機械であるにもかかわらず信じられないと言ったような目を向けた。
「弱点さえ分かれば簡単だ……言ったろ？　銃の腕はプロ級だってな……」
再び弾を装填し、御堂が銃を構えた。
ほとんど執念のようにHMが御堂へと走り寄る。
「任務……ススイ行シマス！」
「くたばりな、化け物！」
ドン！
ただ一発だけ放たれた銃弾が正確にHMの左眼を撃ちぬき——！
ボン！　……ジジジ……シュウ……
意外に小さな爆発と共に頭部が弾け飛び——そのまま倒れ動かなくなった。
「けっ……まあ、苦戦はしたがなんとかなったようだな」
そう、倒れて動かないHMに吐き捨てる。
それから、よろめきつつもゆっくりと御堂は詠美へと近づいた。
「おい、無事か？」
「い、いちおう……って、どうして生きてるのよぅ！」
安心したように顔にしわを寄せ、詠美は泣き出した。
「単車で逃げてる間、念の為こいつを胸にくくりつけて置いたんだよ。さすがに無傷とはいかねぇし、衝撃で一瞬気絶しちまったが……なんとか命だけは助かったみてぇだな」
穴の開いた桜井あさひの描かれたバインダーを詠美の前へと放る。皮肉にも、描かれたあさひの心臓部分に穴が開き、血が付着している。
まるであさひが身代わりになったかのように。

「はからずも本当のお守りになっちまったようだな」
御堂の胸には浅く傷がついていたが、出血はほとんどなかった。
「あのろぼっとは位置の捕捉はできても生死の判定はできなかったらしいな……もし、それができてたら負けてたのは俺様だったかもしれねぇ」
「ううう……」
未だすすり泣く詠美を片手で担ぎ、また寝ている――というか気絶している――二匹の獣をひょいと持ち上げる。
「人が寝てる間になんか活躍してたじゃねぇか。大した武器だぜこいつらは……感謝しとけよ、おめぇを守った騎士様なんだからよ」
からかうように――あるいは皮肉か――詠美の腕に二匹を抱かせる。
「ふみゅん……」
その拳からはまだ真新しい血が滴っていた。

(ちっ、一度休憩してやるか、俺も単車から飛び降りたダメージがかなりあるしな……くそおもしろくもねぇ……)
詠美に……というよりも自分の行動に腹立たせながら安全そうな雑木林へと入っていった。
(そういやあの源五郎とかいう奴が、坂神がどうこう……とか言ってたな……まあ、こんな島で朽ちるタマじゃねぇがよ……俺以外の奴に殺られんじゃねぇぞ)
御堂が単車で去り、HM―13がそれを追ってから約五分。
「HM―13……任務失敗、破壊サレマシタ」
御堂と対峙した小高い丘で煙草を吸っていた源五郎の元にやってきた小柄な少女。
それはマルチに非常によく似ていた。
「そうか……うーん、勝てると思ったんだけどねぇ……」
もう一体の戦闘用HM。HM―12は遠くで起こっ

た事態を告げる。
「まいったなぁ……あの装甲高いんだよね……キミとアレの二体を造るのにどれだけお金がかかったか……」
だが、その顔はいつも通りに……何事もなかったかのように涼しい顔。
「源之助さんに怒られそうだねぇ……ＨＭ―12、キミはいつ奴が来てもいいように秘密通路の警備に当たってくれ」
「ドノ通路デショウカ……」
「うん、御堂が知ってるのはその岩山だけだからね」
源五郎が再び紫煙を吐き出した。
「とりあえずその岩山からマザーコンピューターへ続く通路を守備しといてくれ。ぶっちゃけた話、それさえ無事なら例え百人全員に逃げ出されたとしても問題ないからねぇ」
「カシコマリマシタ」
ＨＭが会釈し、岩山の向こうへと消えていく。
「ふう……やっぱり訓練された人間のほうが戦闘プログラムより優れているのかねぇ……」
自嘲気味に笑う源五郎だけがその場に残された。

## 441　校舎という名の墓場

ああ、耕一？　梓だよ、梓。
ロクに話もせずに別れちゃって、済まなかったね。
偽善者な――じゃないよ、この場合は意地っ張りな、だね。
そんな千鶴姉がさ。
物事が理想通りに進まないのを自分のせいにして、相変わらずあんたに相談もせず飛び出しちゃったわけよ。顔向けできない、とか思ってるんだろうね。バカだよねえ。
あたしたちが言えた立場じゃないけど。
そんな意地っ張りな千鶴姉に代わって、あたしが

解説するよ。
　とにかく初音と楓を捜そうってんでさ。まず初音が行方不明になった学校に向かってたんだ。放送に名前が出ない限り必ず会えるさ、とか楽天的なこと言ってね。

「……それにしてもさ。何であいつら、誰が死んだとか判るんだろ？」
「きっとね、お空から見てるんだよ！　映画とかでやってたもん！」
　あゆが空を見上げる。つられてあたしも。
「……でもさ、そしたら林の中とか建物の中で死んだら判らな……」
「あ……うぐぅ……」
　これから行こうとする建物の中で死んだ少女の事を思い出し、なんだか二人して暗い気分になってしまう。ついでに空から監視って案も没になり、消沈する。

「彼らは位置も、掴んでるみたいなのよ」
　聞いてなかったようで聞いていたらしい千鶴姉が発言する。
　高槻に会った時のこと。間違いなく、千鶴姉を目的に捜していたと思われる、高槻の言動のこと。
　……この島で希望どおりの人物に難なく出会えるのは、確かに不自然だ。
「そうなると、何かでモニタリングしてるとしか思えないのよね」
　結論は、そういう事らしい。
「でも、何かって？」
「ボク、わかったよっ！」
　はいはいはい、と手を上げるあゆ。発言を許すあたし。
「発信機だよっ！　マンガとかでやってたもん！」
「そんなもんどこに……」
　言い返そうとしたあたしに向かって、苦笑しながらお腹を押さえる千鶴姉。

……そうだ、これがあった。お腹の中に、物騒な奴が。
苦りきった顔で、三人して腹を押さえる。
「たぶん、発信機も兼ねてるのよ。胃内pHか体温か、心音を感知して随時送信してるんでしょうね」
「ペーはー？」
「……ってなんだっけ？」
あゆと二人で首をかしげる。
苦笑して説明しようとする千鶴姉は、口を開きかけてもう一度考え、首を振る。
「pHと温度は、恐らくこの際関係ないわね……食事は問題ないし、死亡してから変化するのに時間がかかり過ぎるわ」
「ふーん。じゃ心音を感知して送ってるの？」
たぶんね、と答える千鶴姉に質問を重ねる。
「でもさ、どうして胃の中だって思うの？」
「最初の方の放送で言ってたでしょ。吐いたらドカンって。ようするに爆弾は、少なくとも吐ける位置にあるのよ」
ふーん、と解ったような解らないような気分で、感心する。
「吐くと心音が感知できなくなるから、それでドカンってこと？」
「だめだよっ！　それだと死んじゃったらみんなバクハツしちゃうよっ！」
あゆが結構怖いことを言う……が、確かにそのとおり。
それを受けて、千鶴姉が考えながら答える。
「うーん……生死判定と、吐いたか吐かないかは別なんでしょうね」
「そんなの見分けつくの？　死体と体外の区別をつけるって事でしょ？」
「そうね——」
高槻が、つまらなそうに画面を見ている。

一番モニターには、現在最も成績の良い、四十三番里村茜が映っている。他の人物達も各モニターに映っているが、百個のモニターがあるわけではないので、常に全員を監視している訳ではない。
発信機とシンクロさせて、人物が確認される位置をロボットが拡大、各々の行動を追跡し映すかどうかを決定しているのだ。発信機が重なり合う場所――人が殺しあう可能性が高い箇所が、優先的にモニターに表示される。
「そっちはどうだぁ？」
くるりと椅子を回し、レーダーを監視する来栖川のロボットに尋ねる。
「三番、五番、九番、十一番、二十一番……」
「ああ、今モニターに出てる連中の確認はいい。出てないのはどうだ？」
「一番、四十六番と林道を移動中。次に一秒以上モニターされることは最低十分後ですが、画面に出しますか？」
「相沢と……四十六番は椎名か。まあチラチラ画面見ても仕方が無いからな。他の誰かと遭遇しない限り、映さなくてかまわん」
「了解。十七番、二十番、六十一番、まもなく林道を抜け校舎裏門に到達します。モニターに表示いたしますか？」
「柏木長女と次女に、月宮か……裏門は映るよな？林を抜けたら三番に映せ」
「了解。二十九番、九十四番、家屋内にて停止中。モニターに表示いたしますか？」
「あーそいつらか――」
全設定を更新し（更新するのはロボットなのだが）、だらしなく椅子にかける高槻。そのまま首だけ捻って後ろに控えるロボットに尋ねる。
「そろそろ放送だな。……今何人だ？」
「はい、十三人です」
「おっ、新記録じゃないか？　だがまだまだぬるいなー」

おもしろき、こともなき世をおもしろく。
高槻はちょっとだけ嬉しそうに、マイクを手にとった。

そんなふうに、お腹の爆弾の話をしてるときにさ。放送が——あったんだ。
それで何がおこったか、耕一には大体解るよな？　あたしは語彙が少ないからなんとも良い台詞は言えないんだけど。悲しいっていうより、全然会えなかったのが……悔しかったかな。
この服だって千鶴姉はともかく、あたしよりも楓のほうが似合うと思うんだよね。
姉妹全員揃って、また楽しく騒げたらどんなにいいかと思ってたけど。もう、駄目なんだなって思ったらガックリきたよ。
でさ……あたしもそれなりだったけど、千鶴姉は……そりゃ凄かったんだよ。空気が冷えて来てたのが判ったからね。ひょっとしたら、重みも増してたかもしれない。
なにしろ千鶴姉は楓に一回会えてたみたいなんだけど……ひと悶着あったみたいでさ。それが余計に堪えたんだろうね。
耕一も鬼になっちまったことがあるって言ってただろ？　あのまま放って置いたら、多分なってたよアレは。
あゆと二人がかりで止めてさ。
うん、正直おっかなかったけどね。
……でも、止められた。三人で来て、ホント良かったと思ったよ。
え？　何言ったかは覚えてないよ。
恥ずかしいから、あんまり聞くなよな。
あー……とにかく、だ。
大変は大変だったけど、なんとか収まりがついてさ。収まりって言っても最悪の事態が避けられただ

けなんだけど。
どうにかこうにか、学校に着いたんだよ。
すぐ近くなのに、随分時間がかかったんだよね。
そん時に、次の放送が入ったんだな。
学校のスピーカー全部から聞こえたから、そらもうはっきり聞こえたよ。
それ聞いたらさ。
今までうなだれてた千鶴姉が突然――いや、今思うと長らく考えた後なんだろうけど。兎に角、走り出したんだよね。どこへ行ったと思う？　ぐるっと校舎を回るとね。外に死体があるんだよ。誰だか知らないけど。
もう、だいぶ酷いことになってる死体に向かって一回だけ手を合わせてさ。千鶴姉は爪を立てたんだ。腹のあたり。ざくざくとね。
止めようと思って駆け寄ろうとすると、来るなって言うんだ。
実際、狂ったかと思ったね。
んでさ。何かを、掴んで投げたんだ。
……どうなったかって？
なんにも。
なにも、起こらなかったんだよ。

先ほどまで高槻が座っていた椅子に、ひとりの男が腰かける。並んで入ってきたもう一人が、横に立つ。
「で？　どうすればいいんだ？」
「ロボットがレーダー見て追跡してるから、面白そうなところを大写しにしてもらって、死人が出たら主催者達に報告すりゃいいんだろ？」
「ふーん」
「これが画像モニターだろ。あっちがレーダーで、あっちが心音モニターだ」
「……全然動いてないの、多くないか？」

「そりゃお前。仏さんの心臓は動かないだろ」
「うわ、結構死んでるんだな……だいたいは女子供ばっかだろ？　人間やればできるもんなんだなあ」
「お前が言えた立場かよ」
不謹慎に笑う二人に、声がかかる。
「二十番、校舎内に移動しました。続いて十七番、六十一番校舎内に移動します。モニターを中止しますか？」
「あん？」
「ああ、建物入ると見えないだろ。中で揉め事あっても面白味はないんだよな」
「なるほどね。いーよ、出てくるか誰か接近するまで表示を消しといて」
「了解」
しばらくして、今度は心音モニター側のロボットが口を開く。
「二十番、沈黙しました」
思った以上にたいくつな仕事だったことに気が付き、だれていた二人が目を見開く。振り向けば二十番と書かれた心音モニターに、横線が流れている。
「お？」
「おおー……でも校舎内だぜ、勿体無い」
「これで校舎内の死体は、四つになったなあ」
「怖い怖い」
おどける二人に、再度声がかかる。
「十七番、六十一番沈黙しました」
続けて二本が波形を収めて横線になる。
「おいおいおい、なんだよ相打ちかあ？」
「十七番と二十番って姉妹だろ？　二十番なんか結構成績良かったみたいなのになあ。六十一番ってどんな奴よ？」
聞かれて、立っているほうがパラパラと名簿を確認する。
「んー……こんな、奴だ」
「……」
「……」

「見かけで判断しちゃ、いけねえな」
「そう、だな」

**十七番　柏木梓　死亡**
**二十番　柏木千鶴　死亡**
**六十一番　月宮あゆ　死亡**

## 442　監視外の出来事

――ジャーーーー――
――ジャブジャブ――

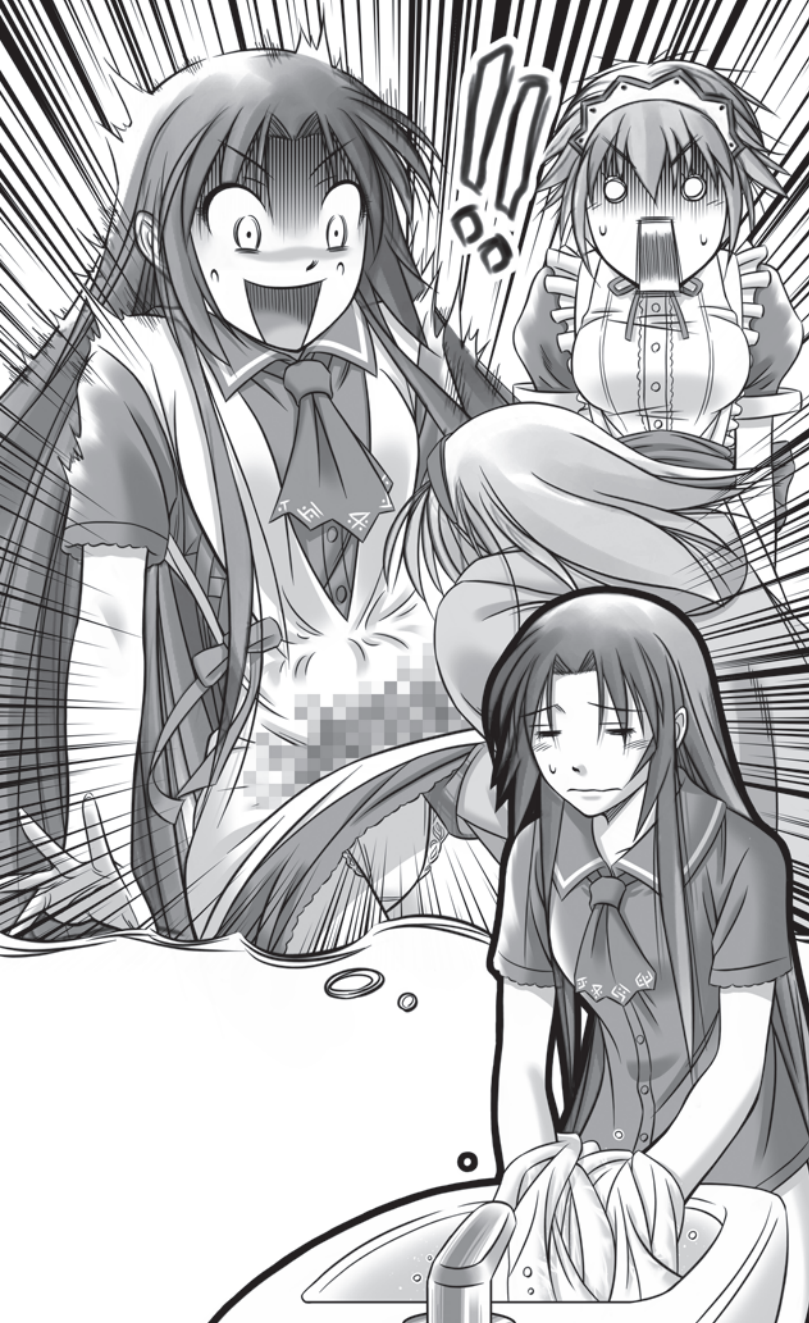
「ふぅ…」
千鶴はメイド服のスカートを脱ぎ、トイレの流しでそれを洗っていた。
「うう……」
こめかみに指をあて、うめいてみる。
フェイントだった。

予測不可能だった。
かわす術がなかった。
しっかりと握られていたのだから。
つい目の前にある布で受け止めてしまった。
多分そんなところ。
ジャブジャブ
なんだか情けなくなってきた。

――「う〜。できないよ〜」
――「千鶴姉、どうする？」
――「仕方ないわね」
――千鶴の指があゆの口の中に入れられる。
――ぐりぐり
――「うひゃにゃ〜」
――ぐりぐり
――「うにょにゃ〜」
――ぐりぐり
――「うぐにゅ〜」

「千鶴姉～。まだぁ？」
――「……。仕方ないわね。保健室で胃洗浄の薬でも探してもう一度……」
――「わっわっ、うぐぅ」
――ぎゅっ
――「ぎゅ？」
――千鶴のスカートを風呂敷のように広げるあゆの手。
――（まさか……）
――「ちょ、出すなら地面に……」
――『あ』
――流石姉妹。ハモった。
（あああ……思い出しただけで!!）
スカートが雑巾のようにきつく絞られる。
とりあえず死者の体で爆弾を体外に出す実験をした。爆発は起こらなかった。
自分が率先して吐き出した。爆発は起こらなかった。
そして二人の爆弾も体外に出せたわけだから、（放送まで確証は持てないものの）おそらく相打ちで死亡したと思われただろう。
これからは隠密行動ができるかもしれない。
しかしその代償にこれとは……。実害が少ないだけにかなり頭に来る。
「ち……千鶴姉……」
千鶴の背後から梓の声。
「そんな怒らなくてもさ～」
「んふふふふ。そうよね～。仕方ないわよね～」
顔は笑っている。にこやかだ。でも圧力が違う……。
「わたしの心の平穏のために！　殴られて！　梓！」
「なんで!?」
――ボカ！――
「なんであたしが殴られなくちゃいけないんだ

よ!!」

――バキャ!!――

二人の乱闘が続く……。

## 443　そらのきおく

女の子が、涙を流している。長いかざりばねがとてもきれいな子。あれはヒトの女の子だ。さっき、動かなくなったのも女の子。ぼくとからだの色が一緒で、ぼくと一緒だったのがヒトの男。

男と女の子が寄り添って泣いているのを見ながら、ぼくはいろいろ考えていた。

ぼくはカラスだ。カラスは、鳥だ。そして女の子は、鳥じゃない。ヒトの女の子。たしか、お母さんがそう教えてくれた気がする。お母さん。あたたかくて、いいにおいがするもの。いつも傍にいてくれるもの。

でも、今はいない。どうしていないんだろう。

ぼくは、なぜひとりでこんなところにいるのだろう。

頭が……痛む。痛いのはいやなので、ぼくはそれ以上は考えないようにした。

とことこ。

ぼくは男と女の子の側に歩いてみる。二人ともぼくには気づかないみたいだ。ぼくは気づいてもらおうと、ばっさばっさと羽を広げてみたがやっぱり気づいてくれなかった。

あきらめて、この二人を眺めることにする。

女の子が、涙を流している。その涙をぼくはどこかで見た気がした。

みすず。

そう、ぼくはこの女の子のことを知っていた気がする。

また、頭が痛み出した。でも、今度はそれでも考えることにした。それはきっと大切なことだと思っ

たから。ぼくは、どうして彼女を見ると懐かしい気持ちになるのだろう、と。
そして。
ぼくは、どうして彼女を見るとこんなにも悲しい気持ちになるのだろう、と。
ふいに。ひとつの風景がぼくの頭をよぎる。
女の子がいる。男もいる。他のなにかもいる。
——そして、赤い色が見えた。それはとても悲しい風景。なぜかぼくは、そんな気がした。

## 444　昂揚の瞬間

——決まった。
蝉丸は攻撃の反動を利用してスッと後退した。
ぼうっとしてはいられない。
一発入ったとはいえ相手が相手。
今この瞬間にも反撃が来る可能性を否定できない。
顎を打ちつけられた源四郎は、一瞬その姿勢のまま硬直していた。
だがすぐに顎を引き、口からペッと血を吐き出した。
「良いな……。同じ轍を踏まぬどころか、さらにその上を行く攻撃を見せてくれおる。やはり、私の目に狂いは無かった……」
口元を拭いながら源四郎はそう言った。
その口調は、そこはかとなく嬉しそうに見えた。
蝉丸は油断無く構えている。
「……だがその拳、果たして私を打ち倒すに至るか？」
「何？」
言うが早いか、源四郎が蝉丸の視界から消える。
蝉丸は視線を空に向けた。
太陽の光を遮り、黒い影が迫る。
音も無く、助走も無く、源四郎の巨体が宙を飛んだのだ。
「むぅん！」

約二メートルの高さの跳躍から放たれる跳び蹴り、その破壊力は推して知れよう。
「くっ」
蝉丸は両腕を胸の前で交差し、十字受けの形を取る。

——そこに、一瞬の葛藤。

俺はこの攻撃を受け止めるべきか？
あの巨体から繰り出される技、全てに十分な重さが乗っている。
……十中八九、防御しきれん。
それならばあえて寸前で回避し、大技の隙を後の先を取るがごとく撃つ。
その方が確実ではないか？

——その瞬末、蝉丸は決断した。

体を大きく右に開き、源四郎の跳び蹴りを避ける。
高角度の軌道であったその蹴りは、上下の体捌きでは避けさせてくれなかった。
「ふっ！」
回避の運動で生じた右回転の力を利用し、蝉丸は一気に後ろ回し蹴りを放った。
源四郎の背中はがら空き——。

「ぐはぁっっっ!!」
見事に後ろ回し蹴りが決まった。

——源四郎の左後ろ回しが。

「(・∀・)な、なんでぇっ!?」
月代には、蝉丸が吹き飛ばされることになるその死角が見えていなかった。
源四郎が着地した際の右足、それを軸に、上半身の回転を用いずに放った反対脚の蹴りは、たっぷり

と遠心力の乗った蝉丸のそれに勢いのよさで一歩譲るものの、技の発生の早さについては一歩勝っていた。
　頭部にヒットした蹴りが、蝉丸を体ごと吹き飛ばした。
「……ぐっ」
　源四郎に追撃してくる様子は見られない。
だがそれに乗じていつまでも寝ていられるほど、蝉丸は冗長な性質ではなかった。
　頭部への直撃によって、一時的に意識が朦朧とする。
　ふらつく視界の中に厳として立ち在る黒ずくめの執事が、蝉丸にはその体以上に大きな人間に見えた。
　一方の源四郎は、何事も無かったかのように、ずれた蝶ネクタイの位置直しをしている。
　やっていることはあまりにも普通で日常的なことなのだが、実際には高い森の中で殴り合いをした後に人を一人蹴り倒してからやっていることだ。

　だがそれでもなお老人にとっては、それすら日常のことに過ぎないと言わんばかりに周囲と妙に調和した仕草をしていると月代は感じた。
「……いつぞやの小僧を思い出すな。あれはもう死んでしまっていたか……。あの程度使えることなど当たり前のこと、早々に終わってくれるなよ。これでも私は期待してここにいるのだから」
　蝉丸の回復を待っているというのか、未だ源四郎に攻撃の意思は見られない。
　蝉丸は呼吸を早め、頭……意識を平常に保つことに努めた。
　あの一瞬に、老人は後ろ回し蹴りを後ろ回し蹴りで返すなどと言う芸当をやってのけた。
　力や技以上に、恐るべき闘いのセンスを持っている……。
　紛れも無く、この老人は天才だということが、骨身にしみて分かった。
　その口調、物腰から歴戦を生き延びた百戦錬磨

の猛者であることはうすうすながら窺えていたものの、この時代、この高齢でこれほどの手練れが活きているという事実は、蝉丸の認識を越えたものであった。
だが、それは必ずしも相手に対する恐れにつながるものではなく。
蝉丸は、それを知って昂揚していく自分を感じていた。
より強い相手と戦うこと、それはある種の人間には娯楽にも等しいことだった。
立ち上がり、再び構えを取る蝉丸。
それを確認した源四郎も、改めて構えを取る。
だがその構えは今までのような、長く体を開いた局部に溜めを作る、動性の少ないそれではなかった。
脇を締め、膝を柔らかく、スピードを乗せた動きが為されるよう考えられたものである。
一見すると、それは蝉丸の構えにも似ているような気がする。
とりもなおさず、それは源四郎が能動的な攻撃に移ることを示していた。
「先手後手の取り合いは、これで終い」
軽やかにステップを踏む源四郎。
月代の目に映ったそれは、蝉丸と同じくらいに機敏な動きに見えた。
「ここからが本当の斗いであると心得よ！」
「望むところだ！」
蝉丸の返事には、いつになく覇気がこもっていた。
「その意気や良し！」
その言葉を合図に、二人は同時に地を蹴った。
「うおおおおおおおお!!」
「ぬううううううううう!!」

パアアァァァァァアン!!

裂帛の気合と共に、拳と拳が激突する。
弾かれた大気が軋み音を上げる。

だがそれは不思議と痛々しい叫びではない。
むしろ空間それ自体すら、二人の気にあおられて昂揚しているようだった。

## 445　ここらで休憩タイム

雑木林をしばらく歩いていると、小さな凹みを見つけた。深さは一メートル弱、半径は三メートルほど、意外と広い。
「おい、ここで休むぞ」
「……うん」
先程までベソをかいていた詠美はすっかりテンションが下がってしまった。
何故ここを選んだのか……それは、こういう所の方が敵に発見されにくいからだ。
今の御堂では、一般人二〜三人が相手でも危うい状況だ。それは御堂本人が一番良く知っていた。そのため、あえて隠れることを選んだのだ。

ＨＭ―13の放った銃弾による攻撃は、桜井あさひのバインダーによって勢いを弱められたため、カスリ傷程度で済んだ。
だが、問題はバイクからの離脱の際に打ちつけた体であった。
（ちっ！　あばらが折れちまったか……普段ならとっくに完治しているんだが、こりゃ半日は休養しねえと治りそうもねぇな……）
己の体をかばうように、そっと地に腰を下ろす。
詠美も御堂に続き、ぺたんと座りこむ。
御堂の体内に潜む仙命樹は急ピッチで折れたあばらを治癒している。……しかし、遅すぎるのだ。
本来なら、三十分程で治る怪我……だが、この島に張り巡らされた結界の力が仙命樹の能力を大幅に抑制しているのだ。
「おい、手。どうした？」
御堂はふいに詠美の手の異常に気付いた。出血している。

「……へ？」
「血が出てるじゃねぇか」
「え？　……あ、うん。平気よ、こんなの」
「平気なら何で痛がってるんだ？」
「ぅ……」
「見せてみろ」
見ると、詠美の拳は皮が裂け、血がにじんでいた。見たところ骨や神経系には異常は無さそうだ。
「とりあえず水かけて傷口洗うぞ」
「あ、ちょっ――」
詠美が制止するよりも早く、御堂はボトルの水を両手の拳に盛大に浴びせた。
バシャバシャシャシャ……
「あ、痛ぅ……」
「ほら、この位我慢しろ」
最後に詠美のハンカチを包帯代わりに巻いて、さささやかな治療は終わった。
「そろそろ飯にでもするか」

御堂はそう言うと、詰め所から奪ってきたサケの缶詰を手に取り、同じく奪ったナイフで器用に缶を切る。
カコカコカコカコカコカコカコカコ……
「おっ、こりゃ丈夫なナイフだな」
ストライダーと呼ばれるそのナイフは、どうやら御堂に気に入られたようだ。
「あ、あのさ……」
「何だ？」
カコカコカコカコカコカコカコ……
「アンタって、一体何者なの？　きょーかへいだとか、かせんたいだとか……わけわかんない」
「元大日本帝國陸軍特殊歩兵部隊所属火戰躰壱号御堂だ」
「……ちょっとぉ、もっとカンタンに言いなさいよぉ……」
御堂は切り終えた二つの缶詰をコトリと地に置いた。

「今回はおめぇらも頑張ったからな、ご褒美だぞ。ホレ食え」
「にゃにゃにゃ♪」
「ぴこ！　ぴこぴこ♪」
御堂はサケをほおばる二匹の獣を撫でながら言った。
「……日本が戦争に負けたのは、知っているよな？」
「あ……うん。いちおー」
「その時、造られたのが俺たち、強化兵だ」
「え？　……造られた？」
「そうだ。……改造されたと、言った方が分かりやすいか？」
「アンタ……仮面ライダーの見過ぎじゃないの？」
「話しはもう終わりにするか……」
「ああっ！　待ってよ！　ジョーダンよ！……で？どんな風にカイゾーされたの？」
「体の中に小さな生き物を入れた。『仙命樹』という生き物だ」
「養命酒？　アンタじさま？」
「話はもう……」
「ウソウソ！　ジョーダンよ！　あ、あたしにも缶詰ちょーだい！」
「あいよ」
カコカコカコカコカコカコカコ……
「で？　その生き物って……スゴイの？」
「ああ、例えばこの傷、もう治っているだろ？」
御堂は胸の傷痕——が、あった部分を見せた。
「あ、ホントだ……」
「これが仙命樹の力の一つ『治癒能力』だ」
御堂は詠美に切った缶詰とフォークを渡す。詠美はハンカチが巻かれた手で受け取る。
「一つって……まだあるの？」
サケの切り身をフォークでつついて解しながら詠美が尋ねた。
「他にも各種能力の増強に不老不死の力も——」

「ふろうふし!?　死なないの!?」
「殺されればくたばる。……ただ、歳取ってくたばらねぇだけだ」
「ウソ……アンタ今いくつ？」
「俺が生まれたのが大正だから……七十は越えてるな」
「普通に年取ってんじゃない」
「テメェ、俺が老けてるとでも言いてぇのか？」
「ああっ！　ジョーダンよ！　……とりあえず、アンタがすごいのは分かったわ……でも、まだまだね……ふっふっふ」
コホンと詠美が咳払いをする。そしてポケットに手を突っ込み――
「ぱんぱかぱーん♪　見て見て！　これがさいしんぎじゅつをくしして作られた『ぽち』よっ！」
「それ、さっき襲ってきたろぼっとが持ってた銃じゃねぇか」
「ぎくっ！　ち、違うわよっ!!　これがあたしの『ぽち』なの！」
「はいはい、分かったよ。とりあえず弾丸を補充してやるから貸してみな」
「じ、自分でできるわよ！　バカにしないでよね！」
「おいおい、素人さんにはちょっと難しいぜ？」
「のぞむところだわっ！　見てなさいよ！　わたしのかれーなるテクニックを！」
（一時間後）
「おい、まだできねぇのか？」
御堂はため息混じりに訊いた。
「ふみゅ～ん……何なのよコレ～～ぜんぜんできないじゃない……しくしく」
詠美はマガジンと弾丸をカチカチやりながら半ベソをかいていた。

## 446　Memories

きっとまだ遠くには行っていない。
ただの勘。
根拠のない憶測。
そんなものを頼りになめるように森を歩く。
「はあ……はあ……」
ただ歩いているだけなのに胸の動悸が激しい。
この二日間、いや、もう三日目か。
小柄な彼女の体は既に体力の限界にさしかかっていた。それでも休むことなく歩く。挫け、立ち止まることはけしてしてない。
命を賭けて自分を守ってくれたあの人の妹、佳乃に会うために。
「ここは……どの辺なの……？」
武器のたくさんつまった鞄から一枚の紙とコンパスを取りだし、目を凝らす。
「えっと……まだ山の中腹あたりかな……」
その紙に描かれた島の一箇所を指で押さえて呟く。
「佳乃ちゃん……どこにいるんだろう」
あの崖から通り抜けられる場所はあまり多くない。
――ここへと辿り着く少し前……途中で、きよみの亡骸を見つけた。むしょうに悲しみがこみあげてきて――思いきり泣きたかったけど。
(ごめんね、きよみさん……こんなことしかできなくて……でも、今は……)
そっと顔の汚れを拭って、聖の持っていた救急箱に入っていた白いシートをかぶせてやる。
(佳乃ちゃんは、私が助けるから……そして、生きてる人みんなで帰るから……見ててね)
思い上がりなんかじゃない。
会ったから、何ができるというわけでもない。
佳乃を、みんなを助けられるような力もあるわけじゃない。
だけど、ただ、生きる意思と佳乃への思いがマナ

をそう行動させていた。
「ひゃっほ～～～う！」
どこからか、何かの爆音と共に男の声が響いていた。
（な、なにっ⁉）
マナが木の陰へと身を潜ませる。
ギュン――……！
生い茂る森の中に一本通った舗装されていないでこぼこの山道が目の前に広がっている。
そこを一気に通りすぎる一輪の単車。
「――！」
一瞬で通りすぎたそれには複数の人間が乗っていたかのように見えた――。
そして……
ヒュン！
さらに一瞬の後――今度はとても驚いた。
こんな場所をバイクで走る人間がいたことにも驚いたが、それを生身の女が走って追っているなんて事態は彼女の想像の範囲を超えていた。
ガン！　ガン‼
走るというよりはすべるといった感じでその女は、発砲しながらマナの視界を右から左へと高速で通り過ぎる。
（なに……今の……）
一瞬だけしか見えなかったが、女の方はＣＭとかで話題の来栖川グループのメイドロボ、ＨＭシリーズの最新バージョンのように見えた。……マナの記憶が正しければだが。
先のバイクを追っていたのだろうか。
一瞬助けなきゃ……とも思ったが、あまりに早すぎたその二つの音は、既に向こうの崖のほうへと消えていってしまっていた。とてもじゃないが追いつかない。
その時、戦闘音に導かれるかのように、一人の少女が山道を挟んだ向こうからふらふらと歩いてくるのにマナは気がついた。

（か、佳乃ちゃん⁉）
マナはそのタイミングに目を疑った。
道の向こう、先程の銃撃戦の音に導かれるように
ふらふらと歩く。その目は、遠目からでも焦点が定
まっていないように感じた。
「か――――っ……！」
一瞬その名を叫ぼうとしたが、マナはその声を飲
み込むと、ゆっくりと気づかれないように佳乃の背
後へと近づいた。
「……」
無表情のまま佳乃は歩く。時折木の根に足を取ら
れそうになりながら、そしてそれを気にした風もな
く、どこかで響き続ける銃撃の音を頼りにゆっくり
と進んでいた。
それはまさに夢遊病者という表現がぴったりであ
った。
「佳乃ちゃん……」
いつの間に接近していたのか、佳乃の背後から恐
る恐るかけられた言葉。佳乃はスッと流れるように
その声の主へと振り向いた。
「……佳乃ちゃん……」
木の陰からおずおずとその姿を見せる一人の少女、
観月マナ。
「……」
佳乃の瞳にマナの姿が映る。
先刻まで一緒に行動していた少女、そして、殺そ
うとしてしまった少女。
だが、表情はまったく変わりはしなかった。彼女
の登場にまったく関心がないかのように。
「マナだよ……さっきまで一緒にいた観月マナだよ
……一緒に霧島センセイのところに行こうって言っ
たマナだよ？」
戸惑いを隠せずにマナ。
「……」
だが、それに応える声はない。
「きっときよみさんも……佳乃ちゃんのこと許して

たよ？　だから……元に戻って……」
「佳乃ちゃん！」
今度は少し強めの語調。悲痛な叫び。
それでも眉一つ動かすことのない佳乃。
「どうして……どうして？……あなたは……誰？」
マナが問い掛ける。今の佳乃は佳乃であって佳乃じゃない。
マナは何も知らないし知る機会もなかったが、そう強く心に言い聞かせる。
そう思わなければ佳乃を、そしてすべてが信じられなくなってしまいそうで。
「……」
相変わらず佳乃は何も喋りはしなかった——その代わりに一歩、マナへと足を踏み出す。
「佳乃ちゃん、返事して……！　聞こえているならっ!!」
さらに叫ぶ。
周りにもし敵——ゲームに乗った者がいたとしたら確実に殺される的となっただろう。そんな風にも思わせる大きな叫びだった。幸いなことに、まわりには誰もいなかったが。
その呼びかけもむなしく、佳乃の口は閉じられたまま。佳乃の濁ったような瞳の中に映るマナの姿がだんだん大きくなっていく。
その瞳に、まるで飲み込まれてしまったような感覚に、マナの体は硬直してしまっていた。
「かの……ちゃん」
生気を感じられないその足取りでゆっくりとマナへとせまる。
マナまであと五歩……四歩……ゆっくりと。
そして眼前まで大きく迫ったときに、佳乃の無表情だった顔に表情が宿った。
笑い顔。
だが人の心を和ませるあの愛くるしい元気な表情でなかった。
口の周りだけを不自然に歪ませ不気味に、ニタリ

と——笑ったのだ。
「ひっ！」
本能が否応なく感じ取った恐怖にマナの足が震えた。佳乃の瞳に映るマナの顔もまた恐怖に歪む。
マナの肩を両腕で押さえつけ、後方の大木へと強く叩きつける。
「あうっ！」
その衝撃にマナの胸に嘔吐感がこみ上げる。
そしてその衝撃は、ボウガンが刺さっていた佳乃の左腕の傷口を再び開かせ、血を撒き散らした。
血に濡れたその顔を拭うこともなく、妖艶に笑う佳乃。
その瞳だけ、不自然に感情が宿らないまま。
「かのちゃん……」
脱力感、嘔吐感、恐怖感の交じり合う中、やっとのことでそれだけを呟く。
その声に反応するかのように佳乃は再びマナの肩を引っつかんだ。それは佳乃の華奢な体からでは考えられない、マナの理解を超えた力だった。
「うあっ！」
もう一度、そして二度三度、木へと背中を打ちつけられる。
闇の中——血か、胃液か、どちらかは判別つかないが、口から液体が飛び出す。
「ごほっ……ごほっ……！」
ようやく開放されたマナが地面にへたり込み、激しく咳き込んだ。
「この子は、私の命だから……だから殺すの……」
この場で初めて佳乃が発した言葉。
マナが下から佳乃を仰ぎ見たとき、闇夜の中、冷たく光る何かが振り下ろされるところだった。
「うっ……！」
ほとんど生きる為の防衛本能だけで体をよじらせる。
肩に激しい痛み。かすっただけだったが、恐るべき速度のそれはマナの痛覚を何倍にも膨らませた。

わずかに血のついたそれは地面に深々と根元まで突き刺さった。
それはボウガンの矢。
それをいとも簡単に引き抜くと、今度は水平にそれを凪ぐ。
「や、やめてっ！」
叫びながらさらに身を屈める。逃げ遅れたおさげにくくられた髪の毛をかすめて通りすぎる極太の針。
ドスッ！　という鈍い音と共に、先刻マナの体を打ち付けていた大木へと深々と刺さった。
ぐいっ……！　ぐいっ……!!
木に根元まで刺さった矢。今度はさすがにそれを引き抜くことはできなかった。
やがてボウガンの矢の回収をあきらめると、
「……あなたも……だからいっそ、この手で……優しいから……無理だから……だから私が、殺して……」
抑揚のない棒読みの台詞を羅列しながら、今度はマナの顔面を思いっきり蹴り飛ばしにかかる。
「きゃあっ！」
今度はよけきれなかった。手に持っていたデイバッグを眼前へとたぐり寄せ、顔面直撃だけはなんとか避けれたが、そのキックの威力はマナの体を完全に捕らえ、宙へと舞わせる。
地面に叩きつけられると同時に、マナの体が再び宙に浮く。
どこにそれほどの力が眠っているのだろう、それほど体重差もないはずだったが、今のマナと佳乃の力は大人と子供程の差があった。
大の男に勝るとも劣らない力を見せつける佳乃は再びマナを投げつける。
（かはっ……！）
三度、木へと叩きつけられ声もなく地面に崩れ落ちた。
――この子は私の命そのものです。

この子——八雲の右手首にあった生まれたときからの醜い痣。
それが災厄。不吉の印。
どうしてそう言いきれるのでしょうか。
たとえそうだとして、この子を見捨てられましょうか？　でも……村の者達は誰もがこの子が災厄の元凶、疫病神であると信じて疑わなかった。
どうしても殺すというなら……私が……私の手で……だけどできなかった。
大切な、わが子を……あの人と一緒に残した私達の宝物を……壊すことなんてできない。
私は。私だけは。
母親として、最後までこの子を守り続けます。
この島で大殺戮が行われている、生き残れるのはたった一人だけ。そんな理不尽な話がどうして起っているんでしょうか。
この島で、この子が生き残るなんて到底無理な話。
この子は優しすぎるから……きっと最後まで誰かを信じ、そしていつか裏切られ果ててしまうから……だから私が殺す。私にならばそれができるから。
鬼と成り果てても、この子を守るためならば。
——だけど……
心の中でもう一人の悲しみ。
——私は、佳乃なんだよ！　八雲くんじゃないんだよ！　もう…やめてよぉ!!
(ううっ……)
遠くなりつつある意識の中、佳乃の姿を確認する。
あれだけ激しく動いたにもかかわらず佳乃は息一つ乱してはいない。
体を襲う激しい痛みに身をよじらせるマナに歩み寄り、今度はその首を両手で持ち上げた。
「うあっ……」
締め付けられ、息ができなくなる。
佳乃の頭よりも高くまで持ち上げられ、首を締めつけられる。
どれほどの力がこめられているのだろう、その力

で佳乃の腕の傷がさらに開き、血が溢れ出しては流れる。
それは佳乃の腕を伝い、肩を濡らし、白い服を徐々に真っ赤に染めあげていく。
「や……め……て……」
力なく、かすかに漏れる息と共に声を絞り出したが、一向に手の力が緩むことはなく——
逆にどんどん締めつける力は強くなっていった。
(佳乃ちゃん……やめてっ！)
出会った頃の佳乃の笑顔を忘れないよう強く心に思い描きながら、足掻く。文字通り、足をジタバタと動かして。
だが、どんなに足掻いてみても足が地面に着くことはなく。暴れるたびにマナの首が締めつけられていく。
「…………!!」
振りほどこうと動くマナの手が、佳乃の腕を掴もうとしたが……腕に滴る血で滑ってうまく掴めず、表面を撫でるだけだった。
そんな中、マナの手が布に触れた。右腕につけられている黄色いバンダナ、佳乃であるという証。
朦朧とした意識の中、それを力任せに引っ張ろうとした。
「——!!」
瞬間、佳乃が首に回していた両手を離し、バンダナを掴んでいたマナの手を弾く。
(あうっ！)
開放されたマナのその体はそのまま地面へと崩れ落ちた。
「——!?」
あいかわらず瞳は淀んだまま、だけど今の佳乃が初めて見せる狼狽だった。
「げほっ……げほっ……」
マナの体が新鮮な空気を取り込む。こんなにも空気がおいしいと感じられたことは今までにない。
だが、開放されたのもわずかな間。再び佳乃はへ

たりこんでいるマナをさらに押し倒すと馬乗りになる。
逃げようともがいたが叶わなかった。
佳乃は再びマナの首を力任せに締めあげた。
急速に力の抜けていく体。酸素が足りない。未だ動悸の収まらない体は既にマナの意識を断ち切るほどまでに弱っていた。
(助けて……霧島センセイ……藤井さん……お姉ちゃん!)
半ば絶望の中、もう還らない人達の姿が次々と頭の中で右から左へ、左から右へと流れていく。
(私……もう……)
かすむ景色。動かなくなっていく体……それでもマナの手は生きようと動いた。
手に何かが触れる。
マナの持っていたバッグ。先刻蹴り上げられたときの衝撃でそのチャックが開き、中から武器が飛び出していた。
藤田浩之が管理者から奪い取った、そしてマナが浩之から没収した拳銃――
それを指先でたぐり寄せ、握る。
(佳乃ちゃん……!)
残された力を振り絞って、佳乃へと銃口を向ける。
(佳乃ちゃん……!!)
佳乃の脇腹へとそれを押し当てる。あとはわずかに力をこめるだけ。
(佳乃ちゃん……!!)
――景色がとっても遠い。生きてきた十七年間の思い出が頭の中で弾けては消えてく。
短い、ほんの少しの間だったけど、きよみさんや私と笑いあった佳乃ちゃんの無邪気な笑顔が浮かんでは消えた。
いつのことだったんだろう……それはほんの少しだけ前の話。少し前までずっと笑ってお話してたのに……。
思い出すだけで切なくなって、涙が浮かんで目の

前が滲んで。だけどもう目が見えなくなっていって――。
　撃てば助かる……あとほんの少し指を曲げるだけで。だけど佳乃ちゃんはどうなるの？
　センセイやきよみさんに藤井さん……みんなに助けてもらった命……大事にしたかった。だけど……私は最後の力を振り絞って手を動かした。拳銃を遠くへ放り投げる。
（撃てない。私撃てないよ。佳乃ちゃんなんだよ？　やっぱり撃てないよ――）
　そして佳乃ちゃんの体に手をまわして、ぎゅっとした。
（助けられなくて、ごめんね、佳乃ちゃん――）
　不意に、首に掛けられた手の力が弱まる。
　佳乃の手はやがて完全にマナの首筋から外されていく。
「前に――聖お姉ちゃんもね、こうやって私を抱きしめてくれたんだ……」
　佳乃の手は、そのままマナの背中に回された。その結果、抱きしめあう形になる二人。
「お父さんが死んだときも、そしてわたしがわたしじゃなくなっちゃったときも、ぎゅってしてくれたんだ」
　佳乃はマナの小柄な体を優しく包みこむ。
「抱きしめられてると安心するんだ。子供っぽいのかな、わたし。だけど……」
　佳乃の瞳は色を取り戻し、そこから澄んだ水が雨のようにマナの顔へと降り注いだ。
　その暖かい雨はやむことはなく。
「あの時は気づかなかったんだ、わたしバカだから。ずっと、寝ぼけて診療所を歩いてたと思ってた」
　でも、普段の佳乃とは考えもつかないほど、重く、真剣な声。
「きよみさんも……そしてマナちゃんも私が傷つけたんだね……」
　そしておそらくあの猫耳メイドの梓も。

「心の中でずっと叫んでた……マナちゃんを傷つけていく私を、わたしは止められなかった。わたしがやったことは、決して許されることじゃないけれど……本当は、死んじゃった方がいいのかもしれないけれど……だけど、わたし、お姉ちゃん達の分まで生きたいって思うの。……だから……だから……わたし、生きていてもいいかな？」

後悔してもしきれない。そんなやるせない感情を胸一杯に抱いて。

「もう一人の私はきっとわたしが止めるから……生きてちゃダメ、かな？」

人はこんなにも涙を流すことができたのだろうか。涙が、佳乃の顔に飛び散っていた血を洗い流していく。

「ごめんね……ごめんね……マナちゃん――」

もう一度、マナをもう二度と離さぬように強く抱きしめた。強く、強く――。

「バカみたい……生きてていいか、なんて……と……当然じゃ、ない……」

ゆっくりと体を弛緩させて。

息も絶え絶えにやっとしぼり出せたのは、バカにしたような口調。

それでも嬉しそうに涙を浮かべて。

「それに……ぎりぎりだったけど間に合ったんだから……わ、たし……生きてるんだからさ。だから……そんな、ことしたら、私が……そしてみんなが元気出しなさいよ……。勝手に死なれちゃ困るわよ許さないんだから」

マナは、強く佳乃を抱き返す。

「マナちゃん……ごめん……ごめんねっ……！」

泣きながら抱きしめあう二人。確かなぬくもりが二人のまわりの空気を穏やかなものに変えていった。

先程までは一面の暗い夜空。だがいつの間にか、東の空が幻想的な薄紫色へと変わっていた。

夜明けはもう、すぐそこ。

## 447 silent presence

森の中の、とある茂みの中。
牧部なつみはその中で息を潜めてたたずんでいた。
茜を探してしばらく森の中をさまよっていたなつみだが、そう簡単に相手が見つかるはずもない。
歩き疲れて道ばたで休んでいた時、なつみはふと考えた。
——そうだ。別にこっちから探さなくても、向こうからやってくるのを待てばいいじゃない。こっちは銃を持っているんだし。
そう気付くと、なつみは身を隠すのにちょうどいい茂みを探し、その中に座り込んだ。
いつでも撃てる体勢にできるよう、右手にはトカレフを握ったままで。

それから数時間、なつみはじっと待っている。
しかし、かつて教室の中で短刀を手に震えていた時のような不安や恐れは、今のなつみには全くなかった。
なつみにはただ一つの、はっきりした目的があったから。

## 448 Good-bye dear

第六回の放送が流れ、続いて高槻処分の放送が流れた。
「また、死んだな。それにしても高槻の野郎、ざまぁみろってんだ」
悪態をつく。
そんなことをしても、死んだ人は帰ってこない。
(香里は、帰ってこない)
だからこそ、悪態をつかずにはいられなかった。
「……ねぇ、ジュン?」
同じ部屋。暗闇の中からレミィが言った。

北川は一瞬、誰に呼ばれているのかわからなかった。今まで聞いたことがない声だった。
暗い色。悲しみ、絶望、そんな色のこもった声。
「どうした？」
なるべく平静を装って訊き返した。
「ジュンは、朝になるまで動かない、って言ったよネ？」
「そうだな。今はゆっくり休む時間だ。寝る子は育つぞ？」
動揺は収まっていない。いつもの馬鹿トークにも、キレがない。
自覚できる自分が情けなかった。
「じゃあ、ここでバイバイだネ。今までアリガトウ、ジュン」
静かに立ち上がり、レミィは自分の荷物を持った。
「ちょ、ちょっと待てよ！」
慌てて北川はくいついた。
「何があった突然……。って、さっきの放送か？」
「……ウン。親友が二人……今すぐにでも、探しに行くヨ」
北川の方を見もしないで、言った。
それは決意。
あまりにも、どこまでも哀しい決意。
「そうか。仕方ないな。俺には何も言えない……悪い」
北川は悟っていた。
朝までここにいるのが一番安全なのは間違いない。だがいくらそんなことを説いても、ある種の決意を固めた人間には無駄なのだ。
さっきの、祐一のように。
だから、自分のやることも決まっていた。
「ウウン、気にすることないヨ！　じゃあ、行くね。バイバイ……」
レミィは部屋のドアノブに手をかけた。
「だから待てって。まだ俺は、荷物片付けてないぞ」

「……え？」
振り向く。
北川はせかせかと自分の荷物を仕舞いこんでいるところだった。
「ジュン……どうして？」
「そんなこと言われてもなぁ……」
手を休めずに言った。
「旅は道連れって言うしな。それにこのまま悲痛な決意背負った女の子一人で行かせられるわけないだろ。人間として、男として。一蓮托生だ、こうなったら。ついていくぞ。一緒に行きたいんだよ、俺が」
そう一気にまくしたてる。
言ってしまって、気付く。
（何を恥ずかしいこと言ってるんだ、この口はーっ！）
後悔しても仕方がない。
言ってしまった。仕方がない。

「さて、と。行こうか」
荷物を全部片付け、鞄を背負う。
「ジュン！」
ずっと黙って見ていたレミィが北川に飛びついた。
「ジュン、サンキュー！　だいすきヨ!!」
レミィの髪の匂いが、なんだか妙に、くすぐったかった。
（香里？　お前は相沢のこと好きだったんだよな？　俺はお前のこと、本当に好きだったんだぞ。だけど……俺、他にも、守りたい人ができたみたいだ。おいおい、呆れないで見ててくれよ？　……さよならだ）

## 449

## Good-bye dears / Good-bye tears

探し物はなんですか？
見つけにくいものですか？
部屋を出て数時間。

探し物は、あっさりと見つかった。
「ヒロユキ……あかり……」
二人抱き合っている、死体。
その死に顔は……
「幸せそうじゃないか？」
「……そうネ。幸せそうだヨ……」
彼等は知らない。
この二人が、どんな絶望を乗り越えて、愛しあうことができたのか。
それでも、最後は幸せだった。
それだけは、はっきりとわかった。
「せめて埋めてあげようかと思ったけど、なんか、動かしたら悪い気がするヨ」
「そうだな。なんというか、二人の世界を作り上げてるって感じだな。と、あれはこの二人の荷物か……拾ってくるけど、もう少しここにいるか？」
「……そうするヨ」
それだけ訊き、北川は二人の荷物を回収しに行った。
「中身は……CDが二枚もあるじゃないか。$\frac{1}{4}$と、何も書かれていないディスクか。……使わせてもらうぞ」
浩之とあかりの鞄の中身を自分の鞄にうつす。
「重っ……そっちはもういいか？」
「うん、いいヨ！」
「じゃあ、行こうか？」
北川が先に歩き出した。
レミィも続こうとし、一度振り返る。
「バイバイ……大切な、トモダチ……」
青い瞳に涙を浮かべて。
振り切るように、駆け出した。

**《葉鍵ロワイアル　第三巻　了》**

バイバイ・・・
ワタシの・・・
大切なトモダチ・・・・・・

# 端書

二〇〇二年、十二月某日、都内の某喫茶店。
私は刷り上がったばかりの葉鍵ロワイアル（以下ハカロワ）の一巻を瀬戸から渡されたとき、こうつぶやきました。

「うわ、嘘くさ」

もちろん、悪意から出た言葉ではありません。私のハカロワに対する万感の思いがこの言葉に集約しているといっても過言ではありません。

自己紹介が遅れました。私は三浦　蘭と申します。ハカロワ出版企画でＤＴＰ作業。要は印刷に適するように与えられたデータを加工する作業をしています。
私がハカロワを知るきっかけは、某ロシア人みたいなハンドルネームを持つ悪友に勧められたからです。
そして多分の例に漏れず、はまってしまった私はハカロワを同人誌にできたら、と思いハカロワ終了後、その作業に適するようなテキストデータを作成しました。
しかし、それはハカロワが巨大な化け物だということを知ることとなったのです。

テキストデータは約三メガバイト。四百字詰め原稿用紙用紙に換算したら五千五百枚以上もある膨大な量の物語だったことが分かり愕然としました。

ちなみに本家の『バトルロワイアル』が原稿用紙千三百枚とのことなので、あの分厚い本の約四倍に相当します。

いくらなんでも、これを同人誌にするには膨大な労力と費用が必要です。ハカロワを本にすることは不可能だ、と思いました。

だが、それから約一年後。瀬戸がハカロワ紙媒体化企画を提唱。参加して半年後。第一巻完成。

文章やカバーを編集作業で何度もモニター越しに見ていましたが、かつて夢想していたものが実際に目に見え、重さを感じることができる本になったとき、その思いが最初に書いた言葉になったのです。

企画の発足から一年経ちようやく三巻の発刊までこぎつけましたが、まだ全里程の半ばまで来ていません。皆様、長丁場になりますが、最後までお付き合いいただければ幸いです。

平成十五年　七月　某日

三浦　闌

# 葉鍵ロワイアル　第三巻　著者一覧

奇跡の企画を作り上げた皆様に
　　　　　　　この場を借りて、お礼を申し上げます。

328　ぼくの戦争　――孤独――……………………………………　。さん
329　――――私…………………………………………………名無しさん
330　すれ違う想い……………………………………………命さん
331　竜虎………………………………………………………暇人さん
332　――――罪…………………………………………………111 さん
333　――――夢…………………………………………………111 さん
334　夜の森往く抵抗者………………………………………L.A.R. さん
335　逢魔ヶ時…………………………………………………名無しさん
336　余裕と苛立ち……………………………………………名無しさん
337　――――疑念………………………………………………111 さん
338　King of Kings ……………………………………………林檎さん
339　接触………………………………………………………命さん
340　ここから始める物語……………………………………命さん
341　詠美ちゃん様の推理……………………………………命さん
342　ここから伝える物語……………………………………命さん
343　狩のはじまり……………………………………………暇人さん
344　小さな手掛かり…………………………………………独活大樹さん
345　ふたりだけのせかい　～ sacred days ～ ………………L.A.R. さん
346　夜が来る…………………………………………………命さん
347　残照……………………………………………名無したちの挽歌さん
348　闇色の再会………………………………………………名無しさん
349　宵闇病……………………………………………………。さん
350　熊狩りビト………………………………………………#3-174 さん
351　御堂もビビる！　詠美ちゃん様は強いんだぞ！……　ヘタ霊さん
352　月明かりの下、赤い女神………………………………命さん
353　そうだ学校へ行こう！　…………………名無したちの挽歌さん
354　たい焼きだよっ！　………………………名無したちの挽歌さん
355　そして一つの決断………………………………遥か昔の書き手さん
356　インサニティ……………………………………………名無しさん
357　（無題）　…………………………………………………名無しさん
358　命、散って……………………………………………セルゲイ@ D さん
359　たい焼きは復讐の薫り………………………………セルゲイ@ D さん
360　別れの引き金……………………………………………L.A.R. さん
361　夕餉………………………………………………………駄っ文ださん
362　ふたりだけのせかい　～ world end ～ …………………L.A.R. さん
363　学校の静寂………………………………………………命さん

◎制作者一覧
制作協力：
111、JOYH-TV、L.A.R、Yellow 、#3-174、独活大樹、
久々野　彰、静かなる中条、駄っ文だ、ないしょ、
名無し達の挽歌、名無しさんだよもん＠誤植指摘、
遥か昔の書き手、観月、林檎、『。』、名無しさんだよもん

制作協賛：
104、５、Alfo、Kyaz、MIU、NBC、いつかの書き手、
感想スレＲの 142、葵原てぃー、シイ原、真空パック、
ナナツさんだよもん、七連装ビッグマグナム、暇人、
日向葵、箕崎、祐一＆浩平、名無しさんだよもん

スペシャルサンクス：
189、quit、River. 、zin、#4-6、#7-76、荒門、命、
静かなる中条、彗夜、ダンディ、名無し cd、
名無しさんなんだよ、にいむらたくみ、花と名無したん、
ヘタ霊、赤目、名剣らっちー、訳あり名無しさんだよもん、
旧データサイト管理人各氏、

そして全ての名無しさんと読者の皆様

（アルファベット～アイウエオ順、敬称略）

---

**葉鍵ロワイアル　（3）**
二〇〇三年　　八月一七日　初刷発行
二〇二二年　一二月三〇日　電子書籍版　初刷発行

著　　者：（別頁に記載）
発 行 者：瀬戸こうへい
発　　行：ハカロワ出版企画
初　　出：２ちゃんねる、葉鍵（Leaf&Key）板
編集事務：セルゲイ＠Ｄ　三浦　闌
挿　　絵：天田　湧介
印　　刷：株式会社ポプルス
連 絡 先：kohei19800310@yahoo.co.jp

＊過去ログサイトにおける 329 話は、前後の話との繋がりに問題がありましたので、紙媒体化するにあたって別の話に差し替えさせていただきました。なお、この件は著者の承諾を得ております。

9784434351453

1924401333030

ISBN4-33051-084-1

C0510

ハカロワ出版企画

HAKAGI ROYALE Ⅲ

さあ、考えなさい。あなた達が今するべき事を。
本当の敵は誰か。思い出して下さい。

最愛の人を失った悲しみも、衝撃に惑う心も、
護ろうと誓う意志も関係なく、
互いに殺しあう参加者たち。
そんな中で、命を賭けて訴えた少女がいた。

思いを受け継ぎ、打開の道を探る者。
果たされる出会いと再会。

退屈ともいえる日常。その象徴だった学校を舞台に、
哀しい衝突が繰り広げられる。

生存者、残り51名。
物語は転機を迎えようとしていた——